

この世界、おばさんにはちよつとキツイです。

angle

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

夢小説大好きな半パラサイトな45歳独身女の私。なぜかいきなり名探偵コナンの世界で16歳になってるんですけど!?

と、とりあえず仕事探さなきゃ。

めざせ！ 月収10万円!!

原作浴いですが大半は主人公の就職活動がメインです。
更新めっちゃ遅いですがよろしくお願いします。

目次

プロローグ

FILE. 1	原作開始	〜社長令嬢誘拐事件〜	16
FILE. 2	女たちは人知れず戦う	〜アイドル密室殺人事件〜	45
FILE. 3	名探偵は追及する	〜赤鬼村火祭殺人事件〜	77
FILE. 4	それぞれの苦悩	〜奇妙な人捜し殺人事件〜	107
FILE. 5	人とのご縁は大切に	〜幽霊屋敷殺人事件〜	120
FILE. 6	初めまして殺人です	〜豪華客船連続殺人事件〜	134
FILE. 7	着信履歴は放置したい	〜月いちプレゼント脅迫事件〜	164
FILE. 8	お土産行脚と事情聴取	〜美術館オーナー殺人事件〜	175
FILE. 9	女たちは人知れず戦う2	〜新幹線大爆破事件〜	185
FILE. 10	大人と子供とお姉さんと	〜大都会暗号マップ事件〜	200
CASE. 1	少年少女の恋愛事情	〜時計じかけの摩天楼〜	224
FILE. 11	推理クイーンは突然に	〜山荘包帯男殺人事件〜	284
FILE. 12	想い出補正は最強	〜カラオケボックス殺人事件〜	318
FILE. 13	定期収入は恐ろしい	〜江戸川コナン誘拐事件〜	

	FILE. 14	勉強は忘れた頃に	骨董品コレクター殺人事件	348
		）		
	FILE. 15	留守番は危険の香り	消えた死体殺人事件	368
	374			
	FILE. 16	故郷は近く、でも遠く	天下一夜祭殺人事件	
	382			
	FILE. 17	現世のことは現世で	ピアノソナタ『月光』殺人事件	433
		）		
	FILE. 18	福利厚生はいつも強制	プロサッカー選手脅迫事件	475
		）		
	【April fool】最終回【特別企画】			482

プロローグ

「あー、つかれたー」

夜、仕事から帰ってきて、ただいまの代わりにつぶやく。

「おかえり。今日は早かったね」

「うん。定時に上がったから」

「ほら、また！　なんであんたはいつもいつもそうやって脱いだもの丸めとくのー！」

年老いた、というかすでに老人と違って間違いない75歳の母のお小言。

聞き慣れ過ぎててもうなんの反応をする気も起きないけど。

まあ、生まれてこの方45年も聞かされてれば、何をどう反応しても無駄なのは判り切ってる。

「灰皿は？」

「あんた煙草吸い過ぎでしょ。いいかげんに」

「そうやってあなたがストレス与えるからね」

「んもう。身体壊してもお母さん知らないよ」

だからさ、こっちは1日仕事してきて疲れてんだって。

まして今日は金曜日、今週はぜんぜん休み取れなかったし、40代の身体には週5日の労働がめっちゃ堪えるんだよ。

リビングからふすまを隔てた自室に入るとさっそく煙草に火をつける。

万年床に腰を落ち着けて、ケータイを充電機にセットして、目の前のノートPCのスリープ状態を解除。

すると、今朝まで読んでたコナン夢小説サイトの画面が現われる。

内容は確か、原作沿いの新一落ちだったっけか？

やっぱ、現実忘れるには夢小説だよな！

現実の私はとりたててなんの長所もないしがない会社員、しかも45にもなって独身で、お局様通りこしてオバサンの域に達してるし。

でもさ、でもさ、夢小説読んでる間は、こんな私でも高校生になれるんだよ？

工藤新一さんと恋愛関係になれるんだよ？

コナンくん「愛夏姉ちゃん」なんて呼んでももらえるんだよ？

あ、ちなみに愛夏は夢小説用の私の名前ね。

ほら、本名はやっぱ恥ずかしいし、でも馴染んでる名前の方が自分だって気がするから、夢小説読む時は決まって「高久喜愛夏」って名前を打ち込んでるんだ。

無意識に煙草を吸いながら夢の世界に浸っていると、世話好きの（というかもうおせっかいの域だけど）母が勝手に夕食を運んできてくれる。

適当に食べ散らかして、空気清浄機の上にお盆ごと置いておくと、時間を見計らった母が再び文句を言いながらお盆を下げてくれる。

PC画面の時刻表示が23時を過ぎたら就寝の目安。

トイレに行って、そのまま万年床でおやすみなさい。

そんな、45歳独身オタク女の夜は、いつものように更けていつてもまさか、これが最後の夜になるとか、ふつう思わないじゃない？

朝は4時40分か、5時か、最悪でも6時のアラームで目が覚める。その間にも5、6回かけてあるんだけどね。

いやさ、社会人たるもの、寝坊だけはさすがにできないわけですよ。だからとにかく回数だけはかけておいて、古い機種のカートリッジから曜日設定ができなくて、結果土曜日も平日同様に目を覚ますことになる。

まずつけっぱなしのPC画面で時刻を確認、5時23分。

無意識に煙草に手を伸ばそうとしたんだけど、なぜかテーブルにも枕元にも煙草が見つからなかった。

あれ？ 昨日ひと箱ちようど吸い切っちゃったのかな？

そう思っただけでまだ覚醒しきらない頭で周りを見回して、その違和感に気がついた。

万年床の左側、窓の手前には積み重なったマンガ達。

その一番上にポンと載せてあるはずの、カートンで買ってるなじみの煙草のケースがなかった。

1日2箱吸ってるヘビースモーカーでしかも出不精の自分が買い置きを忘れるなんてほぼあり得ないことだから、もしかしたらマンガの向こうにでも落ちてるのかと思っただけで立ち上がって探してみる。

で、1つ目の違和感、なんかマンガ、少なくなってるのか……？

でもとにかく煙草と思っただけで右側を向くと……なんだか見通しがいーと思っただけで空気清浄機がなかった。

そういえばほぼ一晩中フル稼働の吹き出し音がなくて静かだ。

その手前にあるはずの灰皿もない。

そして極め付けが正面の本棚、並んだマンガの背表紙がヤニで茶色くなくなってる。――

……………。

と、とにかく落ち着こうか。

ええっと、今の時刻は5時25分。

PCの画面は昨日見ていた夢小説……じゃない。

いや、夢小説は夢小説だ、文章の中に「愛夏」の名前もあるし。

でもなんで、相手役が「新一」じゃなくて「〇護」になってるんだ？

(そりゃブーチも好きだけどさ！)

時刻は5時25分、……あ、26分に変わった。

煙草……はないから、水でも飲んで、とりあえずトイレにでも行こう。

万年床の隣のテーブルに置いたペットボトルの水をぐくりと飲んで、立ち上がって、2つ目の違和感。

妙に身体の調子がいい(というか腰や肩が痛まない)と思っただけ

おなかを見ると、それまで中年太りでぶっくり出ていた下っ腹が、なぜかまっ平らになってたんだ。

……………。

ここでパニックに陥らなかったのは、たぶんそれまでの人生経験というヤツだと思う。

ていうか、反射神経が若い頃より鈍ってるっていうか、運動能力の低下が精神にも影響してるっていうか。

慌てず騒がず、でも内心では焦りまくりながら隣の部屋とのふすまを開ける。

すると、本来そこにあるべきもの——母が寝ているはずの布団と、その布団で寝ているはずの母の姿がなかった。

………いったい、何があった？

母は……？ まさかお風呂で倒れてたり……？

一瞬ぞつとしてすぐにトイレとお風呂をのぞく。

でもそこにも母の姿はなかったから、ひとまず落ち着くためにもトイレに入って用を足した。

うちは公団住宅の3Kでもちろんそんなに広い家じゃない。

母が寝ているのがリビング（と勝手に呼んでる6畳間）で、ふすま隔てて私の部屋（4畳半）と、あと玄関脇に嫁に行った妹の部屋、今はほとんど物置になってて出入りさえままならない部屋（4畳半）がある。

そっちにいる可能性はまずないので、再びリビングに戻って、そして……見つけてしまったのだ。

30年前、45歳で亡くなった父の遺影の隣に、今の母よりはるかに若い姿の、隣の父とほぼ同じくらいの年齢に見える、母の遺影を。

どうしよう。

吸いたいのには煙草がない。

訳も判らないまま部屋に戻って、ペットボトルの水を飲んで、煙草を探してPCの時刻を確認。

6時28分。

いつの間に1時間も経ってたらしい。

たぶん完全に現実逃避しようとしてたんだと思う。

ええつと、もう朝の5時を過ぎたから、店は開いてなくても自販機で煙草は買える。

ああ、そういえば近くにコンビニもあるし、銘柄さえ気にしなければそつちでもいいか。

でも昨日の夜は風呂に入っていないし、っていうかいつも私は朝風呂だから、できれば自販機の方がいいかな。

そう思つて、とりあえずかばんの中から財布を出して、顔を洗つて髪をざつとだけまとめ、家を出た。

コンビニまではほんの50メートルくらい……のはずだったんだけど……??

え? ていうか、ここどこ??

うちの前の道、確かバス通りで目の前は商店街だったはずなのに……なんで住宅街になってるんだ……??

放心状態のまま部屋に戻って、三面鏡を開いてその場に座り込む。目に映るのは確かに私なんだけど……。

それは今の45歳の私なんかではなくて、30年近く前の、おおむね高校生くらいだった頃の私の顔 ——

夢じゃないのは確かだ。

いくら私だって、45年も夢と現実との世界を行き来していれば、今どちらの世界にいるのかくらい空気で判る。

—— なんか、いろんなことが、やっとなんと納得できた。
ううん、納得なんかしてないけど、なんかちよつとだけ判った。
これってあれだ、夢小説にありがちな、そう若返りトリップってヤ
ツ。

でもさ、今までそんなのぜんぜん関係なく45年も生きてきて、い
きなりこんな目にあうなんてまず思わないじゃん！

私だつてさ、子供の頃は幽霊が怖かった。

いるかいなか判らないから、ほんとにいたらどうしよう、見
ちやつたらどうしようって、けつこう本気で怖がってた。

でも、確か16歳のとき、ふと思つたんだ。

今まで16年間一度も見たことがなかったんだから、この先とつぜ
ん見え始めちゃうことなんてまずあり得ないよな、つて。

経験、つて、そういうものなんだと思う。

年齢を重ねて、子供の頃は怖いと思つてたものを、怖くないものに
変えていく。

それによつてだんだん柔軟な考え方とか、突飛な思いつきとか、そ
ういうのはなくなつていくのかもしれないけど。

でも私は、せつかく経験を積んだことで怖くないものが増えたのだ
から、昔に戻りたいとか若返りたいとか一度だつて思つたことはな
かつたんだ。

仏壇の中には、父の位牌の隣に、ちゃんと母の位牌もあった。

それまで母に任せきりでぜんぜんやったことなかったけど、仏壇の
水を換えて、ご飯をよそつて、お線香を立てて。

最近の怖いことの一つが、母が死ぬことだつたから（75歳だから
そういうことも考えた）、その恐怖がなくなったのはむしろ良かった
かもしれない。

ふと2人の位牌をひっくり返して、没年を見比べて、壁にかかつて
たカレンダーを見て私はようやく現実逃避を諦めた。

部屋に戻って現状認識。

まず、私のかばん。

仕事用のかばんは枕もとにあつて、ふだんその中に通帳と健康保険証、免許証、携帯灰皿、車のカギなんかを入れてある。

それに煙草と携帯電話を放り込んで出勤するんだ。

見慣れたそれらのものをテーブルに並べていくと、部屋同様中身はけっこう変わっていた。

免許証と携帯灰皿、車のカギとついでにクレカとtaspoがなくなっていた。

健康保険証は勤め先の会社のものじゃなく、国民健康保険に。

そして、名前はなぜか「高久喜愛夏」になっていて、生年月日が異様に若い。

一瞬別人のものかとも思ったけど、さすがに私の夢小説ネームと同名の人の保険証が私のかばんの中にあるはずなんてないから、これはきつと私のもので間違いないだろう。

さっきのカレンダーの年号から差し引くと、どうやら私は現在16歳、誕生日が来て17歳になるらしい。

……なるほど、そうだよね、16歳の女の子の部屋に煙草や灰皿があるわけないわ。

(さすがの私も吸い始めたのは20歳からだっただけ)

鏡はさつき見たけど、もう一度手の甲や二の腕やバスト、いわゆる年齢が表れやすい部位を見て、確かに16歳に戻ってるらしいことを確認した。

そうだ住所もと思って、保険証をまじまじ見て驚いたんだ。

「は？…米花町2丁目!？」

思わず声に出してちよつと恥ずかしくなったけどそんなのは些細なことだ。

米花町とか……現実世界に同じ名前のある町があるかどうかまで詳し

く知らないけど、でもそれって間違いなく「名探偵コナン」に出てくる地名でしょ！

ここつてもしかしてコナンの世界ですか!?

……いやいやいやいや、若返りトリップ、っていうのはまあ認めない訳にはいかないとは思ったけど、それが都合よくコナンの世界とかありえないっしょ！

手っ取り早く確かめる方法がとっさに思いつかなかっただけで、ふとりビングの和ダンスに卒業証書やアルバムが入ってることを思い出して。

ダメもとで確かめたところ、ありました。

帝丹中学の文字と、工藤新一、毛利蘭、鈴木園子の名前がついた写真が……！

いや、確かにコナン好きだけど、新一落ちの夢小説読んでニヤニヤしてたのは私だけど、でもそれが現実になって嬉しいかっていえばぜんぜんそんなことないんだけど！

だって、新一つていわゆるあれでしょ？ 新聞に載るような有名人で学校のアイドル的存在。

対する私は、キヤーキヤー騒いでる女子、ですらない、そのうしろでこっそり見ているような（むしろ恥ずかしくて視線を送ることすらできないような）内気でオタクな女子な訳で。

どうやら家は近所らしいし、同じ学校だったのは間違いなさそうだけど、賭けてもいいいぜったい話したことなんか一言だってなかったはず！

そんな女がいきなり「ほら、今から工藤新一と同じ世界で過ごせるよ、楽しんじやいなよ！」とか言われたって、夢小説の主人公みたいに親しく話しかけたりとかぜったい無理なんだから!!

でも、たとえば話ができなくても興味はあったから、私はもう一度卒

業アルバムを見つめた。

帝丹中学の卒業アルバムの前半は集合写真で、見開きの左右に2クラス分の写真があつて。

左のページに私の夢小説ネームが、その右のページに工藤新一、毛利蘭、鈴木園子の名前があつた。

写真はもちろんアニメ調なんかじゃなくて、ちゃんと実写だったんだけど……。

不思議だった。

それまでマンガやアニメでしか見たことがなくて、実写の彼らなんか想像すらつかなかつたけど、私には一目で彼が工藤新一だって判つたし、見れば見るほどその写真の人が工藤新一以外には見えなくなつていったんだ。

うん、やつぱかっこいいわ、工藤新一。

毛利蘭も可愛い、鈴木園子も可愛い。

対して隣のクラスの私は……そういえば中学の頃の私って、前髪を上げてゴムで2つに縛つてたんだっけ。

(ちなみに今は前髪は下ろしてうしろで1つ縛りだったりする。だってその方が頻繁に美容院行かなくてすむんだもん)

ムダに背ばつかり高くて、雛壇のいちばん上でぴよこんと飛び出してるのが目立つだけの平凡な容姿。

まあね、トリップ特典で容姿も可愛くなつてたら、なーんて夢見ても訳じゃないけどさ。

容姿がこうなら性格も変わらないだろうし(髪型ってけっこう性格出るよね?)、クラスの他の名前には見覚えがまったくなかつたから、そんなに親しい友達もいなかったんだらうと思うことにした。

という訳で、改めてケータイのチェック。

うん、着信履歴も送信履歴も見事がない。

アドレス帳にはさすがに友達っぽい名前がいくつか入ってたけど(うち数人はアルバムの名前と一致した)、メールもほとんどマガジン

ばっかりだし連絡はとってないみたいだ。

あと、ちよつとだけシヨックだったのは、この家にもケータイにも、妹の痕跡が一つもないことだった。

4歳年下の妹は、現実には結婚して家庭を持つてて、中学生になる娘と小学生の息子がいる。

私が16歳なら妹は12歳で中一、もちろん結婚なんかしてる訳はなく、この家に一緒に住んでるはず。

……もし、私をトリップさせた誰かなんてものが存在するなら、その人は母の存在を殺したんだ。

ほんとだったら少なくとも75歳までは生きていた母を、たった45歳で早死にさせてまで、つれてくることを拒んだ。

ちゃんと確かめなければはつきりしないけど、たぶん妹はこの世界で生きてない。

ここに遺影や位牌がないってことは死んだんじゃない、最初から存在しなかったことになってるんだろう。

うちの両親は戦前生まれだから兄弟も多くて、従兄弟に至っては両家合わせて20人以上いる。

両親は幼馴染同士で若い頃に都会へ働きに出てきた口だから、お盆の時期には必ず実家がある田舎に帰っていて、私だって従兄弟たちと仲良く遊んでたんだ。

それなのに16歳の私が引き取られもせず、独り暮らしをしてるってことは、私が天涯孤独の設定だったこと。

—— なんかちよつと腹が立ってきた。

人間、45年も生きてれば、それなりに丸くなる。

私はもともとそれほど感情の振れ幅が大きい方じゃなかったけど、でもさすがにこの仕打ちには怒りを感じた。

いったい私がなにをしたって？

ただパラサイトシングルを満喫して、現実を見ずに夢小説の世界に浸ってただけじゃん！

……まあ、悪いことをまったくしてなかったとは思ってないよ。仕事してるのを理由に年老いた母親に家事をぜんぶ押しつけて、その仕事だってそんなに全力でやってた訳じゃない。

友達だっていないし人間関係を積極的に築こうともしてこなかった。

孫の顔は妹が母に見せてくれたから、って、結婚も出産もしようとしなかった。

そっか、私、生きてなかったんだ、あの世界で。

私なんかいてもいなくても変わらない存在だったから、だから世界から嫌われて、はじき出されちゃったのかもしれない。

いつもは車の音しか聞こえない窓の外が、なぜか子供たちの声でがやがやし始めて。

土曜日なのに子供？と思ってから、そういえば日付を確認してなかったと気付いて、とりあえず新聞を取りに玄関まで行った。

ドアのこちら側から引つ張り出してみると、紙名は変わっていたけれどいつも届いてるうちの新聞とさほど変わらないレイアウトの束が出てきた。

どうやら今日は、4月8日の金曜日らしいです。

軽く一息ついて、こんどは表紙の柄にまったく見覚えがない通帳を手を取った。

残金は覚えているものほとんど同じで、でも印字されてる内容はかなり違っていた。

入金の項目は「給与」じゃなく「年金」で（たぶん父の遺族年金だろう）、引き落とし欄に家賃と公共料金。

2カ月さかのぼるだけでは心もとなかったので、1年前からの残金

の推移を見てみると、1年間で100万円くらいマイナスになっているのが判った。

……これはまずい。

確かに残金はある。

私は高卒後27年以上フルタイムで働いていて、それなりの給料ももらってたし、結婚したり家を買ったり子供を育てたりしてないからお金は使っていない。

あと15年働けば定年で、退職金や厚生年金だつて入るし、ほかに自分で掛けてた個人年金なんかもあるから老後は安泰だと思つてたんだ。

でも、今16歳で余命70年だとすると、とうぜんこれだけの残金では一生暮らしていくことなんかできないじゃん。

だからといって今のご時世は27年前とは違う。

あの頃はふつうレベルの公立高校卒業資格でも正社員採用枠があつたけど、この不景気ではたぶん大卒か専門卒じゃなきゃ就職なんかできない。

だって、元の会社では私も一応役職についてたけど、あんな会社だつて新入社員はぜんいん大卒で、私なんかよりも遥かに優秀だったんだから。

これから高卒資格取つて、大学行って卒業まで通うとしたら、この残金で安心なんかできるはずないよ！

うん、とにかくもつといろいろ探そう。

そう思つて母が管理してた大切なもの箱なんかをひっかきまわして、見つけたのは父の遺族年金の証書だけだった。

(そして遺族年金が18歳までしか出ないことを確認してさらに落ち込んだ。トリップ特典とか皆無なんかいバーロー!!)

本来なら私は高校2年のはずだけど、学生証も制服も教科書もないってことはたぶん高校へは入学してないんだろうな。

私がそれまで自分で掛けてた保険証書や年金証書も見つからなかったってことは、それらに使ったお金はトリップするにあたって没収されたってことなんだろう。

まあ、予想はできたけどさ。

この部屋に煙草や灰皿、車のキーがないってことは、お金以外の私の持ち物は、16歳の年齢にふさわしいものだけしかトリップしてこなかったって事だろうし。

(16歳で生涯保険や年金に入ってる人はまずいないしね。だいたい16歳で入れるような保険じゃないから)

たぶんそれがこのトリップのルールなんだ。

でもせめて声を大にして叫びたい。

私がこの27年苦勞して稼いだお金を全額返せ!! ———— と。

中学卒業資格があるから、高校へ新たに入りなおすことはできるだろうけど、2年遅れでなおかつ来年まで待たなければならぬと思うと行く気にはなれなかった。

確か大学受験資格は高校卒業しなくても取れるはずだし。

(昔は大検でいってたけど今でもあるよね?)

という訳で、結論 ———— 仕事を探そう。

最初はバイトでもいい。

今あるお金を減らさないように、月10万円を目標にしてお金を稼ぐんだ。

また無意識に煙草を探して、でも吸えないことを思い出したから、気分を変えるためにお風呂に入ることにした。

残り湯に火をつけて。

あ、そういえば洗濯物、どうなってるのかな?

たまってるようだったら洗つとかないとやばいかもしれない。

お湯が沸くまでの待ち時間で、私は洗濯物と、あと衣類のチェックをした。

私がふだん通勤に着てるのは、自家用車通勤だからラフなGパンとシャツとジャケットで、社内では制服だけど会議や研修用にスーツも何着か持ってたたりする。

さすがに会社の制服はなかったけど、スーツが残ってるのがかなりありがたいかな。

とりあえず洗濯はぜんぶ終わってるみたいだったから、いつもよりちよつと遅めの朝風呂に入って、上がってから体重計に乗ると昨日より10キロくらい減っていた。

10代の頃ならこんなもんか。

もともと胸はそんなにないしね。

今までよりも身体が軽く感じるのは、肩こりや腰痛や倦怠感がないせいだと思ってたけど、そもそも体重が軽かったってのもあったんだろう。

部屋で下着だけつけて、私は再び、鏡の中の自分と対面した。

髪型や髪の長さは45歳のときと変わってなかったけど、髪の毛一本一本の張りが増しててそのせいか量も増えた気がする。

顔は……うん、高校生の時の私だ、たぶん。

肌の小じわやシミ、目の下のクマなんかも消えてるし、顎のラインがすつきりしてて、なにより肌の張りがぜんぜん違う。

そういえばこの頃、友達に化粧品を借りて化粧したことがあったんだけど、してもしなくてもそんなに変わらなくてちよつとがっかりしたんだっとなあ。

とうぜん鏡台前に大量にあったはずの化粧品はすべて没収、化粧水すらなくて、残ってたのはヘアムースと日焼け止めだけだった。

二の腕は無駄な肉が落ちて手を振ってもプルプルしなくなってたけど、年のせいか薄くなってたムダ毛は元気に復活していた。

胸は崩れた形が元に戻ってて、トップバストの位置も高くなつて

る。

おなかにたまつてた肉も落ちて、垂れてたお尻もきゅつと上がつてて。

45歳の時を知ってるからか、あの頃はあんまりいいと思つてなかつた自分の身体が、まるでモデルみたいにかっこよく見えた。

(いや、実際ずん胴だし胸は小さいし、他の人と比べたらぜんぜん(だけど))

これ、維持できたらそうとういいだろうな。

高校までは部活もやってたけど(ちなみに背が高いからバレー部だった)、就職してからは何もしてなかったから、ちよつと頑張つてみてもいいかもしれない。

ていうか、今は部活にすら入つてないんだから、放つておいたら前るときより早く崩れ始めるなこりゃ。

髪はムースで固めていつもの1つ縛り。

顔には日焼け止めを丹念に塗りたくつて。

Gパンはウエストがアレだったから、部屋の中からもかベルトを探し出して腰に締めた。

私、ファッションとかほんとに興味がなくて(なにしろ出不精だったから)、衣装も少ないし流行もぜんぜん判らないから多少不安ではあつただけど。

仕事を探すにしてもとにかく外に出なくちゃ何も始まらない、つて。

いったん部屋のパソコンで近隣の地図を検索したあと、その情報をケータイに送つて、思い切って外に出てみることにしたんだ。

FILE・1 原作開始 社長令嬢誘拐事件

4月8日（金）

朝は1歩外に出ただけで、すぐに玄関に舞い戻ったけど。今回はそういう訳にはいかないから、とにかく自分の家を覚えるところから始めないといけない。

振り返れば元の世界と同じ、5階建ての公団住宅の1階に私の家がある。

前の道が元の世界よりも狭くて、ふと「日照権とか大丈夫なのかな？」と思っただけど、見れば目の前は高級住宅街のようで、団地の影は広い庭の3分の1くらいしか届いてはいなかった。

階段のちょうど正面は2軒ある家の境あたりだ。

人通りはぜんぜんなかったのだけど、その並んだ家の右側の家から小太りのおじさんが出てきて、ちょうど目が合ったから、私は笑みを浮かべて挨拶をした。

「おはようございます」

さすがに45年も生きてるからね、内気でもそれなりの社交性は身につけてるよ。

もつとも、じつさいに挨拶してたのは職場の周りだけで、家の近くではほとんどしてなかったけど。

「おお、おはよう。久しぶりじゃな愛夏君」

名前を、しかも夢小説ネームを呼ばれてちよつと驚く。

さすがに目の前に住んでれば知り合いだね。

それと、やっぱり私の名前は高久喜愛夏で間違いないらしい。

「最近はあまり見かけなかったようじゃが、元気じゃったか？」

「あ……おかげさまで。ちよつと引きこもってました」

「そうか、引きこもっておったか。……さすがにあんなことが立て続けにあればのオ」

この世界の私が昔の私と変わらない性格だったなら、外に出なかった理由はこれで問題ないだろう。

あんなこと、は、たぶん両親が立て続けに死んだことだ。

仏壇の位牌によれば、父が死んだのは中学3年生のときで、母が死んだのはそれから2カ月も経たない頃だったから。

たぶん私が高校へ進学しなかったのも、その辺りに理由があったんだらう。

おじさんは朝刊を取りに来たようで、何気なく動きを追っていたらふと表札が目に入った。

変わった名前 —— 阿笠 —— あがさ、って。

一瞬ぎよつとしたけどたぶん表情には出てなかったと思う。

こちらが阿笠ってことは、もしかして隣の豪邸って……

「おお、新一君なら学校じゃぞ。ほれ、今日は金曜日じゃ」

ちらつと横目で見た視線に気づいたらしい。

新聞の日付欄を指しながら、おじさん —— 阿笠さんは朗らかに笑った。

「あ、別に用事じゃないんで。じゃあ私、これで」

「愛夏君はこれから買い物かの？」

「それもなんですが、ちよつと仕事を探しに」

「仕事!?! 高校へは復学せんのか？」

復学？

もしかして世間的には私は休学扱いになってたとか？

……いや、もし仮に休学扱いだったとしても、制服がないところからして復学してもたぶん1年生だ。

ここで1年も棒に振るなら予定通り大検を受けた方がいい。

「まあ、それも考えてはいるんですが。とりあえず外に出ようと思いまして。もしもいい仕事先があったらぜひ紹介してくださいね。では」

最後は社交辞令というヤツだ。

別にほんとに期待して言った訳じゃないし、会話の引きとしてはそれほどおかしくもないと思う。

念のため工藤家の表札も確認しておくか、と思って左に向かって歩き始めると、背後で門が開く音がして。

足早に追いかけてくる気配と呼びとめる声を聞いたから振り返った。

「愛夏君！ ちょっと待ちなさい！」

「はい？」

「ちようど頼まれておつたんじゃ！ ここから車で15分ほどのところにある家だな。わしの知り合いが家政婦を探しておつて。きちんとしたお屋敷で、わしの紹介だと言えば悪いようにはならんじやろ。どうじや愛夏君、家政婦はできそうか？」

まさかの展開に啞然とする。

家政婦……って、この「片付けられない女」代表の私にできるのか……？

いや、こっちは仕事を選び好みでできる立場じゃないし。

それに家では片付けられないけど、職場ではそれなりに片付けも掃除もできた、はず。

「あ、はい！ もしお願いできるならぜひ紹介していただきたいです」

「では善は急げじゃ。うちに来なさい。すぐに連絡してみよう」

「あ、ありがとうございます」

私はぺこりと頭を下げて、阿笠さんについて向かいの中へと入っていった。

「ここじゃ。ひとりで本当に大丈夫か？」

「はい。もうここまで送っていただけただけで十分です」

「ほんとうにしつかりした娘さんになったのオ。昔はあんなに内気で人見知りじゃったというのに」

阿笠博士はこれから人と会う約束があるとかで、でも知らない家に行くのに放り出すのは気の毒だと思ってくれたんだろう。

谷さんというお屋敷の家政婦さん（阿笠さんの知り合いの人）に連絡を取ったあと、時間がない中門の前まで車で送り届けてくれたところだった。

「いつまでも引きこもってる訳にはいけませんから。紹介してください。阿笠さんの顔に泥を塗らないためにも、お仕事がんばってください」

「なにかあったらすぐにわしに言うんじゃぞ。我慢はなしじゃ」

「はい、ありがとうございます」

車を降りて、走り去る阿笠さんを見送ったあと、大きな門の呼び鈴を押す。

インターフォンの声に用向きを告げると、すぐに判ったようで年配の女性が門まで迎えに来てくれた。

「こんにちわ。あなたが高久喜さんかしら？」

「あ、初めまして。私、阿笠さんから紹介していただきました、高久喜愛夏と申します。よろしくお願いします」

「家政婦の佐伯です。ずいぶんお若い方のようにね。二十歳くらいかしら？」

「はい」

佐伯さんがお屋敷に振り向きながら言った最後の方が一瞬間きとれなくて、反射的にはいつて答えちゃったんだけど、すぐに意味が判ってちよつとまずかったかなと思う。

そういえば私、若い頃は背が高いせいか実年齢より上に見られることが多かったんだよね。

20代後半頃からは逆に若く見られるようになって。

最近の実年齢を言うとき「逆にサバ読んでません？ぜったい俺より年下でしょ」なんて30代の人に言われてたから、ある意味得といえは得な外見だったのかもしれない。

(つて、ただ単に精神年齢が子供だったせいだと思うけど)

時間的にはそろそろお昼になるかな、つてところだったんだけど、今は谷さんご一家は誰もいないようで(あとで聞いたらご主人と小学生の娘さんの2人だけらしい)、近所に住んでる通いの家政婦さん達は昼休みで自分の家に帰ってるということだった。

私は座敷に案内されて、佐伯さんにお茶を淹れていただいたあと、斜向かいに座って面接をしてもらった。

「高久喜さん、履歴書はお持ちかしら？」

「いえ、すみません。急だったので何も用意してなくて」

「気にしないでいいわ。あとで持ってきてもらえれば。実はね、長年勤めてくれた家政婦の1人がこんど退職することになって。その補充というところで、できるだけ長く働いてくれる人を探しているの。こういうところだから、今いる一番新しい人で5年目で、私は30年近くなるわね。どう？ 高久喜さんは長く働けそうかしら？」

大学へ行こうと思ったのは、このご時世で就職がかなり厳しいと思っただからだ。

でもここで定年まで働けるならぶつちやけ大学なんか行かなくてもいい。

「はい。私もできるだけ長く働きたいと思ってます」

「そう。それは助かるわ。勤務時間はつきり決まってないのだけ

ど、朝はだいたい7時〜11時くらいからで、帰りは5時〜9時くらいまで。フレックス、っていうのかしらね。旦那様の都合で早く出てきたり、遅くまでいたりすることがあるけれど、ぜんいん週40時間勤務で、仲間同士で調整して勤めてるの。それが日勤で時給は850円から。もちろんベースアップもあるから安心して。ただ、今度やめてしまう人が、夜勤の方の人だったのね。夜勤は夜8時に入って朝8時までで時給1000円からね。慣れてきたら高久喜さんにはぜひこちらをやってもらいたいの」

ええつと、日勤なら週3万4千円で、夜勤は1日1万2千円か。

なんかすごく好条件じゃないですか!?

いや、もちろん私が今までもらってた給料の方がはるかにいいんだけど。

でも16歳の女子の仕事にしてはこれはかなりいい方の部類に入ると思う。

つて、そこで気付いちやっただけだ。

夜勤、つて、たぶん16歳じゃできないよね?

私、まだ履歴書出してないし、佐伯さんも私が二十歳だと思ってるから、夜勤ができる家政婦だと思つてこの話をしてるんだ。

もしも私が正直に年齢を言つたら、きつとこの仕事の話そのものがなくなっちゃう。

「どうかしら〜」

黙つて考えている私に、促すように佐伯さんが聞いてくる。

条件は申し分ない。

今私にある選択肢は、正直に年齢を話すか、それとも履歴書を偽造するか、その2つだ。

「あの、日勤の方はだいたい想像できるんですけど、夜勤は何をするんですか?」

「そうね、旦那様が帰ってこられる日は夜遅いことが多いから、食事をお出ししたり、お風呂の用意をしたり。ときどき秘書の方やお客様がお泊りになられる時にはお部屋の用意をしたり、お酒をお出ししたり。あと、最近はあまりないけれど、お嬢様が夜中に目覚めてしまったときにお世話をしたり。朝は旦那様とお嬢様をお起こしして、朝ご飯を用意して。まあ、眠らずにいるのが一番の仕事かしらね」

お酒を出す、か。

やっぱり16歳にはさせられない仕事だ。

でも、私は実質45歳だからお酒の席での男性のあしらい方くらい知ってる。

(セクハラ上司はどこの世界にもいるのだ)

朝食と子供の世話、つてのはちよつと自信ないけど、でも日勤の間に教えてもらえばきつとなんとかなる。

「わかりました。その条件でぜひお願いします」

「ほんとう？ ではさつそく明日からいいかしら？」

「はい。ぜひよろしくお願いします！」

こうして、悪魔の声を聞いた私は、谷さんのお屋敷で家政婦をすることになった。

この決定がのちにとんでもない事態に発展するなんてことはまるで知る由もなく。

谷さんのお屋敷がある弥生町から米花町へはちようどバスがあるらしく、バス停の場所を教えてくださいました。でもバスには乗らずにバス通りを歩いていった。

阿笠さんの車で15分かからなかったくらい距離だから、歩いてもたぶん1時間前後くらいで帰れると思ったんだよね。

別にバス賃くらい惜しくないけど、そもそも最初に家を出た目的つ

て、自宅周辺の散策だった訳だし。

それに文房具屋を探して履歴書も買わなきゃだったから、ケータイに表示した地図を見ながら、商店街のようなでできるだけにぎやかな通りを目指して歩いていったんだ。

そういえば、そろそろお昼を食いたいよね。

通り道にお店があったら入っちゃおうかな、なんて思いながら歩いてると、少し先にレストランらしいお店が見えた。

近づいていくと看板に「コロンボ」の文字。

………なんか字面にすぐく見覚えがあるんですけど。

しかも少し先の道路は工事らしくて警備員が警棒を振ってるし。

これ、確か原作2話（だっけ？）で阿笠博士が夕食を食べたレストランじゃない？

しかもその先で道路工事をやってるってことは……

もしかして、すでに原作が始まっているか、もう少して原作が始まる、ってこと……？

とりあえず考えるのはあとにして、私は個人経営らしいレストランコロンボに足を踏み入れた。

「お昼のピークは過ぎていたようで、入ったときはあらかた埋まっていた席も、メニューを見ているうちにどんどん空いていった。」

メニューの中で一番目立つようになってるのは特製ミートソーススパゲティ。

パスタはね、おいしい店のはとことんおいしいけど、そうじゃないお店の方がけっこう多かったりするんだよね。

このお店がどっちは判らないけど、このミートソースは阿笠博士の好物みたいだし、試しに食べてみようと思ってエプロンのお姉さんに注文した。

注文を済ませて見まわすと、カウンターのおじさんが金具で綴じた新聞を広げているのが目に入った。

そのカウンターのはずれ辺りには数紙の新聞がかけてあるラックが見える。

このお店、何社かの新聞を選んで読めるようにしてあるみたいね。ということは注文から来るまでけっこう時間がかかるんだろうから、私も読んでみようかと腰を上げかけた時、エプロンのお姉さんがラックに新聞を戻して、別の新聞を持って奥に行くのが見えた。

その、新しく置いていった新聞(たぶん夕刊に入れ替えたんだろう)の紙面をちらっと見て、驚いて、もっとよく見たくて立ち上がって新聞を手取る。

その場で立ちつくしちやったのは勘弁してほしいと思う。

だってそのスポーツ紙の一面に印刷されてたのは、コナンの映画の最初に必ず出てくる、あの顔の工藤新一だったんだから。

「ああ、工藤新一くんね。知ってた？ 彼、この近くに住んでて、うちのお店もよく利用してくれるのよ」

「あ、はい」

うしろからの声に生返事。

でも、この新聞が今日ここにあるってことは、たぶん明日の土曜日が蘭とトロピカルランドへ行く日で、ジンに薬を飲まされちゃう日だってことなんだ。

「でもすごいいわよね。彼、もう3年くらい前からの常連さんなんだけど、今や全国で有名な高校生探偵だものね。さっきもマスターと、今度来たらサインもらつとかないと、つて話してたところなの」
「……そうなんですか」

いや、もしも今日が原作第1話の日だったとしたら、今度来たら、じゃ間に合わないけどね。

明日の夜にはもう工藤新一はいない。
江戸川コナンになつちやうんだ。

「えりちゃん、特製ミート上がったよ」

「はいー！ あ、お客さん、お待たせしました。今お持ちしますね」

ラックに新聞を戻して席に着くと、すぐにお姉さんはパスタを持ってきてくれた。

私がひとりで食べるにはちよつと量が多いかな。

でも食べてみるとお味は良好で、パスタもミートソースもかなり上手にできていた。

（うん、でも、私が今まで45年食べてきて一番おいしいと思つた専門店にはかなわないみたい。ゴメン）

……明日か。

日付が判つても、明日は仕事の初日だから、トロピカルランドまで助けに行つてあげることができないよね。

ううん、たとえば私がフリーだったとしても、果たして助けに行く勇氣が出るかは判らない。

私はたぶん、ジンに目をつけられる危険を冒してまで、工藤新一を助けようとはしないだろう。

それに、あの時ジンは拳銃で新一を殺すこともできたけど、ジェットコースター殺人事件の直後で警察がうろついてたから薬に切り替えたんだけだ。

薬を飲まされたからこそ新一は生きていた。

例えば今回、私が出しやばつて新一がジンやウオッカに出会わないように誘導することができたとしても、これから先の物語ではコナンは何度もあの2人とすれ違つてた。

コナンにならなかつた新一が、何の予備知識もなくあの2人と出会つてしまった場合、もしも拳銃が使える状況ならその場で殺されて

しまう危険性の方がはるかに大きいんだ。

新一はあの2人と出会って、でもとうぜん迎えるはずだった最悪の結末—— 殺される、という事態にはならなかった。

それはたぶん、新一にとってはとてつもない幸運だったんだ。

だったら私は見守るしかない。

黒の組織と出会った工藤新一が、無事に江戸川コナンになるのを。

エプロンのお姉さんに文房具屋さんの場所を訊いて。

買い物を終えて無事に帰宅した私は、部屋の窓からずっと工藤家を見つめていた。

とはいっても、私の部屋の窓際にはマンガが大量に積み重なったから、窓から1メートルくらい離れた場所からレースのカーテン越しに、だったけど。

(ちなみに今朝起きてマンガが減ってる気がしたのは、案の定「名探偵コナン」の全巻が消失してたからだ)

夕闇せまる頃、通りから駆けてきた少年は、工藤家の門の前で足をとめた。

ふと、こちらを振り返って。

数秒間視線を固定した少年と、私は目が合ったような気がした。

そのまま、またふと振り向いて彼は門を開けて入って行ってしまったけど。

(今の……なに?)

私の視線を感じたのか、ただ単にちよつと見ただけなのか、よく判らないけど。

それが、私が生で工藤新一を見た、最初で最後の姿になった。

4月9日(土)

7時43分着のバスは、3分ほど遅れて弥生町へと到着していた。その先は徒歩2分もない。

昨日も思ったけど、通勤はバスより自転車の方がいいかもね。運動にもなるし、バスは交通状況によってすぐ遅れるから。

とにかく今日が私の初出勤だ。

昨日阿笠さんにもそれとなく口止めしといたし（もちろんちゃんとお礼を言ったあとね）、年齢詐称がバレるか私がかへマをやるまでは、ここが私の職場になるんだ。

昨日教えてもらった裏口から台所に入ると、娘さんが学校に出かけてひと段落ついたのか、3人の家政婦さんが和やかに賄い食を食べていた。

「おはようございます。今日からお世話になります、高久喜愛夏です。よろしくお願いします」

「おはようございます」

「おはよう、こちらこそよろしく」

互いに自己紹介をして、昨日の佐伯さんに年齢を4つサバ読んだ履歴書を手渡すと、さっそく食器洗いを指示される。

得意とは言わないけど、今までの45年の人生で壊した食器はまだ一ケタだ。

まあ、洗ったのべ個数を数えれば、ふつうの主婦の千分の一にも満たないだろうけど。

食器洗いが終わると、今度は犬の散歩。

家族だという3匹のワンちゃんに引き合わされたから、私は一声挨拶したあと、膝を折って掌を差し出した。

「おはよう、ワンちゃん達」

「あら珍しい。この子たちが一言も吠えないなんて」

「そうなんですか？」

「ええ。だいたいみんな覚えてもらうまで少しかかるんだけど。でもよかったわ。安心して任せられそうね」

「はい。任せてください」

犬の散歩は、昔近くの親戚が犬を飼ってたから、ときどきさせてもらったことがある。

とはいっても中学生の頃だから、30年以上前になるけどね。

コースは彼らに任せていいと言われたから（帰ろうと声をかければちゃんと家に帰ってくれるらしい）、道が不安な私も安心して、彼らに散歩に連れていってもらった。

その間、他のみなさんはこの広いお屋敷のお掃除。

さすがにいっぺんには無理だから1匹ずつ交代で散歩して1時間、台所にワンちゃん達の水をもらいに行くと、なぜか他のみんなが台所で顔を突き合わせていたんだ。

「ワンちゃん達のお散歩終わりました。水をいただきますね」

「おかえりなさい。ちょうどよかったわ。高久喜さん、ちよつと頼まれてくれないかしら」

「はい、なんででしょう?」

「実は、さつき旦那様から、今夜は4人ほどお客様を連れて帰るとお電話が入ったんだけど。明日のお味噌汁の分のお味噌が足りなくなりそうなのよ」

「あ、じゃあ買ってきます。お店と銘柄を教えてください」

「ええ、でもお昼が終わってからでいいわ。高久喜さん、先にお昼休みに入って。今日は夕方から降りだすっていうから、私たちはお洗濯とお布団干しをぜんぶ終わらせちゃうから」

そんな訳で、私は少し早くお昼休みを取らせてもらって、そのあと教えてもらったお店まで歩いてお味噌を買いに行ったんだ。

ところが、運の悪いことに教えてもらったお店が臨時休業。

いったん帰ってもよかつたんだけど、せつかくケータイを持って出たから、その場でお屋敷に電話を試してみると。

『そう。だったら米花デパートの地下に同じ系列のお店があるから、そちらに行ってみてくれる？ 米花デパートわかるかしら』

「はい。たぶん大丈夫です。行つてきます」

という訳で、今度はちょうどいいバスがあつたから、米花駅までバスで行つて無事に米花デパートへと辿りついた。

それなのに、なぜかその店では、この銘柄のお味噌だけが品切れしてたりして。

ほかの銘柄はそろつてゐるみたいだから、もし違うお味噌でよければ代わりに買つて帰ろうと思つて、再び谷家に電話したんだ。

でも ——

「もしもし、高久喜です。谷さんのお宅様でしょうか」

『なんだ貴様は！ どこの高久喜だ!!』

「そちらの家政婦の高久喜ですけど」

『そんなヤツは知らん！ こっちはそれどころじゃないんだ!! 二度とかけてくるな!!』

男の人の声に怒鳴られて、その後訳も判らないまま電話を切られました。

……ええつと、ケータイで履歴から掛けてる訳だから、間違い電話とかじゃないよね、たぶん。

だつてさつきはちゃんとながつたし。

でも、二度と掛けるなど言われたら、さすがにもう掛けるのは嫌かも。

(怒鳴られたくないし)

そんなことを考えてたら、数分経つて公衆電話からの通知で電話がかかつてきたんだ。

「はい、高久喜です」

『あ、高久喜さん。佐伯だけど今電話大丈夫？』

「はい。あの、さつきお屋敷の方に電話したんですけど」

『ええ。私達もそばで聞いてたから。それでどうかしたの？』

「実は、いま米花デパートにいるんですけど、同じ銘柄のお味噌が売り切れてたんです。なのでもし違う銘柄でよければと思って」

『そうね。……でも旦那様はいつもその銘柄なのよね。悪いんだけど、他のお店を少し探してもらえないかしら』

「判りました。ちよつと当たってみます」

『悪いわね。また1時間くらいしたらこちらから電話するわ。今ちよつと取り込んでるから』

「なにかあつたんですか？ さつきの人って」

『何があつたかはここでは言えないけど……さつき電話に出たのは旦那様よ。高久喜さんのことはちゃんと伝えておいたから、どうか気にしないで頂戴ね』

「判りました。それじゃまた」

実はこの時点でかなり嫌な予感はしてたんだ。

だって、お仕事初日でいきなり雇い主に訳も判らず怒鳴られるとか。

まあ、昨日の今日で、旦那様にも私のことが伝わってなかったのかもとは思うけどさ。

時刻を見ると午後4時少し前だった。

確か昼の1時くらいにお屋敷を出たはずだから、いつの間にかもう3時間近くも経ってることになる。

お味噌屋さん、つて、私はスーパに並んでるお味噌しか知らないけど、たぶんこれってそういうお味噌じゃないんだよね。

だったら近所のスーパーを回ってもムダだろうし、かといって専門店なんか知らないし、あんまり時間をかけたらお店だってしまっちゃうだろうし。

少し考えた私はもう一度デパ地下に戻って、さっきのお味噌屋さん
に訊いてみることにした。

その結果やっぱり、このお味噌は大量生産の安物なんかじゃないか
ら、特定のお店にしか卸されてないだろうって話だった。

そんな訳で、けつきよく私は、パッケージにあった製造元に直接電
話をかけることにして。

折り返しいただいた電話で都内の卸先を何箇所か教えてもらった
から、その店にも電話をして、営業時間と在庫数を確認して。

東都環状線に乗ってる最中に、公衆電話から2回目の電話がケー
タイにかかってきたから。

私はすぐに電車を降りて電話を取って、今は見つけたお店に向かっ
ていることと、帰りは遅くなるかもしれないことを佐伯さんに伝えた
んだ。

そんなこんなで、どうにか無事に高級味噌をゲットした私は、再び
環状線に乗って米花駅まで戻ったあと、雨が降る中バスを待つて乗り
込んで。

谷家に戻ってきたときには、すでに夜の8時近くになっていた。

やっぱり16歳の若い身体は違うよね。

さすがにあちこち歩き回って疲れたけど、でも40代の疲れを知っ
てる私には、こんな疲れはまだまだ序の口だ。

これが45歳の身体だったら、帰りは間違いなくタクシーを使っ
ただろうな。

ここからまた帰りもバスだけど、たぶん座らずに帰ることくらいで
きると思う。

「ただいま帰りました。遅くなりました」

裏口を入ったところで声をかけたんだけど、なぜか台所には誰もいなくて、屋敷の中も静まり返っていた。

確か今日は旦那様がお客様を連れて帰ってくるはずだから、いつもなら帰る家政婦さん達もまだいるはずで、台所がこんなに静かなはずはないよね。

不思議に思いつつ買ってきたお味噌を調理テーブルの上に置くと、庭の方から慌てたように佐伯さんがかけてきた。

「ただいま帰りました。遅くなってすみません」

「お疲れさま。たいへんだったわね」

「それほどでもないです」

「疲れてるところ悪いんだけど、ちよつとこちらに来てもらえないかしら。今、とりこんでて」

そういえば電話でそんなこと言ってたっけ。

訳も判らず佐伯さんについていくと、なぜかワンちゃん達がいる庭に家政婦さんと、知らない人が何人が集まって話しているのが見えた。

「旦那様。高久喜さんが戻りました」

「ああ。確か今日から雇った家政婦だったな。私が屋敷の主人だ。こちらが探偵の毛利小五郎さん」

そう、旦那様に言われて、佐伯さんに背中を押されて、一步踏み出した先に見えた人たちは――

……え？ 毛利小五郎、って――

旦那様の視線の先にいるのが、口ひげを蓄えた長身の男性。

向かって左にるのが、髪の高い高校生くらいの女の子。

そして、茂みの近く、ワンちゃん達のすぐそばで尻もちをついているのが、メガネをかけた子供。

その子供の近くに落ちてるボール。

この光景、見たことがある。

でも現実の風景としてじゃない。

マンガの中、もしくは、テレビアニメの中の物語として。

「ご主人、そちらは？」

「はい。今日初めて雇い入れた家政婦で、さっきまで買い物に出ていました。——君、ご挨拶を」

「あ、初めました。高久喜愛夏です。よろしくお願いします」

大勢に注目されてさすがに居心地が悪かったのもあったんだけど。

なんか、漂う空気が普通じゃないっていうのか。

知ってる、私、この空気がどうしてなのか。

だってこの話、工藤新一がコナンになって、最初の事件だったから。

でもまさか、家政婦として働き始めたお屋敷が、あの狂言誘拐事件の舞台だったとか、そんな偶然が起こるなんてふつう思わないじゃない！

視線を感じる。

どういう意味の視線なのかは判らない。

あの、大きな眼鏡の向こうから。

「高久喜さん？」

「はい？」

反射的に返事をして、振り返って驚く。

声をかけてきた毛利蘭は、目が合って嬉しそうな笑顔に変わったから。

「やっぱり高久喜さんだ。覚えてる？ 私、中学で隣のクラスだった

毛利蘭よ。久しぶりね。元気だった?」

「……え?」

声を上げたのは私じゃなくて、隣にいた佐伯さんだった。ヤバい、と思った時にはもう遅くて。

「中学のとき、ですか? あの、失礼ですけど、お嬢さん今おいくつですか?」

「私ですか? 今16歳、高2ですけど」

「高久喜さんが、隣のクラスだったんですか?」

「ええ。体育が2クラス合同だったんですけど、彼女背が高く運動神経がよかったのでよく覚えてます」

「高久喜さん、あなた、今二十歳だって ——」

「すみません! 歳サバ読みました! ごめんなさい!! どうしてもこの仕事でしたかったんです!!」

悪いことをしたらすぐに謝る、誤魔化さない。

誰もが子供の頃に教わることだけど、社会人の常識でもある。

でも……ああ、これでこの職場に定年まで勤める夢は露と消えたな。

まだ始めたばかりだったけど、みんないい人たちだし、家政婦もけっこう自分にあってるかもしれないと思ったのに。

「まあ、その話はあとだ。それより晶子だ! 毛利さん、なにか手掛かりは!!」

「ご主人落ち着いて。ところで高久喜さん、あなたはいつ買い物に?」

毛利探偵に尋ねられて、私は訳も判らないまま答える。

「はい、確か昼の1時頃だったかと」

「買い物に7時間もかかったんですか?」

「はい。いつものお店がお休みで、次に行つたところが売り切れて、そのあとメーカーに問い合わせたりいろいろ」

「はっはーん。判りましたぞご主人」

「ほんとうですか毛利さん!？」

「今日初めて雇い入れた家政婦。お嬢さんが帰宅する前に家を出て、その間のアリバイは一切ない。確か犬は高久喜さんに吠えなかったんでしたな」

「はい、ええ、確かにそうですが」

「彼女の長身なら黒づくめの服装をすれば男に見える。それに彼女は運動神経がいい。10歳の女の子を抱えてその木を登つて塀を乗り越えることくらいいけないでしょう。声は高かつたような低かつたような。女性が男を装つた声を出していたのならその矛盾も解けません」

一息ついて、毛利探偵は私に、勢いよく人差し指を突き付けた。

「晶子ちゃんを誘拐した犯人は——高久喜さん、あなただ!」

——毛利のおっちゃんのこと、とんちんかん推理で犯人呼ばわりされること。

それがこんなに怖いことだなんて、私は思つてもみなかった。

一瞬、辺りがしんとなつて。

真つ先に声を上げたのは毛利蘭、だった。

「まさか! お父さん、高久喜さんはそんなことしないわよ!」

「だが彼女はここの家政婦になるために年齢を詐称したんだ。晶子ちゃん誘拐の下調べとして、この屋敷の構造を探るためだろう」
「そんな……!」

「貴様ー！ 晶子はどこだ！ 早く晶子を返せ!!」

「旦那様落ち着いて！」

「おじさん！ もしもこのお姉さんが犯人だったら買い物から帰ってきたりしてないよー！」

「ガキは黙ってるー！ この名探偵の完璧な推理が間違ってる訳がー」

「じゃあなんで買い物から帰ってきたのか教えてよー！」

目の前でいろんな人が言い争って。

旦那様に胸倉を掴まれて。

それでも、私は一言も、何も言うことができなかった。

突然の展開に呆然としたのもあるんだけど。

私は最初に晶子ちゃんがさらわれたのが狂言誘拐で、執事さん（だっけ？）が共犯者であることを知ってる。

でも今それを口にしたところで、とうてい信じてもらえとは思えなくて。

だって私は、この仕事を得るために年齢を詐称して、周りの人の信用を失ってしまったのだから。

……ちよつと、待って。

この状況、ものすごくまずくない？

確かこのあと、待機先のホテルから今度は本当に晶子ちゃんがさらわれて、さらった犯人から電話がかかってきて。

その時晶子ちゃんが監禁場所のヒントを叫んで、コナンが探し回る。

でもって、最後の電話で犯人が身代金の受け渡し場所を指示したあと、晶子ちゃんは殺されるんだ。

もちろんその寸前でコナンが飛び込んでいくから、危機一髪のところまで晶子ちゃんは助かるんだけど。

もしもこの狂言誘拐の共犯者——麻生さんだ。今思い出した——がこのまま真実を告白しなかったとすると、旦那様はきつと私に監禁場所がどこなのかを尋ねる。

私はその場所が二ツ橋中学だと知ってるから、教えてあげれば毛利探偵はきつとその場所へ行く。

でも、最初に飛び込んでいったのが毛利探偵だったら、あの犯人なら逆上して晶子ちゃんを殺しかねないよ。

だからといって、私が黙ったままこの状況が長く続いたら、コナンが晶子ちゃんを見つけ出す時間が足りなくなっちゃうかもしれないんだ。

私が監禁場所を教えて、たとえ一時的に犯人と疑われたとしても、警察がちゃんと調べればたぶん私への疑いは晴れる。

だから間違いなく晶子ちゃんが助かるなら教えるくらいするけど。

ダメじゃん、私。

物語を知ってたって、私は何の役にも立たない。

むしろ疑われて物語を混乱させてるだけ——

その時だった。

「旦那様！ 高久喜さんは何も悪くありません！ 私です！ 私がお客様を誘拐しました!!」

推理で追い詰められた訳でもないのに、とつぜん麻生さんがそう告白した。

きつと、麻生さんの中にある良心が、彼に行動させたのだと思う。

あらゆる意味でほっとした私は、知らず知らずのうちにその場に崩れ落ちていた。

そのあとはほぼ原作どおりに話が進んで。

屋敷の中で待っていた私達の元に、毛利探偵から犯人確保と晶子ちゃん救出の連絡が入った。

そのまま日勤のお手伝いさん達はそれぞれの家に帰っていったけれど。

私だけは屋敷に残されて、真夜中過ぎにようやく晶子ちゃんを寝かしつけた旦那様から部屋へと呼ばれた。

「高久喜さん。勘違いだったとはいえ、今日は本当にすみませんでした」

「いえ」

本来、この人は心が優しい人なんだろう。

私に詰め寄ったのも、晶子ちゃんを愛するあまりとった行動なのだと、私はちゃんと納得していた。

「しかし、それとこれとは話が別だ。——たとえばどんな事情が

あっても、年齢を詐称してはいかん」

「はい。申し訳ありませんでした」

「悪気があった訳ではないんだな？」

私はうなづく。

「では、これを持って行きなさい。1枚は今日のお給料分と交通費で、もう1枚は私の詫びの気持だ。少ないが取っておいてくれ」

テーブルに置かれた封筒をのぞいてみると、1万円札が2枚入っていた。

まあ、もしかなくてもこれってクビ、ってことだよな。

でも怒鳴られたお詫びが1枚っていうのはどうなんだろう？

判らないけど、いろいろ言っても角が立つだけだし、気持ちは判る

から、これで許してあげることにした。

「じゃあ、ありがたく頂きます」

その時、ふすまの向こうに人の気配がして。

「旦那様、毛利探偵がお着きになりました」

「お通しして」

「はい、かしこまりました」

「あ、じゃあ私はこれで。お世話になりました」

「高久喜さん」

「はい？」

「もし、あなたが二十歳になって、その時我が家の家政婦が足りないよ
うなら ——」

お屋敷を正面玄関から出ると、門のすぐ目の前にタクシーが止まっ
ていた。

ちらつとのぞけばうしろのドアが開いて、頭に包帯を巻いた子供
と、その向こうに高校生の女の子がいるのが判る。

「高久喜さん！ よかったら一緒に乗って行って。お父さん、依頼料
受け取ったらすぐに戻ってくると思うから」

え……？

これって、今扉が開いた、ここに乘れってことだよな？

いや、正直言っておりがたいよ。

こんな時間じゃもうバスもないし、歩いたら1時間くらいかかる

し、さすがに今から歩いて帰るほどの元気もないし。

でもさ、座席のいちばん向こうにいるのが毛利蘭で、その手前に江戸川コナンがいるってことは、私はつまり工藤新一の隣に座らなきゃってことじゃん！

一瞬、固まっちゃったんだけど、どうにか頭を巡らせて、私は車外から毛利蘭を手招きした。

「ちよつと、いい？」

「ん？ なに？」

私は一度屋敷を振り返って、毛利探偵がまだ出てこないことを確認したあと、車を降りてきた毛利蘭をちよつと離れたところまで引つ張ってきた。

「どうしたの？ なにかコナン君に内緒な話？」

「うん。えつと、言いにくいことなんだけど」

「なあに？」

「私、子供が苦手で」

これは本当のことだ。

妹の子供とか、知り合いの子供とかならまだどうにかできるんだけど、他人の子供はほんとに扱いが判らない。

まあ、じつさい江戸川コナンは子供じゃなくて工藤新一という高校生なんだけど。

だからこそ隣に座られたら余計に困るんだよ！

「そうなんだ。でもそういう人もいるっていうよね」

「できれば助手席か、毛利さんに真ん中に座ってもらえると助かるんだけど」

「じゃあコナン君に奥へ行ってもらおうね。あたしも高久喜さんとおしゃべりしたいし」

そう言つて毛利蘭は車内へ戻つていつて。

「コナン君、そっちへ詰めてくれる?」

「……えー、やだー。ぼく真ん中がいい」

な……なにを言つてるんだ工藤新一!

「駄々こねないですよ。お姉ちゃんたち帰り道でお話ししたいんだから」

「真ん中がいいんだもん。僕もこのお姉さんのお隣がいい!」

「コナン君……」

「こら何やつてる! 早く乗れ! タクシー代がもつたいねえだろ!」

そう、やってきた毛利探偵に背中を押されて。

慌てて乗り込んだ私たちは、けつきよく工藤新一を間に挟んで川の字に!

「お待ちせしました。運転手さんすぐに出してください。高久喜さん、住所は?」

「……」

「おい住所!」

「あ、はい! 米花町2丁目です!」

「え? そうなの? 高久喜さんの家つて新一の家に近いんだ。ねえ2丁目のどのへん?」

あ、あの、蘭さん、私今、頭の中がパニックで。

だって、隣に工藤新一とか、工藤新一が隣にとか、そんなんでいっぱいっぱいなところへもつてきて工藤新一の家が向かいとか、向か

いが工藤新一の家とか。

だってさ、生きてる工藤新一だよ？ アニメの中じゃなくて、今隣に工藤新一が座ってるんだよ!?

さすがにこの年だから恋愛経験ゼロとか大ウソは言わないけど、そのへんにいるふつうの男と工藤新一とじゃ、存在そのものがぜんぜん違うんだよ!

「お姉さん?」

「高久喜さん?」

「……蘭姉ちゃん。お姉さん固まってるよ」

「うん。そうみたいね」

聞こえています。

聞こえますから。

お願いだから、袖をつんつん引っ張るのはやめてください。

この拷問はあとどのくらいで終わるんでしょうか。

夜中だったから、首都高を通らなくてもたぶん5分ちよつとくらいだったと思う。

でも私にとつてはほとんど永遠に近い時間で。

ようやく2丁目の、工藤新一の家の前で車が止まって、やっと私はその拷問から解放されることができた。

すばやくタクシーを降りて助手席の窓を開けた毛利小五郎に挨拶する。

「あ、毛利探偵。送ってくださってありがとうございますごさいました」

「ごつちこそ、悪かったな。犯人にしちまって」

へえ、毛利探偵ってちゃんと謝るんだ。

てつきり「あれは真犯人をおびき出すための演技ですよワツハツハ」とか言つてごまかすと思つたのに。

「高久喜さん。そこが新一の家なの。高久喜さんの家はどこ？」

工藤新一がじっと私を見上げてる。

「そこ。向かいの団地の一階」

「へ？ こんなに近かったの!? じゃあとうぜん小さい頃一緒に遊んだりしたよね？」

いや知らないし。

「ごめんなさい。あんまり記憶になくて。……じゃあみなさんお気を付けて」

「うん。またね」

「お姉さんバイバイ」

コナン君が可愛らしい手を振ってくれる。

でも、やっぱり視線はおかしくて。

工藤新一のあの視線はいったい何なんだろう。

にしてもヤバかった、マジで。

だってタクシーのうしろで3人乗りつてことはほとんど密着状態だよあの工藤新一と!!

心臓バクバクで意識半分飛んでたし、もつと続いてたらぜったい錯乱して訳わからないこと喋り出してたよ自分!

あああ考えちゃ駄目だ考えちゃ駄目だ考えちゃ駄目だぎやあああ
あああああーーー!!!

とにかく今日は疲れました。

お休み前の一服ができないのは悲しいけれど、とりあえず今は何も考えずに眠りにつこうと思います。

FILE・2 女たちは人知れず戦う くアイドル
密室殺人事件く

4月10日(日)

おはようございます、というか……眠れませんでした。

毎朝恒例、無意識に煙草を探して溜息をつく。

禁煙3日目、もともと禁煙するつもりなんかさらさらなかった私は、早くもくじけそうになっていた。

……吸いたいなあ。

でも昨今、この姿でコンビニに行けば間違いなく証明書の提示を求められるだろうから、なんとか気を散らしつつ諦めるしかないのかもしれない。

(ていうかその前に煙草代月2万円のムダ遣いが怖い)

嗚呼、現実逃避がしたいよお。

夜の間くらい仕事のこととかお金のこととか、ほんとはなにも考えたくないのに。

現実逃避がしたくてブーチの○護オチ夢小説とか読んでても、気がつくと考えてるのは原作沿いコナントリップのこと。

つまり、今の私にとってそれは現実って意味で……。

とにかく、この世界で生きていかなきゃならないんだから、まずは仕事を探さないと。

結論は出てるんだから悩む必要なんかないんだよほんと。

そう思っつて、眠れないままネットの就職情報サイトにアクセスしたら、意味不明のキャッチフレーズの羅列に翻弄されて訳が判らなくなりました。

(今の若者はあれを見てやりたい仕事が見つかるのか？ そう

なのか??)

昔のパツと見てすぐ判る求人広告が懐かしいよ。

どうやら自分、45歳にしてすでに現代に生きる人間じゃなくなつてゐるらしいです。

そんなこんなで、現実逃避も仕事探しも上手くいかなかった日曜日の朝。

とりあえず朝風呂を浴びて、いつものように長い髪を1つ縛りにして、出かける支度が整ったのが朝の8時半ごろ。

まだちよつと早いかな、と思いつつ阿笠博士を訪ねると、満面の笑みで迎えてくれました。

「おお、愛夏君じゃないか！ 谷さんのお屋敷はどうだったかね？」

はい、ごめんなさい、初日でクビになりました。

上記を少しだけ丁寧な言葉に直して話し頭を下げる。

だって、せっかく世話してもらったのにそれをふいにした訳だから、社会人としては紹介してくださった阿笠さんにはちゃんとお詫びしておかなければならないからね。

「そうか、残念じゃったがまあ、気にすることはない。また次を頑張ればいいんじゃないのオ」

「本当に申し訳ありませんでした」

お部屋で食後のコーヒーをこちそうになりながら経緯を話すと、謝り倒す私とは逆に阿笠博士は笑顔で私を慰めてくれた。

もともとそれほど長居するつもりはなかったから、猫舌の私が飲み頃になったコーヒーを飲み干して腰を上げかけたその時。

突然だった。

「博士ー！ いるかー!? ちょっと聞いてくれよ——」

呼び鈴もノックもなくいきなり玄関の扉が開いて、眼鏡の少年が駆け込んできたのは。

「しん……コ、コナン君!? コナン君じゃないかね!」

「え? ……愛夏……お姉ちゃんがどうしてここに……」

まさか私がいるとは思ってなかったんだろう。

焦りまくったらしい2人がピタツと動きを止めて、私自身も突然のことに固まってしまって、3人の間に沈黙が流れる。

だって、朝っぱらから生コナンだよ!?

昨日は事件のショックとかもあって実はちゃんと顔を見合わせたりなんかしてなかったけど、今はまだ午前中。

昼間の明るさの下で生コナンとか、この一瞬で心臓が止まらなかったのが不思議なくらいじゃん!!

「……じゃ、私はこのへんで」

はい、ヘタレですみません。

立ち上がり、後ずさり、玄関で靴を踏んで転びかけドアに頭をぶつけながらも、どうにか2人が復活する前に博士の家をあとにすることができました。

(いやマジでやめてください朝から生コナンとか心臓つぶれるしつかヨダレ垂れてないよねヤバイよマジでヤバイよ)

にしても今日だっけ? 蝶ネクタイ型変声機って。

博士が新一の幼児化を知ったのも昨日の夜のはずだから、こんなに早く変声機が出来上がる訳ないし、これは原作には描かれてないコナン君の日常、ってことでもいいのかな。

少しの間部屋で落ち着きを取り戻し(こういうときに煙草がないのがほんとにキツイ)、私は今日も周辺の散策&仕事探しのために家を出た。

ネットの就職情報が私の感性に合わない——だけだと信じた
い——ことが判ったので、たぶんこの世界のこの時代にもあるだろう就職情報雑誌と、お店なんかの入口に貼り出されたスタッフ募集ポスターを求めて駅の方向へ向かった。

この手のポスターはファーストフードやファミレス、コンビニなんかではけっこう見かけるけど、もともと私は事務職で接客とかやったことがないから、そういうのはできれば後回しにしたいんだよね。

という訳で、ちようどよく開店してくれた駅前通りの本屋に客1号として飛び込んで、初めてのの本屋の配置に戸惑いいつも就職情報誌を手に入れることができて。

どこか静かな所でお茶でも飲みながら見ようかな、と再び歩いてい
たとき、なぜか私に声をかけてくる人がいることに気がついた。

「あれ? 愛夏ちゃん? 愛夏ちゃんよね?」

16歳の私よりも少し年上くらいに見える女の子だった。

女子大生、かな?

もちろんこの世界、私自身が知り合いと呼べる人は一切いないんだ
けど、阿笠博士や毛利蘭のように向こうが一方的に知ってる知り合い
はたくさんいるのだろう。

「はい、そうですけど」

「覚えてない? 私ユキ、昔ピアノ教室で一緒だった」

あ、はい、ピアノ教室、通ってました……35年くらい前まで。

確か始めたのは小学校上がる前で、10歳くらいのときに当時の先生が辞めちゃったから、私もやめたんだよね。

まあ、もともとそんなに好きじゃなかったから、練習しないでよく母に怒られてただけだ。

今はどうなのか知らないけど。

昔の、私を通ってたピアノ教室って、自宅にピアノ持つてる生徒の家を借りて開いてただ。

そこに先生が来て、近所の子供が来て、1人30分くらいずつ個人レッスンを受ける。

だから生徒同士の交流はあまりなかったんだけど、みんなレッスンの10分か15分くらい前に来るから、順番が前後の子とは多少交流があったかもしれない。

「すみません、覚えてないです」

「そっか、愛夏ちゃんまだ小さかったもんね。見た目は私と同じくらいに見えたんだけど、4歳下だって聞いて驚いた覚えがあるよ。変わってないよねー」

「はあ」

どうやら人違いとかじゃなくて、ほんとに私の知り合いらしい。

教室には基本的に小学生までの子供しかいなかったから、彼女が4歳上なら私が2年生の頃くらいの知り合いなのかな？

だったらまあ、覚えてないで通しても問題ないだろう。

「ねえ、せっかく会ったし話しよう。少しくらいなら平気でしょ？

私も待ち合わせ早く来すぎちゃって」

「え？ あ、でも」

「いーのいーの、彼女たぶん遅れてくるから。それに待ち合わせの相手ってヨーちゃんだし。さすがにヨーちゃんは覚えてるよね？」

そうまくしたてながら、ユキさんと名乗ったその人は私の背中を押しながら歩き始めてしまう。

うん、たぶん悪い人じゃない、それは間違いないと思う。

ただ、ちらつと目に入った彼女の手提げバッグの中に、ファイルや

資料っぽいものが覗いてるのが気になるくらいで。

（大丈夫だよな？ それになにか買わせられそうになったら逃げられるくらいのスキルは過去の痛い経験とともに持つてるし）

「あの、誰ですか？ ヨーちゃんって」

「ほら、渡辺先生がきてくれてたおうちの子で、一度発表会に出たこともあるヨーちゃん。ほんとに覚えてない？」

発表会のことはうつすらと記憶にあるけど、でも出てたのはヨーちゃんじゃなくてチエコちゃんだった、と思う。

まあ、私が知ってるチエコちゃんがこの世界にいる訳ないんだけど。

もしかしてこの世界、私の記憶と少しでも整合性を取ろうとしてくれているのかもしれないな。

……判らないけど。

「えーと、ひらひらした衣装がすごくきれいでかわいかったってくらいしか」

「うんうん、あの時のヨーちゃん、すごくかわいかったよね！ 今もすごくきれいだけど。—— あ、そこ、その喫茶店でヨーちゃんと待ち合わせしてるの。愛夏ちゃんも行こ？」

「え？ でも迷惑なんじゃ」

「大丈夫大丈夫。あ、返信来た。ほら、ヨーちゃんも嬉しいすぐ会いたって書いてあるよ」

いつの間に。

若い子のメールスキルにはいつも驚かされるな。

ユキさんが選んだのは喫茶店の最奥、表からは観葉植物が目隠しになって、誰がいるのかなにをしているのかほとんど判らないような4人掛けだった。

大丈夫……だと思おう。

「これからすぐ出るって書いてあったから、あと30分くらいかな。ヨーちゃん、ちよつとヤバいくらい悩んじゃってて。昨日も2時間くらい電話につきあったんだけどね。大きい声じゃ言えないんだけど、なんかヨーちゃん、かなり危ない系のストーカーにあってるみたい」

ストーカーか。

幸い私はあつたことがないけど(ていうか私が若い頃はまだそんな言葉すらなかった)、今じゃ社会問題になってるくらいだもんね。

悪質なものも多いし、私なんかが思ってるよりも被害に遭ってる人は多いのかもしれない。

ユキさんは昨日の夜にヨーちゃんと話した内容に織り交せて、自分が今大学生であることや、日曜日は両親が家にいて落ち着いて勉強もできないんだ、なんてことを話してくれて。

私も近況を振られたから、とりあえず両親が亡くなったことと、高校へは行かずに今はバイトを探していることなんかを話した。

「そっか。愛夏ちゃんもいろいろ苦労したんだ」

「ん、まあ、それほどでもないですけど」

「私もまだ親のスネかじりで何にもできないけどさ、でもなにかあつたらいつでも言うって。愚痴を聞くくらいならできるから」

「ありがとうございます」

たぶんユキさんはほんとにいい人なんだろう。

ヨーちゃんという人も、こんなユキさんだから、安心して愚痴をこぼしたりできるんだろうな。

「ヨーちゃんね、今までも仕事でいろんな人と会ったけど、ほんとに心から信頼できるのって仕事を始める前に出会った人だけなんだって。なんとなくわかるかなー、あの世界って、同業者同士で足の引っ張り

合いとかしてそうだよね——？」

「……あの」

「ん？」

「ヨーさん、って、どんな仕事してるんですか？」

ふつうの質問、だと思っただけ。

目の前のユキさんは、まるで想定外とでもいうように目を見開いて絶句して。

「あ、あの、私変なこと——」

その時、私の背後に人の気配があつて、その声が降ってきたんだ。

「ごめーんユキちゃん、遅くなつて。あれ？　あなたが愛夏ちゃんね？」

振り向いた私が見たのは、長い髪を帽子で隠そうとして、でもそれでも隠しきれない輝きを放つアイドル、沖野ヨーコその人だった。

彼女が私の隣へ座つて、飲み物を注文して、ユキさんも交えてあいさつを交わしている間、私は呆然と目の前のアイドルを見ていた。思い出した。

これ、眠りの小五郎初登場の話だ。確か単行本1巻のラストあたりの。

ていうか、なんで私、アイドルに「愛夏ちゃん」なんで親しげに呼ばれてるの……？

「愛夏ちゃん？」

「あー、ヨーちゃんごめん。私、ヨーちゃんが沖野ヨーコだつて言わなかった。つていうか、愛夏ちゃんが知らないと思つてなかった」

「え？　そ、そうなんだ。……私の知名度もまだまだってことかな？」
「いや違うでしょ。沖野ヨーコを知らないんじゃないかと、昔通ってたピアノ教室の友達がアイドルになってることを知らなかったただけだから。ほら、愛夏ちゃんまだ小さかったし」

「そういえばそうよね。愛夏ちゃんって、見た目は大人っぽかったけど、実はまだ小学校入りたてくらいだったのよね。聞いて驚いたからよく覚えてるわ」

「そうそう私も。愛夏ちゃん私のこともはつきり覚えてなかったんだよ。あの頃けっこう可愛がってたと思うんだけどなあ」

沖野ヨーコが知り合いだってことにも驚いた。

でも、それより私は、原作の流れを思い出すのに必死だったんだ。だって、この話って確か、ヨーコちゃんの昔の彼氏が部屋で自殺しちゃった話だったから。

しかもその原因になった出来事は誤解というか、うしろすがたがそっくりだった人に拒絶されたからで、本当だったらその人は死ぬ必要なんかまったくなかったから。

「愛夏ちゃん、どうしたの？　表情暗いよ？　もしかして二日目？」

いやいやユキさんどうしてそこでそういう話に……

ん？　あ、でもあながち外れてもいないかも。

「そういえばそろそろです。たぶん今日か明日くらい」

「すごいね、私なんか来てからじゃないと判らないのに」

そりゃあね、かれこれ30年以上もつきあってますから、身体の感じで判っちゃうんですよ。

「ヨーちゃんは？」

「私は仕事柄体調管理してるから。でも、前に4人でやってた時は不思議だったな。だっていつの間にかみんな一緒に来るようになって

——」

ああ、若い女性と一緒にだと引きずられるから、4人が4人ともお互いに影響しあってたんだろうね。

私はずっと周りに若い女性がない環境にいたんだけど、昨日は久しぶりに若い女性（毛利蘭）と近づいたから、私も思ったよりさらに早く来る可能性もある。

まあ、今だって若い2人に囲まれてるし。

なんかちよつと眠いのも、もちろん寝不足もあるだろうけど、そのせいもあつたんだと思う。

2人の話題は目下の心配ごと、ストーカーの話になって。

家に帰ると家具の配置が変わっていたり、隠し撮り写真が送られてきたり、無言電話がかかってきたり。

夜道で誰かに追いかけられたのが昨日の夜で、逃げ帰ってすぐにユキさんに電話をかけたらしい。

その時の恐怖を思い出したのか、隣のヨーコさんは両腕を抱きしめてぶるつと身震いした。

「それで？ 山岸さんはなんて言ってるの？」

「とりあえず信頼できる専門家に相談に行こうって、今調べてくれる。鍵の方も下手な業者には頼めないからそれも調べるって」

「なんか頼りないなあ。そもそも合鍵なくすとか、マネージャーとしてどうなの？ って話だし」

「彼だけのせいじゃないから。それに監視されてる感じは鍵をなくす前からだしね。私も山岸さんも、今は誰も信じられなくて。信じられるのはユキちゃんと、愛夏ちゃんくらいなものよ」

「え？ 私は別に」

「ううん、愛夏ちゃんがまじめな子なのは知ってるもの。—— 仕

事を始めて、生活が変わったら、仲がよかった人たちはどんどん離れていったの。当時付き合ってた彼にもふられた。変わらなかつたのはユキちゃんくらい。……でも、私が有名になったとたん、また手のひらを返したように私に近づいてきて」

「ヨーちゃん……」

「藤江君だって、今さらヨリを戻したいって言われても信じられない。私がいちばん支えて欲しかった時に傍にいてくれなかつたのに」

……まあ、そうだよね、女としては。

私はその藤江さんがマネージャーに言われて仕方なく別れたことは知ってるけど、そのあとヨーコさんが苦しんだ時間は本物だ。

苦しんで、自分を責めて、女としてのプライドを傷つけられて。

その時間の中でヨーコさんは藤江さんへの感情に決着をつけたのだから、今さら元の関係に戻るなんてことはできないのだろう。

「ねえ、ヨーちゃんにストーカーしてるのって、その元カレなのかな？」

「ううん。はっきりは言えないけど、彼は今のマンション知らないと思う。引越してから一度も会ってないし。引越す前も、ちゃんと会って話したい、って態度だったから」

「そういうえば社会人だって言ってたもんね。それじゃあ平日の昼間にマンションに侵入とか無理か。だいたい仕事中にマネージャーの鍵を盗んだ人がいるとしたら、それってどう考えても仕事仲間のうちの誰かだよね」

「……あんまり考えたくないけど、そうとしか思えないよね」

今、ヨーコさんにストーカーをしてるのは、藤江さんじゃなくて別の人だ。

でも、藤江さんはけつきよく勤めている会社を辞めて、すべてをなくす覚悟でヨーコさんの家にやってくるくらいには追い詰められてしまっている。

せめて彼をヨーコさんと話させてあげることができないだろうか？

彼が最終的にどの道を選ぶにしても、誤解したままよりはずっと納得がいく結論が出せるはずだ。

「あの、ヨーコさん」

「愛夏ちゃん、お願い、できればその呼び方は……」

「あ、すみません。……ヨーさん、でいいですか？」

「さんづけも敬語もいらなただけど。それで？ なに？」

「あの、念のために確認なんですけど。……ヨーさんは、藤江さんとヨリを戻す気はないんですね？」

「あたりまえじゃない！ あの時ヨーちゃんがどれだけ傷ついたらと思ってるの!？」

「あ、判ってます。私も女だから、ヨーさんがすごく傷ついたのも判るし、すぐには許せないし、これからその人を心から信頼してつきあうことなんてできないのも判ります。だからあくまで念のための確認なんですけど」

「……そうね、たとえばだけど。彼の気持ちがあ頃と変わってなくて、そのことが納得できたとしても、私自身はもう、あの頃には戻れない。あんなに純粋な気持ちで彼に恋することはできないと思う」

その、ヨーコさんの言葉と表情で、私はもう、ヨーコさんの中に彼への未練がまったくなくなることがよく判った。

それまでヨーコさんが彼から逃げ回っていたのは、気持ちが揺れたことに戸惑って、とかそういうことじゃなく、純粋に彼の態度に恐怖と嫌悪を感じたからだっただろう。

「そりやそうだよ。自分をふった男のことなんかいつまでも引きずっててもしょうがないもん。でも愛夏ちゃん、どうして今さらヨーちゃんにそんなこと訊くの？」

「あ、え、その。……もし、よかつたらなんですけど。私、ヨーさんが

彼と話すのに、立ち合ってもいいかな、って」

「え？ 今更じゃない？ ヨーちゃんだってもう会いたくないから引越したんだし」

「そうなんですけど。……彼はとにかく、ヨーさんと話がしたいって、そう言ってるんですよ？ でもヨーさんが話し合いに応じずに逃げてたのは、その人にひとりで会うのが怖かったからなんじゃないですか？」

「……」

「思ってたんですけど、その藤江さんという人、なんだかもすごく危険な感じがするんです。このまま追い詰めちゃったら危ないような、そんな感じですよ。だから、ひとりで会うのが嫌なら、私、一緒に会います。ヨーさんにとっては終わった関係ですけど、でも彼にとってはきつと違うから」

なんか上手く話せないのはいつものことなだけけど。

これは私が彼の未来を知ってるから思うことで、今の2人にとってはけっこうどうでもいいことなんだって、2人の態度を見て気がついた。

そりやそうだよね、ヨーさんが今悩んでるのはストーカーの実行犯についてであって、引越したあと押しかけてこなくなった元カレのことなんて関係ないんだ。

むしろ今こんなことにかかずらってる余裕なんかないって思ってるだろう。

「あ、すみません。……よけいな事でした、よね？」

「ううん、ありがとう。……愛夏ちゃんのは嬉しいし、もしもそういう機会があったらお願いしたいけど、今はストーカーの方で頭がいっぱいだから。こっちから連絡付けてまで会う気はないかな。ごめんね」

「いいえ、私の方こそすみません。話の腰を折るような真似をして」

もう黙ってよう。

ヨーさんも、彼が自殺したらもしかしたら後悔するかもしれないけれど、たとえば話ができたとしてもそれがいい方向に転ぶとは限らない。

もしかしたらもつと悲惨なことに——たとえば、ヨーさんに危害が加えられたり、そういうことになる可能性だってあるんだから。

「ううん、でも、愛夏ちゃんが私のことを想って言ってくれたのはすごくよく判ったよ。ほんとにありがとう。やっぱり愛夏ちゃん、いい子だったね」

「でしょ？ 私も愛夏ちゃんはまじめで優しくいい子だと思ってた」

「そんなことないですよ。やめてください……」

「てれないてれない。でき、愛夏ちゃんがいい子だって判ったところで、ちよつとした提案があるんだけど——」

ユキさんが話した提案というのは、なんと私がヨーさんの家に泊まり込むことだった。

ヨーさんが仕事の間はお留守番をして、とにかく家を空けないようにする。

そうすればたとえ合鍵を持つてる犯人がいたとしてもチェーンロックで入れないし、ヨーさんとは違う声で電話に出れば無言電話もなくなるかもしれないし。

夜の間も一緒にいれば少しはヨーさんも安心して眠れるようになるだろう。

「私は助かるけど、でも愛夏ちゃんにも学校があるんじゃない？」

「いえ、私、実はここ一年くらい引きこもってたので、学校へは行っていないんです」

「それにアルバイト探してるんでしょ？ このさいだからヨーちゃんが愛夏ちゃんのこと雇っちゃいなよ。どうせ専門家に相談するとか

言ってたんだから、愛夏ちゃんのアルバイト代くらい出せるよね？」

私はもちろん、ヨーさんからバイト代をもらうつもりなんかなかったけれど。

でも、その方がヨーさんも気兼ねなく私を家に入れられるのならばと、その提案を受け入れた。

ヨーさんもなぜか私を信頼してくれているようで、私に悪いという以外はむしろ喜んでくれて。

もしかしたら、私はこの事件を未然に防ぐことができるかもしれない。

私が沖野ヨーコのマンションにいて、池沢ゆう子の侵入を防ぎ、訪ねてきた藤江氏を招き入れて毛利探偵の立会いのもとヨーさんと話をさせることができれば。

それでは池沢ゆう子の行為は止まらないかもしれないけれど、私が彼女の来訪を証言すれば、少なくともそのあと警戒することができ

る。なによりヨーさんを安心して眠らせてあげられる。

このときこの瞬間、私は忘れていたんだ。

もうすぐ私に、あの悪魔のような数日間が訪れるということ。

「ごめんね、私も一緒に行ってあげたいんだけど、レポートの締め切りが近くて。しばらくここでやってるから、なにかあったら連絡して」そう言ってユキさんが喫茶店のテーブルに広げたのは、レポート用紙と作成のための資料らしきものだった。

どうやらあの手提げ袋の中身は、忙しくて時間に遅れがちなヨーさんを待ってる間にやろうと思ってた勉強の道具だったらしい。

ユキさん、あなたの方が私よりもずっと、まじめで優しくいい子

だよ。

ヨーさんとタクシーに乗ってついたところは、ひときわ大きくそびえたつ高級マンションだった。

タクシーに乗ってる間も嫌な感じはしてただけで、降りてエレベーターに乗る頃にはなじみある嫌な感触までしてきて。

どうやらこのタイミングで例のお客さんが来てしまったみたいです。

「愛夏ちゃん、どうしたの？ 車に酔っちゃった？」

「あ、いえ、そつちは大丈夫なんですけど。……ついたらトイレ貸してもらえますか？ なんか来ちゃったみたいで」

「ええ、もちろん。もしかして愛夏ちゃん重い方？」

「……はい」

今までの経験では、いくつかのパターンがあるんだけど。

最悪なことに今回は重い方のパターンで、しかも若返ったことがさらに拍車をかけてるらしい。

……思い出したよ、私、年をとってからだいぶ軽くなってきたんだよね。

30代後半あたりからはわりと軽めの痛み止めでふつうに行動できただけで、それこそ20歳前後の頃なんか、よっぽど強い薬を飲まなければ丸1日くらい動けないこともあったんだ。

それでも10代の頃はまだそこまでじゃなかったように思ってたんだけど。

40代の痛みに慣れてた今の感覚では、16歳のこの痛みでも正直言ってきたかった。

ヨーさんが部屋のかぎを開けて、中は出かけた時とにも変わってなかったようでほっと一息ついたあと、私をトイレまで案内してくれた。

「私のが棚の上にあるから使つて。今薬持つてきてあげるから」

「あ、病気じゃないんでお構いなく」

「つらさは判つてるから。私もけつこう重いときがあるから、薬もそろつてるし。中で待つてて」

洋式のトイレに座ると、ほつとしたと同時に痛みが襲つてくる。

ヤバい、これほんとに最悪のパターンだ。

こうなつちやうとしばらくトイレから動けなくなる。

ほどなくしてドアをノックする音が聞こえたから、私はなんとか手を伸ばして、座つたまま（もちろんパンツも下ろしたままだけど変なものは見えないように隠して）ドアを開けた。

「ほんとに大丈夫？」

「あ、はい、なんとか。すみません気を遣わせちゃつて」

「いいのよ。薬、あるだけ持つてきたんだけど、アレルギーとか大丈夫？」

「はい、そういうのはないので」

「これが一番強い専用薬で、あとの二つはふつうの痛み止めだけど、こつちが眠くなるのでこつちが眠くならない方。ベッドは使つてかまわないから少し眠つた方がいいわね。あと、電話のところにはチラシがあるから、おなががすいたらピザでも頼んで」

ああ、そういえばタクシーで話した時に言つてたつて。

昼過ぎからなにかの収録があるから出かける、つて。

「判りました。薬飲んだら少し寝させてもらいます」

「お水、足元に置くわね」

「はい。ほんとにすみません。こんな時に」

「ううん、こつちこそごめんね。じゃあ、私出かけるけど、戸締りだけは気をつけて」

「はい、了解です」

ちよつとおどけたふうに笑顔を見せると、ヨーさんも笑顔を返してマンションを出ていった。

私は少し迷った末、とりあえずいちばん強いという専用薬を飲むことにした。

今日はトロピカルランドの翌日で、さすがに事件が起きるのが今日だとは思えないから。

まあ、池沢ゆう子さんが部屋を荒らしに来るかもしれないから、ドアチェーンは掛けておかないとやばいと思うけど。

ところが、薬を飲んでしばらくしたあと、あろうことか私はトイレの中で眠ってしまったんだ。

気がついたのは、ドアをドンドン叩く音と、私の名前を呼ぶ声を耳にした時だった。

「愛夏ちゃん！ 愛夏ちゃん！」

目が覚めた私は、すぐにトイレのドアをたたき返した。

「すみません、すぐに出ます」

「愛夏ちゃん、無事なのね!？」

「はい、すみません。眠っちゃったみたいで。すぐ出ますので」

話しながら支度をしてやっとドアを開けると、なにやら熱風とともに嫌な匂いがして、その次の瞬間に私の胸にヨーさんが泣きながら飛び込んできたんだ。

「愛夏ちゃん！ 無事でよかった……！」

「……ヨーさん？」

「え？ 高久喜さん？」

ヨーさんの様子に驚きつつ声に顔を上げると、そこにいたのは毛利蘭、江戸川コナン、毛利小五郎探偵の3人と1人の男性で。

辺りに漂う血の匂いは、明らかにさつきまでトイレで嗅いでいたのとは質が違うと判った。

まさかと思つて部屋の方を見ると、そこには荒らされたあとと血まみれで横たわる1人の男の姿が ——

「……！」

なんで!?

だってこの事件、確か新一がコナンになってから3日くらいあとはずじゃん！

どうしてコナン誕生の翌日にこの事件が起きてるの!?

「愛夏お姉さん、いつからトイレにいたの？」

コナン君が視線を合わせずに聞いてくる。

その声でわれに返ったのか、毛利探偵も。

「まさか、あんたがやったのか？」

「え!? 毛利さん、愛夏ちゃんは違います！ 愛夏ちゃんのはずないです!!」

「いやおかしいでしょう！ 我々がくるまで彼女はこの家でこの男と2人きりだったんです！ どう考えてもまず疑われてしかるべきだ！」

「愛夏お姉さん、答えてよ。いつからトイレにいたの？」

いったい何時間眠ってたんだ、私。

この位置からだと窓の外は見えないけど、たぶん今はもう夜だ。

ヨーさんの部屋に来たのがちようどお昼ごろだと思ったから、下手したら6、7時間もトイレにいたことになる。

そんなの、ふつうの人ならまず信じられない。

それに、ドアの外では部屋が荒らされて人が1人亡くなったんだ。

同じ家の中にいて、それに気づかないなんてあり得るだろうか。

いやじつさい私は気付かなかったんだからあり得ないことはないんだけど、でもそんなの信じられる訳がない。

「高久喜さん、答えてください。あなたが今日ここへきてからの行動を」

毛利探偵の鋭い視線を、私は見返すことができなかった。

「……ヨーさん……ヨーコさんと昼過ぎにここへ来て、そのあとトイレに入りました。彼女に薬をもらって飲んで、そのままトイレで眠ってしまって、気がついたらヨーコさんに起こされて」

毛利探偵が絶句してるのが判る。

もちろんコナン君や蘭さんも。

私だって、自分のことじゃなかったらとうてい信じられないだろう。

「毛利さん、彼女が飲んだのは強い痛み止めで、飲むと頭がぼーっとして眠くなる成分が入ってるんです！ 愛夏ちゃんが眠っちゃったのはそのせいだと思います！ 愛夏ちゃんはなにもしてません!!」

でもヨーさんは信じてくれた。

ほとんど初対面と言つていい、ただ10年くらい前に少し関わった

ことがあるだけの私のことを。

「……まあいいでしょう。話は警察が来てからゆっくり聞かせてもらいましょう」

そう言つて毛利探偵が死体を調べに行つてしまったから、私はしがみついたままのヨーさんを促して、できるだけ死体から離れたソファに座らせた。

「ごめんなさい愛夏ちゃん。まさかこんなことになるなんて」

「ヨーさんが悪いんじゃないです。私の方こそ、ちゃんと起きてればこんなことにならなかつたんです」

「ううん、それより愛夏ちゃんが無事でほんとによかつた。だって、もしかしたら犯人とはち合わせてたかもしれないでしょう?」

違う、私がちゃんとドアにチェーンを掛けていれば、少なくとも彼はここで死ななくてすんだんだ。

私が「今日事件は起きないはずだ」と思い込んでさえいなければ。

「あの、高久喜さん、ヨーコさんと知り合いだったの?」

訊いてきたのは蘭さんで、そのうしろにコナン君がいるのも見えた。

「愛夏ちゃんとは子供の頃、同じ先生にピアノを教えていただいたたんです。……蘭さん達もお知り合いみたいですけど」

「あ、私は高久喜さんとは同じ中学の隣のクラスで」

「ぼくは昨日初めて会つたんだよ。ね、愛夏お姉さん?」

目が笑つてません、コナン君。

毛利探偵に指を突き付けられるのもさうとう怖いけど、こうして江

戸川コナンに疑われるのもかなり怖いことが判った。

「そういえば高久喜さん、体調悪いの?」

「病氣じゃないから。今日、初日で」

「……あ、それで痛み止め」

「お昼に飲んだきりならそろそろ薬が切れてるんじゃない? 無意識でしようけど、愛夏ちゃん、さっきからおなか押さえてるし」

「……トイレに置きっぱなしでした。もしよければもう1錠もらってもいいですか?」

「遠慮しないで。私が持ってきてあげるから、ここに座ってて」

「すみません。お願いします」

話の内容に察しがついたのか、途中からコナン君は死体の周りを調べに行ってしまったようだった。

その様子を見ながら考える。

池沢ゆう子はけっこう日常的にこの部屋を訪れてたみたいだから、藤江氏がくるタイミングによっては事件が原作よりも早く起こることはあるかもしれない。

でも、それがたまたまヨーさんが毛利探偵に相談しに行った日にぶつかる確率は、いったいどのくらいになるんだろう。

いや、そもそもこの世界って、偶然とかたまたまでコナンが事件に遭遇する確率がものすごく高いんだ。

むしろコナンの都合で世界が動いていると思っただ方が正解なのかもしれない。

ということとは、今朝阿笠博士のところまでコナン君に会ったのは、もしかしたらほんとに蝶ネクタイ型変声機イベントだったのか?

ていうか、コナン今日ちゃんと変声機持ってるよね?!

もしもあのイベントがまだだったら、今日眠りの小五郎が誕生しなくなる可能性があるじゃん!

……私のせいじゃないよね？
そうじゃないといい。

私が今日、この部屋へ来たから、この事件が起きたんじゃないかな
いい。

私が物語を変えようとしたからじゃないかな

そんなに長く待つこともなく、ヨーさんに薬を手渡されて飲み終
わった頃、目暮警部がやってきた。

たがいに名乗りあったあと、まずはヨーさんが今日私が部屋に来た
時から遺体発見のいきさつを警部に話していた。

「では、あなたがこの部屋に帰ってきたときには、もうこの男は殺され
ていたと」

「は、はい」

「そして、その時一緒に居合わせた探偵が……」

「この毛利小五郎であります、警部殿!!」

満面の笑顔でそう言う毛利探偵を横目に、目暮警部が溜息をつく。

「そういえば最初はこんな態度だったわけ？」

「まあ、この先も眠る前はこんな態度だった気がするけど。」

「そして、留守番をしているはずの女性の姿が見当たらないことに気
がつき、部屋中を探しまわったあなたは、トイレの鍵がかかっている
ことに気づいてドアをノックしたところ、彼女が出てきたと」

「はい、そうです」

「で、あなたは」

「そうやって、目暮警部は私の方に向き直る。」

「彼女が部屋を出る時に置いていった薬をトイレで飲み、そのままト
イレの中で眠ってしまったって、彼女が帰宅してドアをノックするまで事

件には全く気がつかなかったと」

「……はい」

うん、自分で言っても思うよ、あまりに説得力がなさすぎる、つて。

でもそれが本当なんだからどうしようもないじゃない。

「しかし、この部屋暑いですなー。いつもこんなにヒーターを強く?」「いえ、こんなに強くは。愛夏ちゃんがいたので出かける前にスイッチだけは入れていきましたけど」

「そりゃー妙ですな……」

「妙なのはそれだけじゃないですよ、目暮警部。わずかですが、死体の周りにぬれた跡があります。そして、死体のそばのこのイス。こんなに荒らされた部屋の中で、なぜかこのイスだけ立ってる。さらに、暑すぎるこの部屋。死亡推定時刻を狂わせるためなのか……いや、まてよ。それなら死体を水につけた方が……」

……めっちゃくちや違和感なんですけど、コナン声で新一口調の長ゼリフ。

ていうか、これってふつうに蘭が気づくよね?

やっぱり固定観念というか、人間の身体が縮んだりするはずないって思い込みがあるから判らないのかな。

コナン君が毛利探偵に殴られたあと、警部がヨーさんに凶器と死体の確認をする。

その時マネージャーさんが足を滑らせて死体の上に倒れ込んで。

死体が握った髪の毛を抜き取ったところも原作のままだった。

もちろん、コナン君がそれを確かめたところも。

「窓には、鍵がかかっているし、ここは25階。となると、入口はあの玄関のドアただ一つ。そして、凶器からは、ヨーコさん以外の指紋は発

見されなかった。つまり犯人は……この部屋の主のあなたか、ずっと部屋にいた愛夏さんしか考えられない」

「そ、そんな、愛夏ちゃんは人殺しなんかしません！ もちろん私だって」

「そうですよ、警部殿!! ヨーコさんは、わざわざ私に依頼を……」

「フン……依頼主が犯人というのは、よくあることだ……」

「しかしですねー」

「愛夏さん、あなたはどうなんですか？」

目暮警部の言葉に、部屋にいる人達がいつせいに私に注目する。

ヨーさんや蘭さんはたぶん違う。

でも、それ以外の男性陣が一番疑ってるのは私だ。

「ヨーコさんが出かけてから帰ってくるまで6時間以上、トイレの中で眠っていたというあなたの証言は、明らかに不自然だ。しかも部屋の中がこれだけ荒らされたのなら物音もしたはず。刺殺事件があったのならなおのこと、まったく目を覚まさないなんてことはあり得ない」

「ですから愛夏ちゃんは薬を飲んで……」

「でもヨーコさん、あなたは彼女が薬を飲んだところを見ていないんでしょう？ だいたい愛夏さんはなぜトイレで薬など飲んだんだ。いったい何の薬を」

「そ、それは……」

「生理痛の薬です」

さすがに、20歳そこそこの女の子にこれを言わせるのは酷だ。

気がついたら口を開いていた。

「私がヨーコさんに連れられてマンションに到着したのとほぼ同時くらいに生理が始まったんです。ヨーコさんにすぐにトイレに案内してもらって、便座に座ったとたんに痛みで動けなくなってしまうって。」

ヨーコさんは、私のアレルギーなども心配して、薬を3種類用意してくれました。私は中でも一番強い薬を飲んだんですが、薬を用意したあとすぐにヨーコさんは仕事に出かけたのでどれを飲んだのかは見えていません。私も、まさかこんな事件が起こるなんて思ってませんから、催眠作用のある薬を飲んでも問題ないと思っただけです。毎月来る生理ですけど、その時々によって痛みが強くなったり出血量が多かったりと様々なパターンがあって、今回は特に痛みがひどかったので――

「よく判りました！ もうけっこうです。判りましたから」

目暮警部が私の言葉を遮るように言った。

まったく、あなたが言わせただけだからせめて最後まで言わせなさいよねっ。

さすがに男性陣はばつが悪かったようで、コナン君が合鍵の話を持ち出すと、毛利探偵も誤魔化すようにマネージャーが犯人だと言いだした。

「あの、ヨーさん」

「……愛夏ちゃん。ごめんね、言いづらかったでしょ？」

「いえ、それほどでもないです。それより、あの薬、3つとも警察の人に渡してもいいですか？」

「うん、それは構わないけど。でもどうして？」

「念のためです」

たぶん、事件はコナン君が原作どおりに真相を暴いてくれる。

でも万が一、ヨーさんが犯人にされかけた時のために、証拠隠滅ができない今の状況で薬を調べておきたかったんだ。

ヨーさんは私がかどの薬を飲むのか予想できなかった。

その状況で、催眠作用のない薬がその中に入っていれば、私を薬で眠らせてその隙に男を殺すつもりだったんじゃないかという疑いはなくなるだろうから。

原作どおり池沢ゆう子のイヤリングはソファの下に落ちていて、さりげなく見ていた私は、コナン君が変声機を使うのも確認できた。すぐに彼女が現場に呼ばれて、コナン君があたふたしながら彼女の不自然な行動を警部達に気づかせるのも原作通り。

ここでヨーさんは、今までのストーカー行為がゆう子さんの仕業であることを知る。

そして、死体の身元が判ると、ヨーさんは彼が元カレであることを告白した。

「死体の顔を見た時、はつきり彼だと判りましたが。彼のことは、マネージャーの山岸さんに口止めされていたので、つい……。でも、なぜ彼がここで殺されていたかは、私には……。教えてください！ 彼を殺したのはいったい、誰なんですか!？」

「だ、誰っていわれても……」

その時、ちよつと不気味な笑い声を洩らしたのは毛利探偵で。

「フッフッフ……今度こそ……今度こそ……判ったぞ!! 犯人は……ママネージャーの山岸、きさまだ!!」

山岸さんに人差し指を突き付けた毛利探偵は、これが正しい推理ならばものすごくかっこいい一場面なのかもしれないけれど。

いちど間違いでこれをやられた私にとっては恐怖を呼び覚ますポーズ以外のなものでもなかった。

煙草に火をつけ死体の写真を手に自信たつぷりの推理を披露する毛利探偵から目をそらすように、私はコナン君の動きを追っていた。

ああ、なるほど、マンガを読みながらいつも、どうしてコナンの行動がバレないのか不思議だったんだけど。

今、室内にいるみんなの視線は毛利探偵に集中していて、なおかつ

身体が小さい子供のコナンのことなんか誰も気に留めていないんだ。コナン君はけっこう堂々とテーブルの灰皿を蹴飛ばしてたんだけど、誰も気付くことはなく、灰皿が後頭部に当たって気絶した毛利探偵のうしろで彼の声で話し始めた。

「——と、いいたいところだが……実は、そうじゃない」

毛利探偵はマネージャーさん、ヨーさん、ゆう子さんが犯人としては不自然な行動をとっていたことを指摘して。

「じゃあ、犯人は愛夏さんかね？」

「いいえ、それも違います。もしも彼女が何かのはずみで男を殺してしまったのだとしたら、なぜ“寝室で寝ていた”と言わなかったんでしょうか。催眠作用がある薬を飲んでいて、しかも昨夜ほとんど眠れていなかった彼女が、ひとたびベッドに入ればぐっすり寝入ってしまったのはごく自然なことですよ。どう考えても“トイレで寝ていた”よりは信憑性がある。高久喜さんがそう言わなかったのは、トイレで寝ていたのが本当のことだったからです」

あれ？ 毛利探偵（inコナン君）、今変なことを言わなかったか……？

私が昨日ほとんど寝れてないって、なぜ判ったんだ工藤新一！

……あ、判るかそりゃ。

だって工藤新一だもんね。

昨日はそうとう夜遅く帰ったことも知ってるし、今朝は博士の家で顔を合わせてる訳だから、顔を見ればそのくらいのは判るって。

にしても、昨日ちよつと同じ現場ですれ違ったくらいのは、通行人に毛が生えた程度でしかない私のことまで観察してるなんて、いったいどこまで注意深く周りを見てるんだ名探偵って話だよ！

原作どおり、毛利探偵は藤江さんが自殺したこと、ヨーさんを愛し

ていた気持ちが絶望と憎しみに変わって罪を着せようとしたことを話して。

マネージャーさんが彼に頼んで別れてもらったことを告白、さらに藤江さんが記していた日記が見つかる、目暮警部も納得したよう、解決ムードが漂った。

これでヘアブラシから藤江さんの指紋が見つければ、事件はほぼ解決ということ。

「愛夏ちゃん、今日はほんとにごめんなさい」

「そんな、謝らないでください。ヨーさんはなにも悪くないんですから」

「お詫びと言ってはなんだけど、あ、もちろんバイト代はちゃんと払うけどね」

「それこそいいですよ。けっきよく私、すべきことはなにもできなかったんですから」

そう、ドアにチェーンを掛けるっていう、たった一つこんな簡単なことすら私はできなかったんだ。

それなのに留守番としての報酬をもらっていいはずがない。

「じゃあさつきまでのバイト代については置いては置いて。今夜なんだけど、一晩だけ泊りのバイトしてもらえないかな？」

「……ええ、私にできることなら」

「ありがとう。実はね、今晚はこの部屋に寝れないから、マネージャーがホテルに部屋を取ってくれたんだけど、こんなことがあったあとだから独りでいたくなくて。……お願い愛夏ちゃん、一緒に泊まってくれないかな？ もちろんホテル代は出すから」

……そっか、マネージャーさんは男だから一緒の部屋って訳にはいかないし、ユキさんはレポートの追い込みでたぶん来られないだろうし。

(彼女なら事情を話せば自分の都合なんか顧みずに駆けつけてきそうだけ)

こんな、元カレが自分の部屋で自殺した夜に、ひとりでなんかいたくないよね。

「判りました。私でいいならご一緒します」

「ありがとう！　じゃあ、下に車待たせてるから」

そう、ヨーさんに手をひかれて、あれよあれよという間に部屋から連れ出されてしまった。

もちろん、そんな私のうしろ姿をじっと見つめている視線があったことには気づかずに。

タクシーがついたのは米花ホテルで、ほぼ100パーセント間違いなく、ヨーさんが私が帰る時のことを心配して選んでくれたのだと判った。

そういえば、のちにコナン君が誘拐されたとき、偽黒づくめの男達の取引場所になるのがここだったな、なんてことを思いながら見まわしてみる。

うん、まあ、とくにこれといって特徴のない普通のホテルだよね。

(こういういい方が正しいのかは判らないけど)

通されたのは比較的上階で広めのツインで、さすがにスイートとかじゃなかったのにほっとしたところだったりする。

私は朝風呂なのでヨーさんにお風呂を譲って、備え付けの浴衣(一応あった)に着替えると、その間に届けられたルームサービスでやつと夕食にすることができた。

「お疲れさま」

「はい、お疲れさまです」

ヨーさんの白ワインと私のブドウジュースがチンと音を立てる。
私、煙草は吸うけどお酒は飲まないの、ここで未成年扱いされるのはそれほど問題はない。

「けつきよく12時過ぎちゃったわね。愛夏ちゃん、体調大丈夫？」

「はい。いただいたお薬で何とか乗り切れそうです」

「明日はチェックアウト時間を延ばしてもらってるから、お昼くらいまで寝ても大丈夫だからね」

「ありがとうございます。ヨーさんはお仕事ですか？」

「うん。10時から収録だから9時には出ちやうかも。でもいろいろ訊かれそうでユーツだなー」

「あ、そういえばさつきユキさんからメールが入ってたんですけど。ニュース見て心配してたみたいなんで返信してあげてください」

「え？ほんとに？……あ、ウソ、15件もきてる。他の知り合いのもあわせてだけど」

ユキさんとは今日の午前中に会ったときにアドレス交換したんだけど、もともと私のケータイにはメールがまったく来てなかったから、今回のユキさんのメールが着信第1号になった。

もちろんその時ヨーさんとも交換したから、この2人がこの世界での私の初友、ってことになるのかな？

昼食抜きの私のおなかも満たされて、そろそろ食事も終えようかというとき、ヨーさんがぼそつと言った。

「私、やっぱり藤江君とちゃんと話すべきだったのかな。……愛夏ちゃんが言った通り」

藤江さんがあんな形で自殺したんだから、やっぱりどうしたって後悔が残る。

というより、身近な誰かが死んだら、それがどんな形でも多かれ少なかれ後悔は残るんだ。

私にはそれをどうしてあげることができない。
でも。

「私、昼間はあんなことを言いましたけど、むしろ話さなくてよかったです。ありがとうございました。毛利探偵や残された日記の話聞いて」

「……ほんとうに？」

「はい。だって藤江さん、ヨーさんに罪を着せようとしたじゃないですか。ふつう好きな人と引き離されて、その人にも冷たくされたからって、殺人の罪を着せようなんて思いませんよ。ほんと、会ってたら何されてたか判らないです。やっぱりヨーさんの会わないって選択の方が正しかったです」

「そう、かな？」

「はい、ぜったいそうです」

こうして少しでも行動を肯定すれば、ほんの少しでも、心が軽くなるというのなら。

私は何度でも断言するよ、あなたは正しい、って。

翌日、私が目覚めたのは昼近くで、すでに部屋の中にヨーさんはいなかった。

でも、昨日の出来事が夢じゃないことを示すように、テーブルには1つの封筒とお土産のケーキが置かれていた。

FILE. 3 名探偵は追及する 赤鬼村火祭殺人事件

4月11日(月)

アイドルスター沖野ヨーコさんとホテルの同じ部屋に泊まるという、ファンならこのまま死んでも悔いはないほどのラッキー体験をした日の午後。

お土産のケーキを手に帰宅した私は、そのまま阿笠博士の家を訪ねた。

「おお、愛夏君。今日はどうしたんじや?」

「あの、ケーキをいただいたんですけど、1人では食べきれなくて。賞味期限があるので消費を手伝っていただけなかと」

「そうかそうか、そういうお手伝いなら大歓迎じゃ。さ、入りなさい」
「ヨーさんは私が1人暮らしだって知ってるから、それでも5つものケーキをくれたのはきつと、親しい人と一緒に食べなさい、って意味だと思う。」

でも私の親しい人って、この阿笠博士くらいしかいないんだよね。
ここに哀ちゃんがいれば「またこっそりメタボって」って言われちゃうんだろうけど、彼女と博士はまだ出会ってないし。

今のうちにメタボっちゃうのはどうか許してもらおうことにしよう。

「ソファに座っててくれ。コーヒーがいいかのオ?」

「はい」

リビングのテーブルにケーキの箱を置いて何気なく博士の動きを追う、と、つい見えてしまったのだ。

シンクに積み上げられた洗い物の食器の山が。

おそらくあそこにちらつと見えてるのは、昨日ここへ来た時にごちそうになつたコーヒーのカップだろう。

「なんか、お忙しそうですね」

「いや面目ない。さいきん面白い研究を始めてしまったの。ついこういうことがあとまわしになつてしまふんじやよ。さて、コーヒーカップはどこかのオ」

「あの、私、あとでお手伝いしますから。こつちのティーカップで紅茶とかいかがですか？　ちようどティーバッグ持つてるんです」

そう、私がかばんから紅茶のティーバッグを二つ出すと、博士も納得してくれたらしい。

ちよつと大きめのカップ二つにセットすると、ケトルにお湯を沸かして注いでくれた。

ちなみにこのティーバッグは、泊まつたホテルに置いてあつたものだったりする。

こういうのつてつい持つてきちやうんだよね。

ヨーさんにはそういう習慣がなかつたようで、残つてた彼女の分ももらつてきちやつたんだ。

博士が言うおもしろい研究つて、きつとコナン君が使うメカのことだ。

蝶ネクタイ型変声機はけつきよく一晩で完成させちやつたんだよね。

(どうしてこんなに事件が早く起こるのかは判らないけど)

確かこの次はキック力増強シューズだから、今はこのメカの研究に没頭しているところなのだろう。

「ところで愛夏君、昨日は大変な事件に巻き込まれたようじやのオ」

「あ、よくご存じですね。私の名前はニュースでは出なかつたはずで

すけど」

「今朝しん……コナン君が来てくれてのオ。事件のことを話してくれたんじゃよ。愛夏君が巻き込まれたことも含めて」

「そうでしたか。阿笠さんはコナン君と親しいんですね」

「あの子はワシの親戚の子じゃからの。小さい頃からよく知っておるんじゃ」

まあ、今でも小さいけどね。

というツツコミは、心の中だけにしておこう。

なんか昨日のコナン君の奮闘ぶりを見ていたら、小バカにされまくる高校生探偵がかなり気の毒に思えてきたから。

「愛夏君もちょうどあのくらいの頃だったかの。ワシの研究室によく遊びに来てくれたのは」

初耳です阿笠博士。

「すみません。あまり覚えてないです」

「そうなのか？ 愛夏君はロボットが好きで、ワシが作ったものをたいそう喜んでくれたんじゃが」

「そうでしたか。私、実はあまりもの覚えがいい方じゃないみたいで。子供の頃のこととはほとんど覚えてないんですよ。逆に覚えている人の方が不思議というか」

「……まあ、それも人それぞれということなのかの」

あまり突っ込まずにいてくれるのは正直ありがたい。

（まあ、目の前の人間がこういうこと宣言したらふつう気を遣うだろう）

大人な対応に感謝します阿笠博士。

「話は違うが、新しい仕事はもう見つかったのかね？」

……実は、昨日眠る前にちよつとだけ買った就職雑誌を見てみたんだけど。

職種の希望もなにもなく年齢だけでチェックしていくと、ほとんどコンビニと飲食店のホールスタツフしか残らないことが判りました。しかも学生可、高校生可って、高校行つてない16歳も当てはまるのかな？

もしだめならまったく残らないことになるんだけど。

「ハツハツハツ、そうそう急には無理か」

「……ですね」

「じゃあ愛夏君、ワシのところで明日1日だけのバイトをしてみんか？」

「阿笠さんのところで、ですか？」

「見ての通り、最近忙しくてのオ。台所もじやが、洗濯掃除も滞ってしまつておるんじや。そんな時間があつたら研究を一步でも進めたくての。明日1日、ワシの家の片付けと洗濯、お願いできんじやろうか？」

「え？ そんなの、別にお金をもらわなくても言つてくださればいつでもやりますよ」

「いやいやそういう訳にはいかんじやろ。仕事でもなければ、愛夏君にワシのパンツなども洗わせられんよ」

阿笠さんにはお世話になつてゐることもあるし、1日くらいならタダでしてあげてもいいつて思うけど。

でもさすがに16歳の女の子に下着を洗濯してくれとは頼めないよね。

(女も45歳にもなれば独身でもさすがにそのへんの恥じらいはないけど)

阿笠さんも、私が家政婦をやろうとしてたことを知ってるから、仕事でならと思つてこの提案をしてくれたんだろう。

「判りました。明日1日、私を阿笠さんのところで雇ってください。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしく頼むぞ、愛夏君」

「はい」

私も、この労働がキック力増強シューズの開発に少しでも役立つと思ふとなんか嬉しいわ。

ていうか阿笠博士、哀ちゃん来てからまさか彼女にパンツの洗濯とかさせないよね。

ひとしきり博士と談笑したあと、家に帰った私は、とりあえず自分の分のたまった洗濯をした。

(明日1日できないことを考えると、今日やつとかなないと着替えがなくなることに気づきました)

その合間にレポート用紙を1枚破って、明日1日の計画を立てる。

さいわい天気はよさそうだから、午前中はお布団干しと洗濯の合間に洗い物をして、午後はお掃除してことでもいいかな。

ほんとは朝のうちにお掃除しちゃう方がいいらしいけど、それだと1日じゃ終わらなくなりそうだし。

4月12日(火)

そんなこんなで翌日の朝8時、朝食にいつものカ○リ○メ○トを食した私は、マスクとスカーフを手に阿笠博士の家へと向かった。

「おはようございます、阿笠さん」

「おはよう愛夏君。愛夏君はもう朝食は済ませたのかの?」

「ええ。よろしければさっそく始めさせてもらいたいですけど」

「そんなに焦らんでもいいんじゃないが。では、まず軽く家の中を案内しよう」

そう言つて、博士はほんとに簡単に部屋の紹介と、してほしいことを案内してくれた。

最後の地下室で博士は立ち止まる。

「ワシは今日一日ここで研究をしておるから、なにかあつたら声をかけてくれればいい。どうじゃね？　大丈夫そうかね？」

「はい、おおむね大丈夫です。午前中はお布団干しと洗濯と洗い物をしますけど、なにか注文はありますか？」

「いや、愛夏君の好きにしてくれてかまわんぞ」

そう言つてくれたので、私はまず洗濯機の場所へ行つて、積み重なっている衣類を全自動の中へ放り込み始めた。

(昨日一瞬「二槽式だったらどうしよう」なんて思ったんだけどね、ちゃんと全自動でした。まあ、二槽式が使えない訳じゃないけど)

そのあと寝室からシーツをはぎ取つて、マットと掛け布団を持ってベランダへ行く。

台所で洗い物をしてるうちに1回目の洗濯が終わつて、2回目をセツトして再びベランダへ。

洗濯物を干していると、眼下に玄関から小さい人影が飛び込んでくるのが見えた。

「はーかーせー！　いるかー!!？」

コナン君、もしかして毎朝博士のところへ通うのが日課になってないか？

確かコナン君が小学校へ通い始めるのは、キック力増強シューズの完成と同時くらいだったから、今はまだ平日でも暇でふらふら遊び歩いてるんだろう。

(いや、これはちよつと失礼か。たぶん毛利探偵の事務所で黒づくめの男の情報が入るのを待ってるんだろう。……暇だけ)

それからまた少し経ったとき、前の道路に宅配の車が停まって、何気に見てたらどうやら我が阿笠邸に向かっている様子。

慌てて仕事を中断して降りていくと、呼び鈴が鳴ったから返事をしながらドアを開ける。

思った通り博士への届け物で、「阿笠」とサインして受け取ると、大ききの割には軽いかな、という荷物だった。

たぶん地下にはコナン君がいるのだろう。

話を聞いたらずい———というか、彼らに私に聞かれたと思わせたらずい———ので、階段の上から大声で声をかけた。

「阿笠さーん！ お荷物が届いたんですけど、お持ちしてもいいですかー？」

「おお、愛夏君、すまんのオ。持ってきてくれるかの？」

「はーい！」

ひと抱えよりも少し大きいので、慎重に階段を降りていく。

研究室の扉は開いていて、中には思った通り博士とコナン君がいた。

どうやら作業台にあるのはキック力増強シューズらしい。

ということは、もしかして今日完成したってことなのかな？

「ありがとう愛夏君。この台に置いてくれるか？」

「はい。これ、大ききの割に軽いですね。なにか注文されたんですか？」

「いやいや、実はこのコナン君が今度1年生に転入するんでな。ランドセルを買ったんじゃないよ」

「んなっ……い！」

嬉しそうに箱を空ける博士の隣には、なにか文句を言おうとして、

でも私がいるせいで言えないまま口をパクパクさせるコナン君。
うんうん、なかなかいいシチュエーションですよナイス阿笠博士！
そういえば私、最初の頃よりずいぶんコナン君に慣れたような気がする。

「これこれ、そんなに嫌そうな顔をするでない。君もいつまでもふらふらしとる訳にはいかんじやろう」

「いや、だけどっ」

「君は今6歳なんじや。6歳といえは小学1年生なんじやよ？ 他の子供はみーんな行つとるんじや。コナン君だけ行かない訳にはいかんじやろう？」

これ、原作のセリフでは確か「中身が高校生でも外見は小学1年生、学校に行かないと怪しまれる」って感じだったよね？

私がいるせいでセリフが変わってるのがなんかすごく新鮮だ。

「わあ、ピカピカで綺麗ですね」

「おお、思ったより手触りもいいのオ。コナン君、ちよつと背負ってみんか？」

いや博士、それはさすがに悪ノリが過ぎますよ。

外見は小学1年生でも中身は高校生なんですから、他人がいるところでそれはさすがにプライドが許さないでしょう。

(ま、いずれは背負わなきゃならないんだけどね)

「じゃ、私は仕事に戻りますので。この段ボールも片付けておきます」

「ああ、そうか。じゃあ頼んだぞ」

「はい」

再び段ボールを持って階段を上がっていく。

リビングまで戻って箱を潰したあと、ひとまずキッチンカウンター

の隅にでも立てかけておいて。

他のごみもそのあたりにもまとめて、洗濯干しに戻ろうと振り返った瞬間、私は全身を硬直させて立ちつくしてしまった。

……すみません、ぜんぜん慣れてなんかいませんでした。

私のうしろに無言で立ってたコナン君が目に入ったらもう駄目です息もできませんです。

「愛夏姉ちゃん、なにしてるの?」

なんだろう、どうしてだろう、コナン君のまっすぐな視線はいつも怖い。

誰も、私以外、彼の視線を怖がるそぶりを見せる人なんかいないのに。

「あ、あの……お洗濯に……」

どうにか足を動かし、彼の脇を通り過ぎようとしたその時。

小さなコナン君の手が、私のシャツの裾をつかまえた。

「なんで、愛夏姉ちゃんがお洗濯するの?」

「なんで、って。……私が阿笠さんに頼まれたから、です」

「ふーん」

答えたのに、コナン君は手を放してくれなくて。

仕方なく、私は言葉を続けた。

「阿笠さんは、研究が忙しいそうです。時間がないので、私が雇われました」

そうです君のためのメカを作るのに阿笠さんは忙しいんですだか

ら私が代わりに家事をやってるんです。

子供じゃ判らなくても、中身高校生の工藤新一になら判るでしょう？

判ったらどうかその手を放してください。

私を仕事に戻らせてください。

私がちらつと、コナン君が掴んでるシャツの裾を見たことは、彼にも判ったのだろう。

少し目線を外したあと、再び彼は私をまっすぐに見上げた。

「愛夏姉ちゃん、ぼくのこと嫌い？」

……なに、それ。

なんで高校生探偵工藤新一が、ただの一介の中卒フリーター女にそんなこと訊くんだ……？

お、落ち着け。

彼は工藤新一だけど、江戸川コナンでもある。

そして私が訊かれてるのは、江戸川コナンを嫌いなのか否かだ。

江戸川コナンは工藤新一にとって虚像の人物。

工藤新一は江戸川コナンになるにあたって、より江戸川コナンらしい人物になるために演技をしている。

つまり、私はこの虚像の江戸川コナンが、私に対してこう訊きたくなるような態度をとってしまっているんだ。

私の態度が、虚像である江戸川コナンの心を傷つけるような。

「ごめん、なさい。……君のことを嫌いなんじゃないやなくて……」

いやむしろ好きだけだ。

好きな人ほど私はうまく付き合えない。

それをどう、この虚像の江戸川コナンに伝えればいいのか、私には

判らない。

「……人が、苦手っていうか……」

子供が、と言いかけたのを慌てて人に言い替える。

「でも、阿笠博士にはふつうだよ、愛夏姉ちゃん」

そうだよ、こう返されるなんて判り切ってるじゃないか！

「……阿笠さんは……大人、だから」

—— そう、私が言い終えた瞬間。

江戸川コナンは一瞬だけ、すごく傷ついたような表情を見せた。

……これじゃさつき何のために「子供は苦手」って言葉を回避したのか判らないじゃないか自分!!

子供じゃダメ、大人じゃなきゃダメ、その言葉がどれほど工藤新一を傷つけるか、私は知ってたはずなのに。

けつきよく私は、コナン君の手が緩んだのをいいことに、その場から逃げだした。

その日、コナン君が再び私の前に現われることはなかった。

要するに、私の態度が問題だったんだろう。

初めてコナン君を見た時、私はほとんど目を合わせることもできなかったし、言葉も交わさずにただ硬直していた。

それは私にとってはただ、あこがれの人のすぐ近くにいてテンパってる”状態”ただただだけれど、相手にとって解釈は違ってい

た。

工藤新一が演技する江戸川コナンは、自分が私に嫌われているのだ
と思った。

そして本体である工藤新一は—— たぶん何とも思わなかった
だろう、ただ、自分には関わりのない女が子供に対して変な態度を
とっている、というだけで。

でも、江戸川コナンにとって私は、阿笠博士と比較的親しく、毛利
蘭とも知り合い以上の関係になる可能性がある。

つまり、嫌われたままでいてはいけない人物だった。
だから彼は私に尋ねたんだ、ぼくのことを嫌い、と。

この言葉を、私は彼に二度と言わせてはいけない。

なぜなら、私はさっきも彼の問いについての答えを探せなかつた
し、今でも答えは見つからないのだから。

再び同じ問いを投げかけられたとき、私は彼を傷つけずにいられる
言葉を返すことができないのだから。

昼食は阿笠さんと一緒に宅配ピザを頼んで。

3時のおやつはすっ飛ばして夕食時、広すぎる家の掃除に一区切り
つけて、私は再び阿笠さんと食卓を囲んだ。

「阿笠さん、食事はいつも店屋物なんですか？」

「なかなかそっちまで手が回らんのオ。男やもめの独り暮らし、わ
びしいもんじゃよ」

「ぜんぜんそんな風には見えませんが。好きなことを好きなだけ
やって、人生楽しんでるように見えます」

ああ、なんとなく、私が阿笠さんに感じてる親近感みたいなもの、そ
の正体が見えた気がする。

たぶん実年齢に近いのも関係あるんだろう。

私は彼に結婚して家庭を持つ以外の幸せを感じて、それでもいいんだと自分を肯定してほしいと、いや自分で自分を肯定したいと思ってるんだ。

「それを言うなら、隣のご夫婦にワシは勝てる気がせんかの」

「……工藤さんですか?」

「ああ。ひとり息子を日本に置いて世界を飛び回っておる。そういえば、さつき新一君から電話があつてな。しばらく事件で手が離せないらしいんじやが」

……電話?

いや午前中ここへきたばっかりでしょ江戸川コナン君が。

電話というのは私に対する方便で、おそらくその時にコナン君がなにか話していったことを言ってるんだろう。

「愛夏君がうちの掃除を請け負ってくれている話をしたら、新一君が、ぜひ自分の家も掃除してほしいと言ってきたの」

「……は?」

って、心の声で済ますつもりが思わず口に出ちゃったよ!

だって、さつきあんな会話したばっかで、なんでそういう展開になるワケ!?

いやいや、工藤邸を掃除することと、さつきのこととはぜんぜん何の関係もないけどさ。

「もちろん都合のいい時でかまわんし、なにぶん広い家だから1回に数日かけてもいいそうじや。朝8時から夜8時、途中休憩を2時間入れて日給1万出すと言ってるが、どうじやね?」

ええっと、正味10時間で1万円てことは時給千円。

例えば4日働いたとすると4万円。

工藤新一はしばらく帰ってこないし、沖矢昴がくるのもまだそうとう先だから、働きによってはこの先再度依頼を受けられる可能性もある。

確か原作では毛利蘭がときどき掃除に通ってるってことになってたけど、彼女だってふだん部活と家事と育児——は失礼か——で忙しい訳だから、引き受ければ彼女の負担を減らすこともできる、かも。

でも、なんで私なんだろう？

私は虚像の江戸川コナンを態度で傷つけて、加えて本体の工藤新一を言葉で傷つけた、彼にとっては迷惑な女でしかないというのに。

「引き受けてくれんか？」

あ、でも、そういうえば黒の組織が工藤邸を見張ってる可能性があるんだっけ。

そんなところに毛利蘭や他の身近な人を近付けるよりは、あまり工藤新一と接点のない私の方が都合がいいのかもしれない。

逆に下手な業者とかだと背後に黒の組織が絡んでる可能性もあるし。

「判りました。ちょっと広くて大変ですけど、喜んでやらせていただきます」

「そうか、引き受けてくれるか。ではさっそく新一君に連絡しておく。いつから始めるかね？」

「今日の勢いで明日から始めます。あ、でも、自分の洗濯もあるので、もしかしたら1日くらい間を空けるかもしれないが」

「それは構わんじやろう。ワシが鍵を預かっておるから、明日の朝取りに来なさい。その時に軽く屋敷の中を案内しよう」

「はい」

工藤邸かあ。

原作でもあんまり出てこないから、興味はあったんだよね。

噂の本棚とか、ナイトバロンシリーズとか。

休憩時間中なら読んでも大丈夫かな？

帰り際、阿笠さんが渡してくれた封筒の中には、1万円札が1枚入っていて。

そんなにももらえないと遠慮したのだけれど、1日拘束したのだから取り合ってはくれなかった。

んまあ、博士はこう見えてけっこう稼いでるみたいだから、遠慮する必要はないのかな？

(乗ってる車がしょつちゅう壊れるから貧乏っぽい印象があるけど、それもお金持ちのこだわりのビートルに乗ってるからだし)

私もこの年になれば引き際はわきまえてるので、最後はありがたく受け取ることにした。

博士も、娘にこづかいでもやる気分なのかもしれないな。

って、確か博士は52歳の設定だから、実年齢は7歳しか違わないんだけどね。

むしろ嫁にもらってください阿笠博士！

(いや、彼にはフサエ・キャンベルさんがいるからじっさいは無理だけど)

4月13日(水)

そんなこんなで翌日水曜日。

私は、コナンファンならあこがれの場所、工藤邸に入ることになりました。

いやいやすごいね、広いね、豪華だね。

高級そうな花瓶とか何気なく置いてあるし、なんと本物の暖炉がある部屋なんかもあるし。

ただでさえ天井が高いのに樽の書斎は2階まで突き抜けててめちゃくちゃ広い！

そこにぎっしり推理小説とか……いったいどんだけ稼いでるんだよ優作氏。

「掃除用具は一通りそろってるそうじゃが、必要なものがあつたら買ってもらって構わんぞ。レシートさえあれば食費も必要経費でOKじゃ」

「あ、はい」

「……どうしたんじゃ？ 愛夏君」

「あ、いえ。……あまりに広くてどこから手をつけてよいものやら。ひとまず道具はあるものでやってみます。ありがとうございます」

「なにかあつたら遠慮なく声をかけるんじゃぞ」

そう言つて、阿笠博士は帰つていった。

……とりあえず、掃除機をかけながら各部屋をチェックしていきましょう。

ほんとは棚のほこりを落としてからの方が効率がいいんだけど、どうせ掃除機1回じゃ終わらないから、先に床のほこりだけでも取っちゃうことにする。

業者が使うような大きい掃除機を2階に運んで、コンセントを探しながら廊下、部屋と順番にかけていくんだけど……。

明らかに数日じゃきかないほこりが積もってる部屋があるってことは、工藤新一、使つてない部屋はほとんど掃除してなかったってことなんだろう。

そういう部屋は棚のほこりも軽く掃除機で吸い取つて、順番に巡つ

ていくと2階に新一の私室らしいドアが……!

……とうぜんかかってますよね、鍵。

さすが、江戸川コナンになっても抜かりはないです工藤新一。

午前中いっぱいを掃除機に費やして。

お昼はどうしようかな、と思っていると、阿笠さんが陣中見舞いに来てくれました。

「今日の出前は休みのところが多くてのオ。よかつたらポアロにでも行かんか?」

「あ、いいですね。じゃ、戸締りしてきます」

数か所窓を開けたままだったので、それを閉めて玄関に鍵を掛けてから阿笠さんについていく。

ポアロって、まだ行ったことないけど、毛利探偵事務所がある建物の1階の喫茶店だよね。

ということはつまり、ようやく私は毛利探偵事務所がどこにあるのか判るんだ。

もちろん蘭さんは今日は学校だろうけど。

「阿笠さん、コナン君は今日から学校ですか?」

「そのはずじゃよ。確かまだ授業は午前中までで、給食を食べたら帰ってくるようじゃが」

1年生って5時間目ないんだっけ?

それともまだ4月だから?

はるか昔すぎて、自分の時がどうだったのかまったく記憶にないわ。

ポアロは工藤邸から徒歩10分程度の場所にあって、見上げると2階の窓には『毛利探偵事務所』の文字。

……なんかちよつと感動した、かも。

工藤邸もある意味感動だったけど、こっちはもろコナンの生活圏、ってイメージだからね。

お昼時のポアロは近所の会社に勤めてるらしい人たちで多少混んではいたけれど、そろそろ昼休みも終わるのか座れないほどじゃなかった。

注文を済ませて見まわす。

毛利探偵も昼はほとんど外食なんだろうけれど、今日はここには来ていないみたいだった。

「愛夏君は毛利君とも知り合いだったかな？」

「はい、毛利探偵と蘭さんには、偶然2回ほどお会いしました」

「毛利君が依頼された事件に巻き込まれたんじゃないやったな」

「はい」

そう、確か2回ともそうだった。

偶然、とは言っただけど、確かに偶然以外のなものでもないんだけど、でも本当にそうなんだろうか。

私は夢小説ネームでトリップしてきた人間なんだ。

最初に部屋で感じたトリップのルールのようなものが、こういうところにも存在するかもしれない。

2回なら、まだ偶然ですまされる。

でももしもこれが3回になったら ——

「蘭君は新一君とも仲が良くての。まあ、元は2人の母親同士が友人だったからなんじゃが。それでワシも毛利君達のことは昔からよく知ってるんじゃないよ」

「そうでしたか」

まあ、原作読んでるから、阿笠博士が毛利一家とそれなりの付き合いがあるだろうってことは知ってるけどね。

ていうか、阿笠さんはさつきからいったいなにが言いたいんだろう。

「愛夏君は、今まで蘭君のことはまったく知らなかったのかの？」

え？　もしかしてそれが疑問だった、とか？

いやだって隣のクラスだったんでしょ？

私の性格なら、たとえ同じクラスだったとしても一度も話したことがない人の1人や2人いると思うし。

だいたいあの時の毛利蘭の態度だって私とちゃんと話すのは初めてって感じだった。

「クラスが隣だったらいいんですけど、私の方はぜんぜん」

合ってるはずだ、これで。

中学の時、私の友達といえるのはバレー部で一緒だった子たちだけだったから。

空手部の毛利蘭とは接点がない。

「新一君と仲が良かったのにな？」

「え？　誰がですか？」

「蘭君じゃよ。登下校はよく新一君と一緒にだったんじや。本当に蘭君のことはまったく知らなかったのかね？」

「……はい」

なにか問題あったんだろうか。

どうして阿笠さんはこんなにしつこく訊いてくるんだろう？

「そうか。……新一君も気の毒にのオ」

阿笠博士のその言葉は、私の返事を期待して言われたものではな

かったので、私はなにも答えなかったけれど。

……意味が判りません。

なんで、私が毛利蘭を知らないと、工藤新一が気の毒なんですか？私と工藤新一、近所に住んでたんだから顔見知りではあるだろうけど、それ以上の接点なんてないよね？

私の性格ならいくら近所に住んでたからって、男の子と親しく遊んだりはしないはず ——

ていうか、私には生まれてから16年、ここでしていた生活があったのか？

名探偵コナンのマンガは、私がトリップしてきたのほとんど同じ時間軸から始まっているけど。

その登場人物、ううん、もつと言えばこの世界に存在するすべての人たちには、彼らが生きてきた過去があるんだ。

とうぜんその過去は「私」にもあって……。

でもその「私」は私がトリップしてきた時には既にいなかった。

私は「私」がどうなったのか、判る範囲で知るべきだ。

昼食は阿笠さんがおごってくれちゃったので、私はお礼を言って、再び工藤邸の掃除へと戻る。

汚れがひどい部屋はあとまわしにして、廊下や共用部分の拭き掃除をしながらずっと考えていた。

トリップしてから今日まで、私はとにかく自分のこれからの生活のことばかり考えていて、過去のことには目を向けてなかったんだ。

あの時の私は、ただ漠然と「私が世界に溶け込めるように関わってそんな人の記憶が捏造されてたりするのかな？」なんて思ってた。

この世界の過去に私が知らない「私」がいるかもしれないなんて考えもしなかった。

私がこの世界へトリップする前、ここで16年間生活していたのは「私」だった、はず。

でも……その「私」はいつたいたいどうなったんだろう。

私がこの世界へ来た時、ここで16年過ごしてきた「私」は、いつたいたいどこへ行ってしまうたんだろう。

「愛夏姉ちゃん」

あたりが夕闇に包まれて、部屋の中も薄暗くなり始めた時。

背後から声をかけられて、私はうしろを振り返った。

見上げる少年の眼鏡は光っていて目の表情が判らない。

「コナン、君……？」

玄関には鍵を掛けたけれど1階の窓はところどころ開いている。

それ以前に彼は家主なんだから家の鍵を持つてははずだ。

それについて尋ねれば言い訳はすでに用意してあるんだろう。

でも問題は、江戸川コナンがなぜここに来たか、だ。

彼が工藤新一ならくる理由はある。

自宅なのだからいつ帰ってきてても不思議はないし、掃除のために雇った私がきちんと仕事をしているか監視する権利もある。

でも、江戸川コナンがここにくる理由なんてないのに。

「愛夏姉ちゃんに訊きたいことがあるんだ」

およそ小学生らしくない、低い声だった。

まるで犯人を追いつめている時のような。

「ねえ、愛夏姉ちゃんは、どうして何も訊かないの？」

……ああ、もしかして、これってかなりヤバい展開かも。

「だって愛夏姉ちゃん、見てたよね？　ぼくが灰皿を蹴飛ばしておじさんの頭に当てたところ。それとぼくがゆう子さんのイヤリングを見つけた時も。あの時いた捜査員の誰もソファの下なんか見てなかったって、愛夏姉ちゃん知ってたよね？」

探偵の目を持ってすれば、子供のコナンが大人の声を出しているのを見て何も言わない女は、立派な不審者だ。

なにかを知ってる、なにかを隠していると白状してるのと同じこと。

たぶんコナン君が阿笠さんを通じて私に自宅の掃除を頼んだのも、私にこれを訊きたかったからなのだろう。

名探偵、マジ怖いわ。

もちろん彼が私にこれを訊くのは、自分の身に危険があるかもしれないと思ってるからなんだろうけど。

「愛夏姉ちゃんは、いったい何に気づいてるの？　どうしてぼくになにも訊かないの？」

私はようやくかすれた声を出した。

「……だって、私が訊ねて、答えを聞いちゃったら……今度は私が答えなきやいけなくなるから」

「撃つていいのは撃たれる覚悟がある奴だけ」ってのはちよつと違うかもだけど。

私には彼の秘密を知る覚悟なんかない。

もちろん実際は知ってる訳だけど、なぜ私がそれを知っているのか、彼に教える覚悟なんかないから。

私は別世界からトリップしてきた、ほんとは45歳のおばさんだ。そんなこと、彼に知られて信じてもらう覚悟も、信じてもらえずにさらに不審者扱いされる覚悟も、私にはまったくない。

「それが、愛夏姉ちゃんがぼくを避ける原因？」

どう思ったのかは知らないけれど、再びコナン君が訊いてくる。

いや、そもそも私は自分がコナン君と——工藤新一と対等につきあえる人間だなんて思っていない。

たとえ同じ空間にいても、別世界の人間、っていうのは確かに存在するんだ。

文字どおりの意味だけじゃない。

工藤新一や毛利蘭はあちら側の人間で、私ごときでは近づくことすらできないってことを、私は知ってるから。

「だったら……ぼくが愛夏姉ちゃん秘密を暴いたら、もう答えない訳にはいなくなるよね」

私の沈黙を肯定と取ったのか。

目の表情は相変わらず眼鏡の向こうで見えなかったけれど、口元に笑みを作りながらコナン君は言った。

……キミ、もしかして子供の演技をする気、ないですか？

その時だった。

——ピンポーン

昼間阿笠博士がきたときにも聞いたから間違いない、この家の玄関の呼び鈴だった。

「新一——帰ってるのー!？」

ドンドン、とノックの音に混じって蘭さんらしい女性の声が聞こえてくる。

窓があいてたからだろう、工藤新一が帰っていると思ったらしい。私はその場にコナン君を置いて玄関までかけていった。

「はい、今開けます」

正直言つて助かった。

あのままコナン君に問い詰められてたらどうなってたか判らないから。

ちようどいいからコナン君を引き取ってもらおう。

「え？ ど、どうして高久喜さんが……？」

「あ、はい。阿笠さんに頼まれたんです。この家を掃除してほしい、って」

「そ、そうだったんだ。……で、あの、新一は……？」

「おうちの方は帰ってないです。しばらく家を空けるから、という話でしたけど」

「……そう。……ていうか、高久喜さん、どうして敬語？」

「あ……」

ど、どうしてだろう??

「それはそうと、コナン君が」

「え？ コナン君？」

「うん。……困ってたの。連れて帰ってもらえる？」

耳元で小さく言うと、私の子供が苦手という話を疑いすらしていないらしい蘭さんは、ひとつ頷いて家の中へと入っていく。

ほどなくして戻ってきた時には、片手でコナン君の手をしっかりと

握りしめていた。

「さあ、コナン君。愛夏ちゃんにご挨拶して」

「……おじやました」

嫌々、という感じでふてくされながら、視線を合わせずに言う。

いちおうそれで彼女は満足したのだろう、コナン君が玄関に座って靴を履いている間に、近くに寄ってきた蘭さんが私に話しかけてきた。

「ごめんね。コナン君にはよく言い聞かせておくから。……どうやらコナン君、愛夏ちゃんのことを好きみたい」

最後の方は耳打ちするような感じだった。

もちろんその声はコナン君にも聞こえているだろう。

つか、いつの間に私は高久喜さんではなくて愛夏ちゃんになったんだ？

「よく言っておくけど、もしもまた邪魔しにくるようだったらいつでも電話して。あ、まだ番号交換してなかったっけ」

あれよあれよという間に毛利蘭のケータイ番号をゲットしてしまう。

……できればあんまり彼女とは関わりたくないんだけど。

でも、そもそもこの世界にトリップさせられた時点で、私が毛利蘭や江戸川コナンと関わることは決められてしまっているような気がする。

「それと、もし新一が帰ってきた時も ——」

2人を玄関で見送って、掃除を再開させながら、私は再び考えてい

た。

もしもこの世界にいる人達のものに関する記憶が、最初に私が思ったような「トリップが不自然じゃないように捏造された記憶」じゃなく、「この世界の高久喜愛夏が存在したことによって蓄積された記憶」だったとしたら。

なんだかんだと私に絡んでくる江戸川コナン——工藤新一と高久喜愛夏との間には、なにか関わりがあったんじゃないだろうか？

たぶん、元の「私」が工藤新一と関わろうとしなかったこと、それは間違いないと思う。

でも、今までの江戸川コナンを見ていると、ただの顔見知りという範疇ではおさまらないような行動を取っている気がするんだ。

ともあれ、江戸川コナンが起こしてきたアクションに、私は沈黙するしかない。

なぜ私は彼になにも訊かないのか。

その問いに答えるためには、私は自分がトリップしてきたことを話さなければならなくなる。

なぜなら、毛利蘭と違って工藤新一とそれまでほとんど関わったことがなかった私が、一目で江戸川コナンの正体を看破することはあり得ないのだから。

その日、きつちり8時まで仕事をした私は、阿笠さんに工藤邸の鍵を返してすぐに自宅へと戻った。

たぶん休憩2時間の中には夕食の時間も含まれていて、食費が必要経費になるならとうぜん夕食代も出してくれるつもりだったのだろうけれど、私はわびしく朝食用のカ○リーメ○トをかじる。

明日は1日かけて書斎の掃除をするつもりだけど——他人の家よりもまずは自分の部屋をどうにかしろって感じだよなあ。

(忘れてるかもしれないけれど、私の部屋は大量のマンガとかその他でとても他人を呼べるような代物じゃないのです)

以前ここにいたはずの『私』の痕跡を探すならよけいにどうにかしないとまずいだろう。

まあ、そのあたりはそのうち考えよう。

4月14日（木）

という訳で、翌日の木曜日。

その日はコナン君が訊ねてくることもなく、毛利蘭が乱入することもなく、昼は阿笠博士の家でうな重（私も大好きだー）を取ってもらって。

夜、自宅で何気なくテレビをつけたら、あのニュースが飛び込んできたんだ。

赤鬼村火祭のやぐらの中から、根岸正樹（42）の遺体が発見されたという、原作2巻の最初の話、保険金殺人事件のニュースが。

4月15日（金）

どうやら今回、私は事件に巻き込まれずに済んだようです。

「博士ー！ カセットテー……プ……」

ちよいまち！

私が阿笠さんと早めの夕食を取ってるタイミングを見計らったように、なぜコナン君が阿笠さんの家に飛び込んでくるんでしょうか？

「……愛夏姉ちゃん」

「どうしたんじゃ、し……コナン君？」

「あ、うん。……博士、カセットテープ、持ってたよね？ 小さくて録音もできるヤツ」

「なんじゃ、貸してほしいのか？」

「うん……」

ああ、2人ともやりづらそうだ。

テープはたぶん犯人の阿部豊の自白を取るために必要なんだろう。昨日ニュースを聞いたあと話の全貌は思い出してはいたけれど、原作にないところでこんなやり取りがあつたとは、さすがに想像もつきませんでしたよ。

「待っておれ。確か研究室の方に……」

そう言いながら阿笠さんが奥に行ってしまうと、私とコナン君の間には何とも言えない気まずい空気が流れていた。

しかし、このデジタル時代にカセットテープですか。

(まあ、原作が描かれた時にはまだ主流の録音機器だったからね)

たぶん原作に登場してる証拠品がカセットテープだからなんだろうけど、一方でケータイやスマートフォンはふつうに普及してるみたいだし、この世界は矛盾に満ちていると思う。

「あ、それじゃ、私は仕事に戻りますので」

気まずさは持ち前のスルースキルで黙殺してたけど、そろそろ仕事に戻らなければいけないのも確かだ。

そう言つて席を立ったその時、コナン君が私の袖口をがしつとつかまえた。

「愛夏姉ちゃん……」

目を伏せて、肩を落として、小さなコナン君がますます小さく見える。

「……なんですかこの愛らしい生き物は……！」

子供、嫌いだけど、嫌いだけど……でも、悔しいけど私、姪っ子が生まれた時は正直な話ほんとに可愛いと思った。

まるでその時と同じ、コナン君が、すごく、可愛い。

「愛夏姉ちゃん。……ぼくを、嫌いにならないで……」

……オイ、工藤新一。

君はいつたいたいどこまで演技派なんだ？

それとも……ほんの少しでも、この演技の中に真実が含まれてるともいえるのか……？

いやあり得ないだろう。

彼は確かに16歳で、45歳の私から見ればほんの子供でしかないけど。

ひとりで組織と対峙して、いきなり周りの人間関係から置いてきぼりを喰らって、阿笠さん以外の人の前ではずっと江戸川コナンを演じ続けなければならぬのはものすごいストレスだろうけれど。

でも、よく知りもしない私なんか弱みを見せるような、そんなかわいげのある性格じゃなかったでしょう君は。

「……嫌いじゃ、ないですよ」

ほだされた、のかな？

たぶん違うと思う。

私だって、子供は苦手だし中でも江戸川コナンは超苦手だけれど、大好きな彼に嫌われたいなんて微塵も思っていないから。

その後、阿笠さんが戻ってきたところで私は再度工藤邸に入って。

無事に仕事を終えたあと、夜のテレビで阿部豊が逮捕された事を知った。

FILE. 4 それぞれの苦惱 〈奇妙な人捜し殺人事件〉

4月16日（土）

土曜日。

3日間を工藤邸の掃除に費やした私は、今日1日だけ休みをもらって、自分の洗濯とできれば“私”の捜索に当てようと思っていた。

ほんとは工藤邸の方もあとわずかだし、連続してやつちやいたかつただけどね。

（いや、マジで下着のストックが切れる寸前だったんよ）

しかし、お金をもらえない仕事となると、どうして私はこんなに身が入らないんだろう？

ともあれ、トリップしてきたのが先週金曜日だから、もう1週間以上たつたことになるのか。

この8日間、すさまじく密度が濃かったような気がするよね。

まあ、もともと私はそんなに密度が濃い生活をしてた訳じゃないから、よけいにそう感じるのかもしれないけど。

でもこの8日間の事件の頻度は、確実に原作のときよりも上がつてると思う。

『—— 10億円強奪事件から今日で6日目になりますが、未だに犯人逮捕のめどは立っていません —— 』

……はい!?

つけっぱなしのテレビから流れるニュースに思わず固まる。

オイオイ、いつの間に起こったんだ10億円強奪事件！

今日で6日ってことは事件が起きたのは月曜日ってことで……ああ、私がヨーさんとホテルで1泊した翌日、お昼頃まで惰眠をむさ

ぼっていたあの日、ってことですか。

(あー、確かにあの日の午後、阿笠さんに翌日の自宅の掃除を頼まれて、翌々日からも工藤邸の掃除でカンヅメになってたから、テレビも新聞もほとんど見てなかった、かも)

展開が早すぎて全く考えてなかったけど。

宮野明美、助けるのは不可能、だよな。

私はトリップ前にいろいろなサイトでコナン夢小説を読んできたから、確かに彼女を助けるストーリーを見たこともあるけど、ほとんどの場合主人公(オリキャラ含む)が「特殊」だった。

もちろん平凡主人公が奮闘する話もあったけど、宮野明美は妹を助けるために自分から危険を承知でジンに会いに行くのだし、あの場面で殺しの専門家であるジンが宮野明美に致命傷を与えない訳がない。彼女の説得は不可能、たとえそのとき彼女を引きとめられたとしても、妹を助けるために彼女は必ずジンに会うだろうから殺されるのが少し先に延びるだけだ。

そして、この平凡な私が埠頭に先回りできたとしても、その場でジンに殺されて終わりだろう。

じゃあもつと前、あの大男の方を助けてジンと対決させる？

ううん、私はあの男が泊まってるホテルを知らないし(確か原作でも文字が隠れて見えなかった)、もし見つけられたとしても信じてもらえるとは思えないし、やっぱり私が殺されて終わりだ。

……うまく出来てるなあこの原作。

こうして破綻を探そうとするとつくづくそう思うよ。

事件が起こったのが月曜日だととして、その日から毛利探偵は3日間、根岸さんを尾行していた。

だから宮野明美(広田雅美)がすでに毛利探偵に相談に来てたとしたら、早くても木曜日ってことになる。

それから実際に毛利探偵が広田さんを見つけるのは確か1週間後、つてことになってるんだけど……。

私が知ってる原作よりもこの世界は物語の展開が早いから、競馬場で広田さんが見つかるのは、東京競馬場が開いてるこの土日がいちばん怪しい、よね？

そう思つてテレビのチャンネルを競馬中継に変えたその時。

『——ぶつちぎりだー!! ゴーカイトイオー、G1五連勝ーっ!!』

その音声が飛び込んできて、私は頭を抱えなくなった。

それからけっこう考えて、頭の中で何度も何度もシミュレーションしてみたけど。

宮野明美を救うことはやっぱりできなかった。

洗濯が終わつてお昼頃、私は大箱でストックしてある○○○○メ○ト（買ってまだ間もないので段ボール4つで100食分以上ある）をかじりながら、パソコンの前にいた。

電源はずっと入ったままで、スリープを解除すると読みかけのブ○ーチ夢小説が現われる。

私はたくさん開いたままのブラウザをぜんぶ最小化していった。その先に現われたデスクトップのアイコンを1つ1つ見ていくと、カラフルなアイコンの中にぽつんと「無題・txt」というファイルを見つけた。

ここでちよつと昔話。

今45歳の私が初めてパソコンを買ったのは、2000年問題が世界的に騒がれていたアラサーの頃だったりする。

世間的にもちよつと遅いと思うんだけど、実はその前にワープロを

3台使ってたんだよね。

最初に小型のワープロを買ったのは高校1年の時で、当時はまだフロppyディスクすら出始めで搭載されてなかったんだけど。

(なので記録媒体はカセットテープでした。今の若者には想像もつかないんだろうなあ)

で、その頃私は、生まれて初めて遺書的なものをそのワープロで書いた。

別に当時自殺がしたかったとかじゃなく、内容は財産分与(マンガとか自転車とか?)の話に終始していた訳なんだけど。

その頃私がすでに自分のパソコンを持ってたとしたら、おそらくそのパソコンで書いてたと思う訳ですよ、遺書を。

もし、以前この部屋に住んでいた「私」が本当に存在していたのなら、私と似た性格の彼女がなにかをする時には私と似た行動を取るはず。

このパソコンがもし、私の部屋からトリップしてきたものじゃない、もともとこの部屋にあったものだとするならば、このパソコンの中には彼女の痕跡が必ず残っているはず。

無題、と名付けられたテキストファイル。

さほど期待せずにダブルクリックして私が見つけたのは、どうやら彼女の手記らしきものだった。

内容は、私が想像してた以上に重いものだった。

父親が死んだとき、彼女は元の私と同じ15歳だった訳だけれど、私と違ってそのわずか2カ月後に母親が死んだ。

ちょうど中学の卒業を間近に控えていて、葬式やらなにやらでごたごたしているうちにあっけなく卒業してしまっただけ。

両親ともに1人っ子で、祖父母も既にいなかった彼女は、本来なら施設にでも入るところだったのだろうけれど、このままこの家に住み

続けることを選択したらしい。

というのも、高校生で独り暮らしするのは世間的にもさほどおかしなことじゃなかったし、相続財産や両親の保険金は成人までの生活費としては十分な額があったからだ。

(これは私も通帳で確認している。私の貯蓄額とほぼ同じくらいだった)

ただ、これから通う予定だった高校は私立で、通い始めればあつという間にお金を食いつぶしてしまうだろう。

両親をいっぺんに失った彼女は精神的にもかなりショックを受けていたし、性格的にめんどくさがりでもあったので、既に入学金を払い込んであった高校に休学の届けを出したあと、いとも簡単に引きこもってしまったのだ。

ファイルのプロパティによると、テキストの作成日は去年の6月、最終更新日は私がトリップしてくる2日前だった。

おそらく前半部分を書いたのが6月で、後半を書いたのが今年の4月だったんだろう。

前半とは違い、後半は起こった出来事のようなものはまったくなく、彼女のネガティブな感情が吐露されていた。

周りに誰もいない、友達も家族もなく、人と話をすることもなく、ただ食べて寝るだけの生活。

誰にも必要とされず、なにをする気力もなく、生きていても仕方がない。

書き散らした文章は稚拙で、前後の脈絡もなく、したがって説得力もまるでなかったけれど。

それが16歳の私なのだというフィルターを通せば、彼女の感情は手に取るように判った。

判りすぎて逆に怒りというか、憤りみたいなものを感じたけど。

要するに、もしも私が父親を亡くしたとき、母親も亡くして、妹も

親戚もいなかったとしたら、おそらく同じものになっていただろうということだ。

甘えたがりで、人見知りで、めんどくさがりで、がんばることが嫌い。

強要されなければ動かないくせに反抗的で、人に優しくされたいくせに自分からは優しくできない。

彼女は私と同じで、でも私と違っていたのは、引き留める人間がいなかったということだ。

自分が責任を負うべき人、この世の未練、そういうものが彼女にはなかったんだ。

もうちよつとだけ生きて、社会人になって、視野が広がって、自分が判れば。

生きること、少しだけ楽しくなったのね。

楽しく、というより、楽になった。

私は今でも人付き合いが苦手で、元の世界で友達と呼べるような人はぜんぜんいなかったけど、でも学生の頃よりはずっと楽だった。

友達なんかいなくても生きていけることが判ったし、それが人間として社会人として致命的な欠陥じゃないことも判った。

本当の自分を誰かに知ってもらう必要なんかなし、とりあえず普通の人間に見えるように振る舞う術も身につけることができた。

誰にも理解されないことはさびしいことなんかじゃなく、当たり前のことなんだって、判った。

高久喜愛夏、さん。

私はきつと、あなたが理想とする大人にはなれなかったと思うけど。

でも、あなたが遺したこの世界で、私はあなたの代わりに生きていくよ。

4月17日(日)

過去の自分とか、醜い部分とか、いろいろ見せられて、考えさせられて。

気がつくとも曜日の朝になっていた。

工藤邸は、初日に共用部分、2日目に書斎、3日目に使っていない部屋の掃除をほぼ終えていた。

あとはソファやクッションのカバー、カーテン、シーツなんかを洗濯して、もう1回仕上げに掃除機をかけて、もし時間が余ったら庭の芝刈りでもすれば完了とっていいと思う。

まあ、やろうと思えばいくらでもやることはあるのだけど。

「いちおう今日で終わりの予定です」

「そうか。じゃあ、また昼に誘いに行ってもいいかのオ」

「はい。ではお待ちします」

朝のうちに阿笠さんとそんな会話を交わして、けっきょく昼過ぎまでかけて屋敷中に掃除機を巡らせたあと、誘ってくださった阿笠さんと一緒に再びポアロ前までやってきた。

と、その時。

落ちてきたのだ、ポアロの2階、正確には毛利探偵事務所の窓から、ミニスカートをはためかせ見事な生足をさらした蘭さんが！

「え？ 蘭君……？」

「どこ、なの？ 雅美さん、どこに連れてったのよ!？」

蘭さんの視線はサングラスをかけた大柄の男に固定されていて、阿笠さんの呼びかけにも気付いていないみたいだった。

すぐに踵を返した男を追いかけていく。

近くに停めてあった車に男が乗り込み、ドアを閉めた瞬間に追いついた蘭さんが運転席の窓ガラスに跳び蹴りを喰らわせて。

砕け散ったガラスを浴びて放心状態の男を車から引きずり出したんだ。

月並みだけどまるでアクション映画のワンシーンみたいだった。

蘭さん、私のことを運動神経がいいって言ってたけど、私は凡人であなたは超人だと思います。

「捕まえたわよ、お父さん!!」

「おーし、でかした!!」

いやいや、その人確か雅美さんの失踪とは無関係でしょ。

でもこの派手なアクションのおかげで判ったよ。

今が、原作で広田さんが殺されたことが判った直後なんだ、つてことが。

「博士！……愛夏姉ちゃん」

「おお、コナン君」

「え？ 愛夏ちゃん？ やだ、恥ずかしいところ見られちゃった?」

「いえ、……はい」

どっちなんだよ、と自分でもつつこみたくなつたし。

いちおう念のため、恥ずかしいところが“はい”で、見ちゃったのが“はい”の方です。

「そ、それで、2人はうちになにか用だったの?」

「いやいや、ワシらはポアロに用での。遅い昼食を食べに来たんじやよ」

「へえ、博士と愛夏ちゃん、そんなに仲が良かったんだ。知らなかつ

た」

「最近じゃよ。愛夏君がワシや新一君の家の掃除をしてくれての――」

「蘭！ 行くぞ！」

「はい。じゃ、2人ともまたね」

男を連行していく毛利探偵に呼ばれて、蘭さんとコナン君は事務所に戻っていった。

私と阿笠さんも無事ポアロに落ち着いたけど……。

あの探偵の人に大男の情報を聞いたのなら、この事件が終わるのはもうすぐだ。

コナン君の眼鏡で雅美さんの時計についた発信機を追跡して、男の死体を見つけて、ジンに会いに行った彼女を埠頭まで追いかけて――

「愛夏君、元気がないようじゃが」

「え？ いえ、そんなことないですよ。ちよつと寝不足ですけど」

「また仕事の心配かね？」

「あ、はい、それもありました」

そういえば工藤邸の仕事も今日でおしまいだもんね。

また新しい仕事を探さないと。

注文を済ませてしばらくした時、なぜかポアロにコナン君が慌てた様子で飛び込んできたんだ。

「博士！ お願い！ すぐに帰ろう!？」

「どうしたんじゃし……コナン君」

「急いでの。早くおうちに帰って」

「いや、ワシらはこれから食事をじゃな」

……いや、駄々をこねるコナン君は、傍から見ると可愛い憎たらしいガキです。

でもこれ、たぶん私がいるから歪んでるシーンだ。

ほんとどっつたらこの時間、阿笠博士は自分の家において、コナンの追跡メガネを充電してくれてるはずだから。

「阿笠さん、私、テイクアウトできないか訊いてみます。だからコナン君と一緒に帰ってあげてください」

「愛夏君……」

「私のことはどうか気になさらず。食事はあとでお届けしますので」「そうか、すまんのオ」

コナン君のただならぬ様子と私の言葉に、阿笠さんもなにやら感じ取ってくれたらしい。

ポア口を飛び出し、コナン君に手をひかれながら、阿笠さんもかけ足で帰っていった。

私はすぐに店員さんに、急に帰らなければならなくなったから、もう作り始めてしまったようなら持ち帰れないかと相談してみた。

多少待たされはしたがどうやら持って帰れるようだったので、私は容器に詰めてもらった2人分の食事を持って阿笠邸を訪ねていた。

「おお、愛夏君、すまなかつたのオ」

「いいえ。それで、コナン君の急用は終わつたんですか？」

「ああ、いましがたな。どうやらゲーム機の電池が切れてしまったよう、さっきまで充電してやってたんじゃ」

「そうでしたか。あのくらいの子供にとっては最優先の急用でしたね」

「ハハハ……」

阿笠さんが乾いた笑いでごまかす。

この会話、工藤新一が知ったらさうとう機嫌を損ねるんだろうな。

阿笠さんとの食事のあと、再び工藤邸に戻って仕事を続けて。

私はどうやら、無事に工藤邸の掃除を終えることができたようです。

まあ、カーテンの洗濯に手間取って、庭までは手が回らなかったんだけどね。

でもどうにか片付いてよかったよ。

夜8時、戸締りをして、工藤邸の鍵を阿笠さんに返しに行くと、阿笠さんが変なことを言っていて。

意味が判らないままとりあえずうなずいて、帰ってきてからもずっとそのことが頭から離れなくて。

夜、11時くらいだったと思う。

めったに鳴らない私のケータイが着信を告げたのは。

「……もしもし」

『あ、……高久喜愛夏、か？』

一気に心拍数が上がる。

だって、電話越しでも誰の声かはつきり判ったから。

——確かに帰り際に阿笠さんが言っていた。

工藤新一に私のケータイ番号を教えるもいいか、って。

「は、ん」

『あの、オレ、工藤新一。……今日は、ありがとな。その、家の掃除頼んじまって』

ええっと、女を口説くなら左側から、っていったいなんで聞いたんだっけ？

女性の右脳には男性の低い声に反応する何かがあつて、だから左耳から入る声の方がより効果的だとか何だとか。

つて、こんなこと考えてる時点でさうとうパニックってるよ自分!!

「いえ……こちらこそ、お仕事ありがとうございました」

冷静に、なんとか冷静になるんだ。

「カーテンは洗つたんですけど、庭の掃除まで手が回らなくて。時期的にまだ雑草が生い茂るような季節じゃないので、私でよければまたその頃にでもお伺いします」

『あ、ああ、サンキューな。……つて、また頼んでもいいってことか!?』
「はい。とりあえずお時間がある時にでも出来栄えを見ていただいて、私でよろしければまたいつでも声をかけてください」

みつともなく上ずつた声で対応するのはこの年になるとさすがにプライドが邪魔して、できるだけ低い声で話していたからちよつと愛想に欠けてるかもしれないけど。

正直仕事自体は割りがいいから、ぜひまた頼んで欲しいと思う。
……できれば阿笠博士を通して。

『あ、あの、さー!』

「……はい」

『また、電話してもいいか!?』

……?

今、私言わなかったっけ?

いつでも声をかけて欲しい、つて。

「ほ」

『……っ! そ、そんなじゃ、また電話する。今日はほんとにサンキュー

！』

この頃になってようやく私は気がついた。

工藤新一の声に、私を知る彼の冷静さのようなものがかけらもない、つてことに。

……そうか、彼は今夜――

「あの」

『えっ!?!』

「……いろいろ、たいへんだと思いますけど……。これからも、お仕事がんばってください」

『お、おう！……じゃ』

これだけで伝わったとは思えないし、ありきたりの言葉で励ましにも何にもならなかったかもしれないけれど。

事件のこと、目の前で死んだ人のこと、できるだけ引きずらないでほしいと思う。

こんなの、なにもできなかった私に言えることじゃないんだけど。

つらいこと、これからもたくさんあると思うけど。

できるだけ彼には幸せでいて欲しいと願うよ。

FILE・5 人とのご縁は大切に 幽霊屋敷殺人事件

4月18日(月)

思いがけず工藤新一のケー番をゲットしちゃった、翌日の月曜日。私は早朝から金計算をしていました。

今月のバイト代。

谷氏の家政婦とお詫びで2万円。

沖野ヨーコさんのホテル付き添いで1万円。

阿笠さん宅の掃除洗濯で1万円。

工藤邸の掃除で4万円。

目標10万とってたから、月半ばにして8万ならあんがい順調に稼げてるように見えるけど、実はほとんどが知り合いからのお情け的な収入だったりするんだよね。

こんなの毎月あてにできるものじゃないし、あくまで臨時収入ってことでとらえておかないと、この先安定的な生活は見込めない訳で。

……やっぱりコンビニか飲食店のホールスタッフしかないのかなあ、16歳女子のバイトって。

私、こう見えて身長も高いしそれなりに体力ならあるから、郵便配達とか宅配の仕分けとか、肉体労働の方が向いてるかもしれない。

せつかく収入を書き出したことだし、覚えてるうちに支出も計算して小遣い帳でもつけよう。

そう思ってたネットで適当なソフトをダウンロードしてきた。

そうこうしているうちにけっこうな時間が経ってたらしい。

とつぜんの電話に気づいたときには朝の7時になっていた。

「はい」

『もしもし、高久喜さんの携帯電話ですか？』

「あ、はい、そうですけど」

『覚えてる？ 私、佐伯だけど』

谷家で家政婦をしてる佐伯さんでした。

そういえば履歴書（偽造）を預けたままだったから、それで電話番号を知ったってことなんだろう。

「もちろんです。その節はたいへんお世話になりました」

『いいえ。こちらこそ、厄介なことに巻き込まんじやって』

「それは佐伯さんのせいじゃないですから。むしろ私の方がご迷惑をおかけして申し訳なかつたです」

佐伯さんにとっては、自分の伝手（阿笠さん）で紹介してもらった人が、年齢詐称してた訳だからね。

あの時はほんと、佐伯さんにも阿笠さんにも申し訳なかつたと思う。

『ところで高久喜さん、その後お仕事は見つかったの？』

「あ、……単発でお留守番やお掃除の仕事はしてたんですが、今はまた探してるところです。それがなにか？」

『実はね、旦那様の知り合いのところでも急に人手が必要になって。うちの家政婦を1人貸してほしいって打診があつただけど、泊りがあから誰も出られなくてね。もしも高久喜さんが良ければ、と思って電話してみたところなの』

「あ、ありがたいです。すごく助かります。でも、泊りがあるって、どんな内容なんですか？」

『結婚式のお手伝いで、ほとんど雑用だから、難しいことはないと思うわ。期間は約1週間で、その間はずっと泊りになるから、それも含めてお給金は10万円出すっていつてるんだけど』

「やります！ ぜひ紹介してください！」

はい、お金につられました。

そのあと、いちおう年齢についても確認したけど、それは佐伯さんが先に確認してくれてたようで。

泊りといっても夜勤のようなものじゃなく、ただ単に場所が遠くて家に帰れないだけだから、16歳でも問題ないということだった。

という訳で、今私はなぜかフランス料理のレストランにきてたりします。

「あの、すみません。私、谷さんのところで家政婦をしている佐伯さんから紹介されました、高久喜と申します」

「伺っております。ただいまシェフを呼んでまいりますので、少しの間こちらでお待ちいただけますでしょうか」

そう、レジのお姉さんに案内されたのはスタッフオフィスの一室で、どうやら従業員の休憩室とロッカーを兼ねた応接室らしかった。もともと、ちゃんとした応接室というのも別にあるんだろうけどね。

生まれも育ちも庶民の私としては、高級レストランの高級な応接室なんかより、こういう場所の方がリラックスできてよかったです。

ほどなくして現われたのは、長身でわりとガタイがいい、元の私と同年代くらいに見える男性だった。

「初めまして。谷家の佐伯さんに紹介されてきました、高久喜愛夏と申します」

「初めまして、籟本祥二です。このレストランでシェフをしています。どうぞよろしく」

手を差し伸べられたので思わず握り返してしまう。

「どうやらこの人、日本人より外国人と接する方が多い人種らしいです。」

「仕事の内容についてはどのくらいご存知ですか？」

「結婚式のお手伝いと伺いました。内容はほぼ雑用で、遠方のため1週間ほど泊りになると」

「おおむねその通りです。実は、予定していた人が急病で行けなくなりまして、その補充ということで方々に声を掛けさせてもらったんですが、なかなか都合がつく人がいませんのでね。急な話で申し訳ないのですが、明日からお願いできますか？」

「はい、大丈夫です。こちらこそぜひお願いします」

「なんだか簡単に決まっちゃいました。」

その後、テーブルにいろいろ広げて詳しい説明をしてくれたところによると。

「どうやら結婚式を行うのは私有地になっている観光島で、週2本の定期船で丸1日以上かかるらしい。」

「明日の火曜日、10時の船に乗って翌水曜日の午後から仕事で、既に現地に入っているスタッフの指示に従って主に掃除をすればいいようだ。」

「結婚式は土曜日、新郎新婦と参列する親戚たちは金曜日に貸切船で到着するので、その後はその人達のお世話が仕事内容に加わって。」

「式が終われば仕事もほぼ終わりで、土曜日の定期船で帰るか、火曜日まで観光してから帰るかは好きにしていいたことだった。」

話を聞いてるうちにふと思いついた。

私有地の観光島、結婚式、定期船と貸切船。

これって、もしかしなくてもあの話のキーワードじゃなかったらうか？

それに、この人――

「あの、籬本さん」

「ああ、私のことは名前で呼んでください。なにしろ参列者全員が同じ苗字なので。……それで？」

「もしかして、今回ご結婚なさる方、夏江さんとおっしゃいますか？」
「高久喜さんがご存知とは意外ですね。このことは報道はまつたくされてないはずなのですが」

「あ、いえ。……以前、籬本夏江さんという方の話を聞いたことがあるだけで。結婚式の話は初耳でした」

「そうでしたか。夏江は私の姪でしてね。高久喜さんは？」

「私は直接の知り合いではないんです。以前知人の話の中に出てきた名前を覚えていただけですから」

祥二さんはそれ以上追及してこなくて助かった。

（もし追及されてたら鈴木園子の名前を出さなきゃならないところだったよ。……友達どころか会ったことすらないのに）

でもこれではつきり判った。

これ、豪華客船で連続殺人事件が起こる話だ。

でも事件が起こるのは一族の人たちが帰る貸切船の中で、私が乗るのは島の定期船だから接点はないはず。

あとは島で蘭さん達に会わないように気をつければたぶん大丈夫。
（実は毛利探偵に犯人扱いされたのがけっこうなトラウマになってたりします）

「では、明日の定期船に乗り遅れないようにお願いします。チケットもお渡ししておきますから」

「かしこまりました。よろしくお願いします」

立ち上がって、再び握手を交わす。
と、なぜか祥二さんが手を握ったまま私の肩に逆の手を置いた。

「愛夏さんは、とても16歳には見えませんね。言葉はしつかりしているし、まじめで常識もある」

また言われたな、まじめ、って。

ていうか、これつてもしかして口説かれてる？

……いやいや、この人外国生活が長そうだから、あちら的にはこの程度なら社交辞令の範囲に入るんだろう。

「恐縮です」

「時間が取れたら、島でとっておきの場所に案内しますよ。なにより高台から見る景色が格別なんです」

オイオイ、いい年したオッサンが女子高生口説くなよ！

(いや私は高校行ってないけどさっ)

「ありがとうございます。仕事の励みになりますので、あちらにいたら他のスタッフにも伝えておきますね」

フンツ、45歳なめるなよ！

いったい何年セクハラオヤジの相手してると思ってたんだ!!

ともあれ、どうにか無事に明日からの仕事をゲットしました。

事件のことは気になるけど、こうも立て続けに仕事が舞い込んでくるって、けっこう運がいいと思っていいいんじゃないかな？

……まあ、そんなに上手くいくわきゃないんだけど。

急いで帰宅して、とりあえず2日分の着替えを旅行かばんに詰め込んで。

着ていく分の下着がないから急いで洗濯も済ませて。

あんまり旅行とかしたことないから、なにか忘れ物があるかもだけど、あちらは観光地だし現地で調達すればいいよね。

そんなこんなであたふた準備に奔走していると、夜の8時頃になってケータイに電話がかかってきたんだ。

「もしもし」

『愛夏ちゃん？ 私、毛利蘭だけど』

「はい、どうかしたんですか？」

『ごめんね、夜遅くに。愛夏ちゃん、コナン君がまだ帰らないんだけど、今どこにいるか知らないよね？』

……ああ、なるほど、こうつながるのか。

私、いちおう事件の順番はかなり正確に覚えてるんだけど（さんざん読んだし）、幽霊屋敷の事件が飛ばされたと思ってたらここでこう絡んでくる訳ね。

「うちには来てないけど。……心配だから、私も心当たりを探してみるね」

『え？ でも、もう夜も遅いし』

「ジヨギングしながらちよつと町内を回ってみるだけだから。1時間くらいしたらまた連絡する」

『ありがとう。こつちも見つかったらすぐ電話するね』

さて、場所は確か4丁目の洋館で……名前までは判らないけど、引越した設定だからたぶん表札は出てないよね。

ていうか4丁目ってどのへんなんだろう？

ひとまずネットで地図を調べて、ある程度場所の見当をつけてから、私は動きやすい服装で家を出た。

ええつと、この事件って確か、のちに少年探偵団を結成する3人とコナンが仲良くなるきっかけみたいなイベントだったよね？

ということは、まだ毛利蘭や阿笠博士は彼らのことを知らないんだ。

下手に立ち入っても事件解決の邪魔になるだろうし、でもこの時間まで小学1年生が帰らなきゃ、親御さんたちは心配だよな。

原作では朝になってから帰るような感じだったけど、それまでやきもきしながら待ってる家族があまりにも気の毒だから、事件が解けたあたりでちゃんと家に帰らせよう。

4丁目のあたりもそれなり的高级住宅街で、目的の洋館はほどなくして見つけることができた。

マンガにあった塀の隠し扉を通って庭に出る。

と、草むらに転がってる人影があつて、すぐに小嶋元太と円谷光彦であることが判ったから。

いちおう肩をゆすって目が覚めないことを確認したあと、私は蘭さんに電話をかけた。

「もしもし。今平気？」

『うん。もしかして見つかったの!?!』

「ううん、コナン君はまだなんだけど。同じくらいの子供が2人、よそ様のお庭で眠つてて。もしかしたらコナン君の友達じゃないかなつて。蘭さん、コナン君のクラスの名簿、手元にある？」

『え？ ちょっと待つてて』

電話の向こうで蘭さんがごそごそやる気配があつて、やがて再び声が聞こえてきた。

『いいわよ』

「1人が小嶋元太君、もう1人が円谷光彦君。あと、歩美ちゃんという子が一緒みたい。寝ぼけながら話してくれたことだから確かじゃないけど」

『小嶋……あ、いた！ 2人とも同じクラスの子！ あと、吉田歩美ちゃんという子もいる！』

「じゃあ、念のためその子達の家連絡してみて。今いる場所は4丁目空き家になってる洋館。私は引き続き、その歩美ちゃんて子とコナン君のこと探してみるから」

『待って、愛夏ちゃん！ 私も行くわ！』

「え？ でももう遅いし、危険だし」

『だったらなおさら行く。だって愛夏ちゃんのこと心配だもん』

やっぱり優しいな、毛利蘭。

腕っ節はそのへんの男どもよりずっと強いけど、ふだんの女らしさとかこの優しさが工藤新一をひきつけるんだろうなあ。

「ありがとう。……じゃあ、毛利探偵に来てもらえないかな？」

『お父さん？ 大丈夫かな、ちよつと飲んでるけど』

「大人の人にもしてもらえると助かるから。私の方も阿笠さんに連絡してみる」

『そう？ じゃあ話してみるね。くれぐれも気をつけて』

「うん、ありがとう」

電話を切ったあと、私は阿笠さんに連絡して、洋館に来てもらえることになった。

蘭さんが元太君達の家連絡してくれれば、彼らの親も迎えに来てくれることだろう。

ほどなくして到着した阿笠さんには庭で子供たち2人を見てもらうことにして、私は洋館の中へと足を踏み入れた。

地下室への扉は、おそらくコナン君の伸縮サスペンダーで開いたままだろう。

できるだけ音をたてないように薄暗い廊下を進んでいくと、しばらく行つたところで床板が上がっていて、地下への階段が見えた。

滑り落ちないようにゆっくりと歩いていく。

と、ドアの隙間から灯りが漏れているのを見つけて、そっと近づいてみた。

「—— オレはこれ以上、父さんを殺した悪夢を見ながら、おびえて暮らすのはいやなんだ!! 罪を償って、楽になりたいんだよ!!」

「しっかりとしなさい昭夫!! もう少しよ! もう少しで時効よ!! 黙っていれば誰にも……」

「そう……確かにこのまま隠れていれば、警察からは逃げられる。だが、犯した罪からは決して逃げられませんよ。……奥さん、あなたは息子さんに一生……、一生この重荷を、背負わせる気なんですか?」
「う……うう……おとおお……」

おそらく奥さんが崩れ落ちたのだろうドサツという音と、慟哭。

そこまで聞いて、私はゆっくりと扉を開けた。

「コナン君」

呼びかけは聞こえなかったらしい。

まあ、原作はここで場面が切り替わって朝になってたから、この親子が落ち着くのにそのくらいかかった、ってことなんだろう。

でもまさかそこまで子供たちにつきあわせる訳にはいかないからね。

私はそっと歩いて行って、ようやく気付いたコナン君を手招きして、歩いてきた2人を扉の外まで連れ出した。

「愛夏姉ちゃん……どうしてここに？」

「あのね、小学1年生がこんな時間まで帰らなかったら、どんな騒ぎになるか判つてますか？」

「……」

そう、君は今高校生探偵じゃない。

遅くまで帰つてこなければみんなが心配するし、子供たちを引率できるような立場でもないんだ。

「あの、お姉さんは」

「初めまして。高久喜愛夏と申します」

「あ、吉田歩美です」

「外にいた2人と、吉田さんとコナン君、屋敷に入ったのは4人で間違いないですか？」

原作を知ってるから訊く必要はないんだけど、名探偵の江戸川コナンに変な疑いを持たれないために確認してみる。

思い出したように少年2人のことをたずねてきたコナン君に、庭で寝ていたことを伝えると、彼はほっとしたように息をついた。

館を出たところには阿笠さんと毛利探偵、蘭さんが子供2人を介抱していて。

蘭さんに訊くとやはり名前を言った子供の親も半狂乱で探していて、この場所はすでに伝えてあるからすぐに来るだろうと教えてくれた。

あとは、地下にいるあの2人のことだ。

「毛利探偵、わざわざ来ていただいてすみませんでした」

「いや、こっちこそ悪かったな。うちの坊主が迷惑かけて」

「いいえ、それはぜんぜんかまわないんですけど。実は、毛利さんを良識ある方と見込んで、お願いしたいことがあります」

私は、ちよつとばかり毛利探偵をおだてつつ、地下でのことを話し始めた。

「実はこのお屋敷、地下に人が隠れ住んでいたらしくて。私もちよつと小耳にはさんだ程度なんですけど、数年前に起きた事件に関係がある人たちみたいなんです」

「そーいや何年か前に強盗殺人事件があつたな。ありやあこの家だつたか」

「たぶんそれです。で、どうやらその潜んでる人が犯人らしいんです」「なんだつて!? そいつあすぐに警察を呼んで——」

「いいえ、その人達、今は罪を悔いているようなので、できれば自首扱いにしてあげたいんです。お願いです、毛利探偵。あの人たちを説得して、自首を勧めてもらえませんか?」

まあ、たぶん、コナン君があらかた説得しちやつたから、放つておいても自首してくれそうだけど。

ここまで大人を巻き込んだんだから、ここはもうぜんぶ任せちやつた方がいいよね。

毛利探偵に無関係のところできつた事件ならともかく、こんな近くに殺人犯が潜んでたのに何も知らなかったじゃ、名探偵のメンツが丸つぶれだろうから。

「んまあ、オメーがそう言うならそうしてやってもいいが」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

そのまま毛利探偵は地下へと降りていって。

やがて子供たちの親も次々到着して、私が彼らを見つけたいきさつを簡単に話すと、お礼を言つて帰つていった。

「じゃあ、私もそろそろ帰りますね」

残った阿笠さん、蘭さん、コナン君に向かって言う。

たぶん蘭さんとコナン君はもう少し毛利探偵を待ってみるつもりなのだろう。

「ワシが送っていいこう」

「ありがとうございます」

「ねえ、愛夏姉ちゃん」

「はい？」

「いつから聞いてたの？」

たぶん地下でのことだろう。

蘭さん達に判らないようなのかな、あいまいな言い回しだった。

「男の人が話してるときです。罪を償って楽になりたい、って言ってます」

コナン君が気になったのはたぶん、そのあと自分が言った言葉を私はどう思ったのか、ということだ。

あの時のコナン君は、とうてい小学1年生が言えるはずのないセリフを話していたから。

「コナン君もかっこよかったですよ。将来は刑事さんとか、刑事ドラマに出てくる俳優さんになれそうですね」

子供をほめるような、おだてるような言い回しで答えてみる。

それを彼がどうとらえたのかは判らないけれど。

帰り道、阿笠さんには明日から1週間ほど仕事に出かけることを話しておいた。

島ではケータイはふつうに使えるらしいから、さほど心配はしない

だろうけど一応念のため。

「そうか。愛夏君がいなくなるとさびしくなるのオ」

「ありがとうございます。仕事先は観光地らしいので、お土産買ってきますね」

「楽しみに待つとるよ。気をつけてな」

「はい」

いろいろ不安がない訳じゃないけれど。

この世界でこれからも生きていくために、とりあえずお仕事がんばってきます。

FILE・6 初めまして殺人です 豪華客船連
続殺人事件)

4月19日(火)

火曜日の午前10時、籾本島への定期船に乗るため、私は電車を乗りついで港へとやってきました。

あわただしくて何も知らずにここまで来ちやっただけど、私がもらったチケットは定期船「はたもと丸」の2等船室のもので、夜は広いフロアに雑魚寝らしくて。

両隣オッサンとかだったらいやだな、とか思ってたなら、レディスルームがまだ空いてるそうなのでそっちにしてもらっちゃいました。(まだGWにかかってなかったからよかつたけど、シーズンだったらもっと早く満室になってたらしい)

そんなこんなで一晩を船に揺られながら過ごして、翌日の水曜日、はたもと丸は無事に籾本島へと到着した。

4月20日(水)

船着き場にはホテルや旅館からの迎えの車がたくさんいて、その前を通りながらタクシー乗り場へ行くと長蛇の列で。

でも、船がつくこの時間にはタクシーの数も多いらしく、最後尾に並んでもさほど待たされることはなかった。

運転手さんに場所を告げて走ること15分、到着したのは大きな敷地に母屋と離れと蔵が鎮座する典型的な日本家屋。

すぐに見かけたお手伝いさんらしい女性に声をかけると、さっそく離れに案内して、その場でスケジュール表のようなものを手渡してくれた。

「ここが高久喜さんに寝泊まりしてもらおう部屋になります。今日はこ

れから庭の草取りの手伝いをして、明日は他のみなさんと一緒に車で神社へ行つてそちらの掃除をお願いします」

「神社、ですか？」

「そう。管理を簗本家がしている神社で、結婚式もそこでやることになつてるの。ちよつと遠くて全員車で向かうから集合時間に遅れないようをお願いね。当日は式のあと、近くのホテルに移動して祥二様が昼食を作つてくださるのだけど……高久喜さんには金曜日から下ごしらえの準備を手伝つてほしいそうだから、祥二様が船で到着されたらあとは指示に従つてください」

スケジュール表には金曜日以降はご家族の方のお世話と書いてあつただけど、私にはどうやらレストランで会つた祥二さんの手伝いが割り振られているらしい。

(ていうか、私も祥二様って呼ぶべきなんだろうな、家政婦らしく) そういえばマンガでも言つてたっけ。

披露宴(?)で祥二様が作ったフランス料理が旦那様には不評で、激怒して以降ものすごく機嫌が悪いとかなんとか。

それで船の中で犯人に言つた一言がそもそもの事件の発端だつた気がする。

名探偵コナンという物語自体、ものすごくよく考えられてて、なかなか付け入る隙がないのは10億円の時でよく判つたけど。

でも、私がいることで変わつてる部分もあるのは今までのことよく判つた。

変な風に変えちゃつて、被害者が増えたりするのはさすがに自分も嫌だけど。

少しだけよくなるように変えられるんだつたら、それは物語に関係のない私がここに意味がある、ということでもあるよね。

4月21日(木)

昨日は庭で他の人たちと草取りをして。

今日も庭掃除を続ける人達はあるみたいだったけど、私はほか数人の人たちと車で向かった神社の掃除にかかった。

私、背が高いから、とくに神社みたいな天井が高い建物では思いつきり重宝するらしいんだよね。

ほとんど1日中高いところばかり掃除していたから、1日が終わるころにはすっかり腕が筋肉痛になりました。

そんなこんなで、掃除をしている間もずっと考え続けてたんだけど。

せつかく祥二様の料理の下ごしらえを手伝うのだから、旦那様の機嫌を悪くしないことが一番じゃないかという結論に達した訳だ。

祥二様は父親に自分の料理を食べて気に入ってもらって、あわよくばレストランの借金を帳消しにできるお金を引き出せば、って考えなんだろうけれど、そもそもフランス料理という時点で旦那様は気に入らない訳だから。

ここは、レストランの借金返済のためにも、祥二様に進言して旦那様の料理を日本食にしてみらうのが得策だろう。

4月22日（金）

この日、私は神社へは行かずに、屋敷の中で朝から布団を干したり掃除機をかけたリ指示に従って掛け軸を掛けたりしていると。

表に車がついたと知らせがあつて、玄関先に整列したあと、全員で頭を下げて簾本家の人たちをお迎えした。

「「おかえりなさいませ」」

声を合わせたのは元からいる使用人たち。

ふだんはこの人たちが屋敷の管理をしていて、臨時で雇われたのが私たち、あと貸切船に一緒に乗ってきた使用人の計20人くらいが明

日の結婚式に向けての人手になる。

私は次々現れる車を見ながら、その1台に祥二様の姿を見つけて車に近づいていった。

「おかえりなさいませ、祥二様。船旅お疲れ様です」

「ああ、愛夏さん。どうやら無事に船に乗れたようですね」

「はい、おかげさまで。お荷物をお持ちします」

「じゃあ半分お願いしてもいいですか？」

他の人たちはほとんどの荷物を使用人に預けてさっさと屋敷に入っていったから、荷物の半分（しかも重い方）を自分で持つてる祥二様はちよつと異質だった。

まあ、私の感覚ではこっちの方が普通なんだけど。

屋敷で過ごす時の各自の部屋というのはいつも決まっているようで、私が案内する必要もなく祥二様は自分にあてがわれた部屋へと歩いていった。

荷物を置き、祥二様の上着を受け取ったあと、用意してあった急須でお茶を淹れる。

「仕事にもすつかり慣れたようですね」

「はい。こちらの方は皆さんいい方たちばかりで、臨時の私たちにもよくしてくださいませ」

「食事もおいしいでしょう？ 地元でとれた新鮮な食材だけを使って作ってますからね」

「はい。食事はもちろん、景色もいいし、とてもいいところだと思います」

って、出不精の私は、旅行とか別に興味ないんだけどね。

食事でも食べられればいいって感じだから、実は毎食力〇リーメ〇トでもぜんぜん苦にならないし。

お茶を一杯飲む時間分だけ休憩をして、祥二様はすぐに食材や食器のチェックをしにホテルへと向かった。

手伝いの私ももちろんついていく。

とはいえ、フランス料理の食材なんかほぼ判らない私は、せいぜい当日使う食器の種類と数を確認するくらいしかできないんだけどね。

祥二様は一通りのチェックを終えたのか、調理台に食材の一部を並べ始めて。

「愛夏さん、これから調理場の火力や手順の確認をしますので、よかつたら味見をお願いできますか？」

「はい、喜んで。……祥二様、あの、一つだけ提案というか、相談があるんですけど」

話すタイミングを探していた私は、ここで祥二様に相談してみることにしたんだ。

「相談ですか？ 私にできることならいいんですが」

「本当だったら私が口を出すようなことではないと思うんですけど。」

「……旦那様のことで、ちよつと気になることを聞いたものですから」

私は言葉を選びながら、旦那様の洋食嫌いのことと、差し出がましいと前置きをしつつ、旦那様の食事だけ和食にできないかという話をした。

祥二様は少し表情を曇らせながらも、私の言葉に怒り出すようなことはなく、むしろ私が思うよりずっと真剣に考えてくれたようだった。

「確かに、愛夏さんがいうことも一理ありますね。親父の洋食嫌いは筋金入りだ。口に入れてもらいさえすれば納得させるだけの自信はあるのですが、そもそも洋食というだけで箸をつけることすらしないでしょうな、あの親父なら」

「はい、私もそんな気がします」

「フランス料理家としては口惜しい部分もないではないですが、料理を提供する者としては客の要望に応えるのも筋として間違つてはいませんか。……いいでしょう。愛夏さん、すみませんが、ホテルに使用できる和食器について確認してきていただけますか?」

「はい! あ、あの、ありがとうございます!」

「お礼を言うのは私の方ですよ、愛夏さん。危うく夏江の結婚式を私自身が台無しにするところだったかもしれないんですから。あなたの気遣いに感謝します」

その後、祥二様は当日のフランス料理と同じ材料を使って、試行錯誤を繰り返しながら見事和食にアレンジしていったんだ!

多少しようにゆを使つたりというのはあつたけど、ほとんどの材料は調味料を含めてフランス料理からの転用で、驚く私に祥二様は種明かしのように話してくれる。

「実は若い頃、修行先の厨房でよく作らされてね。シェフが研究熱心な人で、フランス料理に他国の調理法を合わせた創作料理を研究していたんです。おかげで私も出身国である日本の料理を研究する羽目になりましたよ。まあ、その経験が今に活かされているわけですから、無駄ではなかったということですね」

洋食嫌いの旦那様に育てられた祥二様は、きっと幼い頃は和食以外のものは口にしていなかったんだろう。

そんな生活の中で自然と舌を鍛えられて、やがてある程度大きくなってから食べた和食以外の料理に魅了されて、フランス料理家を目指すたんじやないかと想像する。

その中には父親に反発する気持ちもあつたんだろうけれど、でも心の奥底では、幼い頃から口にしてきた和食を完全に否定した訳ではないんだろうな。

そんな私の想像を裏付けるように、祥二様の和食はとてもおいしく

て、フランス料理と両方味見させてもらった私はすっかり満足してしまっていた。

祥二様が研究、私が下ごしらえと分担して（あ、念のため一応包丁は使えます。……16歳並みには）、翌日の準備は深夜にも及んで。

日付が変わる頃に気付いた祥二様に見送られて、私だけ先にタクシーで屋敷へと帰らせてもらう。

これで少しでも原作が変わって、事件が起きなければいいんだけどな。

……まあ、もともと事件の種は旗本家にすでに根付いているみたいだから、今回事件が起きなくてもいざずれ同様のことは起きるのかもしれないけれど。

明日島の定期船で帰る私には、これ以上のことは無理だと割り切つて。

帰り着いた従業員宿舎の一室で、私は静かに眠りについた。

4月23日（土）

結婚式当日の朝、寝不足ながらなんとか起床して身支度したあと、私が荷物の整理をしていると最初にいろいろ説明してくれた屋敷の使用人の女性が部屋にやってきた。

私の仕事は昨日まででほぼ終わっていて、あとはせいぜい部屋の片付けの手伝いくらいだったから、たぶんお給料の支払いの件だろうと軽く対応したのだけれど。

部屋を一通り見まわした使用人さんは、少し言いづらそうに話し始めたんだ。

「高久喜さんは、今日の定期船で帰る予定でよかったのよね。観光はしないで」

「はい。いちおうお土産屋さんくらいは見るつもりですけど」

「そう。……実は、急で申し訳ないんだけど、高久喜さんには追加でお願いしたい仕事ができただけだ」

使用人さんが話したのは、なんとご家族の方が帰る貸切船での祥二様のお世話だった。

なんでも祥二様が私の仕事を気に入ってくださいって、できれば帰日も私を担当にしてほしいとか。

って、それってつまり、私が自分で自分の首を絞めた、ってことですか!?

私が呆然としていると、慌てたように使用人さんが言葉をつづけた。

「もちろん断ってくれてもかまわないわ。最初の契約では高久喜さんは今日までの予定だったのだし、正直言って帰りの船での人手は十分で、わざわざ高久喜さんに入ってもらうほどでもないの。ただ、高久喜さん自身が今日帰る予定なら、船の時間は定期船よりも遅いから、少しは観光する余裕もあると思うのね。それにここで祥二様と伝手を作っておくのも悪くはないし」

いや、正直祥二様との伝手なんて別にどうでもいいし。

観光とかもあまり興味はないから、阿笠さんとあとユキさんとヨーさんと、この仕事を紹介してくれた佐伯さんへのお土産だけ買えればなにも問題はない。

それより豪華客船での殺人事件に巻き込まれるかもしれないことの方が恐怖だよ!

そりゃ、旦那様の機嫌を悪くしないよう画策したりはしたけど、でもあれだけでほんとに事件が起きなくなる保証なんかないんだから。

「あと、お給金、2万円ほど追加させてもらおうから」

「……はい、やります」

答えた私はほとんど涙目でした。

でもムリです、断れないです、2万円の前には私の涙なんてクズも同然です、はい。

その場で12万円入りの封筒を受け取ってしまった私にはもう逃げる余地などなく、ご家族が式場になっている神社へ出かける時にお見送りをしたあとは、自分が使った部屋の掃除をしてひとまず解散になった。

臨時の使用人たちは観光組と帰宅組に分かれて、私は帰宅組の方へ混ぜてもらってタクシーでお土産屋さんに回ってもらおう。

そこで予定の人たちにお土産を買ったあと、仲間同士で早めの昼食をとって、定期船に乗るみんなを見送って。

それから貸切船が出港する午後4時までは自由時間だったのだけど、私はすでに観光する気分ではなく、港近くの喫茶店で時間をつぶしながらどんよりと原作の流れを思い出していた。

原作の最初は蘭さんたちが船に乗りたいきさつの説明で、確か旦那様の娘婿の北郎様が旦那様に内緒で、定期船に乗り遅れた蘭さんたち3人を船に乗せたという話だった。

例えばここで私が出しやばって船に乗せないようにするとか……はムリだろうな。

(むしろ私の伝手で無理やり乗り込みそうだよ、あの3人なら)

それでさらに旦那様の機嫌が悪くなって、絵を描いていた孫の一郎様に余計な一言を言ったのが事件の発端だったんだ。

事件そのものを防ぐためには、事件が起こった夜の8時ごろに現場で目撃者になるしかない。

(犯人が包丁を取り出したところで悲鳴を上げる、とか?)

ただ、この時間は使用人ほぼ全員が厨房で食事の支度をしていて、同時に使用人全員のアリバイも証明されることになる。

つまり、下手に介入すると、事件も防げずアリバイもないという状

況になりかねない訳だ。

そして、逆上した犯人に私が殺される可能性も十分あったりする。

（そうだ、凶器の包丁、確か祥二様の私物でケースに鍵なんかはついてなかったはず）

凶器を隠す？ でも本当に人を殺したいなら、包丁なんてどこからでもいくらでも調達可能だ。

例えば私が祥二様の包丁を隠したとしても、それで事件が防げる確率はあまり高くないだろう。

最初の刺殺事件さえ起こらなければ、第二第三の事件は起こらない。

でもこの事件を防ぐためには、私自身がかかなり危険な橋を渡らなくちゃならない。

……旦那様を見捨てる？ 本当に？ 事件が起こることが判つてそれをやる？

だけど、結婚式での旦那様の食事が和食に変わったのだから、事件が起こらない可能性だってゼロじゃない ——

どうすればいいのか判らないまま、気づけば船が出港する30分前になっていた。

慌てて会計をして、荷物を持って客船が寄港しているそばまで来る。

毛利家の面々はいないようではつとしながら船に乗り込むと、さっそく使用人の一人が私を部屋へと案内してくれて。

もちろん使用人専用の客室で、ご家族の皆様のような豪華な内装じゃなく、普通の個室でひと安心したところだったりする。

「荷物を置いたら一度祥二様のお部屋へご挨拶に行ってください。そのあとは厨房に声をかけてくれれば執事の鈴木さんに紹介するから」

「はい、あの、祥二様のお部屋はどちらですか？」

使用人さんはドアの内側に貼ってある船内見取り図（非常口なんか
が判るやつだ）を見ながら、ご家族の方たちのお部屋と、あと主要の
施設を一通り教えてくれた。

ご家族のお部屋はだいたい一所に集中していて、中でも一番奥まっ
た場所にある部屋が旦那様のお部屋で判りやすかった。

私は荷物を開いてクローゼットに入れたあと、言われたとおりに祥
二様の部屋へと向かう。

そのころになると船はすでに出港していて、祥二様も部屋で荷物を
開いているところだった。

「やあ、愛夏さん。突然のことなのに引き受けてくれてありがとう」

「いえ。あと1日お世話になります」

「こちらこそ。愛夏さんはこの船は初めてでしょうから、簡単に船内
を案内しますよ」

「ありがとうございます。……ところで、旦那様はいかがでしたか？」

船内を歩きながら少し声を潜めて訊いてみた。

まだほかの人たちの部屋が近いからだろう、祥二様も少し声を低く
して、私の問いに答えてくれた。

「さすがに満面の笑顔で、という訳にはいかなかったですがね。ひと
まず声を荒げるようなことはありませんでしたよ。まあ、及第点とい
うところではないでしょうか。おかげで今後の話もだいぶしやすく
なりました」

「それはなによりでした」

「できれば本物のフランス料理を親父にも味わってもらいたかったと
ころでしたけどね。激怒しなかつただけでもありがたい。愛夏さん
には本当に感謝しています」

「いえ、むしろ余計なことだったかもしれないと心配していたところ
です。機会があれば今度ぜひ、祥二様の本物のフランス料理をご馳走
してあげてください」

「ええ、ぜひそうしましょう」

心配事の一つを解消できて、私にもほっと笑顔が出た。

祥二様も笑顔で返してくれる。

これでひとまずフラグは折れたかな、と思ってたんだけど――

案内されるままデッキへ出ると、そこには一族の皆様と、あと毛利
家の面々が顔をそろえていて。

「バカモノオ、これはどういう事じゃあ〜っ!？」

旦那様が北郎様に怒鳴りつける姿が見えて、私はたぶん顔面蒼白に
なっていた。

旦那様が歩き去るまで、私は茫然自失のまま立ち尽くしていた。

だって、その間のご家族様たちのやり取りは、私がマンガで見たの
とほとんど違わなかったから。

違ったのは、祥二様と夏江様達との「私の料理を食べてからです
ね」というくだりが「結婚式が終わったあたりからですね」に変わっ
たくらい。

つまり、去り際に旦那様が一郎様に言った一言も、原作のまままで変
わらなかつたんだ。

毛利家の面々が旦那様を激怒させた原因のすべてだとは私も思っ
てないけど。

やっぱり私、あの3人が船に乗るのを邪魔するべきだった？

でも私じゃきつと無理だったよ。

私がこの船に乗るのに、彼ら3人を乗せずにいられる方法なんて、

あの時も今も思いつかないんだから。

「あれ？ 愛夏ちゃん？」

「……あ、はい」

「やだあ！ すっごい偶然！ ねえ、お父さん、コナン君、こんなところで愛夏ちゃんだよ！」

「なんだと？ ……またあんたか。嫌な予感しかしねえな」

いや、それこっちのセリフです毛利探偵。

「愛夏さんのお知合いですか？」

「はい。私が愛夏ちゃんの中学の頃の同級生なんです。でも驚きました。まさかこんな旅先で会うなんて思ってませんでしたから」

「そうでしたか。彼女は夏江の結婚式の手伝いで来てもらいましたね。実は私が彼女の優秀さに惚れ込んで、帰りの船でも私の専属としてついてきてもらったんですよ」

「そうだったんですか。……コナン君、どうかした？」

「ううん、べつに」

蘭さんはずっと笑顔でこの偶然の再会を喜んでいただけけれど、毛利探偵はちよつと不機嫌そうで、コナン君にいたってはなぜかうつむいたままこぶしを震わせていて。

どう見ても歓迎ムードじゃない場の雰囲気と、しかも私一人だけ使用人という居心地の悪さもあって、できるだけ早くこの場から立ち去ってしまいたかったんだ。

会話が途切れたのをチャンスと、私は祥二様に告げた。

「祥二様、私はそろそろ鈴木さんの所へ参らないといけませんので」

「そうですか。残念ですが、では、またのちほど」

「はい、ご案内ありがとうございます」

祥二様がそれまで私の肩に置いていた手を外してくれたから、私は一礼して、船の中へと戻っていった。

(いやもう、今更だからなにも言わないけどコレ、日本では立派なセクハラだからねっ！)

その後すぐに厨房へ顔を出すと、使用人数人が夕食の準備の前のミーティングを開いていて。

執事の鈴木さんとそこで顔を合わせたあと、私は食材の下ごしらえ(今回は縁があるな)を指示されて、言われるがままに包丁で野菜を切っていった。

その間に祥二様に内線で呼ばれて飲み物を届けたりもしたけど。

(まあ、会話もしたけどたいした話じゃなかったり)

やがてマンガでの被害者の死亡推定時刻である午後8時が近づいてきた頃には、夕食の支度が最高潮で、私もだんだん気持ちが悪くなり落ちて着なくなっていくたんだ。

時刻を気にしつつ、作業にきりがついたので7時45分、行動するとしたら最後のチャンスだ。

私は思い切って、近くにいた使用人に声をかけた。

「すみません、ちょっとお手洗いに行ってきます」

「はい、迷わないでね」

「気を付けます」

こうして厨房を飛び出した私は、教えられた見取り図を頭に思い浮かべながら、旦那様の部屋へと早足で歩いていった。

厨房から旦那様の部屋までは5分もかからない。

もしも廊下に犯人がいたら、包丁を持つてるか、あるいは床の血痕を掃除してるかだ。

なにも考えずに叫べばいい。

そう、行動をシミュレーションしながら現場へ行くと、たぶんまだ8時まで10分以上あったはずなのに、すでにそこには誰もいなくて、ただ廊下に一輪の花が落ちていたんだ。

え？　ここにこの花があるってことは、すでに犯行が終わって証拠隠滅も済ませた後だったってこと？

だって、確かマンガでは亡くなってから1時間もたっていないときに死亡推定時刻が割り出せたから、誤差は10分くらいしかなかったはずで……!!

そうだよ！　原作で死んだのが8時だったからといって、この世界で必ずしも同じ時刻に同じことが起こるとは限らないじゃない！

それに死亡推定時刻はあくまで、“亡くなった”あと経過した時間からの逆算で、刺されたあとに自力でドアを閉めた旦那様がその後数十分にわたって生きてた可能性はあるんだ。

だから今回の場合、犯行が行われたのは8時よりもずっと前の可能性があつて、必ずしも死亡推定時刻＝犯行時刻にはならないんだ！

ということとは、今この瞬間、旦那様はまだ生きてるかもしれない。

私はドアに近づいて、ノックをして声をかけた。

「旦那様、どうかなさいましたか？」

廊下を歩いていたらうめき声が聞こえたことにしよう。

そう思つて私は声をかけたあと、ノブを回してみる。

鍵がかかつてることを確認して、私はすぐに執事の鈴木さんを呼びに食堂まで行った。

「鈴木さん、ちよつとすみません」

「どうされました？」

「あの、さつき旦那様のお部屋の前を通ったら、なんだか様子がおかしくて。声をおかけしたんですけど、鍵がかかって」

私の声はそれほど大きくはなかったのだけれど、ちようど食堂で夏江様と話をしていたコナン君たちには聞こえていたみたいだった。

「愛夏姉ちゃん、様子がおかしいって、どうしたの？」

「なんか、うめき声のようなものが聞こえた気がします。私、ちよつと気になって。もしかしたら気分でも悪くて倒れてるんじゃないかって」

「それが本当なら一大事です。すぐに鍵を持っていきましよう」

「はい、お願いします」

鈴木さんのあとについて廊下を歩いていく。

うしろからは毛利家3人と夏江様もついてきていた。

それと、食堂に向かおうとしていた籾本家の人たちも、私たちのただならない様子を見て周囲に集まり始めていたんだ。

そんな中、声をかけながら鈴木さんがカギを開けて、ドアを開けた。

そこには、すでに事切れていることがはっきり判る、旦那様の刺殺体があったんだ。

「遺体の状況からみて、死後10分程度、ただ、床の血はすでに固まり始めているところから見て、刺されてからは20分程度経過していると思われます」

「それじゃあ、高久喜さんが聞いたうめき声というのは」

「ええ、おそらく亡くなる直前、最期のうめきだったのでしよう」

私は廊下の、直接遺体が見えないあたりに立っていて、倒れそうになる身体をなぜか祥二様に支えられていた。

人の刺殺体を見るのは初めてじゃないけど（アイドル密室殺人事件参照）、こんなの何回見たからといって慣れるものじゃない。

いつもいつも、マンガでコナンが死体発見の時にひどく驚いた表情で描かれてたのがすごくよく判った気がするよ。

（連載の中盤頃から「そろそろ死体にも慣れたでしよ、驚きすぎだよ」なんて思ってたごめんさい。こんなの慣れんわ）

原作よりも発見が早くて、流れた血の固まり具合と死亡時刻の差が判ったことで、密室の謎もすぐに毛利探偵が説くことができた。

ともあれ、私のうめき声を聞いたという証言と、実際の死亡時刻に差がなくてよかったよ。

ここで状況が食い違ってたら、真つ先に疑われるのは私ってことになってただろう。

原作同様、真つ先に疑われたのは、胸の花を廊下に落としていた武様（夏江様の夫）だった。

動機もあつた武様はそれでも無実を主張していたけれど、その場で一族の人たちに取り押さえられて倉庫へと閉じ込められてしまった。

ただ、その後の言い争いで、ほかの家族たちにも動機があつたことが判ってきて。

旦那様の遺言で、遺産のすべてが夏江様に行くことが判つた家族たちの間に、新たな火種が生まれたことが誰の目にも明らかだった。

このあと原作では、夏江様がデツキに出て蘭さんとコナン君と話しているときに、竜男様（夏江様の義兄）が犯人に殺されるという第二の事件が起きる。

竜男様が犯人に殺されたのは、犯人が凶器を捨てるところを見てしまったからなのだけ。

もしかしたらこの時、竜男様は莫大な遺産の相続人である夏江様のあとをつけていて、独りになったところで海に突き落とそうとでもしていたのかもしれない。

この時の夏江様の精神状態なら、たとえ海に身を投げたとしても、自殺として処理されたかもしれないのだから。

……怖い、怖すぎるよ名探偵コナン。

そういえば今まで私が直接遭遇してきた事件は、社長令嬢誘拐事件とアイドル密室殺人事件の二つしかなかった。

本当の殺人事件に遭遇するのは初めてだったんだ。

「愛夏さん、大丈夫ですか？」

私が考え込んでいる間も、祥二様はずっとそばにいて、私を支え続けてくれたらしい。

当事者の方がずっとシヨックなはずなのに、私は祥二様に余計な心配をかけてしまっていたんだ。

「すみません、もう大丈夫です」

「その大丈夫はあてになりませんね。今夜はもう部屋に帰った方がいいですよ」

「……はい、そうします」

祥二様は私が部屋に入るまで送ってくれて、戸締りに気を付けるように声をかけたあと、鍵の音を確認してから歩き去ったのが足音で判った。

祥二様には明日もう一度謝ってお礼を言おう。

このお話、連続殺人事件の二人目の被害者は竜男様だ。

事件はもう一つ起こるけれど、これについては犯人の自作自演だからあまり考えなくてもいい。

竜男様は、私の想像が正しければ、夏江様の命を狙っていた時に逆に犯人に殺されてしまう。

たとえ助けてもその後夏江様の命が危なくなるならあえて助ける

必要はない気がするけれど、でも竜男様の遺体を抱いて泣き崩れていた妻の秋江様の姿を思い出すと、簡単に見捨てることはできないと思えてくる。

でも、私が竜男様を助けるためには、やっぱり旦那様のとときと同じく、目撃者になるしかないんだ。

凶器を捨てた時か、竜男様に殴り掛かった瞬間に、悲鳴を上げるしかない。

だからもしそれで竜男様が助かったとしても、代わりに私が殴り殺されることになるかもしれないし。

タイミングが悪くて犯行後に現場に到着したりしたらやっぱり私が犯人にされるかもしれない。

――心が折れていた。

蘭さん、あなたすごいよ。

私と同じ状況にいて、それでも夏江様を気遣って、励ましてあげられる。

ぎすぎすした一族の人たちに明るく話しかけて、ケガをした一郎様をやさしく手当てしてあげて。

あなただって、私より多少は経験豊かかもしれないけれど、そんなに殺人事件に慣れてる訳じゃないのに。

私は蘭さんとは違う。

私には蘭さんのような勇気も、自信もない、45歳になった今でも内気で小心者だ。

私は犯人が一郎様だと知っている。

だからもし、私が犯人を知っていることに一郎様が気づいたら、私は殺されるかもしれない。

これ以上行動したら、私が何かに気付いていることを、犯人に悟ら

れてしまうかもしれない。

例えば、あの時私が旦那様の部屋へ行った『本当の理由』に気付いたら、一郎様は私を殺しに来るかもしれないんだ。

だっておそらくコナン君は気づいているはずだから。

私はあの時「トイレに行く」といつて厨房を出た。

船内のトイレはいくつもあるから、もちろん一番厨房に近いトイレは旦那様の部屋とはかけ離れている。

そして、旦那様の部屋は通路の行き止まりで、たとえ私が道に迷ってあのフロアに迷い込んだとしても、部屋のドアの前まで行くのは不自然なんだ。

私のアリバイはほぼ完璧だから、今のところ誰も指摘しないでいてくれるけれど。

疑おうと思えば疑えるほどの不自然な行動をとっていた私のことを疑う人がいるかもしれない。

それはもしかしたら一郎様で、たとえ本当の理由には気づかなかつたとしても、「もしかしたら犯行を見られたかもしれない」と思って私を殺しに来るかもしれないんだ。

恐怖の原因は経験と想像だ。

経験については、例えば自分の心や体が傷ついた時、同じ傷をもう二度と受けたくないと思ってしまう。

でもそれはあくまで経験した範囲での恐怖でしかない。

経験からくる恐怖には限りがあるけれど……想像による恐怖には際限がない。

私は、想像からくる恐怖にとらわれて、もう動くことすらできない。

ベッドの上で、小さく膝を抱えながら恐怖と戦っているうちに、いつの間にか日付が変わっていた。

4月24日(日)

急にどたばたと部屋の外が騒がしくなつて。

荒々しいノックのあと、外にいる人がけつこう大きな声で叫んだから、私はびくつと身体を震わせた。

「愛夏さん、起きていますか?」

「愛夏姉ちゃん! そこにいる!?!」

祥二様とコナン君の声だった。

私はのろのろと立ち上がったあと、ドアの前まで歩いて行って、二度ノックをしながら外に向かつて声をかけた。

「はい、私はここにいます。起きてます」

「よかった。今、こちらは私、籾本祥二とコナン君だけです。愛夏さん、ドアを開けていただけますか?」

「愛夏姉ちゃん、祥二さんが言ってるのはほんとだよ。安心して」
「はい、判りました」

さつき部屋に帰るとき、祥二様は私に、容易にドアの鍵を開けないように言い聞かせていった。

だから私を信用させるため、利害関係がない二人できたのだろう。私がドアを開けると、言われたとおり外には祥二様とコナン君の二人だけがいた。

そして、次の瞬間、私は祥二様に抱きしめられていた。

「愛夏さん、無事でよかった」

「……祥二様?」

「今さつき、竜男さんが殺されたんです。まさか愛夏さんも思つたら気が気ではありませんでした」

「……私は大丈夫です。心配していただきありがとうございます。ごさいます」

私が祥二様から離れる仕草を見ると、祥二様はすぐに腕を放してくれた。

「二人は恋人同士？」

と、下の方から声が聞こえて。

思わず顔を動かすと、無邪気な声とは裏腹に、けっこう真剣な目でコナン君が私を見つめていた。

私はすぐに目をそらしてしまった。

(いやだって、コナン君の真剣な上目遣いとか、ほぼ心臓直撃なんですけど!?)

「違いますよコナン君。私は海外生活が長いものでね、つい動作が大げさになってしまっんです。まあ、愛夏さんを気に入っているのは確かですが」

「愛夏姉ちゃんも？」

「はい、祥二様はすぐくよくよしてくださいますから。恋人ではないですが、尊敬できるいい方だと思います」

「……そう」

大人同士の社交辞令的サービス発言、果たしてコナン君に判るのだろうか？

この辺りは高校生の工藤新一でも難しいかもしれないな。

こういうノリはきつと、社会人になれば嫌でも判ると思う。

今回は違うけど、恋愛に臆病な大人たちが、相手の反応を探るのに飲み会なんかでよく使う手だったりするから。

「部屋に戻ってだいぶ落ち着いたみたいですね」

「いいえ、実はさつきまでは膝を抱えて震えてました。落ち着いたのは今です。祥二様とコナン君のおかげですね」

「それならよかった。……先ほども言いましたが、竜男さんが殺されました。独りでいては危険なので今は全員で食堂に集まっているところなんです。使用人の皆さんも、常に二人一組で行動するようにしています」

「判りました。私も行きます」

確かにそうだ、独りで部屋にいたら、たとえ鍵をかけてたつて恐怖で固まってしまう。

それだったらみんな一緒にいて、少しでも気を紛らわせていた方がいい。

食堂と厨房の分かれ道で、私が厨房へ行こうとすると、祥二様に引き留められた。

「愛夏さんはこちらで。私の専属ですから」

「え？ でも、示しがつかないんじゃないか」

「もともと勤務時間でもないですし、かまいませんよ。それに、私が愛夏さんと一緒にいたいんです」

「それでしたら、判りました」

そうして私と祥二様、そしてコナン君が食堂に入ると、蘭さんが立ち上がって笑顔を見せた。

「よかった、愛夏ちゃん、無事で」

「ありがとうございます。私は大丈夫です」

「愛夏さんはこちらへ」

「あ、ありがとうございます」

スマートな仕草で祥二様が引いてくれた椅子に腰かけると、隣に祥

二様が、そして反対側の隣にはなぜかコナン君が座っていて！

……緊張するからできれば離れててくれるとありがたいんですけどっ！

それともコナン君は、私の不自然な行動をやっぱり疑ってたりするんだらうか。

「コナン君、こっちにいらっしやい」

「やだ。ぼく愛夏姉ちゃんの隣がいい」

「ほら、愛夏ちゃんに迷惑だから」

「迷惑じゃないよ。ね、愛夏姉ちゃん？」

いや、けっこう迷惑です。

でも社会人たるもの、そんなことを本人の前で言える訳がない訳で。

って、もしかしてコナン君、いつの間にか私の操縦方法を会得し始めてる……？

沈黙は肯定とばかり、コナン君が胸をそらす。

「ぼく、迷惑なんかかけないよ」

「んもう。ごめんね、愛夏ちゃん」

「……いえ、大丈夫です」

謝りながら蘭さんが自分の席に戻ると、今度は祥二様がコナン君に話しかけていた。

「もしかして君は、私のライバルなのかな？　かわいいナイト君」

いやいや、違うから、コナン君はただ私を疑ってるだけだし。

まあ、こういう緊張する場所にいたら、少しでも場を和ませたいっていう祥二様の気持ちは判るから、水を差すようなことは言わないけど。

「ぼくはおじさんが愛夏姉ちゃんに抱き着かないように見張ってるだけだよ」

「ほう、君はあれが気に入らなかつたんだね。でも、私も君に愛夏さんを渡すつもりはないよ」

「セクハラはだめだよ。今度やったらぼく、訴えるからね」

「やれやれ、頼もしいナイト様だ。どうやら私は、彼がいる限りうかつな行動はできないらしい」

そういうながら祥二様は、両手を広げて私に笑いかけてくる。

ほんと、祥二様は優しい人だ。

例えば私が肉体年齢16歳じゃなくて、なおかつ祥二様に借金がなかつたら（↑コレ重要）、本気で交際を考えたかもしれない。

「祥二あんた、この使用人と結婚する気かい？」

会話を聞いていたのだろう、隣のテーブルから声をかけてきたのは、祥二様の姉の麻理子様だった。

「嫌だなあ、姉さん。私と愛夏さんはまだ出会ったばかりで交際もしていませんよ」

「やめときなそんな若い娘。どうせ財産目当てに決まってるよ」

「愛夏さんはそんな人じゃありませんよ。それに、財産は夏江に相続されると決まってるようなものじゃないですか」

「そんなのわかんないだろ。とにかく使用人の娘なんかには手を出さずんじやないよ。あんたも、どうせ籬本家の財産が目当てでこの船に乗つたんだろ？」

……なんだかなあ。

「まあ、お金が目当てなのは間違いないかもしれないです」

「やっぱりね。そういう女だと思つたよあたしや」

「愛夏さん？」

「この船に乗ったら、バイト代を上乗せするって言われました。2万円
の誘惑に勝てませんでした。すみません」

「……は？」

そう、麻理子様が絶句した次の瞬間、とつぜん祥二様が大きな声で
笑い出したんだ。

「はははは、さすがは愛夏さんだ！ 姉さんを絶句させるとは、私が見
込んだだけのことはある」

「……恐縮です」

まあ、今の私にとっては、籀本家の財産なんかよりも目の前の2万
円なんだよね。

でもさすがに懲りたけど。

2万円の代償が殺人事件じゃ、割に合わないってことがよく判つた
わ。

ひとしきり笑って和んだあと、祥二様は私に、それまでのいきさつ
を話してくれた。

原作の通り、竜男様が撲殺されて、その犯人が倉庫から逃げ出した
武様らしいこと。

それを確認してからすぐにコナン君が、全員が一か所に集まって私
を呼びに行った方がいいと言ってくれたこと。

その言葉を受けて祥二様とコナン君が迎えに来てくれたこと。

今回の事件、とうぜんのことながら私にはアリバイがない。

私を疑っているコナン君は、人を集めると言いながら、本当は私の
様子を確かめたかったのかもしれない。

私がちやんと部屋にいるかないか、あるいは、私の様子に不自然

な点はないか。

今のところ私に何も言っていないのは、今回に限っては私の言動を不自然だと思わなかったのだろう。

朝までの時間は長かった。

誰かが時折ポツリポツリと話し出して、それに誰かが言葉を返して。

事件に関することもあるし、犯人に関することも、そしてそれが言い争いになることもあった。

話の矛先が変わったのは、コナン君が「武さんが閉じ込められた部屋は外から誰かが開けない限り開かない」と言った時だ。

私はこの言葉によって、犯人の一郎様がトイレでの自作自演を考えたのだと判る。

この、誰もが疑われた状況の中で、少しでも自分への疑いを晴らすうとしたのだろう。

一郎様がトイレに行つて、しばらく経つたその時、ふっと船内の明かりが消えた。

私はその場を動かずに、使用人の誰かが明かりをつけるのを待っていたけれど、やがて一郎様の叫び声が聞こえた時、隣の祥二様が立ち上がって食堂を出ていこうとしたのが判った。

「愛夏さんはここから動かないで」

「はい」

「コナン君も」

「とつくにいませんよ」

「なんと。……ともかく愛夏さんは動かないで」

「はい、大丈夫です」

そうこうしているうちに部屋の明かりがついて。

一郎様の名前を呼ぶ、麻理子様と北郎様の悲痛な声が食堂にも響い

てきていた。

長かった夜が明けてすぐに、執事の鈴木さんの案内で、毛利探偵たち3人が船内に潜伏した武様を探しに行った。

ご一家は食堂で待機、私たち使用人はぜったいに一人にならないようにと言い渡されて、厨房で食事の支度。

それ以外の時間はすべて、食堂で全員が集まって、ただひたすら待つだけの時間となる。

この時間、コナン君が手掛かりを集めて、推理がまとまれば解決はもうすぐだ。

正直言つて早く終わつてほしい。

早くおうちに帰りたい。

「あの、籟本家の皆さん、至急秋江さんの部屋に集まってほしいって、お父さんが」

そう言ったのはずっと食堂にいなかった蘭さんだ。

やっと、やっと名探偵の推理ショーが始まる。

「愛夏さん」

「祥二様、私は部外者ですから」

「……そうですね。では、ここで待つててください」

それからどのくらいの時間が経つたのだろう。

船がようやく港に着いた時、私は食堂のテーブルに突っ伏して眠っていたところを祥二様に起こされていた。

「愛夏さん、もしかしたら少し熱があるかもしれませんね」

あー、私、身体だけは丈夫なつもりだったんだけどな。
さすがに殺人事件と徹夜が重なれば身体もダウンするか。
あと、泊りがけだった仕事の疲れも残ってるのかもしれない。

もういいや、帰ってさっさと寝よう。

今回の仕事だけで一月分の目標以上に稼いだから、今月はもう仕事しなくてもいいし。

心行くまで惰眠をむさぼってやるんだ！

「愛夏さん、よかったらうちの者に家まで送らせましょう」

「いえ、少し眠いだけですから。それにだんだん目も覚めてきました」

「疲れが出たんでしょうね。本当に一人で帰れるんですか？」

「もし毛利さんたちがよければ一緒に帰ります」

「そういえば同じ中学だと言っていましたね。判りました。気をつけて帰ってください」

「祥二様、このたびは本当にお世話になりました」

「いいえ、私の方こそ、面倒なことに巻き込んで申し訳ありませんでした」

そう、挨拶を終えたあと、荷物をとって船から降りたところで祥二様とは別れて。

あたりを見回すと、駆けつけた警察官と毛利探偵が話しているのが視界に入ってきた。

……そっか、殺人事件だったんだっけ。

とうぜん警察に届けなきゃだし、関係者一同事情聴取必須だよな。

ま、私はただの従業員だし、なにかあれば連絡先は蘭さんが知ってるから、呼び止められないうちに帰ろう。

そうして港の駅から電車を乗り継いで、どうにか家に帰ったはいいけれど。

その日の夜、私は38度を超える高熱に苦しめられることになった。

FILE・7 着信履歴は放置したい　く月いちぷ
レゼント脅迫事件く

4月25日（月）

この日、私が深い眠りから目覚めたのは、家の呼び鈴が何度か鳴らされたのが原因だった。

一瞬「なんでお母さん出てくれないんだ？」と思って、次の瞬間に「そういえば今はいないんだっけ」ってなことに気付いて思わず泣きそうになる。

きつとこれからもずつと、こんなことを何度となく繰り返していくことになるんだろうな。

なんとか重い身体を起こして、部屋を出て台所脇のインターフォンを手に取ると、聞こえてきたのは阿笠博士の声だった。

「はい」

『愛夏君、阿笠じゃが、部屋にいるのかね？』

「はい、すみません寝てました」

『いるのならいいんじゃない。電話が通じんのてな、ちよつと来てみただけなんじゃよ。起こしてすまなかつたの』

「いえ」

この時はまだ寝ぼけていて、満足な受け答えもできなかつたんだけど。

やがてだんだん目が覚めてきて、阿笠さんが私を心配してわざわざ足を運んでくれたんだってことに思い至った。

あとでちゃんと謝りに行こう。

それよりケータイの着信の方が問題だった。

昨日、疲れて帰ってきた私は、ケータイをカバンの中から充電器に戻すのを忘れていて。

さいわい電池は切れておらず、深い眠りについてた私は、カバンの

中から響く目覚ましの音にも着信音にも全く気付かなかったんだろう、けど。

なんと朝から数件、蘭さんと阿笠さんとなぜか工藤新一からの着信が履歴に残ってたんだ！

……蘭さんは、まだいい。

折り返し電話をかけて、謝って、用件を聞くのは自分でもなんとかできると思う。

でも……なんで工藤新一から電話がかかってくるんだ!?

工藤新一に折り返し電話をかけるなんて高度なミッション、この内気な私にクリアできる訳ないじゃないか!!

身体が重いのは、たぶん昨日からの熱がまだちゃんと下がってないからなんだろう。

パソコンの画面で時刻を確認すれば午後1時過ぎで。

阿笠さんに謝りに行くにしても、まずはお風呂に入って身支度をしなきゃならないよね。

そう思ってお風呂にお湯を溜め始め、その待ち時間を使ってとりあえずまずは蘭さんに電話を掛けた。

『はい、愛夏ちゃん?』

「そうです。すみません電話に出られなくて」

『ううん、気にしないで。さっき阿笠博士にも電話をもらって、ずいぶん疲れてる様子だったって聞いているから、無理しないで』

「心配かけてごめんなさい。それで、なにか用事だったの?」

『うん。ちよつと警察の人に頼まれただけなの。事件のことだね、いちおう愛夏ちゃんが豪蔵さんが生きてることを最後に確認した人になるから、調書を取りたいみたいで。今日か明日にでも警視庁に出頭してほしいんだって』

警視庁? 今回の事件、あの観光島はいちおう都内になるから警視

庁の管轄になる、ってことなのかな？

まあ、船がついた港も都内だから、いずれにしても警視庁で間違いないのか。

「判った。今日はちよつと都合が悪いから、明日にでも行くことにする」

『うん、それで大丈夫だと思う。じゃあ、目暮警部の連絡先を言うね』

そうして警察の署内の番号らしきものを教えてもらってメモを取る。

明日の午前中にでも電話して予定を合わせて出頭しよう。

『じゃ、そろそろ予鈴が鳴るから』

「うん、忙しいところありがとう」

『ううん、それじゃまたね』

蘭さん、学校で電話してたのか。

確かに今日は平日の月曜日だけど。

昨日の今日で普通に登校できるとか、彼女はほんと化け物なんじゃないだろうか??

お風呂がいつぱいになるまでもう少し時間があつたので、熱を測つてみたところ38度6分。

こんなに高熱になるのも40過ぎてからはなかったから、ほんと久しぶりの感覚だ。

(年寄りには風邪ひかない、っていうし?)

若い頃、朝熱があつてでもどうしても出勤しなければいけないときは、朝風呂に浸かってムリヤリ熱を下げてたんだよね。

そんなことを思い出しつつ、お風呂で「熱よ下がれー」と祈りながら身体を温めたあと、再び測るとどうにか37度8分にまで戻すことができていた。

(コレ、よい子はマネしないように。 確實にお医者様に怒られます)

まあ、平熱とはいいがたいけど、さつきよりはマシになったから、身支度をして阿笠さんのお宅を訪ねたところ。

笑顔で寝起きのときを謝ったり旗本島のお土産を渡したりふつうに受け答えもできてたと思うんだけど、やっぱり阿笠さんには熱があるのがバレてしまって、問答無用で車に乗せられて近くの総合病院まで連れていかれてしまいました。

「愛夏君、あまり無茶をするでない。 愛夏君が無理をすれば、周りは心配するんじゃないぞ?」

「はい、すみませんでした」

「帰りも迎えに来るからの、必ず電話しなさい。 判ったな」

「はい、ありがとうございます」

阿笠さんが連れてきてくれたのは米花総合病院で、受付後診察の順番を待ちながら、そういえば原作の次の話は何だったんだろうかと考えていて。

確か籬本家の事件から1か月後に夏江さんから毛利探偵のところの手紙が来るのがオープンングで、そのあとたくさんのおもちやを抱えた依頼主が事務所を訪ねてくるのが事件の発端だったと思う。

と、そこまで考えたところで、私は不意に思い出したんだ!

その事件の依頼主が勤めている職場が、確か米花総合病院じゃなかったか……?」

その時、視界の隅に毛利探偵と蘭さん、コナン君とあと一人の男性が連れ立って奥に入っていくのが見えて。

私は、さきほどせっかく下がった熱が再び返すのを感じていた。

熱の方は、診察後に点滴（地味に初体験だったりする）を受けたらすぐに下がってくれて。

とくに何か病気という訳ではなくて、お医者様が言うには疲れが出たのだろうという話だ。

まあ、この1週間は船で移動する以外は休みなく働いていて、しかも初めての殺人事件で著しく消耗したのは間違いのないからね。

肉体的疲労もだけど、たぶんそれより精神的疲労の方が蓄積しての発熱だったんだろうと思う。

歩いて帰れない距離ではなかったけれど、阿笠さんにまた怒られそうな気配がビンビンだったから、おとなしく言われた通りに電話をして迎えに来てもらった。

帰宅したらちゃんと布団で寝るようにと念を押されて、すでに熱は下がってたのだけど、私は言いつけどおりパジャマに着替えて布団に入る。

そうして何もできない状況に追い込まれると、私の目の前にはまたあのエベレスト並みの高度なミッションが浮かんできて。

この世界に来る前の私なら、「もし用事があるならまたかけてくるだろ」つてな感じで放置がデフォだったのだけど、相手があの工藤新一だと思うと、「放置したら見限られるかも」つてな焦りがむくむくと湧き上がってきて絶望一直線だったりするんだよ！

にしても、なんで工藤新一が私に電話をかけてきたりなんかしたんだ？

家の掃除はまだしたばかりで、きれい好きな人ならそろそろホコリが気になりそうな日数ではあるけれど、今までほかの部屋をあれだけホコリまみれにしてきた工藤新一にそれは当てはまりそうにない。

となると、私には彼が電話をかけてきた理由に、思い当たるものがまったくないんだ。

もしかしたら私が来る前にいた『高久喜愛夏』が原作前の工藤新一と関わった可能性もあるけれど、それにしてはこの部屋のパソコン

やケータイに工藤新一の影がかけらもないのは不自然だと思う。

“高久喜愛夏”は孤独で内気でうしろ向きな女の子だった。

彼女の周りには私が来るまでの1年、彼女に関わろうとする人間は一人もいなかった。

そんな人間がたった一人でもいたら、彼女はあんな手記だけを残して消えたりしなかっただろう。

もしも工藤新一が“高久喜愛夏”に関わる人間だったとしても、彼女の孤独を払拭できるほどの深い関わりじゃなかったのは間違いないんだ。

もちろん、そういう状況を作ったのは彼女で、周りの人はぜんぜん悪くないよ。

私が今、今日みたいに阿笠さんに心配してもらえているのは、私が（不器用ながらも）阿笠さんと大人の関係を築こうと努力しているからだ。

そういう努力なしにただ心配してもらえるなんてことは、それこそ両親や家族でなければありえないんだから。

考えているうちに私は眠ってしまったみたいで。

目が覚めたのは、今度こそ充電器に戻したケータイが着信を告げた時だった。

ケータイの液晶画面に映っていたのは、私自身が以前登録した“工藤新一”という名前で

一気に目が覚めた!!

「はい」

『あ、高久喜愛夏か?』

「はい」

『今、電話平気か?』

「はい」

はいしか言っていないぞ自分！

そう自分で自分にツツコミを入れつつ、なんとか落ち着こうと最大限の平常心を努力する。

『あの、さ、コナンのヤツに聞いたんだけど。……殺人事件に巻き込まれた、って』

あ、はい、そういう設定ってヤツですね、判ってます。

で？ 事件の話でも聞きたいんでしょうか。

それならぜひコナン君に聞いてください。

私はあなたからの電話だってだけで心臓バクバクで今にも意識を失いそうなんです。

『オメー、大丈夫だったか？』

……………。

……………。

……心配、してくれてるように聞こえます先生。

「あ、はい」

ぜんぜん大丈夫じゃなかったですがなにか？

ああ、なにをどう考えていいのか自分でもまるつきり判りませんよ先生！

『ほんとか？ 阿笠博士に聞いたぜ、オメーが熱出したって。ああいうのは慣れが必要なんだから、あんま無理すんなよ』

いや、正直慣れるほど殺人事件に遭遇したくなんかないです。

ていうか、用事ってそれですか？

にしてはちよつと時間軸がおかしくないですか？

阿笠博士が私の発熱を知ったのは、最初に工藤新一からの着信があったあとだ。

だとしたら本来の用事はこれじゃなくて、別にあつたってことで。

「……それで、用事は」

思い切つてこちらから尋ねると、電話の向こうでなにやらごそごそと音がする。

受話器になにかが当たってるのか？

気にはなつたけれど、音の方はすぐに止んだので意識の外に放り出しました。

『あー、なんだ、つまりその……オメーがセクハラされたって、コナンのヤツに聞いたから』

ん？ もしかしなくてもこれって祥二様の件だよな。

工藤新一ってセクハラに関心があるような描写、原作にあつたっけ？

それとも犯罪はたとえどんな小さなことでも見逃さないとか、探偵のサガみたいなものでもあつたりするのか??

「たいしたことじゃないですけど——」

『ヤローに抱き着かれたって聞いたぞ!? たとえ雇い主だからって、仕事の中にそんなことされたらふつう許せねえだろ!』

「あ、えーと、……あのくらいなら給料のうちかなと」

『バーロー!! オメーはもつと危機感を持て! あのくらいって……そういうのは放置してるとすぐにエスカレートすんだぞ! もつとひどいことされたらどうすんだバーロー!!』

あ、はい、おっしゃる通りです。

失言でした認めます今の発言はある種の女性団体に知られたらたぶん袋叩きにいます許してください。

でも知りませんでした、工藤新一が女性団体の回し者だったなんて。

『あ……悪イ、怒鳴ったりして』

「……いえ。私の方こそすみませんでした」

『だからつまり、その……オレが言いたいのは、オメーはもつと自分を大切にすべきだ、ってことで』

「はい。ありがとうございます」

心配、してくれたんだな、コナン君。

私が事件にショックを受けたことも、世間知らずの16歳の女の子が40代のオヤジにセクハラされたことも。

……でも、それを工藤新一の口を借りて言わせるのはちよつと違ふよ。

まあ、小学1年生を装った語彙じゃ、これをうまく伝えるのは難しかったのかもしれないけど。

私が原作を知らない「高久喜愛夏」だったら勘違いしてたかもしれないよ。

もしかしたら、工藤新一が自分に気があるんじゃないか、って。

「コナン君に心配させちゃったんですね。彼にもよろしく伝えてください」

私がそう言うと、またさっきの「そごそ」という音が聞こえて。

『あー、まあ、次からは気をつけろよ』

「はい」

『それとき、話は違うんだけど』

ふと調子が変わった工藤新一の声。

って、まだ何かあるのか!?

こっちはそろそろ心臓が限界なんですけど!!

『29日の祝日、空いてるか?』

……デートの誘い、じゃないことは確かだ。

だって、工藤新一は誰にも会えない存在なんだし。

だいたい工藤新一が私なんかにそういう感情を抱くとか、妄想以外のなにものでもないって。

ともあれ私に仕事を探す以外の用事なんてものはそもそもない。

「はい」

『実はオレのところにガーデンパーティーの招待状が届いてるんだけど、今は事件から手が離せなくて行けねえんだ。バイト代は出すら、オレの代わりに行ってくれねえか?』

ガーデンパーティー?

そんなの原作にあったっけ?

思わず返事をしかけたんだけど、私にはそもそも着ていく服がないってことに気が付いた。

Gパン以外の服といえば、仕事で着ていたスーツくらいで。

「あの、それって、着ていく服はスーツでも大丈夫ですか?」

『スーツって……。男なら問題ねえだろうけど。……ほら、なんかねーのか? その、ス……。スカートとか』

「すみません。せっかくのお話なんですけど、今回は——」

『あー判った! それも用意してやるから、必要経費で! あとで届けるから予定空けとけ!』

「でもさすがにそれは」

『当日は蘭たちも一緒に行く予定だから、あとであいつに連絡させる。じゃ、よろしくな!』

そう、一方的な別れの声のあと、通話が切れる音が聞こえてきて。

ケータイを戻した瞬間、私は大きく息をついてしまった。

煙草がないので水を飲みつつなんとか気持ちを落ち着けて。

さつきまでの工藤新一との会話を思い出せるだけ思い出したんだけど(実はけっこう意識が飛んでてぜんぶは思い出せなかった)、肝心の仕事の内容がよく判らないってことに気が付きました。

私は蘭さんたちとガーデンパーティーに行つて、けつきよく何をすればいいんだ?

おそらく工藤新一の名代で行くってことだろうから、パーティーの様子をレポートにして提出でもすればいいんだらうか??

まあ、私は元の仕事が事務職だったから、報告書みたいな文書作成とかはそう苦手じゃないからいいんだけど。

この世界の著名人をほとんど知らないから、パーティー参加者の名前や経歴なんかはパーティーのあとで蘭さんに確認すればいいかな。(毛利蘭って何気に芸能人とか有名人に詳しいし)

とりあえず、もう一度工藤新一と話をして、仕事内容をちゃんと確認するという、さらなるミッション追加が決定したってことで。

—— この世界、思ってた以上に過酷です。

FILE. 8 お土産行脚と事情聴取 ㄱ美術館
オーナー殺人事件ㄱ

4月26日(火)

昨日早めに布団に入った私は、熱の影響もなくなりたいへんすがすがしい朝を迎えることができました。

さすが16歳、45歳の時とはやっぱ基礎体力が違うよね。

年齢による衰えもちろんあったんだろうけど、あの疲れの原因の一つは常習していた煙草にあったんだろうと思う。

今でも無性に吸いたくなるし、この世界で20歳になったらやっぱり吸い始めるような気はするけれど、今は日本の法律に素直に従っておくことにします。

ケータイの目覚ましで起きた私は、昨日できなかった旅行の荷物の整理と洗濯を始めた。

その間にお風呂を沸かして入って、残しておいた最後の下着を身に着ける。

今日は天気もよさそうだし、9時になったら警察に電話して、事情聴取の予定を組んだあとできれば旅行のお土産を配りに行きたいよね。

ま、谷家のお手伝いの佐伯さんに買ったのはお菓子だから早い方がいいけど、ユキさんとヨーさんは期限のないものにしたので、さほどあわてる必要はなかったりする。

(とくにヨーさんはいつ会えるか判らないからね。二人ともすごく忙しいそうだし)

そんなこんなでいつものシャツとGパンに着替えて朝食の恒例力◯リーメ◯トを食していると、ケータイに阿笠さんから電話がかかってきたんだ。

『やあ、愛夏君。体調はどうだね?』

「昨日はお世話になりました。おかげさまで熱も下がって、ほぼいつも通りに復活しました」

『それはなによりじゃ。ところで、今朝少し時間があるかね?』

「はい。大丈夫ですが」

『悪いんじゃないが、一度早いうちに我が家へ来てほしいんじゃない。それほど時間は取らせんでの』

「判りました。じゃあ、8時ごろに伺いますね」

『待つとるぞ』

そんな会話を交わして、その後身支度して阿笠さんの家を訪ねると、阿笠さんはリビングでいつものコーヒーを入れてくれた。

「実は昨日、新一君に頼まれてのオ。愛夏君はまた新一君に仕事を依頼されたそうじゃの」

「はい。詳しい話は聞いてないんですが、29日に工藤さんが招待されたガーデンパーティーに出席してほしいそうです。たぶん工藤さんの名代で、ということだと思っんですが」

「わしが聞いた話だと、毛利君親子とコナン君も出席するそうじゃ。まあ、仕事というより、愛夏君に純粹にパーティーを楽しんでほしいということじゃと思うぞ」

……そうなのか?

だったら別に、私が行く必要はないよね。

(むしろできればそういうめんどくさいところへは近づきたくないつてのが本音だったりする)

「それじゃ、今からでもお断りしてもいいでしょうか?」

「ちよ、ちよっと待ちなさい愛夏君! すでに一度引き受けたんじゃないろう? 一度引き受けた仕事をキャンセルするのはさすがにどうかと思うぞ?」

「……はい、そうですね。すみません」

そんなどうでもいいような仕事ならキャンセルしてもどうつてことないような気がするけど。

社会人としては、阿笠さんが言うことも間違つてはいない。

こういうのは私の信用にも関わることだから、今回は言われた通りちゃんと仕事として受けるべきなのだろう。

……どちらかといえば、私の工藤新一に対する信用度の方が少し下がったけど。

(ま、そんなの関係なく工藤新一のことは大好きだけどさつ)

「パーティーの開始は午後3時半からで、場所は毛利君たちが知っているから、待ち合わせをして一緒に行けばいいじゃろう。当日着ていく洋服代は必要経費で新一君が負担するそうじゃ。そのほかに報酬と交通費として1万円。帰りの時間までは判らんが、まあ夜になることはないじゃろう」

「あ、あの、さすがに1万円はもらいすぎだと思えます。交通費だつてそんなにかかると思えませんし」

「この1万円の中には当日履いていく靴の代金が入ってるそうじゃ。洋服はサイズさえ判れば誰でも買えるが、さすがに靴までは用意できんからな」

「え？ 服ってレンタルなんじゃ……」

「通販で買ってプレゼントすると言つておつたよ。という訳で、わしが今日愛夏君を呼んだのは、服のサイズを選んでもらうためなんじやよ」

そう言つて阿笠さんはテーブルに、婦人服のサイズ表(通販雑誌かネットの画面あたりからコピー印刷したらしい)を何枚かこちらに向けて広げてくれた。

……意味がわからん。

なんでそうまでして、工藤新一は私をそのパーティーとやらに出席させたいんだ？

だって通販で服を用意するとか、手間も時間もお金もかなりかかるでしょ。

(たぶん工藤新一のことだから、1枚の金額が3ケタの生産国さえ怪しい量産品なんかじゃないだろうし)

もしかして、水面下では原作にない何かが進行していて、私が知らない黒づくめ男たちの情報とかそういうのがあったりするの？

自宅の掃除のときもそうだったけれど、工藤新一が黒づくめ対策に私の存在を使いたいというのなら、私はそれでもかまわないんだ。

そもそも私がこの世界に来たことでさえ疑問ばかりで、世界が私にどんな役割を期待しているのかも判らないのだから、もしも毛利蘭が被るはずの被害を最低限に抑えるための盾として使い捨てられるのだとしても、それはそれで納得できる。

もつと言えば、私が知っている名探偵コナンの原作と、この世界とが本間に同じものかどうかさえ判らないし。

(だいたい原作より事件の頻度が高いってのも相違点としてあるしね)

私はなにかの原因でずれてしまったこの世界を原作世界に戻すために、神様のな何かから呼ばれた可能性だって否定できないんだ。

だから、この世界の主人公である工藤新一の思うとおりに流されるのは、私の在り方としては間違っていないって思うんだけど。

「あの、せめて、買っていたいただいた洋服は使用后、相応の値段で引き取らせてもらえませんか？」

阿笠博士は私の言葉に、ちょっと苦笑いのような表情を見せて。

「まあ、愛夏君ならそう言うじやろうとは思ったがのオ。新一君がど

う答えるかは保証できんぞ。それでもいいなら話してみるが」

博士もある程度私の性格は判っていたようで、消極的ながら私の提案を受け入れてくれた。

阿笠さんが渡してくれたサイズ表から自分の服のサイズを選んで印をつけたあと、家に帰った私は警視庁に電話をした。

電話に出たのはなんと高木刑事で、どうやら私の事情聴取は彼が担当してくれるらしい。

ちよつと驚いたけど、高木刑事はコナンのマンガではほとんど脇役筆頭級の大活躍をしてる人だからね。

(今の時点ではまだ名もない一刑事だったはずだけど)

じつさい事件のことを訊かれてもたいした話はできないだろうけど、ちよつとだけ警察へ行くのが楽しみになってきたところだったりします。

警視庁へ出向くのは午後4時ごろに決まったので、それまでは当初の予定通りお土産行脚に向かうことにした。

まずは谷さんのお屋敷に電話をして、佐伯さんの予定を確認する。弥生町行きのバスの時間を確認したあとはユキさんとヨーさんにメールして。

学生のユキさんは平日は大学があるので、土日の予定を確認してからまたメールするという返事をもたらったあと、バスに乗り込んで無事谷さんのお屋敷を訪問することができました。

お屋敷にはほかのお手伝いさんたちもそろっていたから、私はお土産を渡しつつ、少しだけ佐伯さんと話をした。

「このたびは、お仕事を紹介してくださってありがとうございます。高久喜さんは大丈夫
「いいえ、事件のことを聞いて心配していたの。高久喜さんは大丈夫

だった？」

「ええ、……まあ」

「その様子だと大変だったみたいね。話せるなら話してほしいけど、思い出したくないこともあるでしょうから、あえて聞かないでおくわ」

愚痴なら聞くけど興味本位では訊かないと言ってくれる。

ほんと、この人と知り合いになれたことは、私にとっては一つの財産だ。

「でも、お仕事を紹介していただいたことはほんとに感謝してるんです。またなにかあつたらぜひ声をかけてください」

「そうね、私も心掛けておくわ。籟本さんも高久喜さんの仕事自体には満足されたから、私も自信もって紹介できるしね」

「そう言っていただけで本当にありがたいです。次があればその時も全力で頑張りますから」

まあ、この先も無職が続けば、って条件はあるけどね。

今後無事に就職できたら佐伯さんにはきちんと報告しよう。

佐伯さんとも個人的な連絡先を交換して、谷家を辞したあと。

バスで米花デパートまで行った私は、あまりくだけすぎているいらないサングラス（今の若者の言葉では違う言い方をするんだろうけど思い出せません）を一足と、ムダ毛処理に必要な品をいくつかそろえた。

工藤新一が用意する服がどんなものかは判らないけど、そのあたりは最低限準備しておかないとヤバいからね。

（電話の内容はあんまり覚えてないけど、うっすらとスカートと言われたような記憶があるし）

ほかにも下着やらなにやらをいろいろと見繕って、一度帰って洗濯物を取り込んだあと、再びバスに乗って警視庁まで辿り着いた。

午後4時、対応してくれた高木刑事は、さほど広くない会議室のようなどころへ私を案内してくれた。

「高久喜愛夏さんですね。今回、簗本家の臨時雇いの家政婦として、結婚式からの帰りのチャーター船にご家族と一緒に乗ったという事で間違いありませんか？」

「はい、間違いありません」

「では、その時の高久喜さんの行動を、調書として記録させていただきますので、ご協力をよろしくお願いします」

実は私は若い頃、交通事故の被害者として、警察で調書を作ったことがあったりする。

まあ、事故自体はたいしたことなくて、ケガもほとんどしなかったから実質被害は乗ってた自転車がゆがんだくらいだったんだけど、それでも病院の診断書をとったり調書を作ったりはちやんとしたんだよね。

そんなことを思い出しながら、高木刑事に促されるまま、事件当日の自分の行動を言葉にしていく。

とりあえず事件そのものは解決していて、私が新たに疑われるようなことはなかったけれど、被害者のうめき声を聞きたいきさつを話すときにはやっぱり少し緊張した。

話はほとんど終えて、それを高木刑事がきちんとした文章に起こしていたとき、ふいに会議室の扉が外からノックされたんだ。

「ちよつとすみません」

私に断って高木刑事が部屋を出ていく。

外での話はほとんど聞こえなかったのだけど、一つだけやけにはつきりと「米花美術館」という単語が耳に飛び込んできて。

あれ？　もしかして今日が「美術館オーナー殺人事件」の日だった

りしたのか!?

確か昨日も「月いちプレゼント脅迫事件」が起きてたはずだったから、連日休みなく事件に巻き込まれてることになるぞ毛利一家!

「高久喜さんすみません。ちよつと別件で出なければならなくなつたので、続きはまた後日でもよろしいですか?」

「はい、私はかまいませんけど」

「できるだけ早くご連絡します。連絡先だけ教えてください。あとで必ずご連絡しますから」

私は自分のケータイの番号を高木刑事に教えて、迎えに来てくれた女性警察官に案内されて警視庁をあとにした。

帰宅した私は、スリープ状態のノートパソコンを起動して、テキスト画面を開いて。

今まで遭遇した事件を時系列順に打ち込んでいった。

今日は4月26日で、私がトリップしてきたのが4月8日だったから、まだ19日しか経過してないのに「ジェットコースター殺人事件」も含めるとすでに9つもの事件が起こってる。

この頻度は明らかに異常だ。

しかも、事件そのものは単行本の掲載順で起きてるから、順番以外の日付や曜日なんかはけっこうめちやくちやなんだ。

(一部びったり合ってる時もあるんだけどね、それがなおさら怖かったり)

蘭さんやコナン君は普段学校に通ってるのに、なぜか平日に泊りがけで旅行に行ったりしてるのはいったい何なんだろうか?

原作順で行けば、次に起こるのは「新幹線大爆破事件」だ。

毛利探偵が遠方の結婚式に出席するため、蘭さんとコナン君を連れ

て乗った新幹線で、黒づくめの男たちが起こす事件。もちろん平日に結婚式をする人がぜんぜんいない訳じゃないけれど。

まだまだ考えはぜんぜんまとまらないけれど。

私はテキストファイルに、この先で起こる事件を夜までずっと書き続けていった。

私のケータイに蘭さんからの電話が入ったのは、夜も10時になってからだった。

『愛夏ちゃん、遅くにごめんね。今大丈夫？』

「うん、大丈夫だけど」

『んもう、新一ったら、こんな夜遅くに電話してくるんだから。そのせいで愛夏ちゃんにも迷惑かけちゃってほんとにごめん』

「なにか緊急の用事だったの？」

『実は明日、京都で結婚式に出席する予定があつてね、帰りも一泊してくるし丸二日連絡が取れそうにないから。愛夏ちゃんも聞いてるでしょ？ 29日のこと』

ああ、そうですか、すでに明日「新幹線大爆破事件」が起こるのは決定事項つてことですか。

明日が水曜で明後日が木曜だつてことは突つ込まない方がいいんだらうな。

「本当に私なんかが一緒に行つていいの？」

『あたりまえじゃない。それで、当日はタクシーを呼ぶ予定だから、3時くらいまでにうちの事務所に来てくれる？』

その蘭さんのタクシーという単語で、私は初めて蘭さんたちと出

会ったあの日のことを思い出していた。

地獄か天国か、思わずその場で昇天しそうになった、後部座席に三人川の字で座ったあの時間のことを。

「それはいいんだけど」

「わかってる。今回は愛夏ちゃんが一番奥で、その隣に私が座るように誘導する。でも失敗したらごめんね。コナン君、ほんとに愛夏ちゃんのことを好きみたいだから」

私のことが好きというか、名探偵が行動不審な私を疑ってるっていうのが真相なんだけどね。

もしかしたら今回のガーデンパーティーも、工藤新一扮する江戸川コナンが、私の行動を見極めるのが目的だったりするのかもしれない。

電話のあと、私は再び、テキストファイルに目を落としたけれど、けっきょく私の疑問が解消されることはなかった。

FILE・9 女たちは人知れず戦う2 〈新幹線
大爆破事件〉

4月27日(水)

この日、いつものように朝風呂に入った私は、下着だけを身に着けていぎムダ毛との聖戦に臨んだ。

まずは軽くすね毛から。

昨日買ってきた脱毛ワックスをはがして、ペたりとすねに張り付けて、一気に引っ張る。

若返ったことでより頑固になった毛根は、はがしたあとジワリと毛穴からの出血を強いてきて。

毛根様よりよほど根性がない私は、早くも涙目で白旗を上げそうになっていった。

しかし、この作業も彼氏がいた20代の頃以来だから、かれこれ15年ぶりくらいかな？

最近では毛根様もすっかり年老いて、細くて短いのがぽつぽつとしか生えてなかったから、生理と並んでこればかりは若返って損したと思うことだったりする。

(まあそれまでであった倦怠感とか老眼とかがなくなったから、若返って得したことの方が多いのは間違いないけど)

ひざ下が一通り終われば次はわきの下へ。

鏡を見ながら狙いを定めて、容赦なく一気に！

そういえば、痛みの単位で一鼻毛(鼻毛を引き抜くときの痛みを一つの単位)つてのがあったけど、わきの下の脱毛は何鼻毛くらいになるんだろうか？

というか、そういうくだらないことでも考えてないとやってられない

い痛みですよコレ。

最後に腕にかかり、ようやくすべてを終えた頃には、すでに1時間以上が経過していました。

……世の中には永遠の若さをもてはやす風潮があるけれど、私はこんなのがこれから先何十年も続くのはとうぜん耐えられない、と思つてしまう人種のようなです。

ああ、早く45歳に戻りたい……。

(順調にいけば29年後だけ)

その後、にじんだ血と肌に残った薬剤を洗い流すため、再びお風呂でシャワーを浴びて。

お風呂のあと、オ○ナインを薄くのばして傷ついた毛穴に塗り付ける。

ひとまずこれで一安心、少し休憩する間にメールをチェックしていると、ユキさんからけつこう長文のメールが届いていたんだ。

内容はなんと、明日の午後にヨーさんと会うため、一緒にテレビ局へ行こうというお誘いだった。

(なんか、どんどん私の日常とかけ離れていくんですけど……)

—— 黒のパンツスーツとGパンの究極の選択、選ぶとしたらどっちですか??

そうだ、もしかして明日の午後なら、工藤新一からの衣装が届いてるかもしれない。

(まさか仕事の当日に衣装を届けるとかないだろうし)

でも、指示された仕事より先に私用で着るとなったら、これはもう仕事前に買い取るしかないよね。

今月の稼ぎが20万円、うち10万円は生活費として、残りの10

万円くらいは覚悟しておこう。

足りなかつたらまた来月稼げばいいさつ。

……って、安定志向の私はそう軽く思えないのが難点だけだ。

ユキさんに返事を返して、メールのやり取りで待ち合わせ場所と時間を決めて。

場所は先日ヨーさんと3人でお茶をした喫茶店の同じ席で、時間は午後1時になった。

どうやらその日、ヨーさんが出演する予定の歌番組の収録があるらしくて、私たちにも観覧席（ひな壇に座って拍手とかするヤツ）を用意してくれるとか!?

（それじゃますます変な服装では行けないよ。黒のスーツもアウトだわ）

観覧後に楽屋で少し話ができるそうなので、その時にお土産を渡せばいいとユキさんはアドバイスしてくれた。

もしも今日衣装の連絡がなかったら、明日の午前中はあきらめて買い物するしかないかな、と思っていたところ。

運がいいことに午後になってから阿笠さんから家に来てほしいと電話があつて。

私は10万円を入れた封筒を用意して（籐本家の給料袋から2万円抜いただけだけど）、臨戦態勢で阿笠博士の家に向かったんだ。

「わざわざ来てもらってすまないのオ。実はさつき新一君から洋服が届いたんじゃ。サイズは合うと思うが念のため試着してもらおうと思つての」

「はい、そうじゃないかと思つたので用意してきました」

「……なにをじゃね?」

私は無言のまま、笑顔で用意してきた封筒を差し出す。

阿笠さんも笑顔だったけれど、若干頬がひきつっているように見え

た。

「注文から約一日というこの短時間で用意できたのなら、たぶん阿笠さんの家に直接配達されたんですね。ということは、阿笠さんのクレジットカードから支払ったか、代金引換を利用していると思います。つまり、阿笠さんは服のお値段をご存知ということですよ？」

「ここに10万円用意してきましたので、足りなかったら言ってください。とりあえず試着してみますので、お隣の部屋をお借りしますね」

そう言うてにつこり笑う。

唾然としていた阿笠さんは、ちよつとため息をついてから言った。

「……愛夏君」

「はい？」

「……たくましくなったのオ」

「光栄です」

なにせ私は45歳ですから。

阿笠さんが知ってる15歳までの『高久喜愛夏』とは30年ほど年季が違うんですよ。

用意されていた洋服はTシャツとカーディガンのアンサンブルに、下はロングタイプのスカートだった。

白地に黒と薄い青のラインがランダムに入ったシックな色合いで、身長が高い私にはそれなりに似合っていると思う。

これなら昨日買ったサンダルでもそんなに違和感はないかな？

でも髪型の方はかなり違和感があるから（黒ゴムで一つ縛りだからね、せめて飾りがなしとでしよ）、明日の午前中に警察からの呼び出しがなければ美容院で整えてこよう。

着替えを終えてリビングに顔を出すと、阿笠さんは一目見てにっこり笑ってほめてくれた。

「見違えたのオ愛夏君。まるでモデルさんのようじゃ」

「身長が高いだけです。でも私も気に入りました。ありがとうございます」

「お礼なら新一君に言うんじゃない。察しの通り注文したのはワシじやが、選んだのは新一君なんじゃ」

「そうでしたか。では工藤さんにもよろしくお伝えください」

その後はお金の計算で、観念した阿笠さんは代引きの伝票を見せてくれたから、私は端数まで正確に支払うことができた。

消費税込みで約4万8千円。

けっこう高い買い物ではあるけれど（少なくとも高校生が買う服の値段じゃないし）、でも予算の半分で収まってくれてかなりほっとしたよ。

にしてもこれだけの金額を必要経費って……一度工藤新一の経済観念を叩き直す必要があるような気がする。

（私にはムリだけど）

阿笠さんにはちょっと強引な態度をとってしまったので、お詫びと、なぜそうなったかの理由を話しておいた。

事情を聞いた阿笠さんも苦笑いで許してくれたから、ひとまずこの件でのわだかまりはなくなっただけだと思っていいたいだろう。

帰宅して、確か一つだけ持ってたはずのバレツタ（黒のリボン型）を探しながらテレビを流し見していると。

ニュース速報で新幹線が上下線ともに止まっているとの情報が入り、やがて臨時のニュースで上空からのヘリコプターの映像を交えな

がら、車内（実際は車外）で爆弾が爆発したらしいという情報も入り始めていた。

どうやらコナン君、無事に事件を解決したようですね。

なにより私がいらないところで事件が起こってくれるのが最高にありがたいです。

って、油断ができないところが名探偵コナンの怖いところなんだけど。

ひとまず今日のところは私の周りは平和です。

4月28日（木）

私がここへ来る前の美容院へ行く頻度は、だいたい半年から1年に一度くらいだった。

美容院で最低限縛れる長さまで短く切ってもらって、そのあとは自分が邪魔だと思うまで放っておいたんだよね。

でも、私ぐらいの年齢の人でそこまで美容院へ行かない人はかなりまれだと思う。

というのも、45歳くらいになると多くの場合、白髪が目立つようになってくるからだ。

人によっては3週間も放っておいたら気になり始めるから、月に1回くらいはカットとカラーリングが義務のようになってしまったり。

ではなぜ私がそこまで放っておくことができたかというと……。

これは自慢してもいいと思う。

私の髪、45歳になった今でも、白髪が1本も生えてきてなかったんだ。

ま、自慢できるのは私の努力とか功績じゃなくて、単なる遺伝子な

んだけどね。

母方の祖母がそんな感じで、伯母も84歳で亡くなるまでほぼ真っ黒だったから、ほんとにいい遺伝子を授けてもらえたと思う。

(ちなみに母は数年前に白髪染めをやめてほぼ真っ白だった。隔世遺伝万歳!!)

とはいえ、白髪染めという理由がなくても、最近の40代は落ち着いた茶髪の人が多かったんだけどね。

(いまどき真っ黒に染める人はあまりいないし)

ものぐさな私は、白髪染めが未だ必要ないことを理由に、カラーリングなどという面倒なことから極力逃げていたんだ。

そんな私が木曜日の午前中に美容院へ行ったのは、突き詰めれば単なる暇つぶしだった。

だって……禁煙がつかったんだよ!

ふだん暇さえあれば煙草を吸ってた私、暇ができたらもう煙草のこっぴどく考えられなくなっちゃって。

そのくらいなら美容院にでも行ってた方が多少は気がまぎれたんだ。

個人経営のお店はちよつと敷居が高かったので、選んだのは駅前にある若者向けで明るい雰囲気のところだった。

受付は女性だったけど美容師さんは男性が多いらしい。

指名もなにも初めてなので、そう告げると、そのときまたまたま空いていた人が担当についてくれた。

「今日はどうする?」

「長さはギリギリ縛れるくらいで、あと少し量を減らしてください」

「短いのも似合うと思うけどね」

「ちよつと癖があるんで、できれば縛っておきたいんですよ。なにしろものぐさなもので」

「まあ、確かに髪質的に短いと朝とかちよつと大変か。了解。こつちの席へどうぞ」

「あ、あと、白髪があったら教えてください」

いつものセリフを言った私に、担当のお兄さんは明るく笑った。でもあながち笑い事でもないんだよ。

私、最近じゃぜんぜん見つけられなかったのに、高校生の頃はけっこう何本も見つけてたんだから。

(そのキミー・老眼のせいとか言わないっ！)

最初に余分な長さの髪をざっくりと切ったあと(なぜかお兄さんは髪のをうしろに持っていった。なにかに使うのか?)、シャンプー台で整髪料なんかを落として。

そのあとうしろで束ねて見せながら長さを確認して、ハサミを入れていく。

こういう単調な作業を見るのってけっこう好きなんだよね。

(次のバイト、肉体労働系じゃなかったら、工場のベルトコンベアの作業とかでもいいな)

途中、やつぱり何本か白髪は見つかったので、丁寧に根本あたりから切ってくれちゃいました。

カットが終わったあとは再びシャンプー台で切れた髪の毛なんかを洗い流して。

お兄さんが戻ってくるまでの間に、専門らしいお姉さんが頭皮マッサージと肩もみをしてくれました。

って、16歳の私はまだ肩も凝ってないから、もんだ時のあの気持ちよさは味わえなかったけど。

(いや凝らない方がよほどいいのは間違いないから)

それが終わったあと、戻ってきたお兄さんは私の髪をブローして、きれいに伸ばして整えてくれたんだ。

「どうだろ。ぎりぎり結べると思うけど」

「はい、ありがとうございます」

「これからお出かけ？」

「はい。午後から友人とテレビ番組の収録を見に行くんですよ」

「へえ、すごいね。楽しんできて」

「はい」

「カードに名刺挟んどくからね。よかつたら次も指名してね」

「はい」

次に来るのは早ければ半年後かな？

私は覚えてるかもしれないけど、お兄さんはきつと私のことは忘れてるよ。

カット代の4千円を払ってカードを受け取ったあと美容院を出る。

髪はボブに近い感じで整えてもらって、服は工藤新一から買い取ったおしゃれ着、足元は先日買ったサンダルだ。

このいでたちで待ち合わせの喫茶店へと向かう。

やっぱり、服装が変わると気持ちが明るくなるのはいくつになっても変わらないよね。

おしゃれってすごくめんどくさいけど、こういうのがあるから女性はそのめんどくささも乗り越えようって思うんだろうな。

(私はめんどくささに負けるタイプだけどね)

ユキさんとの待ち合わせは午後1時だったけど、実は今の時刻は昼食にもまだ早い頃だったりする。

待ち合わせの喫茶店に着いた私は、ちょうどよく空いていた奥の4人掛けへと陣取って、始まったばかりのランチメニューの中から昼食を注文して。

って別にほかの店で食べてからこっちへ来てもよかつただけ

ね。

どうせだったら一つの店で居座ってた方が時間を気にしないでいいから、つてのがものぐさ女子の思考だったりするんですよ。

食事が届くまでと、食後の待ち時間、私はずっとケータイで就職情報をあさっていた。

今まで私が見たのはネットと就職雑誌だったけど、すべて16歳の年齢を条件に探していて。

でも、16歳ができる仕事はものすごく限られてたから、私はある決意をしたんだ。

—— 悪いことだったのは判ってるし、バレたら信用がなくなるってのもよく判ってる。

でももう一度だけ、私は年齢詐称する決心を固めたんだ。

できるだけ接客がない肉体労働。

その条件でずっとケータイをいじり続けていた私は、ある一つの仕事を見つけた。

(自転車便か。配達業だから接客はあるけど、でも荷物の受け渡しするときだけなら何とかかなるか?)

年齢制限は18歳以上で、未成年は親の承諾が必要だから、詐称するなら20歳以上。

自転車は持ち込み要のところが多いけど、実は「高久喜愛夏」がもともと持ってたママチャリがあるから、ある程度稼げるまでの間はそれを使えばいい。

ヘルメットは最初に買わなきゃだけど、数日働けば元は取れるかな。

なにより私の最大の長所、体格と運動神経が活かせるし、私は見た目もしゃべりも16歳には見られないから、公的書類の提示を求めら

れない限り年齢詐称がバレる心配はない

とりあえず、比較的近い場所に事務所があった一つの会社のホームページから、スタッフ募集のフォームに入力して反応を待った。

すると、割とすぐに返事が返ってきて、5月2日月曜日の午前10時に面接をするから、履歴書と自転車とヘルメット代を持ってくるようにとメールに書いてあったんだ。

(よし、第一関門突破！ あとは面接で何事もなければ……)

おそらくサイトにあるような、月25万以上稼げるようなおいしい仕事じゃないと思うけど。

納税の対象になるほどたくさん稼がなければ、会社にも公的機関にもバレることなく続けていけるかもしれない。

ユキさんは、待ち合わせの時間よりも10分ほど早くやってきて、すでに私が席に座ってるのを見えずいぶん新鮮な驚きがあったようだった。

「いつもは時間に遅れる子とばかり待ち合わせしてるから、待たせるのって実は初体験かも」

「ぜんぜん待たされてないですから。でも、そうなんですか？」

「うん。ほんと、愛夏ちゃんて真面目だよねー」

真面目というか、社会人にとって時間前行動はあたりまえだったりするんだけど。

すっかり忘れてたけど学生の頃ってかなり緩かったんだなあ。

「お土産、今渡してもいいですか？」

「うん、ありがとう。でも開けるのはヨーちゃんと一緒にするね。ほ

ら、楽しみは共有したいから」

「そんなたいしたものじゃないですから。期待しないでください」

喫茶店ではお茶を一杯だけ飲んで、すぐに電車でテレビ局まで向かった。

「愛夏ちゃんって、すらっとしてるからそういう服が似合うよね。その服どこで買ったの？」

「あ、これは自分で買ったんじゃないので、どこで買ったのかは判らないんですけど」

「へえ、彼氏からのプレゼントかあ。いいなあ」

「いませんよ、彼氏なんて」

「うそ！ ぜったい愛夏ちゃんて彼氏持ちだと思ってた。だってこないだのヨーちゃんのとときの発言とか」

そういえば、ヨーさんに「自分も女だから気持ちは判る」的なことを言った覚えがあるな。

あれはさすがに16歳っぽくはなかったか。

「失恋の経験があるんですよ。だから今は独りです」

「いいなあ。私なんか、恋愛の経験もないのに。4歳年下の愛夏ちゃんにすら抜かれてるとか……」

「年は関係ないですよ。ユキさんはまだこれからいい出会いがあるんだと思います。だから焦らなくても大丈夫です」

「まあね、焦ってはいないけどね。今はやることいっぱいあるし、正直言っただけ今はあんまり恋愛とかしてる暇ないって思ってるんだ」

まあ、いわゆる対外的なポーズってやつなんだろうな。

彼氏いらないとか、言う相手によっては引かれそうな内容だし。

ユキさんはそういう、対人関係のバランス感覚っていうのが優れた人なんだろう。

テレビ局では係りの人に案内されて一度控室に入って。

そこで軽く説明を受けたあと、スタジオのひな壇に座って、どうやら若手芸人らしい人たちにいわゆる前説というもので笑わせてもらった。

トイレ休憩のあとは本番で、私は自分の役目通りに拍手をしたり歓声を上げたり。

やがてヨーさんが歌う順番になったときには、周りの子たちもけっこう興奮状態で、私も巻き込まれるように笑顔で大きな拍手を送った。

こういうの、元の世界ではぜんぜん経験したことなかったけど。

やってみると思ってた以上に楽しかったんだ。

きつと私、いろいろ面倒くさがって、楽しいと思える経験をずいぶん逃してきたんだろうな。

(たぶんここにいる私たち以外の人たちは、はがきを送って抽選とか、面倒な手順を踏んでるんだろうし)

これもぜんぶユキさんとヨーさんのおかげなんだって、改めてこの二人と友達になれた幸運に感謝したんだ。

ひとつ驚いたのが、ヨーさんの出番が終わったあと、注目のアーティストのコーナーでレックスの木村達也が出たこと。

……これ、もしかしなくても「カラオケボックス殺人事件」の被害者だよ。

まあ、今日はコナンもないし、さすがにここまで違う状況で前倒しで事件が起きることはないだろうと思うけど。

レックスが歌って(例の上着を脱ぐ振り付けで!)ステージから引っ込むまでの間、私は少しだけ緊張で手のひらに汗を握ってしまった。

収録が終わったあとは、マネージャーの山岸さんが私たちを迎えに

来てくれて。

ヨーさんの楽屋に足を踏み入れると、ヨーさんはすでにステージ衣装を脱いでいて、ふつうのラフな格好になっていた。

「愛夏ちゃん、今日は来てくれてありがとう。楽しんでくれた？」

「はい。私の方こそ、招待してくれてありがとうございました。こういうの初めてだったんですけど、すごく楽しかったです」

「それはよかった。ユキちゃんもありがとう、忙しいのに愛夏ちゃんを連れてきてくれて」

「ううん、私も楽しかったから。ヨーちゃんの歌も久しぶりに聞けたしね」

そう、ひとしきり会話に花を咲かせたあと。

私はヨーさんにもお土産の包みを渡した。

「先日仕事で行った旗本島のお土産です。たいしたものじゃないんですけど、よかったら使ってください」

「ありがとう愛夏ちゃん。さっそく開けてもいい？」

「あ、私も開ける！ ヨーちゃんと一緒に開けようと思って楽しみにしてたんだ」

包みから出てきたのは、私が旗本島のお土産屋さんで見つけた、おそろいの一輪挿しだった。

「一輪挿しね。変わった形だけど」

「はい。花瓶にしてもいいですし、インテリアとしてただ置いておくんでもいいと思います」

「ありがとう。さっそく部屋に飾るわね」

「私も。愛夏ちゃんありがとう。大切にするね」

そうして、わずかな間だったけれど、再び私は初友との時間を過ご

すことができて。

帰ってきて大きなため息をついてしまったのは――

やっぱり名探偵コナンの世界で、いつの間にか事件への警戒心で緊張してしまってたからなんだろうな。

FILE・10 大人と子供とお姉さんと く大都
会暗号マップ事件く

4月29日（金）

ヨーさんたちと楽しいひと時を過ごした翌日金曜日の朝。

今日は午後からガーデンパーティーへ行く予定だから、午前中はのんびりしようと思つてただけだ。

朝、警視庁の高木刑事からの電話があつたので（祝日なのに）、私は再び警視庁へと赴いていた。

「すみません何度もお呼びしてしまつて」

「いえ」

「ではさつそくなんです、先日の続きをさせてもらいますね」

調書の内容はほぼ話してあつたから、高木刑事も文章のほとんどをすでに完成させていて。

私は高木刑事が読み上げてくれた内容にうなずいて、サインをするだけでさほど時間がかかることはなかつた。

「ありがとうございます。ご協力に感謝します」

「いえ」

「そういえば、高久喜さんは船で毛利さんたちとも一緒だったんですよ」

「はい」

「今、隣の部屋で調書を作つてるんですけど。……あの人たち、今週だけで3回も事件に巻き込まれてるんですよ。いったいなんなんでしょうかね」

「……はあ」

3回って、豪華客船連続殺人事件と、美術館オーナー殺人事件と、新幹線大爆破事件ってことか？

あと1回、月いちプレゼント脅迫事件が抜けてるけどね。

(これはたぶん、依頼人の希望で事件にはしなかったのだろう) っていうか、そういう情報を私なんかには漏らしていいのか高木刑事。

「高久喜さんも気を付けてくださいね。では、今日はありがとうございました」

「はい、お疲れさまでした」

近づかないで済むならとつくにそうしてるんだけど。

あの3人、午後3時の待ち合わせまでに調書の作成終わるんだろうか？

ガーデンパーティーでは軽食も出るだろうからと、昼はカ○リ○メ○ト○だけで済ませて。

昨日のうちにスプレーしておいた一張羅と、どうにか探し出したバレッタで身支度を整える。

私の髪、ちよつと癖があるから、いつものムース(ハードタイプ)で固めると緩いパーマをかけたみたいになるんだよね。

(まあ、45歳の頃よりは癖も少ないから、思い通りになるかは判らないけど)

でも、今日はただ固めてうしろで縛る形にして、縛ったところにバレッタを通してなんとか格好をつけた。

バッグは仕事用の大きい(A4書類が入るスグレモノ)しかないから、ちよつとパーティーには合わないかもだけどしようがないよね。

だいたい待ち合わせの5分前に着くように調整して歩いていくと、事務所のブラインドはすべて降りていて。

階段で2階に上がってドアをノックしたら、こちらもおしゃれ仕様

の蘭さんがドアを開けてくれた。

「愛夏ちゃんいらっしやい。お父さん、コナン君、愛夏ちゃんが来たわよ」

「今日はよろしくお願いします。お邪魔します」

中に招き入れられて見ると、毛利探偵は事務机で新聞を広げていて、コナン君はソファに座って私を見上げていた。

「へえ、なかなかいいじゃねえか。着るものでけっこう変わるもんだな」

「その服すてきね。すごく似合ってる。あ、髪も切ったのね」

「ありがとう。蘭さんも相変わらずかわいいよ」

「ありがとう。コナン君、愛夏ちゃん見違いちゃったね」

コナン君は私を見上げたままで、なぜか固まっていた。

……？

この服を用意したのは君じゃなかったか？

思ってたイメージと違ったから、驚いてるとか？

「……うん。愛夏姉ちゃん、すごくきれい」

「……ありがとう」

……なんなんだこの会話は。

ともあれ、事情聴取は無事終わったようだなによりだよ。

全員そろったので蘭さんがタクシーを呼んでくれて。

乗る順番は以前蘭さんが言った通りで、コナン君も今回はなぜか駄々をこねることもなく、蘭さんを間に挟んでくれた。

「ところで、今日のガーデンパーティーって、誰が主催してるの？」

「え？ 新一、愛夏ちゃんに言っただけだったの？ 東都大で建築学科の教授をしている、森谷帝二って建築家よ。いろいろ賞もとってるすごい偉い先生なんだって」

森谷帝二？ そんな名前の人、マンガに出てたっけ？

私、原作はかなり読み込んだから、名前を聞けばだいたい判るはずなんだけど。

そうこうしているうちにタクシーは会場に到着したらしく、コナン君が飛び出して行って、そのあとを蘭さんが追いかけていった。

「わあ」

「すごい」

「まさに、イギリス17世紀、スチュアート朝時代の建物だな」

「へえ、お父さん建築に詳しいんだ」

うん、確かにすごい。

広い空間をぜいたくに使って、正面の建物も、噴水も、植えた木ですらすべて左右対称で。

……左右対称、シンメトリー……？

建築家の森谷帝二……？

あつ！

思い出したよ！

これ、原作じゃなくて映画だ！

ええつと、確かタイトルは……わからん。

原作はものすごく読んだけど、映画はテレビで放映した時くらいしか見なかったから。

でも、夢小説知識によれば確か、爆弾事件が起きる話だった気がする。

森谷帝二が、自分が設計した建物のうち、シンメトリーじゃないも

のを壊していくような。

「愛夏ちゃん、どうしたの?」

声をかけられて顔を上げると、いつの間にか毛利家3人は先に進んでいて、その向こうに口ひげで長身の男の人が立っていた。

「あ、はい、すぐ行きます」

私が近寄ると、男性は私にもこやかに微笑みかけてくれた。

「初めまして、森谷帝二です」

「初めまして。工藤新一の名代で参りました、高久喜愛夏と申します。今日はお招きありがとうございますと、工藤から言付かっています」
「工藤新一君は来られないそうですね。工藤君にお会いできないのは残念ですが、高久喜さんにお会いできてうれしく思っていますよ。どうか楽しんでいってください」

「ありがとうございます」

緊張のあまりちよつと固い挨拶になってしまいました。

ガーデンパーティーだから、もうちよつとくだけた挨拶でもよかったですな。

などと反省しつつほかの人たちのあとについていくと、パーティー自体は裏庭で開催されるようで、すでに多くの人たちが集まっていた。

しかし、これが映画だと判つたのはよかつたけど、このあたりのストーリーにまったく覚えがないんだよね。

犯人が森谷帝二で、爆弾で自分が作った建物を壊して行って、それに蘭が巻き込まれて。

蘭が爆弾を解体して、最後に残った二本の線のどっちを切るかで運

命が分かれる、みたいなクライマックスシーンなら覚えてるんだけど。

たぶん森谷帝二が工藤新一をパーティーに招待したってことは、最初から工藤新一を巻き込むというか、挑戦しようとしたんじゃないかって推測はできるか。

「愛夏姉ちゃん」

「はい？」

コナン君でした。

下からの上目遣いに心臓が暴れ出しそうです。

「ねえ、愛夏姉ちゃん。その服、新一兄ちゃんからのプレゼントなんだよね」

いや、プレゼントはされてません。

でもそれ、すでに君だって知ってるんじゃないのか？

ということはこの次に来る質問が本当に聞きたいことだってことで……。

「え？… そうなの!？」

でも、コナン君から次の言葉が発せられるより前に、森谷帝二と話していた蘭さんがとつぜんこちらを振り返って言ったんだ。

「いいえ、違いますよ。お金は自分で出しましたから」

「でもそれじゃあ、選んだのは新一だってことよね？」

「……はい、そうなります」

なんか、ちよつと空気が怖いです。

蘭さんはこのところ工藤新一とは会えてないんだから、自分が知ら

ないところで別の人の服を選んでたなんて知ったら……！

「でも通販で買ったらしいですから、ちよくせつ渡されたわけじゃないですよ。私が服を持ってないって話を聞いて、今回の仕事用に送ってくれたものですから」

「……そうなんだ」

「はい。あくまで今回の仕事を請け負うために必要な服だったというだけで、プレゼントというのとはかなりニュアンスがかけ離れているんじゃないかと思います」

恨むぞ江戸川コナン。

毛利蘭を怒らせるのって、この名探偵コナンの世界ではぜったいにやっちゃいけないことなんだから！

どうやら蘭さんの怒りも多少静まっただろうタイミングで、それまで独演で周囲を引かせていたらしい森谷帝二が、毛利探偵相手にクイズを出すことになっていて。

小さな紙片を配り始めたから、私もその中から1枚もらって目を落とした。

これ、コナンの映画でその後恒例になっていくダジャレクイズの原型かな？

紙片には3人の男性のプロフィールが書かれていて、この3人に共通する言葉を平仮名5文字で答えればいいらしい。

3人は名前も趣味もバラバラで、一見共通することはないように見えたけど。

生まれた年がそれぞれ1年違いで、元の私よりもだいたい一回り年上だったから、干支はすぐに計算できた。

見るとコナン君が指を折って何かを数えていて。

「昭和31年は申年ですよ。32年が酉年で、33年が戌年です」

「愛夏姉ちゃん？」

「それを計算してたんじゃないんですか？」

「……そこまで判ってるんなら、愛夏姉ちゃんも判ったよね。ねえ、せーので正解を言ってみない？」

「いいですけど」

「じゃあ、せーの！」

「ももたろう」

つて、なんで私一人なんですか!?

う……裏切られた、江戸川コナンに裏切られたよ!!

「愛夏姉ちゃんすごい！ 3人が生まれたエトがサルとトリとイヌで、ぜんぶももたろうの家来だなんて、ぼく子供だからわからなかったよー」

「正解です！ でもよく判りましたね。たいしたものですよ」

「いえ、私は……」

く……これが江戸川コナンのザ・子供のフリパワー炸裂か！

これだから子供は……もう子供なんか信じない、ぜつたい信じないぞ!!

「それじゃあ正解したご褒美に、高久喜さんには特別に私のギャラリーをご案内しましょう。コナン君と蘭さんもご一緒にどうぞ」

「はいー」

いや別に、建築家のギャラリーとか興味ないんですけど。

でもこのパーティーに参加してる以上、そんなこと言っちゃいけないだろうな。

案内されたのは屋敷内の一室で、広い部屋の壁中にたくさんの写真

がかけてあった。

ほぼ建物の写真ばかりだから、これは森谷さんが設計した建物の完成した姿、ってことなのかな。

自由に見ていいとのことだったので、蘭さんのあとについて適当に見流していると、コナン君が一つの写真の前で足を止めた。

「蘭姉ちゃん、これこの前の」

「そうよ、黒川さんのお宅だわ」

黒川さん、か。

いちおう名前だけは覚えておこう。

「ところで、高久喜さんは工藤君とは親しいのですか?」

うしろを歩いてきた森谷さんにとつぜん訊かれて驚いてしまう。

「いえ、私は。親しいのは蘭さんの方です」

言ってしまったからヤバかったかもしれないと思う。

(森谷帝二のターゲットが工藤新一なら、より工藤新一と親しい方が危険だろう)

でも、蘭さんも聞いているのだから、ここで工藤新一と親しいとか大ウソはつけないし。

「私、彼とは幼馴染で、高校も一緒なんです。ただここんところしばらく会ってなくて。……でも、今度の水曜日が新一、いえ、彼の誕生日で、一緒に映画を観る約束をしてるんです!」

「ほお、それは楽しみですな。では、もうプレゼントも買ってあるんですね」

「いえ、それは火曜日……彼、私と同じで赤い色が好きなんです! それに5月は、二人とも赤がラッキーカラーで。だから赤いポロシャツ

プレゼントしようかなーって」

なんだ、この蘭さんの怒涛のセリフは!?

よく知らない人にごここまで個人情報さらすのって、……もしかして蘭さん、私に対抗してるのか？

「え？　これ米花シティビルじゃないですか？　私たち、ここの米花シネマワンで映画を観るんです。3日の夜10時にロビーで待ち合わせて」

もうやめてくれ、ただの対抗意識なら必要ないから！

私、工藤新一とは親しくもなんともないし、プレゼントのことは完全な誤解だし。

だから私に対抗するのはやめなさい!!

森谷帝二にそんなに詳しい情報を与えたら、もうそこを狙ってくれと言ってるようなもんじゃないか!!

心の中で叫びながらも口に出しては一言も言うことができないまま。

再びパーティーに戻ると、毛利探偵はいろんな人に囲まれながら、それまで解決した事件のことを自慢げに話していた。

これ以上目立つ気がなかった私は、隅の方で料理をつまみながら周囲を見回していて。

どうやらこの場にはこの事件にこれ以上関わる人はいないことが判ったので、ときどき蘭さんやコナン君と会話しつつパーティーが終わるのを待っていた。

帰りのタクシーの中、座席順は来た時と同じで、幾分ほっとしていた時。

蘭さんの向こうからコナン君が話しかけてきたんだ。

「ねえ、愛夏姉ちゃん、明日は空いてる？」

明日？ この映画、このあとまだ事件当日以外のエピソードとかあるのか？

「なにかあるんですか？」

「ぼく友達と東都タワーに行こうって約束してるの。だから一緒に来てほしいんだ」

ああ、これってあれか、大都会暗号マップ事件の前フリエピソードだ。
（ていうか、映画進行中でも原作エピソードは進むのか？）

確か東都タワーで子供たちの荷物が入れ違っちゃって、イタリア人が書いた暗号を入手するんだったよな。

っていうか、それ引き受けたら私一人で子供4人を引率するってことで……。

蘭さんも気づいたようで、私が答える前に間に入ってくれた。

「ねえ、コナン君、それ私じゃダメかな？ ほら、愛夏ちゃんいろいろ忙しいし」

「うん、でも、ぼく愛夏姉ちゃんが一緒がいい」

原作ならこのエピソード、毛利蘭が引率するはずなんだよね。

だからここで断ったところで原作がおかしくなるようなことはない訳で。

むしろ私が引き受けた方がいろいろ危ない気がする。

でも、今回のパーティー参加の仕事、工藤新一は1万円の報酬を用意しているはずだ。

私はもらいすぎだと阿笠さんに伝えてあったけれど、洋服代の件もあるから工藤新一はたぶん減額に同意はしないだろう。

なら、もらいすぎた分は子供たちの引率を引き受けることでチャラにした方がいいのかもしれない。

むしろ江戸川コナンが強硬姿勢をとれば、これも仕事として工藤新一が依頼してくる可能性が無きにしても非ずだったりするんだ。

なんかだんだん工藤新一と江戸川コナンが私の宿敵に見えてきたよ。

(いや、そんなの関係なく工藤新一も江戸川コナンも大好きなんだけど)

コナン君のあの目はぜったい何か考えてる。

(今日彼は私に質問する機会を一度逃しているんだ)

私の秘密を探り出すためなら、彼はきつとどんな小さなチャンスでも逃すことはしないだろう。

「……蘭さんが一緒なら」

「え？ 愛夏ちゃん無理しなくてもいいのよ。コナン君のことは私が引き受けたんだし」

「ううん、大丈夫だから。でも、一人は不安だから、申し訳ないけど蘭さんも一緒にいてほしい」

「それはかまわないけど。……判った。私も愛夏ちゃんと話したいことがあるし、明日は一緒にお出かけしよう」

そういえば蘭さんの誤解もちゃんと解かなくちゃならないのか。

これ、もしかしたらけっこう面倒なことになっちゃったかもしれないな。

とりあえず、蘭さんにはこの経緯をきちんと話さないと。

そして、可能な限りコナン君の追及をかわすというのが、明日のミッションになった。

4月30日（土）

自転車便の面接日が明後日に迫ってたから、私は午前中、洗濯を終えたあと、ママチャリの整備をしに近くのお店まで持っていった。

空気を入れて、油もさしてもらって、軽く町内を走ってみる。

うん、45歳の時とは桁違いに運動能力も上がってるな。

（ていうか、45歳の私はそもそも自転車を持ってたかったし）

しばらくぶりに運動するのが楽しかったから、つい足を延ばして東都環状線1周なんてことをやらかしてみた。

いちど戻ってシャワーを浴びたあと、時間を見計らって毛利探偵事務所へ行く。

その日は毛利探偵も特に依頼はなかったようで、暇そうにしながらデスクで新聞を読んでいるところに、やがて子供たちが連れ立ってやってきたんだ。

「こんにちわ」

「おじやまします」

「おじさんコナンの父ちゃんか？」

「ただいま、ランドセルおいてくるね」

にぎやかだ。

ほかのみんなはすでに一度帰ってランドセルは置いてきたようで、荷物もなく手ぶらだ。

この分だと財布もないんだろうな。

まあ、小学一年生にお金を持たせる親がいたらそっちの方が驚きか。

「あ、愛夏お姉さんだ。こんにちわ」

歩美ちゃんが声をかけてくる。

ていうか、よく覚えてたな。

あの幽霊屋敷のときはかなりの暗闇で、顔なんかほとんど判らなかっただろうに。

「こんにちわ、歩美ちゃん」

「あ、お姉さん覚えててくれたんだ」

「吉田歩美ちゃんですよ？ 覚えてますよ。あと、小嶋元太君と円谷光彦君。ちゃんと知ってますよ」

「わっ、なんで知ってたんだ!? おまえかいじんのてさきか!？」

「元太君、そんなわけないじゃないですか。初めまして、円谷光彦です。あの、お姉さんは？」

「初めまして、高久喜愛夏です。今日はよろしくお願いします」

やっぱり、以前幽霊屋敷のときに発見したんだけど、子供相手には敬語キヤラでいた方がいろいろ楽だな。

笑顔スイッチとか自動的に入ってくれるし、子供のペースに引きずられずに済むし。

たぶん昔から私が作ってる『普通の人間モード』が敬語で構成されてたからなんだろう。

相手を子供と思うより、セクハラでパワハラな上司だと思ってた方が、理不尽な行いに対する怒りなんかも表に出さずに済むような気がする。

じつさい、コナン君相手にも敬語で対応するようになってからは、多少話せるようになったからね。

もう、子供も大人もお姉さんも、ぜんぶいっしょくたにこのモードで行くことにしよう！

蘭さんを先導役に、私は後方で監視役をしながら、子供たちを誘導して電車で東都タワーへと向かう。

蘭さんは子供たちの興味の対象が他へ移らないよう、適度に話しか

けて意識を自分に向けている。

ほんと、毛利蘭ていろいろハイスペックだよなあ。

彼女を見てると、自分がいかに45年という時間を無駄遣いしてきたのかよく判る気がするよ。

無事に東都タワーの展望台に辿りついたあと、いったん自由行動をとることになった。

「いい、みんな。6時になったらお姉さんたちのいるこの展望台に戻ってくるのよー!」

「はーい!」

仮面ヤイバーショーか。

そういえば子供の頃、近所の広場にやってきたゴ○ンジャーにサインもらったことがあったなあ。

あの時抱き上げられて撮った写真とか、どこに行ったんだろう？

(つて、少なくとも16歳の女の子の部屋になった今の高久喜家にそんなものがあるわけないか)

「愛夏ちゃん、お疲れさま」

「ううん、蘭さんの方こそ。ほとんど子供たちの相手任せちゃってごめんね」

「いいのいいの。だって子供ってかわいいから。一緒にいると和むんだよね。だからぜんぜん苦にならないよ」

「私はムリだな。どっちかっていうと緊張しちゃう方だから」

「きゃっ!」

突如悲鳴を上げた蘭さんの方を見ると、うしろからコナン君がジューズの缶を蘭さんの頬にあてていた。

「おどろいた？ はい、これ、蘭姉ちゃん分！ 愛夏姉ちゃんのもあるよー」

「あ、ありがとう」

いたよここに、財布持つてる小学一年生が！

ともあれ、コナン君の背丈では蘭さんの顔が限界で、私の顔までジューズの缶を届かせることはできなかつたらしい。

「コナン君は行かないの？ 仮面ヤイバーショー」

「う、うん……」

さすがに工藤新一は楽しめないか。

むしろ私くらいになつちやえば、別の楽しみ方があるんだけど。

「ねえ……、正体って、なに……？」

「え？」

あ、そういえばこういうシーンあったな。

私は一步下がって傍観者に徹する。

「ほら、この前新幹線の中で言ってたでしょ？ 『本当のオレの正体は』って。あのあと、聞いてなかったよね」

「い、いや、その、だから……。ボ、ボクの、正体は……」

とつぜん窓枠の上で立ち上がったコナン君は、腕を前に組んでポーズをつけて。

「ボクの正体は、仮面ヤイバーなのだ!! とおっ!!」

窓枠をジャンプして降りると、そのあとはもう振り返らずに人ごみの中を走って行ってしまった。

……うん、なんか、めちやくちや和んだわ。
今頃コナン君、顔真つ赤なんじゃないかと思うと余計に。

「かわいいね、子供って」

「うん、確かに和んだ」

「愛夏ちゃんも、少しずつ慣れていくといいと思うよ。きっと自然にかわいいと思えるようになるから」

蘭さん、知ってるんだな。

「私」が内気で引きこもりで、約1年間誰にも会わずにいたんだ、ってこと。

まあ、たぶん阿笠博士あたりに聞いたんだと思うけど。

これ以上望むのはぜいたくなんだ、って判ってるけど。

できればそのやさしさ、失踪する前の「高久喜愛夏」に向けてもらいたかったな、とはちよつとだけ思う。

「ねえ、愛夏ちゃん。……新一のことなんだけど」

和んだところで、蘭さんが今日の本当の目的を話し始めた。

私もすぐに臨戦態勢に切り替える。

「うん」

「前に新一の家を掃除してたこともあるし、昨日の服の話とか。……もしかして、新一と定期的に話したり、……会ったりとかしてるの？」

「電話で話したのは、2回だけかな」

「……会ったのは？」

「会ったりはしたことないよ。……私が久しぶりに外に出たのが、4月8日の金曜日で、その日の夕方にちらつと姿を見たくらい。そのときはまだふつうに家にいたんだよね？」

「うん、私が新一とトロピカルランドに行ったのがその次の日だから。でもそれ以降、居所が判らなくなっちゃって」

「家の掃除を頼まれたのはね、阿笠さんを通してだから、工藤さんとは話してないんだ。ただ、掃除の最後の日に、夜になって電話がかかってきてね。ただ、掃除ありがとう、ってだけ。私もどういふ作業をしたのか、軽く話したただけだから、そんなに長時間でもなかったし」
「うん」

「もう1回は、私が蘭さんの学校に電話した日だったかな。昨日の、ガーデンパーティーに出席してもらいたい、って。そのとき私がスーツでもいいかって聞いたら、じゃあ服を用意するって話になって。でも、さすがにそれは困ると思ったから、阿笠さんを通して買ってもらった服を買い取ったの。……うん、高い買い物だった、うん」

私が聞いてくれオーラを出していたからだろう。

蘭さんは律儀に私に訊いてくれた。

「ちなみに、いくらだったの?」

「上下3枚で4万8千円」

「……はあ!」

「ひどいよね。こっちはお金が欲しいから必死でバイトしてるのに、1枚平均1万6千円の服とか。まあ、買い取るって言った手前、私も阿笠さんを通してちゃんと全額払ったけどさ。一歩間違えたら詐欺の一種だよ、あれは」

「……」

「蘭さん、もしも工藤さんと結婚するなら、その前にあの経済観念、どうにかしておいた方がいいと思う。まあ、近所に住んでて顔見知りだって理由はあるのかもしれないけど、他人にちよつとした仕事を頼むのに、その金額を必要経費で払おうとするなんて、やっぱり常識としておかしいよ。もしもこれが会社とかの制服かなんかだったら私も何も言わないけどね。蘭さん、これなんとかしないと、これからぜったい苦労すると思うよ」

話してるうちに私も不満爆発な感じになっちゃって。

余計なことまでいろいろ言った自覚はあるけど、でも後悔はしていなかった。

たぶん誤解は完全に解けたと思うから。

あの服がプレゼントなんて心温まるものじゃなかったことも、私が蘭さんと工藤新一との関係を心から応援してるんだってことも。

「あ、ごめん。なんか話がそれちゃって。……そんな訳だから、私は工藤さんとはたいして話してないし、居所なんかも判らないんだ。私よりのたぶん、阿笠さんの方が多少は知ってると思う」

私がこの引きで想定していた話の流れとしては。

蘭さんは「じゃあ阿笠博士に聞いてみる」ってな感じで納得して晴れやかな笑顔を見せてくれるか、「私と新一が結婚だなんて」と照れた感じで微笑んでくれるか、ってものだったんだけど。

なぜか蘭さんは少しの間顔を伏せて考え込んだりしちゃったんだ。そうなたっちゃうと、私の方から声をかけるなんてこともできなくて。

やがて顔を上げた蘭さんは、私の方を真剣な、でもちよつとだけ切なさそうな表情をして見つめたんだ。

「愛夏ちゃんは、もっといろんな人と話をして、人の気持ちとかも判るようになった方がいいと思う」

毛利蘭の言葉にしてはけっこう辛辣で、私はちよつと驚いてしまった。

「愛夏ちゃん、あんまり自分で自覚してないのかもかもしれないけど、素敵な女の子だと思うよ。だから自分の魅力をもっと自覚してほしい」

あ、一応自覚はあります。

こんな私でも、ささやかながらモテ期というのは存在していたので……20代の頃は。

「私、新一のことが好きなの、あきらめないから。……これからはライバルだと思っていいいかな?」

—— どうしてこうなった!?

そのあと。

元の明るい雰囲気に戻った蘭さんに、私は必死で誤解だと何度も言っただけだ。

蘭さんの返事は「誤解してるのは愛夏ちゃんの方だと思う」で、詳しく聞こうとすれば「ライバルだから教えない」で。

そんな話をしているうちに、ふとコナン君が駆け寄ってくるのが見えただ。

話を聞けば、歩美ちゃんのヤイバー人形がなくなったとのことで、コナン君の案内で私たちも現場のトイレの前まで行った。

「わたしちゃんとトイレの前に人形の入った袋を置いたのよ。でもトイレから……トイレから出たらなくなってる……代わりにこの袋がー」

「そっか。きっと誰かが間違えて持ってっちゃったのよ」「えー」

「少しここで待ってみましょう。たぶん向こうが気づいて戻ってくると思いますよ」

「愛夏お姉さん、ほんとにそう思う?」

「はい、たぶん大丈夫だと思います。安心してください」

歩美ちゃんとそんな会話を交わしている間にも、元太君が残された

袋をひっくり返し始めて。

……まあ、悪人の持ち物だからいいのか？

これがなければイタリア強盗団を一網打尽にできないと思えば、彼らの行動を邪魔するのは間違いないだろうと思うけど。

でも、あの暗号がなければ、子供たちを危険な目にあわせることもない訳で。

……このあたりもけつきよく永遠の葛藤になるのかもしれないな。

この経験がなければ、彼らがこれから先に出遭う危険を回避できるだけのスキルは身につかないかもしれないのだし。

工藤新一が江戸川コナンになった時と同じく、私はスルーしつつ彼らの無事を祈ることしかできないのかもしれない。

ほどなくして袋の持ち主の男の人はちゃんと原作通りに戻ってきて。

袋を交換したあとの帰り道、軽くなにか食べてから帰ろうかと話していた時、再びさっきの男の人がやってきたんだ。

彼は暗号の紙片を探していて、ちよつと強引に歩美ちゃんの袋を探ろうとしたその時。

蘭さんが繰り出した足蹴りにサングラスを飛ばされて、警察に言う脅されて、そそくさとその場を駆け去っていった。

そのあとはまあ、とりたてて何もなく、軽く食事をして帰った訳だけれど。

(もちろん子供たちの食事代は蘭さんと折半しましたよ、ええ)

帰宅したあと、そういえばコナン君は何のアクションも起こしてこなかったな、つてなことにも思い至った。

まさかあの時、彼が私と蘭さんとの会話を盗聴器越しに聞いていた、なんてことはつゆほども思わずに。

5月1日（日）

翌日日曜日。

いよいよ明日が自転車便の面接日だったから、私は今日も自転車で軽く都内を回ってみるつもりだった。

ところが、そろそろ出かけようというとき、阿笠さんから電話がかかってきたんだ。

呼び出されて阿笠さんの家のリビングに落ち着くと、さっそくテーブルに一つの封筒を差し出してきた。

「新一からじゃ。おとといのバイト代だと言っておったよ」

「あ、はい。拝見します」

中身は最初の約束通りの1万円だった。

まあ、そのうち4分の1くらいは昨日の引率で消えてくれたから、交通費と時間当たりの金額を計算すれば、さほど過剰でもない時給になったりする。

「確かに、ありがたくいただきます」

私が受け取ると、阿笠さんはほっとしたように息をついた。

「すみません、間に立たせてしまって」

「いや、いいんじゃない。新一君も今回はよく判ったじやろう。愛夏君がけっしてお金だけで動いていていいのではないとな」

私も、自分ではあんまり判ってなかったんだけど。

若い頃にいちど地主っぽい人にプロポーズされたことがあったんだけど、けっさよく私はその人と結婚しようって気になれなかったんだよね。

私がお金に執着しているのは、先々の安定が欲しいからでしかない

んだ。

だから、面倒なことを抱え込みそうないろくつついてきそうなお金なら、かえってもらわない方がうれしいと思ったりするんだ。(要するにただのめんどくさがりなんだけど)

「じゃが、愛夏君にも、新一君が愛夏君を怒らせようとした訳ではないことは判ってやってくれんか？」

ん？ 私、前回阿笠博士に服のお金を払った時、そんなに怒ってたか？

まあ、多少毅然とした笑顔では対応した気がするけど……自分が思ってる以上に怖かったのかな？

「えっと、私、別に怒ってないですし。工藤さんが私を怒らせようとしたなんてことはぜんぜん思ってませんよ」

「そ、そうか、ならいいんじゃない。忘れてくれたまえ」

「はい」

「ところで愛夏君、ゴールデンウィークの予定は何かあるのかね？」

ゴールデンウィーク？ ああ、世間では会社や学校が軒並み休みになるんでしたね。

私もトリップ前は堪能した口だけど、今では関係ない境遇になりますよ。

「ええっと、実は明日、新しい仕事の面接があるので、その結果によってですね。面接が通ればたぶんシフト制になるので、あんまり土日祝日は関係ないんじゃないかと」

「ほお、それはなによりじゃ。うまくいくといいのオ」

「はい」

その後ゴールデンウィークについてはとくに言及しないまま、私は

阿笠博士の家を辞した。

もしかしたらなにか仕事をくれようとしたのかもしれないけれど、今はひとまず面接一直線だ。

そんなこんなで、ほぼ1日中都内を走り回って。

なんとなく夕方ごろから東都タワー前の月見通りも走ってみたけれど、コナン君たちやイタリア強盗団の面々とすれ違うこともなく。

帰宅して夜のニュースで強盗団が逮捕されたことを知って、子供たちが無事だったことも判って、ほっとしたところだったりする。

CASE・1 少年少女の恋愛事情　く時計じかけの摩天楼く

5月2日（月）

いよいよ自転車便の面接の日。

時間は午前10時なので、少し前に着くように時間調整しながら自転車で事務所へ向かう。

実は昨日、すでに下見は済ませておいたから、道に迷うようなこともなく。

5分前に到着して事務所に顔を見せると、まずは事務のお姉さんが自転車置き場に案内してくれました。

「え？　ママチャリ？」

「はい。仕事が軌道に乗るまでは、これをお願いします」

「けっこうきついと思うわよ。この仕事、女性だってだけでもハンデなのに」

「なんとかします。体力には自信があるので」

確かに平均的な女性は、平均的な男性にはかなわないけどね。

でも、本格的な女性アスリートに敵う一般男性はそうはいわないはず。

私はそこまで本格的じゃないけど、でも平均以下の男性にだったら勝てる要素はあると思うんだ。

再び事務所に戻って、社長さんと面接。

まだ若そうな30代くらいの男性で、履歴書をしばらく見たあとさっそく質問してきた。

「中学高校とバレー部で、今は職歴は家政婦だけですか。なぜこの仕

事を？」

「体力に自信があつたので、肉体労働をやってみたかつたんです。こういう仕事は若いうちしかできないと思つたので」

「正直言つて、この仕事はきついです。身体を壊したり、事故でけがをしてやめていくバイトも何人もいます。もちろん補償制度はありませんが、女性にはあまりお勧めできませんね。まだ若いんだし、ほかの仕事の方がいいんじゃないですか？」

最初から落としかかってくるのか。

会社としても、使えるかどうか判らない女性よりも、少しでも使える確率が高い男性の方がありがたいんだろう。

（私が若い頃にできた男女雇用機会均等法なんてものがなかったら面接すらしてもらえなかつたんだろうなあ）

「こちらには女性のスタッフもいると聞きましたけど」

「いますよ。でもほとんどが自転車競技など専門的な訓練をしてきた人たちです。それでもきついですよ。とても仕事になるとは思えませんね」

「それでも雇つてほしいんです。仕事を続ける覚悟ならあります。ぜひ雇つてください。お願いします」

たぶん、ここでこの社長に怖気づくようなら、それまでつてことなんでしょう。

じつさい雇つてみなければ使えるかどうかなんか判らないんだから。

この面接で見るのはその覚悟で、ひとまず私はこの第二関門を突破してみたかった。

面接後、私は再びお姉さんに案内されて、事務所の購買部でヘルメットを選んで購入した。

値段とかデザインとか様々あつたけど、あまりごてごてしくなくて

安い6千円のものにした。

そしてそのあとは座学研修。

交通法規とかマナーとかの基本と、自転車が壊れた時やケガの応急処置、あと接客マニュアルの実践だ。

昼休憩をはさんで午後3時ごろまで研修を受けたあと、最後に軽く実地研修をした。

「彼が高久喜さんの実地研修を担当します。彼がOKを出さない限り、研修は終わらず給料も出ませんからそのつもりでいてください。その結果合わないと判ったら、残念ですがこの仕事はあきらめてもらいます」

「はい。判りました。よろしくお願いしますー!」

「はい、よろしく」

担当になったのは20代後半くらいに見えるお兄さんだった。

たぶんこの世界では経歴が長くて、社長の信頼も厚い人なのだろう。

支給品は地図とPHS、バックパックと研修中の身分証明書だ。

まずは待機場所を決めて送信して、仕事が入ればPHSに連絡が来る。

場所を地図で探して受け取り現場に行つて、マニュアル通り荷物と伝票をもらう。

荷物をバックパックに入れて、今度は受け渡し場所に行つて、マニュアル通り伝票にサインをもらう。

そしてまた待機場所を決めて送信の繰り返しだ。

「今回は研修だけど、仕事は本物だからな。荷物の扱いは丁寧に、顧客の対応も丁寧に、間違つても事故なんか起こして会社の信頼を失墜させるようなことがないようにしろよ」

「はいー！」

「待機場所はだいたい決まってくる。交通の邪魔にならない。長時間いても周囲に不審者扱いされない。担当範囲のどこでもあまり時間をかけずに移動できる。このあたりなら堤向津川の河川敷が多いかな。できれば橋の近くで、川のどちら側にもすぐに移動できる方がいい」

「判りました。それじゃ、移動します」

私は地図を見て移動経路を確認したあと、先頭に立って走り始めた。

うしろからついてくるのはプロだから、振り返ったりする必要はないだろう。

けっこうな速度で移動したと思っただけでも、さすがはプロ、ぴったりとうしろについてきていた。

「それじゃ、待機場所を送信して。終わったら息を整えて」

「はい」

初めての機種に戸惑いつつ送信すると、お兄さんは話しかけてきた。

「コース取りは？ 誰かに教わった？」

「いいえ、とくには」

「通りをすぐに外れたのはなぜ？」

「あの先、駅が近くなるので、歩行者が多いかと思ひまして。あと、踏切が怖いのでちよつと遠回りしました。すみません」

「いや、基本が判ってるみたいで驚いたただけだから。平日の日中は踏切はできるだけ避けた方がいい。地図の見方も大丈夫みたいだな」

「昨日と一昨日、少し都内を走ったので。東都環状線沿線くらいならなんとか判るようになりました」

そうこうしているうちに、PHSに仕事の内容が入ってきて。

「地図で二か所とも場所を確認して。付箋かなにかで印をつけたらコースを組んで。今回の仕事はいつもの常連さんだから、慌てなくても大丈夫だから」

「はい」

そんな感じで、お兄さんにきめ細かい指導をされながら、初めての仕事はどうかこなすことができた。

まあ、給料はまだもらえないんだけどね。

夕方6時くらいまで方々を走り回って、事務所に辿りついた時には、正味2時間くらいしか仕事してないのにけっこう疲れ切ってしまった。

「お疲れさま。どうだった？ 自信は粉碎されたか？」

社長さんもなぜかフランクになっている。

本来はこういう感じの職場なのかもしれない。

「緊張しました。時間とか場所があらかじめ判らないから、その場ですぐにコースを組んだりしないといけないのがちよつと大変でした」
「まあ、そのへんは慣れだな。担当の地域が長くなれば、使う道もそれぞれ決まってくるし。力の抜き方もだんだん判ってくる。で？ 続けられそうか？」

「できます。任せてください」

「判った。じゃあ、明日は朝8時からだ。疲れは残さないようにな」
「はい」

その後、自転車に乗って帰宅した私は、数十年ぶりに夜のお風呂に入った。

温めのお湯にゆったり浸かって、身体をほぐして。

眠れなくなりそうでちよつと怖かったんだけど、そういえば10代の頃はまだ夜のお風呂に入ってたんだよね。

(部活で汗まみれだったからね、夜に風呂に入らないなんてことは許されなかったんだ)

身体が疲れていれば眠れないなんてこともなく、目安の11時にはぐっすり寝入ってしまったっていた。

5月3日(火)

さて、世間ではゴールデンウィークのこの日。

私は再び研修のため会社に赴いていた。

きつと本採用になれば、朝会社へ行くなんてことも省略できちゃったりするんだろうな。

(だって朝なのに、会社にいたのはオペレーターの人ばかりだったし)

まあ、祝日の今日は配達の方の人数もいつもより少ないのかもしれない。

「今日は1日ぶつ通しでやるから。体力がきついと思ったら遠慮せずに言うこと。最初はみんな夕方まで持たないのがあたりまえだから、無理して倒れる前に自分の体力を見極めるのが今日の課題と思えばいい」

「判りました」

昨日の研修担当のお兄さんと一緒にまずは堤向津川の河川敷まで。

そこからPHSで呼ばれてはコースを組んで地域を回っていく。

日によつては長距離の依頼が入ることもあるらしいけれど、今日は割と近場ばかりで、あまり堤向津川から離れることもなくて。

お昼になったから、ひとまず食事休憩の連絡を入れて、近くのコンビニでおにぎりを買って食べながらお兄さんと話をしていた。

「慣れれば速度はもう少し出せるだろうけど、今のところはまだそのくらいで大丈夫かな。あんまり速度にこだわると最後まで続かなくなるから」

「今の速度でもけっこうきついんですけどね」

「ママチャリだからね。スポーツ用の自転車にすれば、それだけで速度は出るよ。あとは慣れ」

「そればかりですね」

「じっさいそういうもんだから」

話しながら何気なくあたりを見回した。

—— そのときだった。

片手にスケボーを抱えたメガネの少年と、目が合ったのは。

今日は5月3日で、工藤新一の誕生日の前日。

夜10時に蘭と待ち合わせて、米花シネマワンで映画を見る約束をしている日。

たぶん米花シテイビルが爆発するのは今夜だ。

ということは、彼は今爆弾犯と戦ってる最中つてことだ ——

ここまでわずか0.5秒ほどで思考が巡る。

「愛夏姉ちゃん自転車貸して!?!」

その彼が血相を変えて私のところに走ってくる。

迷ってる暇はない。

私は素早くバックパックを外してお兄さんに押し付けた。

「体力の限界なのであとはお願いします!」

「へ?」

キミのその身体で、私の身長に合わせた高さの自転車をまともに扱える訳ないじゃないか！

「コナン君！ うしろ乗って！」

「愛夏姉ちゃん！ あのタクシー！ 爆弾が乗ってるんだ！」

ヘルメットを外してうしろに飛び乗ったコナン君の頭にかぶせる。

あのタクシーの進路は――

私はすぐにわき道にそれて、道の先へと出られるルートを構築、疾走。

どうにか間に合って、道に飛び出した自転車はタクシーにブレーキを踏ませて止めることに成功した。

コナン君がタクシーに乗り込んでる間に、今度は爆弾処理ができる場所へのルート構築。

――このバイト、始めてよかったよ。

おかげで私でも、江戸川コナンの役に立つことができた。

再びコナン君をうしろに乗せて走り出す。

「あと20秒なんだ！ つ!? 止まった!？」

「大丈夫、間に合うよ」

「動き出した！ あと15秒！」

高速道路の向こうにある川沿いの空き地まで全力疾走。

ハンドルを握りしめる腕がプルプル震えてくるのが判った。

――大丈夫、間に合う、間に合わせてみせる。

「愛夏姉ちゃん！」

「爆弾貸して！」

「あと3秒だよ!!」

土手を乗り越えて、自転車に乗ったままの勢いで、思いつきり背をそらせてバレーのスパイクの要領で爆弾を投げる。

そのあとうしろのコナン君を抱えてできるだけ遠くへ。

!!

爆発の瞬間、耳がおかしくなって。

平衡感覚が判らなくなっ、おそらく私はその場を転がったんじゃないかと思う。

でも、たぶんコナン君は大丈夫。

ちゃんとヘルメットしてたし、私の大きな身体は、小さなコナン君を覆い隠すには、きつと十分なはずだから。

……意識は、ある。

でも身体感覚が普通じゃないみたいで、ゆらゆら揺れてる気がするの、たぶん誰かにゆすられてるからだ。

この手は、コナン君かな。

なんか、助けようとして、逆に迷惑をかけちゃったかもしれない。

「——無駄にすすく伸びやがって！ オレがオメーの身長超えるの、どれだけ苦労したと思っただ！ ふぎけんじゃねえぞ愛夏！ こんなところで勝手に死にやがったら——」

……なんだ？ しゃべってるのは誰だ？

って、ここには私とコナン君ぐらいしかいないじゃんか。

でも口調はどう聞いても工藤新一だよ。

コナン君が新一口調でしゃべってるのか？

「起きろ愛夏！ オメーがオレをかばうなんて10年早えんだよ！ そんな英雄みてえな死に方オレがさせるわけねえだろ！ オメーはこれから大人人なって、おばさんになって、ババアになって、干からびたミイラみたいに年喰ってから死ぬんだからな！ こんな若いまままで死ぬなんてぜってー許さねえからな！」

なんかだんだん耳が治ってきたと思ったたら、すぐそばでとんでもないこと言ってる人がいるんだが。

……とりあえず、私が干からびたミイラになるにはあと80年くらい必要な気がする。

目が開かないなあ。

少しでも身体が動かせれば、このとんでもない発言してる子供を黙らせられると思うんだけど。

「爆発に巻き込まれたのはこの人ですか!？」

と、こんどはまた違う声が耳に飛び込んでくる。

「この人の名前は判りますか？」

「高久喜愛夏16歳誕生日は10月10日血液型はO型住所は米花町2丁目の——」

「ありがとう坊や。あとでゆっくり教えてね」

名探偵、人の個人情報勝手に漏らしてくれちゃって……！
すぐに肩をたたかれて、男の人の声で名前を呼ばれる。

「愛夏さん、高久喜愛夏さん、意識はありますか？ しゃべれますか？ 目は開きますか？ どこか動かせますか？」

声、出せるかな。

ちよつと頑張ってみたら、なんとかかかすれた声を出すことができ

た。

「自分の名前は言えますか？」

「……高久喜……愛夏……で……」

「意識確認。これから救急車に運びますから、驚かないでください。大丈夫ですよ」

救急車ですか、何気に人生2度目だよ。

最初に乗ったのは2歳の時にひきつけ起こした時だから、実質初めてだよ。

ああ、でも、酔っぱらった後輩の付き添いで乗ったことがあるから、それも入れれば人生3度目か。

早く職場復帰できるといいんだけど……なんだか今回もクビの予感がプンプンするなあ。

身体の感覚の方は、救急車の中にいるときにもだんだんふつうに戻ってきて。

同時に打ち身っぽい痛みがじわじわと襲ってきたけれど、あれだけ動かなかったのが嘘のようにみるみるうちに回復していった。

病院に着いた頃には、多少平衡感覚が怪しい感じはあったけれど、立って歩いて動けるくらいにはなっていて。

それでも頭を打った可能性があるからと、一応精密検査のために1日だけ入院となった。

コナン君はずっとそばにいて、私が検査を受けている間も、検査室のドアの近くから離れなかった。

……そんなことをさせるために私が盾になったんじゃないんだけどな。

コナン君としては、たまたま近くにいた私の自転車を選んで乗ってしまったことで、私に責任を感じてたりするんだろう。

検査が終わって病室に運び込まれると、それを待っていたかのよう
に目暮警部とあと一人、たぶん白鳥刑事が病室に駆け込んできた。

そのうしろに毛利探偵や阿笠さん、少年探偵団の姿も見える。

どうやら随分といろんな人を心配させちゃったみたいだな。

「愛夏さん、このたびは爆弾犯の犯行に巻き込んでしまったこと、心か
らお詫びします。それと、爆弾から街を守ってくれてありがとうございます」

「いえ、私はたいしたことは。怪我也心配ないみたいです」

「いや、あなたの勇気がなければ、被害はもつと大きくなっていたで
しょう。我々はこれから全力で犯人を逮捕することをお約束します。
どうか養生なさってください」

「はい、ありがとうございます」

一つ頭を下げて、目暮警部は今度はコナン君に向き直った。

「さて、コナン君。話してくれるね」

「うん。爆弾犯からの電話は、新一兄ちゃんの携帯電話にかかってく
るんだ。この部屋、ケータイ使って大丈夫？」

「ああ、ここは隣の病棟とは隔離されてるからね。阿笠さんにも聞いて
いたからこちらにしたんだ」

つまりコナン君も警部さんたちも、この部屋から出ていくつもりは
ない、と。

「最初は、なんか変な声で、堤向津川の緑地公園でおもしろいものを見
せる、って。早くしないと子供たちが死ぬぞって言われたから、ぼく
が新一兄ちゃんの代わりに行ったんだ。そうしたら元太たちが変な
おじさんからラジコン飛行機をもらったって」

「ほら、このおじさんだよ。歩美たちみんなで描いたんだ」

「これは爆撃機だーって言ったんだぞ」

「それを聞いたコナン君が、爆弾が仕掛けられてるって言ったんです。

ぼくびつくりして、リモコン壊しちゃって」

「コナンがリモコン蹴っ飛ばして、飛行機に当てたら爆発したんだぜ」

なるほど……ぜんぜん覚えてません。

なにしろ映画をちゃんと見たのって、たぶん20年近く前だからな。

私が読んだ夢小説で題材になったこともあったけど、ああいう小説だからほとんどの場合夢主の行動を追ってて、事件のあらましましを詳しく説明してくれることなんてなかったし。

「それで？」

「爆発してからすぐに2回目の電話がかかってきたから、たぶんどこかでぼくたちの様子を見てたんだと思う。その電話で、1時ちようどに次の爆弾が米花駅前広場の木の下で爆発する、早くしないと誰かに持っていられるって言われたんだ。だからぼく、すぐに行ったんだけど……。猫が入ったキャリーバッグに仕掛けられてて、拾ったおばあさんがタクシーに乗っちゃったんだ」

「そのタクシーを追いかけている途中で、愛夏さんに会ったんだね？」
「うん。愛夏姉ちゃん、すぐにぼくをうしろに乗せてくれて、裏道を使って追い抜いてタクシーを止めてくれたんだ。その時見たタイマーの時間があと30秒で、でも走り始めてすぐに一度タイマーが止まったんだ」

「止まった？ 確かかね？」

「うん。18秒だったよ。でもすぐにまた動き出したから、愛夏姉ちゃんが自転車で河川敷まで走って、あと3秒のところで爆弾を川に向かって投げたあと、ぼくを爆発からかばってくれたんだ」

実はあの時、もうちよつとうまいやり方があったと思うんだよね。

例えば、爆弾を自転車に乗せたまま走らせるなりして、土手のこつち側に身を隠すとか。

でもあの時とつさに私、自転車を壊したくないって思っちゃったんだ。

その成果についてはまだ確認できてないんだけど。

あの自転車は『高久喜愛夏』の持ち物だ。

洋服やカ○リーメ○トのような、45歳の私がこの世界に持ち込んだものじゃない。

だからできるだけ、彼女の物は壊さないでいたいと思ってしまったんだ。

犯人からの電話が工藤新一の携帯電話にかかってきたことから、目暮警部たちも、犯人の目的は工藤新一に対する挑戦、あるいは恨みを晴らすためだと推測している。

工藤新一を恨んでいるだろう人物として挙がったのが前西多摩市長の息子で、フットワークの軽い白鳥刑事はすぐに市長の息子を調べに行ってしまった。

……いつものことではあるんだけど、私が犯人を知っても、私自身疑われずにそれを伝えるのってほとんど不可能なんだよね。

(もつと頭がいい人なら可能なのかもだけど)

推理で犯人を割り出していく江戸川コナンだって、推理の材料がそろうまでは犯人を特定できないのだから、彼より先に材料をそろえることができない限り私が理論的に犯人を指摘なんてできないことになる。

大人たちが難しい話を始めてしまったので、子供たちが私に話しかけてきた。

「愛夏お姉さん、大丈夫?」

「倒れてぜんぜん動かなかったってコナンのヤツが言ってたぞ?」

「はい、今はもう大丈夫ですよ。目立ったケガもなくて、頭も打ってないですし、ほんとはすぐに退院しても大丈夫なくらいです」

「でも、コナン君がゆすつてもぜんぜん起きなかつたって」
「それなんですけど。……恥ずかしい話なんですけど、たぶん、おなかが空いて動けなかつたんだと思います」

子供たちはみんな、ポカンとした顔で私を見つめた。

……うん、なごんでる場合じゃない、か。

「朝ご飯を食べた量が運動するには少し少なかつたんですね。そんな状態で自転車に乗ってたくさん走ったから、身体が勝手に「腹ペコでもうこれ以上動けないよー」ってすねちゃったんです。今は点滴で栄養が行き渡ってますから、もう大丈夫なんですよ」

「……ハンガーノック……?」

「はい、コナン君はよく知ってますね。それがたまたま、爆発が起きたのと同時に起こったみたいです」

「なあ、ハンバーガーノックってなんだ?」

「ハンガーノック。身体がエネルギーを使い果たして勝手に止まっちゃうんだ。携帯ゲームでも電池が切れそうになると急に電源が落ちちゃうだろ? あれは、データをバックアップする最低限の電池まで使い果たさないためなんだ。人間の身体も、生きるための最低限のエネルギーを残しておくために、身体そのものの動きを止めるんだ」

「……なんだかよくわかんねえけど、愛夏姉ちゃんががんばったってことだな」

「そうだな」

まあ、私の不注意以外のなものでもないんだけどね。

45歳の私はふだん運動なんてほとんどしてなかつたから、若い頃よりも食べる量がかなり減っていて。

いきなり16歳の身体になったところで、45歳の時より燃費が悪くなってるなんて気づかなかつたんだ。

だから食べる量を増やさないまま昔と同じ調子で運動をしちやつ

て、その結果エネルギー不足でハンガーノックを起こしたんだ。

でもこれ、起きるタイミングがあとほんの少し早かったら、爆弾処理が完了する直前にいきなり身体が動かなくなってた可能性もあった訳で。

自分の身体に感謝するとともに、これからはもっと16歳の身体のことを意識しなければいけないんだってことを痛感した。

子供たちは私の身体がもう心配いらないと理解できたようで、別れの挨拶をして帰っていった。

コナン君は残ったままだ。

まだまだ捜査に協力するつもりなのだろう。

そして、子供たちが帰った直後、工藤新一の携帯電話が着信を告げた。

相手は犯人で、毛利探偵が電話を替わってスピーカーモードになると、東都環状線に5つの爆弾を仕掛けたと言い出して。

4時を過ぎてから時速60キロ以下で走行した時と、あと日没になったときに爆発するらしい。

電話を切ったあと、目暮警部は本庁に連絡して、列車を止めないように通達したようだった。

そして、その環状線の一つに、子供たちが乗っていることが判って。

4時過ぎでの連絡では爆発した車両はなかったようだったが、子供たちを含めた多くの乗客の命が危険にさらされたままなのは事実だった。

—— 思い出せたらいいのに。

爆弾が仕掛けられている場所、犯人がヒントで言ってた××の××で、私は映画で見ているはずだ。

なんで思い出せないんだろう。

「愛夏姉ちゃん」

いつの間にか目暮警部と毛利探偵は病室からいなくなっていて、残ったのはコナン君と阿笠さんだけになっていた。

「はい」

「身体が痛むの？」

「いいえ、それほどでもないですよ。心配無用です」
「でも……」

「少し、病室の外でも歩き回りましたよ。痛いときは運動した方が脳内麻薬が出て痛みが緩和される——」

「ねえ」

「——はい？」

「愛夏姉ちゃん、どうして僕をかばったりしたの？」

コナン君はベッドのわきに椅子を持ってきて座ってたのだけど。

今は目を伏せていて、私の位置からでは表情をうかがうことはできなかつた。

でも、どんな表情をしているのか、想像することはそう難しくはななくて。

「私は、年上ですから。コナン君の3倍近く生きてるんです。年長者が年少者をかばうのは、あたりまえなんですよ」

コナン君はこの言葉を、6歳の江戸川コナンと16歳の高久喜愛夏に当てはめたのだらうけれど。

私自身は16歳の工藤新一と、45歳の自分というつもりで言っていた。

若い頃は判らなくても、この年になって見えてくるものはたくさんある。

私が、今までどれほど年長者にかばってもらってきたのか、彼ら彼女らと同じ年齢、同じ役職になってよく判ったんだ。

若い頃、上司におもねるように調子を合わせて、おべっかばかり言っているお局様がいて。

私たち若い社員は、時折若者だけの飲み会で、彼女の悪口を言っただことがある。

でも、私が彼女と同じ立場になったとき、判ったんだ。

彼女は上司の機嫌を取ることで、上司が若い未熟な私たちに向ける悪感情をそらしてくれてたんだってこと。

私は彼女どうまく上司の機嫌を取ることはできなかつたけれど、でも可能な限り矢面に立って、若い社員たちを守っているつもりだった。

組織にゆがみができれば、そのしわ寄せが一番弱い部分に、つまり若い社員に行くことが判ってたから。

私は彼女のような多くの年長者たちに守られ育てられてここにいる。

だから、その年長者になった今、私は自分より若くて弱い人たちを守り育てる義務があるんだ。

工藤新一はまだたった16歳なのに、探偵という仕事を通じて人々の人生を守る立場にいる。

だから守られる自分に悔しさとか、憤りを感じてしまうのだろうか。

でも、たった16歳の少年は、今はまだたくさんの人たちに守られるべき存在なんだ。

守られて、育てられて、やがて探偵という仕事がなくても弱い立場の人たちを守る人間になるために。

「愛夏姉ちゃんだって、死ぬかもしれないよ。愛夏姉ちゃん

が死んだら悲しむ人はたくさんいるんだよ？ 愛夏姉ちゃん、ほんとにわかってるの!？」

まあね、コナン君が言うことも間違っていない。

もしもあの時私が死んでいたら、いちばん悲しんでいちばん自分を許せないのは、きっとコナン君だろうから。

「判ってますよ」

「わかってないよー!」

「少なくともコナン君よりは判ってますよ。君はあの時、私になんて言ったか覚えてますか?」

「……あの時?」

「『愛夏姉ちゃん自転車貸して!』そう、君は言ったんです。もしも私が自転車を貸すだけで、一緒に行かなかったとしたら、君はどうしてたんですか? 独りでタクシーを止めて、独りで爆弾を抱えて、独りで爆弾処理をしに走って。……独りで爆風を受けて、ケガをしてベッドに寝ていたのは、きっと君だったはずです。そうなったとき、私たちがいつたいどんな思いをするのか、君自身は本当に判っていたんですか?」

「……」

「君自身が今感じている、悔しきとか、怒りとか、憤りとか、そういう気持ちはずべて、君の周りにいるたくさんの人たちの気持ちなんです。今回君は無茶をしましたけど、必要な無茶だったことは判ってます。君の無茶がなければ、もっとたくさんの人たちが悲しい思いをしたはずですから。でも、その無茶の影で、そういう思いをしている人がいることを、君は覚えておくべきです。この先同じような出来事があれば、君はきつと同じことをするでしょうから、覚えておくことしかできませんけど」

コナン君はしばらくうつむいたままで、なにも言わなかった。

まあ、私が話したことは単なる立場のすり替えで、そう反論されたら返す言葉がないようなたぐいの説教だった訳だけど。

コナン君が私の気持ちを自分に置き換えて考えられたなら、彼にも判ったはずだ。

私が、なんの勝算もなくあんなことをした訳じゃないことも、実はあのときはなにも考えてなかったんだ、ってことも。

「とりあえず、お説教はこのくらいにして。……コナン君、阿笠さん、心配かけてすみませんでした」

「……まあ、愛夏君は判っておるようじゃから、ワシには何も言えんが」

阿笠さんは一つため息をついて。

「愛夏君は、会うたびにどんどんたくましい大人になっていくのオ」

いやそれ、私がすさまじい勢いで成長している訳じゃなくて、ただ単に大人だった自分を小出しにしているだけですから。

「そろそろ事件の方が気になってきました。ここ、ケータイは使えるみたいなので、ワンセグが入るかどうか試してみましようか」

「それじゃ、ワシは看護婦さんに、テレビが借りられないか聞いてみよう」

「あ、はい、お願いします」

そう言っつて阿笠博士が出て行って、私も自分のケータイを手元に引き寄せたところで、再びコナン君が話しかけてきたんだ。

「愛夏姉ちゃん」

「はい？」

「愛夏姉ちゃん、爆発のあと、ぼくの声聞こえてた？」

これはあれか、80年後にミイラ化する高久喜愛夏の話か。

「しばらくは、爆発で耳がおかしくなっていたので、救急車が来るときのサイレンの音も聞こえなかったくらいです。救急隊員の人に耳元で声をかけられたときに、かろうじて意味がつかめたくらいで。だからコナン君の声はあまり聞こえませんでした。すみません、あの時、なにか大切な話をしたんですか？」

「……ううん、ただ、起きて、って叫んでただけだから」「そうでしたか。コナン君には本当に心配をかけました」

二人きりでの会話はそれだけで、ワンセグの電波が入る前に阿笠さんがテレビを抱えて戻ってきてくれたので、私たちは事件を報道するテレビを見ながらずっとヒントの意味をそれぞれ考えていた。

私が唯一知っているのは、犯人が森谷帝二その人だということだ。森谷帝二は自分の昔の作品を壊すために爆破事件を起こしている。ということは、例えば電車本体に爆弾を仕掛けたとすると、その電車が狙い通りの場所で爆発してくれるかどうか、かなりの綱渡りになつてしまう。

そんなことをするなら、素直に建物に爆弾を仕掛けるか、建物の近くに仕掛けるかのどちらかだろう。

(でも建物に爆弾を仕掛けてもそれじゃ東都環状線は関係なくなるし)

狙いが電車じゃないのだから、例えば吹っ飛んできた電車が当たって建物が壊れるとか？

いや、それもけっこう博打だよな。

でも、どうやったら直接爆弾をしかけずに、建物を壊したりできるんだ？

ぼんやりテレビを見ながら考えていると、テレビの画面に見たこと

がある風景が映り込んだんだ。

「あれ？ あの橋って」

「ん？ どうしたんじや愛夏君」

「あの橋、写真で見たことがあるんですけど、東都環状線が走ってるんですか？」

「……確かに珍しいのオ。英国建築風の鉄橋というのは」

その時、コナン君の頭の中で、なにかが起こった……らしい。

携帯電話を取り上げながら叫ぶように言った。

「博士！ ちょっと電話してくる！」

「お、おう」

あ、もしかして判ったのか？

私がいるから変声機で電話できないだけで、映画だったら病室で電話してたのかもしれない。

(いや、そもそもこのシーンが映画では違う場所なのかもだけど)

コナン君が出て行ってしばらくしたあと、病室のドアがノックされて。

てつきりコナン君が戻ってきたのかと思っていたら、ドアを開けて顔を出したのはなんと、あの時荷物を押し付けたまま連絡すらせず忘れていた、自転車便のお兄さんだった。

「高久喜愛夏さんの病室はこちらですか？」

「あ、はい。すみません連絡もせず」

「いや、救急車で運ばれたところは見てたから。……高久喜愛夏さんにお届け物です。伝票にサインをお願いします」

なんか、接客モードと同僚モードが入り混じってて気持ちが悪い

な。

差し出された伝票を確認すると、なんとバイト先の社長からで、荷物は1通の封筒だった。

「はい、確かに。それと伝言なんだけど、社長が話があるから、動けるなら電話ができる場所まで移動してほしいって」

「それならこの病室、電話可能なので」
「了解」

お兄さんが会社のPHSで通信を送ると、1分も経たないうちに私の私用のケータイが着信を告げた。

「はい、高久喜です」

『お前、クビな』

覚悟はしていたがいきなりでグサリと胸に突き刺さりましたよ！

「はい、仕事を放り出した時点で覚悟はしてました。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

『そっちは問題ない。初心者が半日で挫折は普通だ。それと、爆弾処理したのもまあ、説教ものだが許せる範囲だ。けどな、ニュースで言ってた、爆弾を住宅街から遠ざけようとして負傷した16歳の女性”ってのはなんだ！うちの職場は18からしかバイトできねえんだよバカヤロウ!!』

バレてたよ年齢詐称！

これあれだろ、ぜつたい、名探偵がまくしたてた私の個人情報が原因だろ!!

「すみませんでした！」

『とりあえず、バイト代は出ねえが、個人的に見舞いくらいは出しとい

たから。お返しは必要ねえから取っとけ！ あと、18になって保護者の許可が取れたらまた来い。そのときは限界までこき使ってやる』

「……はい、ありがとうございます」

『じゃあな。早くケガ治せよ』

「はい」

怒涛の展開に、電話が切れてからも数秒間放心していて。

我に返ったのは、先輩が声をかけてきたからだった。

「高久喜おまえ、ほんとに16歳なの？」

「はい、そうですけど」

「うちの社長、そういうの見抜くの得意なんだけど、さすがにこれは見抜けないよな」

「もともと老け顔なんですよね。年相応に見られたことがないですから」

「いや、そういうんじゃない。社長も言ってたけど、学生らしい甘さとか、そういうのがぜんぜんないんだよな。社会人のおいがする、っていうの？ 少なくとも数年は、社会でもまれた経験がありそうな感じ」

うん、言わんとすることは判る気がする。

私も会社で新卒の新社会人を見てきたからなんとなく判る。

入ったての新人が、だんだん学生っぽさが抜けていって、いつの間にか社会人になっていく、っていうのが。

「まあ、とりあえず、待ってるから」

そう言っつて、お兄さんが私の頭にポンと手を乗せたところで、病室のドアが開いて。

「あー！ セクハラ!!」

コナン君がいきなり叫んだから、お兄さんはすぐに手を引つ込めた。

用事はすでに終わっていたので、お兄さんはそそくさと帰っていった。

無然とした表情で病室に入ってきたコナン君に、阿笠さんが遠慮がちに声をかけていた。

「し……コナン君、電話はなんだったんじゃ？」

「そうだ。新一兄ちゃんが教えてくれたんだ。爆弾の場所は、線路の間だって」

「線路の間？」

「うん。一定時間以上太陽の光がさえぎられると爆発する仕組みになってるんだって。だから、線路の上から電車をなくせば爆発しないんだって教えてくれたんだ」

「なるほど。それで日没までが期限なんじゃな」

「うん。新一兄ちゃんもさつき気づいて警部さんに連絡したから、今頃は電車を移動させてるはずで、たぶん爆弾を探すのも間に合うだろうって」

「なにはともあれ一安心じゃな」

なるほど、そういう仕組みなのか。

でも、例えば今日の天気が曇りや雨だったら、計画そのものが破綻してたよな。

どっちにしても綱渡りだったってことじゃん。

お兄さんが配達してきてくれた封筒には一万円札が1枚入っていた。

けつきよく今回のバイトはヘルメット代が持ち出しでマイナスになってたからな。

そのあたりを考慮して社長が計算してくれたってことなんだろう。

「あの、お二人がご存知かどうか判らないんですけど、私の自転車、どうなったか知りませんか？」

「ああ、それならこの病院の自転車置き場においてあるぞ。ワシが鍵を預かっておる。ほれ」

「ありがとうございます。ということは、ひとまず無事ではあるんですね？」

「目に見えて壊れたところはなかったようじゃ。明日帰るときにでも確認してみるんじゃない」

「判りました。そうさせてもらいます。あと、コナン君、あの時渡したヘルメットって」

「ぼくが預かってる。今返した方がいい？」

「いいえ、それ、コナン君にあげます。バイトクビになっちゃって、もう使わないので」

「え？ でも」

「できれば今日一日かぶっててください。サイズがちよつと大きいかもしれないですけど」

「……うん、いいけど」

これからコナン君、壊れたビルの中を駆けずり回るはずだからね。

彼が少しでも安全に過ごせるなら、ヘルメット代の6千円くらい安いものだ。

(まあ、社長のお見舞金がなかったらそんな気にならなかつたかもだけど)

いつもの紺色ジャケットにスポーツ用のヘルメットは似合わないかもしれないけど、そこは子供ってことで許してやってください皆さん。

律儀なコナン君はさっそくヘルメットをかぶって、顎のひもを調節していた。

「愛夏姉ちゃん、似合う?」

「はい、かつこいいですよ、コナン君」

「……さっきのお兄さんより?」

「比べものになりません。断然コナン君の方がかつこいいです」

あの人はいわゆるモブで、まあ仕事柄引き締まった身体つきはかつこいい部類に入るかもしれないけれど、所詮は一般人だからね。

私が20年以上も——一方的にだけど——恋してた少年探偵とは格が違いますよ格が!

私はこの時ずっと上半身を起こした状態でいたのだけれど、初めて身体を動かして、ベッドから降りた。

まだちよつと痛みがあるかな。

でも動いていればたぶん気にならなくなってくるくらいだろう。

「愛夏姉ちゃん、どこ行くの?」

「ちよつと用を足してきます。ついでに点滴の管も外してもらってきます」

「うん、わかった」

用を足す、はトイレへ行くときにも使う言葉だ。

ふつうの男性なら女性のトイレについてくるとは言わないだろう。

ケータイはさつき使ったあとポケットに入れた。

財布はもともと使ったのが大きすぎるからと、千円札1枚だけポケットに入れて家を出たから、今はコンビニでのおつりが残ってるだけだ。

自転車の鍵は阿笠さんに返してもらった。

社長からの見舞いの封筒も折たたんでポケットに入れた。

つり下がってた点滴の空袋を手につけて病室を出る。

そのままナースステーションへ行つて、看護師さんに声をかけると、すぐに点滴を外してもらうことができた。

「どこかへ行かれるんですか？」

「ちよつと動き回つてた方が気がまぎれそうなので、散歩でもしてこようかと思ひまして」

「あまり遠くへ行かないようにしてくださいね」

「はい」

嘘ですごめんなさい。

ちよつと自転車で都内を徘徊してきたいと思ひます。

病室の窓は病院の裏側に面していたから、正面側を歩き回つても気づかれることはないだろう。

私の自転車は外来用の自転車置き場に停めてあつて、ほどなくして見つけることができた。

鍵を差し込んで動かしてみる。

うん、多少前かがいが曲がつてるけど、走るだけならふつうに動かせるようだ。

爆弾犯に関して、私ができることはたぶんない。

私は理論的に犯人を指摘することはできないのだし、それをやるのはコナン君一人だけで十分だ。

だとしたら、今の私ができることは、蘭さんを爆発から守ること。自転車をいったん病院から少し離れたところに停めて蘭さんのケータイに電話を試してみたけれど、着信には気づかなかつたようだながることはなかつた。

トリップしてから今まで、私が明確に原作を変えようと行動したのは、アイドル密室殺人事件と豪華客船連続殺人事件の2回だ。

そしてそのどちらも原作を根本から変えることはできなかつた。

特にヨーさんの部屋へ行った時が判りやすいかもしれない。

私はたった一つ、部屋のチェーンロックをかけるという行動だけで原作を変えられたはずなのに、本来ならありえないような行動不能状態に陥ってしまったんだ。

今考えてもあれは異常だったと思う。

予想よりも早く来た生理と、16歳では考えられないくらいの痛み。

私はあの時いちばん強い薬を飲んで寝込んでしまったけれど、たぶんの薬を飲んだとしても、チェーンをかけることはできなかったよ
うな気がする。

それが、この世界のルールだった、そんな気がするんだ。

だからもう一度確かめたい。

私が本当に原作を変えることはできないのか。

私が蘭さんを爆発から救うことはできないのか。

どこまでが許された行為で、どこからが許されない行為なのか、その線引きがどこにあるのか、今回は確かめられるような気がするから。

蘭さんは米花シティビルの米花シネマワンで映画を観ると言っていたから、その前の買い物はたぶん米花駅の近くでしているのだろう。

警察病院から米花駅まではそれほど遠くないから、私はひとまず米花駅方面へと自転車を走らせていて。

駅近くまで来たとき、ふとポケットのケータイが振動を伝えてきたんだ。

見るとそれは蘭さんからで、私の電話の着信に気付いて折り返してくれたんだと判った。

「ほこ」

『愛夏ちゃん？ ごめんね、電話気づかなくて』

「大丈夫。今どこにいるの？」

『ちようど米花駅近くのレストランに入ったところ。なにか用事だったの？』

「うん、ちよつと話したいことがあって。これから行ってもいいかな？」

『ちよつと待つて。……大丈夫。今、園子が一緒にいるんだ。鈴木園子、判る？ 中学の時私と同じクラスだったんだけど』

「……顔くらいしか判らないかも」

『ちようど愛夏ちゃんを紹介したいと思つてたの。愛夏ちゃんさえよかつたらぜひ来てほしいな』

鈴木園子が一緒なのか。

こりや、怪しまれないように話をするのはちよつと難しいかもな。

蘭さん一人だったら、米花シティビルに入る直前に仮病でも使つて足止めするつて手もあつたけど。

場所は蘭さんに指示してもらつて、そのあと10分くらいでレストランに到着することができた。

ケータイの電源を切つて入口をくぐるとすぐに手を振つて声をかけてくれたから、私は店員さんに断つて彼女たちのテーブルに合流した。

「ごめんね急に電話しちゃつて」

「ううん、いいのいいの。あ、こちらが親友の鈴木園子。園子、彼女が高久喜愛夏ちゃんよ」

「お噂はかねがね。私も一度会つて話がつたと思つてたから歓迎するわよ。高久喜さんも夕食食べていくでしょう？」

「あ、うん。じゃあ軽く」

メニューをもらつて、いちばん安いパスタのセットを頼む。

病院代もまだ判らないし、社長からのお見舞いはあつたけど、今回

は完全に赤字だな。

まあ、今までの仕事は食事が必要経費だったり、待遇がよすぎたつてのはあるんだけど。

「それで、話したいことがあるって、なあに？」

……ぜんぜん考えてなかった。

どちらかというところ、蘭さんを米花シティビルから遠ざければいいと思っただけだから。

でも私から蘭さんへの話といえは、この間のあの話しかないよな。

「……ええつと、鈴木さんはどのくらい知ってるの？」

「……あの話だよ。まあ、だいたいは話したかな。ごめん」

「ううん、知ってる方が通じやすいと思うから、それはいいんだけど」「それって新一君の話よね。高久喜さん、単刀直入に聞くけど。高久喜さんは新一君のことはどう思ってるの？」

さすがは鈴木園子、ずばりと切り込んでくるなあ。

それに蘭さんの親友だからだろう、彼女は蘭さんの味方だと態度でしつかり主張してくる。

「どうもなにも、ほとんど知らなくて。有名人で、雲の上の存在とか。……アイドルみたいなの？」

「ということは、好きなのよね？　新一君のこと」

「……なぜそうなるんですか」

そういえば彼女はけっこう本気で怪盗キッドにさらってほしいとか言っちゃうタイプだったっけ。

この間テレビ局で見たレッススの打ち上げにコネ参加できちゃうくらい、芸能人との距離も近いし。

「園子、まずは愛夏ちゃんの話聞いてごうよ」

「ええ、そうね。それで、蘭に話してなに？」

「……あの、この間言ってた、私が誤解してるって話なんだけど。蘭さんがそう言った理由までは判ったと思う。……私は、工藤さんの経済観念がおかしいんだって思ったけど、たぶん蘭さんはそうは思っていない。だから、私に高額なプレゼントをしようとしたのが、工藤さんが私に気がある、とか、そう思ったんじゃないかな、って」

あの話のあと、蘭さんが私が思うのとは違う反応をした理由、私にはそのくらいしか思いつかなかった。

蘭さんが今まで接してきた工藤新一は、けっして経済観念が壊れた少年じゃなかったんだろう。

それが私に言ってた“誤解”の意味で、ライバルだからと教えてくれなかったのは“工藤新一が私を好きかもしれない”と私自身に気付けさせたくなかったからなんだろう。

「それで、それを私に言いに来たってことは」

「うん。私、工藤さんのことは、テレビや新聞の中の有名人としか思っていないから、憧れ以上の感情はないって、それを言いたくて」

「じゃあ、新一君が面と向かって告白してきたとしても、高久喜さんは断るのね？」

「園子……」

「はい、断ります」

私が断言したことで、蘭さんは驚いたようで、でもちよつと複雑そうな表情をしていた。

まあ、自分が好きな男の子だからね。

その価値をほかの人にも認めてほしいって気持ちもあるだろうし、なんとなくプライドを傷つけられたような気がしたんだろうな。

女心は複雑だ。

「愛夏ちゃんが言ったように、新一はそんなに経済観念がおかしい訳じゃないよ。ただちよつと周りが見えなくて突つ走るようなところはあるけど、最低限人への気遣いはできると思うし。……憧れる気持ちがあるなら、愛夏ちゃんが付き合うのに不足はないと思うんだけど？」

「それは工藤さんが問題なんじゃなくて、私の方の問題で。私は安定志向なので、付き合うなら平凡な方がいいです。普通の会社に就職してそれなりの収入があつて、間違つても殺人事件なんか巻き込まれない人。……私、この間の事件で心底思いました。私に殺人事件は無理です。あんなことが周りで頻繁に起こるような生活、私は送れる人種じゃないです」

「まあ、私も殺人事件は嫌だけど」

でもそれに勝るほどの感情を、工藤新一に対して持つてるんだよね。

やっぱり名探偵コナンの物語でのヒロインは毛利蘭以外にはないよ！

「だから私、全力で蘭さんを応援するから！　蘭さんが工藤さんとまとまれば、私が変わなことに巻き込まれる可能性も少なくなると思うし。蘭さんはメンタルも強いから、工藤さんとはお似合いだと思うんだ。蘭さん、お願い、私に蘭さんを応援させてほしい。そしてできるだけ早く工藤さんとくっついてほしい！」

「え？　私は別に、新一とはそんな……」

「まだ言ってるの？　もういいかげん認めちゃいなさいよ。新一君のことが好きだ、って」

「やだ園子。ほんとにそんなじゃないんだから。誰があんな推理オタク」

「なによ。この間新一君が高久喜さんを好きかもしれない、ってあんなだけ落ち込んでおいて。いまさら何言ってるのよ」

「それは、新一は幼馴染だから、いろいろ心配で」

そっか、毛利蘭は鈴木園子に対して、まだ工藤新一が好きだって認めてないのか。

だったら私がライバル宣言されたことは黙ってた方がいいんだろ
うな。

まあ、ただ単にからかわれたり冷やかされたりするのが嫌なだけな
んだろうけど。

(でも認めなくてもからかわれたりはしてるけどね)

どうやら私の気持ちというか、考えは二人に通じたようで、夕食の
時間は和やかに過ぎた。

主に二人の会話を私が聞くような展開だったんだけど、話は私のこ
とにも及んで。

私は今のところ高校に復学するつもりはなくて、今はバイトをクビ
になった直後で、また仕事を探さなきゃ、なんてことを話したところ。

「じゃあさ、愛夏は明日も暇なのよね」

園子さんはいつの間にか私のことを呼び捨てしてましたとき、ま
る。

「ええ、まあ」

「だったら明日、うちの別荘へ来ない？ 一泊の予定なんだけど、姉キ
が大学のサークルの同窓会をするんで、蘭も招待してるの。もしかし
たら愛夏のお眼鏡にかなう安定志向の男性もいるかもしれないわよ」

いや別に、私は安定志向の彼氏が欲しいとか言った記憶はないんだ
けど。

……いや、園子さんの頭の中では、私がそう言ったことになってる
のか？

っていうか、原作の次の話って確か、山荘包帯男殺人事件なんじゃ

……!

ムリムリ! クローズドサークルのバラバラ殺人なんて、私に耐えられるはずがないよ!!

「さすがに今日の明日というのは」

「つまり愛夏は、まだ新一君に未練がある訳だ。男あさりの誘いに応じないってことはそういうことよね?」

「そんなことは」

「それに、食事は姉キが作る予定なんだけど、人数が多いから蘭にも手伝いを頼んでるの。でも蘭は今夜新一君とオールナイトでしょ? もしも盛り上がりすぎて二人きりでしっぽり、なんてことになったら、正直私だけじゃ手が足りないし。バイト代2日で2万でどう? 交通費も食事も持つからさ」

……ああ、喰いつきたい。

守銭奴の本能が「やります」という言葉を言おうとしている。でもバラバラ殺人が……!!

「やっぱり新一君のこと——」

「やります」

怖かった、いや、バラバラ殺人よりも、蘭さんの視線の方が。

——名探偵コナンの鉄則、『毛利蘭は怒らせてはいけない』が発動。

理解した、世界は彼女を中心に回っているのだと。

さて、やるとなったなら食事の支度を手伝うだけで2万円もの給料をもらう訳にはいかない。

(そもそも蘭さんがボランティアでやろうとしていた仕事なのだし) 詳しく聞けば午前中に鈴木家の別荘管理の人が掃除をする予定ら

しいので、私はその掃除にも混ぜてもらおうことにして。

掃除がいつから始まるのかは園子さんも知らなかったのだけど、移動の時間を考えて、午前10時くらいに別荘へ着くように電車で出発することにした。

帰りももちろん、終電ギリギリまで掃除して帰る予定だ。

「なんか、愛夏って真面目ね。お金だけもらってのんびり休日を満喫しちやえばいいのに」

それじゃあ次の仕事につながらないでしょ。

谷家の佐伯さんだって、私がまじめに仕事してたから、簗本家の仕事を紹介してくれたんだし。

(まあ、その結果が貸切船での殺人事件だった訳だが)

「それだけが取り柄みたいなものだから。私、専門的な技術も何もないし」

「誰も女子高生のバイトにそんなの期待してないわよ。でも、なんとなく判るわね。蘭が愛夏のこと信用してるのがどうしてなのか」

「……そうなの？」

「愛夏ちゃん、中学の頃からずっと真面目だったじゃない。バレエ部一直線で、愛夏ちゃんのこと悪く言う人なんて一人もいなかったよ」

いやそんなの、私以外にもいっぱいいたでしょ、あの中学。

私自身は公立の中学を出てるんだけど、〃高久喜愛夏〃が行ったのは私立の帝丹中学で、その時点で変な生徒はいないだろうって推測はできる。

しつつかし、山荘包帯男殺人事件か。

事件を未然に防ぐ方法がないか、これから考えないとな。

確かあの犯人、すごく計画的でしかも恨み全開だったから、付け入るスキがあるかどうか判らないけど。

むしろ意図せず目撃者となった蘭さんを容赦なく狙ってきたくらいだから、下手に介入したら私が殺される危険性は半端じゃないが。

「さて、いい時間だし、そろそろ解散しようか。予定よりちよつと遅くなつちやつたしね」

「そうね、今日は付き合ってくれてありがとう園子」

「ううん、私も面白い話が聞けたし。明日の話も楽しみにしてるぞ」

気が付けば蘭さんは伝票を手すでに立ち上がっていて。

私もあわてて立ち上がって、レジで別々に会計を済ませたあと、外に出た。

「じゃ、私たちはここでいいよ。映画楽しんできな」

「うん」

「あ、私は蘭さんとちよつと」

「駄目よ、愛夏。蘭はこれから新一君とランデブーなんだから、邪魔しちゃ」

つて、まだ蘭さんを引き留めるミツシヨンが……！

!!
ここで別れたらなんのためにここまで来たか判らないじゃないか

腕をがっしりと園子さんに抑えつけられて。

笑顔で手を振って去っていく蘭さんが見えなくなるまで、園子さんはつかんだ手を離さなかった。

しょうがない、園子さんと別れたあとに追いかけるか、間に合わなかったら電話で蘭さんに助けでも求めよう。

そう思つて振り返ると、園子さんはちよつと怖い視線で私を見上げていた。

「愛夏、蘭はあんたのこと信用してるみたいだけど、私は蘭ほど信用し

てないからね」

「……はい」

「人の気持ちなんてどう変わるか判らないし、もしも愛夏が新一君に告白されたとして、その時ほんとに断るかどうかなんて判らないでしょ？ 私だって、蘭の親友だけど、万が一新一君に真剣に告白されたら、心が揺れないなんて断言できないもの」

……園子さんの心の話はともかくとして、確かにそういう懸念があるだろうことは理解できる。

工藤新一は私の人生設計に対してマイナス要素ばかりの男性だけれど、私に憧れというプラスの感情がある限り、いつその比重がひっくり返るかは判らないんだ。

「工藤さんには、蘭さんしかいないと思うけど」

「うん、私もそう思ってるわ。でも、新一君の気持ちまで私の思い通りにできるなんて思ってるのも事実なのよ」

まあ、それはその通りだ。

私も45年の人生で、なんでこの人がこんな人!!? と思ったことは何度もある。

それがこの世界の工藤新一に起こらないとは限らないけど……私は原作を知ってるからなあ。

原作の二人は両片想いで、途中からは両想いで、このままいけばちゃんと結ばれる運命だったのは間違いないんだ。

—— 私が、私自身が、向き合わなければいけない事実がある。

それは、この世界の工藤新一が、「高久喜愛夏」を好きな可能性だ。すでにこの世界にはいないかもしれない、自殺したのか失踪したのか、それとも私のように別の世界へ飛ばされてしまったのかすら判らない「高久喜愛夏」を。

「だからさ、私に高久喜愛夏を見極めさせてくれる？」
「……へ？」

ちよつと自分の考えに沈み込かけていたから、私は間抜けな反応を示すことしかできなかった。

「私ね、親友として、蘭の失恋を受け止める覚悟はできてるの。でも、あなたが本当に新一君にふさわしい人なのか……ううん、もつと言えば、蘭よりも新一君に愛されるほどの人なのか、私に確かめさせてほしい。別に蘭と比べて優劣をつけたい訳じゃないのよ。ただ、愛夏にその要素があるって、それを知りたいだけ」

「……」

「だって、知らないままでいたら、通り一遍の表面的な慰めしかできないじゃない。蘭は一途な子だから、万が一新一君に失恋なんかしたら、ものすごく落ち込むと思うのよ。だからそれを慰める役目の私も、ものすごい覚悟が必要なの！ 判る!?!」

途中から、園子さんは少し自分のセリフが恥ずかしくなってしまうみたいだった。

ちよつと強い口調でごまかすように言葉を切つて。

「あ、はい、なんとなく」

「とりあえずその一歩が明日の旅行ね。それとこれからもけつこう絡むと思うから、覚悟しておいて」

「はい、判りました」

「よろしい。それじゃ、また明日ね」

「あ、うん。よろしくお願いします」

最後は雇い主に対する礼儀とばかり頭を下げると、園子さんは振り返らずに手を振って地下鉄の駅へと消えていった。

すごいなあ、と思う。

45歳の私には友達すらいなくて、でもこの45年の間に友達がぜんぜんいなかった訳じゃなくて、部活の子や卒業後もちらほらと付き合いがあった人くらいはいたんだけど。

あんなに真剣に友達のことを考えたことはなかったよ。

というか、私はそれができなかったから、親友と呼べるような存在が作れなかったんだと思う。

親友とか、夫婦とか、家族もそうだけど。

ちゃんとした関係を築こうと思ったら、物事を二人分、考えられなければできないと私は思ってる。

自分の分ともう一つ、その人の分。

私にはそれができなくて、だから私の周りの人は自然と私から離れていったし、私自身、結婚して家庭を作る踏ん切りがつかなかったんだと思う。

たぶん映画のどれかだと思うんだけど、毛利蘭と鈴木園子の友情が描かれているシーンがあつて。

私はそれを見て、素直にそのすごさに感動したんだ。

私ではできない、私には築けない関係を積み重ねている二人に。

その端っこを垣間見た私は、映画と変わらない友情に、ちよつとだけ気を取られてしまっていた。

でも、そうそう呆けている訳にはいかなかった。

とにかく園子さんとも別れたし、たぶん時間はあまりない。

私は食事の間切っていたケータイの電源を入れて。

でも、蘭さんの番号を画面に呼び出している間に別の、阿笠さんの着信が割り込んできたんだ。

って、これぜったい電源切ってる間もずっとかけてた口だよ！

ということは向こうから切れるなんてことはないだろうから、どう

あってもぜったい出ないといけない訳で……！

「……はい」

『愛夏君！ 今どこにいるんじゃない？ ワシやコナン君がどれだけ心配したと思つとるんじゃない？』

「はい、すみませんでした。すぐに帰りますから」

『いや、迎えに行くからその場で待ちなさい。今いる場所はどこかね？』

え？ 今いる場所？

ちよつと通りから奥まつてるし、判りやすい目印もないし……。

そうだ！

「あの、では、米花シティビルが近いので、そっちで待つてもいいですか？」

『本当に近いんじゃない？ どこかからそこへ向かうんじゃないんじゃない？』

「ええ、ほんとにすぐ近くです。通りに出ればすぐに見えると思います」

『判った。それじゃ、米花シティビルに着いたらまた電話するからの。必ず待つとるんじゃないぞ？』

「はい」

『身体が痛いとか、気分が悪くなったりはしとらんかね？』

「はい、問題ないです」

『なぜとつぜん病院を抜け出したんじゃない？』

え？ 阿笠さん、まさか電話しながら車運転してたりしますか？

なんかバックに車のエンジン音が聞こえてる気がするんですが。

「あの、阿笠さん、ケータイ片手運転は危ないんじゃない」

『いや、今警察の若い刑事さんが来てくれたの。ワシの代わりに運転

してくれとるんじやよ。愛夏君もこのまま米花シティビルに向かいなさい』

いやあの、それじゃ蘭さんに電話が……! !

「私はムリです。歩き通話は危ないので電話を切らせてもらいます」
『いや、それならその場で待ちなさい。米花駅の周りならだいたい判るからの。目印にレストランか喫茶店を教えてくださいなさい』

ああ、阿笠さん、米花駅周辺の外食系はすでに開発済みってことですか。

クツ……こ、これが世界の修正力ってヤツなのか……! ?

ま、まけてなるものか!!

もうこうなったらちよくせつ蘭さんを連れ出してやる!

怪しまれたって知らない!!

たぶん目の前のビルで爆発が起これば、蘭さんはちよつとした私の不自然な行動なんかすぐに忘れてくれるはずだ!

ケータイを通話状態のまま自転車の前かごに放り込んで。

そのまま裏通りを選んで米花シティビルに向かう。

ケータイから何か叫んでるらしい声が漏れ聞こえるけど無視だ無視!

やがて米花シティビルまで辿り着いたから、1階の駐輪スペースに自転車を停めて、ケータイを掴んで、すぐそばの壁に貼ってあった案内図を見て5階の米花シネマのロビーへと階段を駆け上がる。

ロビーを見回して蘭さんを見つけた時、彼女はかばんの中から自分のケータイを取り出すところだった。

「蘭さん!」

振り返りつつ電話を取る蘭さんを、まるでスローモーションのように間延びした時間軸の中で見ていた。
そして――。

!!

爆発の瞬間、私は蘭さんを抱きしめるようにして、爆風からかばう。つて、けつきよく間に合わなかったし！

ていうか、なんで私まで巻き込まれてるんだよ!!

1日の間に2回も爆弾騒ぎに巻き込まれるなんて、もちろん人生初めてだしこれからもぜったい経験なんかしたくないよコノヤロウ!!

「……愛夏、ちゃん……?」

耳、は大丈夫だ。

たぶん前回の爆弾よりも威力が小さかったか、壁とかを破壊してるからそれで爆風の威力が落ちたのか。

もしかしたら爆発音が前とうしろ両方から聞こえた気がするから、それである程度相殺されたのかもしれない。

「大丈夫? ケガはない?」

「うん、私は大丈夫。……愛夏ちゃん、どうしてここに?」

「ちよつと話し忘れたことがあって。それより、この状況をどうにかしないと。出口とか、あと誰かケガしてるかもしれないし」

爆発前に一瞬だけ見た画像によれば、ロビーの中には10人近い人がいたと思う。

このロビーから映画館に直接つながるような通路はないらしくて、爆発した2か所が唯一の脱出経路だ。

ケータイの明かりを頼りにドアの方へ行ってみると、瓦礫に阻まれ

て外へ出ることはできそうにない。

たぶん閉じ込められてるのは最初にここにいた人たちだけだ。

「誰か、ケガをした人はいませんか？」

ケータイを確認すれば圏外の表示が出ている。

ほかの人たちも電話が通じないことにパニックになりかけていたけれど、声をかけたら自分のケータイの明かりで周囲を見回してくれた。

たぶんここにいた人はほとんど、蘭さんと同じように、映画を観るために待ち合わせをしていた人たちなんだろう。

お互いに知らない同士だからそれぞれが不安で、でも不用意に騒ぎ出すような人がいなかったことにほっとした。

瓦礫で軽いケガをした人が何人かいたから、ケータイで照らしながら応急処置をしていく。

（昨日研修で習ったばかりだからね。さほど器用じゃないからしないよりマシなくらいで申し訳ない）

そうしてある程度場が落ち着いたら頃には、爆発からたぶん40分くらいが経過していた。

さて、このあたりのエピソードは映画のクライマックスだからけっこう記憶にある。

ロビーの中には時限爆弾が置いてあって、設定された起爆時刻は夜中の0時3分。

工藤新一からの電話で、毛利蘭が爆弾を見つけて、ソーイングセットの小さなハサミで解体していくんだ。

そして最後、残った2本のコードのうち、どちらを切るかで運命が決まる。

一つだけ、判ったことがある。

私はどれだけ世界に介入しても、決められた道筋を根本から覆すことはできない。

起きるべき事件は必ず起きるし、亡くなる人を助けることもこれまで一度もできなかった。

でも、それはけっして、事件が必ず解決すると保証するものではないんだ。

もしかしたら、この爆弾で私と蘭さんが死ぬ可能性だって、ゼロじゃないんだ。

ううん、もしかしたら、ものすごく細くて困難だけれど、死ぬべき人を助けられる道筋は存在するのかもしれない。

—— ああ、私、株とか賭け事とか、やったことがなかったけど。もしかしたら取り返せるかも、って思って深みにはまっていく人の気持ちに今判ったかもしれない。

私は蘭さんを爆発から遠ざけることができるかもしれないと思って、行動して、けっきょく次の事件に関わることについての間になつてたりするし。

ほんと、45年も生きてたからって、世の中知らないことは盛り沢山だ。

「愛夏ちゃん、何か考えてるの?」

「んー、賭け事で身を持ち崩す人の悲哀?」

「なによそれー」

クスリと蘭さんが笑いを漏らす。

こんな状況で少しでも笑いが出るのはいいことだ。

「さつきは、ありがと。爆発からかばってくれて」

「二人いたからね、お互いに前面を合わせれば、衝撃が少しでも分散す

ると思っただけなんだけど」

「ううん、それでもありがとう。だって愛夏ちゃん、私の頭を抱え込んでくれたでしょう?」

「それは身長差の関係で、ね。私、平均的な男性と同じくらいの身長があるから」

これも学生の頃のコンプレックスの一つだったな。

バレーボールを始めてからは多少薄らいだけど、それでも最初の彼氏ができるまではずっとコンプレックスだった。

だって、男性の平均値とほぼ同じってことは、世の中の半分以上の男の人はヒールを履いた私より背が低いってことだし。

でも、たとえ半分以上が対象外だったとしても、残りの半分未満の人は、きつと私をそういう対象として見てくれるんだってことに気付いたから。

「私はね、さつき、新一のことを考えてたんだ」

「……たぶん工藤さんも、蘭さんのことを考えてるよ。事件のことはもう知ってるだろうし」

「そうかな」

少しの沈黙。

「考えちゃったんだ。もしも私と愛夏ちゃん、どっちかしか助からなかったとしたら、新一はどっちを助けるだろう、って」

「工藤さんなら両方助けると思うけど」

「うん、私もそう思うけど。……でも、新一が優先して助けるのは、私じゃないような気がする」

「それは信頼度の問題じゃないかな。どう見ても蘭さんより私の方が危なっかしいし」

「そういう要素は無視しての話よ。……愛夏ちゃん、判ってて言ってる?」

「まあ、よく言われることだし。崖に落ちそうな二人のうち、どつちを先に助けるか、つて」

そもそもそういう究極の選択つて、ほかの要素を無視した時点であり得ないんだけどね。

「新一は、愛夏ちゃんがここにいることは知らないだろうけど。もし知ってたらいったいどつちを助けたいと思うんだろう」

「いやそれ、たぶん知ってるんじゃないかな？」

「え？ どうして？」

「私、ここに駆け込んできたとき、阿笠さんと通話状態だったから。蘭さんと同じタイミングで通話が切れて、しかもその後一切つながらないんだから、知っててもおかしくないし」

「え？ 私があの時コナン君と電話してたってどうして」

「あ、あの時の電話の相手つてコナン君だったんだ。ならなおさら判ってるんじゃないかな。阿笠さんとコナン君、仲がいいみたいだし」

「でもどうして阿笠博士と？」

「実は私、脱走者でね。ハンガーノック起こして病院に入院してたんだけど、阿笠さんとコナン君の目を盗んで脱走してたの。阿笠さんはここへ車で向かってる途中だったから、コナン君や工藤さんとすれ違つても不思議はないんだ」

「……あきれた。なんで入院中に私に会いに来たりなんかしたのよ」「うん、たぶん、私も確かめたかったんだと思う。……工藤さんが、私と蘭さん、どちらを選ぶのか」

理由は、蘭さんとはぜんぜん違うけど。

もしも工藤新一が「高久喜愛夏」を選ぶなら。

私はこれ以上、工藤新一と関わるべきじゃないと思う。

なぜなら、工藤新一が選ぶ「高久喜愛夏」は私じゃないのだ。

彼がいつからそういう気持ちを持つてたのかは知らないけれど。少なくとも、「高久喜愛夏」の身長を追い抜きたいと頑張つてたくらいには意識していた彼が、その目で追つていたのは、私が来る前にこの世界にいた「高久喜愛夏」でしかないのだから。

まあ、それも有り得ない仮定だ。

ここまで来て、たとえ彼がどちらを選ぼうとも、感情以外の要素が絡まない選択など不可能なのだから。

「じゃあ、私が新一と会つてるところに乱入して？」

「そう。反応を見るつもりだった」

「でも、愛夏ちゃんは新一に興味がないって」

「だつて気になるし。蘭さんは工藤さんが私を好きみたいだつて思い込んで、ライブ宣言までしちゃうくらいだから、はつきりさせた方がいいのかな、つて。……まあ、ないとは思うけど、たとえばが私を選んだとしても、付き合うつもりはないから安心して」

「それ、けつきよく私が失恋するつてことなんだけど」

「私は工藤さんは蘭さんを選ぶ確率の方がはるかに高いと思つてるから。それがはつきりすれば、蘭さんもいろいろ思い悩まなくて済むし、私も煩わしいことから解放されて万々歳だから」

たとえば工藤新一の初恋の相手が「高久喜愛夏」だつたとしても。

今、彼のそばにいるのは蘭さんで、本当の「高久喜愛夏」が彼の前に現れることはおそらく二度とない。

だから、今の彼の感情が「高久喜愛夏」を選んだとしても、いずれ彼の気持ちは蘭さんに戻るはずだ。

そうすれば、私が好きだった物語の続きがこの世界でも再現される。

—— 子供たちはその時その瞬間、真剣な気持ちで恋愛をする。

大人たちはそれを一時的な感情だと言つて、いずれ目が覚めるだろ

うとその感情を切り捨てる。

子供たちはそんな大人たちに反発して、自分の恋を貫こうとするけれど……。

でも、これは大人が言ってることの方が正しいんだ。

恋愛感情なんて、何年も何十年も持ち続けられるものじゃない。

環境が変わって、そばにいる人が変われば、やがてその恋心も冷めていく。

時間とともに冷めていくその恋心に匹敵するのは、その人と同じ時間を過ごしたという経験でしかないんだ。

一緒にいなければ経験は生まれない。

だから、「高久喜愛夏」がない時間が増えて、毛利蘭がいる時間が増えれば、工藤新一の気持ちはぜったい毛利蘭に傾くだろう。

今、工藤新一がどちらを選ぶほうとも、最後には毛利蘭を選ぶことになる。

「愛夏ちゃんは、ほんとにそれでいいの？」

ドキツとした。

私は今、蘭さんとの会話と内面の思考を並列して考えていて。

蘭さんが言ったのは、私の「付き合うつもりはない」という言葉に対する疑問だったのに、私は思考の方に言われたような気がしたんだ。

私が、「高久喜愛夏」ではない私自身は、本当にそれでいいのか、と。

私は、この世界に本来ならいてはいけない存在だ。

「高久喜愛夏」は原作に登場しないいわゆるモブ以下だったけれど、私自身はそれ以上に許されない存在だ。

そんな私が、工藤新一と恋愛関係になど、なっていないはずがない。たとえなっただとしてもそれは単に「高久喜愛夏」の身代わりとい

うだけのことだ。

「いいもなにも、私、工藤さんのことはほんとに何も知らないし。好きも嫌いも生まれる要素がないよ」

「……なら、いいんだけど」

「だから、蘭さんもあんまり私を工藤さんと近づけない方がいいよ。今回は私も出しゃばってきちゃったけど、本当なら蘭さんが私と仲良くするのもあまりよくないと思う」

「それは嫌。私、愛夏ちゃんともっと仲良くなりたいたいもん」

「え？ ……どうして？」

「そんな、どうしてって言われても、そう思うんだから。私、もっと前から愛夏ちゃんと仲良くしておけばよかったな、って最近思うの。どうして私、中学の時愛夏ちゃんに話しかけなかったんだろう」

「いや、隣のクラスだったんだし、接点なんてないし」

「そうだよね。でも、愛夏ちゃんと知り合ってから、いろいろ変わったっていうか。なんか、世界が広がった気がして。ああ、私、こういう人と付き合いたかったんだな、って」

いやそれ、たぶん原作が始まったからです。

主にコナン君のせいだと思います。

さらに極論を言えば工藤新一が余計なことに首を突っ込んだせいです。

—— そんな時だった。

しんと静まり返った真っ暗なロビーに、電話の音が鳴り響いたのは。

そういえば非常灯がついてる。

だから完全な暗闇じゃなくて、非常灯の近くだけは明かりがともってるんだ。

つまり、このロビーは別に電気が来てない訳じゃなくて、ただ天井

の蛍光灯が壊れて明かりが消えてただけで。

ロビーのカウンターにある電話は、まだ生きていたんだ。

「蘭さん、出てみて。たぶん工藤さんだと思う」

「え？ どうして？」

「早く」

「う、うん」

蘭さんがケータイの明かりを頼りにカウンターへと歩いていく。

私もすぐうしろをついていって。

周囲の人たちも息をのむように静まり返っていたから、蘭さんの小さな声はロビーの隅々まで響き渡るようだった。

「もしもし……新一!？」

あー、なんとなくだけど、工藤新一の声も聞こえるな。

まあ、言葉が聞き取れるほどじゃないけど。

「なにしてたのよ！ いつもいつも肝心な時にいないんだから！
……ほんといつも、いつも、……！ わかってるの？ 今私がどんな目に遭ってるのか!？」

蘭さんの目に涙が浮かぶ。

私と話しながらも、蘭さんはずっと不安な気持ちを押しこらえてきたんだろう。

「……………え？」

蘭さんが非常扉の方を振り返る。

もしかして、そのドアの前にコナン君が来てるのか？

「……変なもの？」

蘭さんが周りを見回して。

椅子の近くにあった紙袋を拾い上げようとしたから、私も手伝った。

これが爆弾か。

けっこう重いし、さすがにちよつと持ち上げるのが怖い。

ちらつと見えた時間表示は42分あまり。

下手をすればこれが私と蘭さんの余命になる訳だ。

「なんなのこれ。すごく重くて大きいよ。デジタルの、時計みたいな
のついてる。……え？ 爆弾!？」

蘭さんの声が響いた瞬間、部屋にいたみんなが一斉に驚きの悲鳴を
上げる。

中には蘭さんからできるだけ遠ざかろうとする人も。

まあ、普通の反応だよな。

むしろ何も反応しなかった私の方が異常に見えたことだろう。

「ちよつと待って……42分、7秒よ」

そのあと、すぐに蘭さんが解体する訳ではないようで。

爆弾をカウンターに置いたまま、蘭さんは工藤新一と電話をつづけ
た。

「ねえ、新一。……今、私、一人じゃないの」

なんかここだけ聞くと、彼氏に黙って浮気してた女の子の告白みた
いだな。

返事として漏れ聞こえる工藤新一の声は、別に焦ってる様子も怒っ

てる様子もない。

おそらく思った通り、阿笠博士から私の状況は聞いているんだろう。

「うん、ケガとかはないから安心して。……よかつたら電話、代わるよ？」

私は蘭さんの目の前で思いつきり手と首を振る。

すると蘭さんは工藤新一の声に何度かうなずいたあと、私に視線を合わせて言った。

「愛夏ちゃん、新一から伝言。『オメーに聞きたいことがある。事が済んだら電話すつから、首洗って待ってる』だつて。——ちよつと新一、それどういう意味!？」

うわー、こりや今回の私の行動、完全に疑ってるよ！

そりやあね、入院してた病院をいきなり抜け出して、やっと見つけたと思つたら阿笠さんと電話中に通話状態のまま放置でその後通話断絶。

同じ時刻に蘭さんとコナン君の通話も途切れて、二人同時に爆発に巻き込まれたと推測できたけど、私がつた行動は不自然以外のなものでもない。

これを疑うなという方が無理があるだろう。

その後は私が構われることもなく。

工藤新一と蘭さんは静かに会話を続けていて。

蘭さんは内部の状況を説明したり、おそらく気持ちを落ち着けるためだろう、たわいない会話を工藤新一と交わしていく。

やがて、あと15分ほどで日付が変わろうというところで、蘭さんの雰囲気が変わった。

「……ソーイングセットのハサミなら持つてるけど、どうするのよそんななもの。……ええ!? ……待つて! 電話しながらじやうまくできないうよ! — 愛夏ちゃん、爆弾の解体、愛夏ちゃんがやって!?!」

「はあ?!」

いや、なんでそこで私!?

映画ではぜんぶ一人でやってたじゃん!!

「私が新一の指示を伝えるから、愛夏ちゃんは私の言うとおりにするだけでいいから。お願い」

「……」

私が明確な返事を返すより先に、蘭さんはかばんの中からソーイングセットを取り出して、ハサミを私に突き付けてきた。

「大丈夫、死ぬときは一緒だから。私も新一も、愛夏ちゃんを恨んだりしないしできないよ」

「……うん、判った」

「大丈夫、一緒に頑張ろう!」

「うん、頑張ろう」

16歳の子がこれだけ気丈に頑張ってるんだ。

45歳のおばさんが、ここで怖気づくのは違うよな。

ハサミを受け取った私があなずくと、蘭さんは電話に向かって合図を送った。

これは、怖い。

私は蘭さんの指示を聞いて、その通りに手を動かしているだけなんだけど。

切る前に何度も確認して、コードの色が間違いないかどうか、ケータイの光を角度を変えて何度も照らして。

ハサミで切る瞬間はいつも、寿命が1年ずつくらい縮まってるような気がした。

この作業が終わったら、私は元の45歳に戻ってるんじゃないか、そう思えるくらい精神をすり減らしていたと思う。

「愛夏ちゃん、これで最後だって。黒いコードを切れば、爆弾は止まるはずよ」

「……うん」

「あと少しだから、頑張って」

額からの冷や汗を袖で拭って。

蘭さんに励まされながら、最後の黒いコードを切る。

……やっぱりだ。

爆弾は止まらない。

「し、新一、今、黒いコード切ったけど、止まらないよ、タイマー。……それに、コードはまだ2本残ってるよ。赤いのと青いのと」

残り時間は5分弱。

……ムリだ、これ以上は。

気が付けば私はその場に座り込んでいた。

「愛夏ちゃん！……新一、愛夏ちゃんが……！」

蘭さんが受話器を置いて私の傍らに来る。

……だめだよ、蘭さん、工藤新一の話を聞かないや。

「……大丈夫。ちよつと、精神が限界。……ほんとごめん、私、根性なくて」

カウンターにもたれかかるようにすると、蘭さんは私の肩を抱いて、そっと引き寄せてくれた。

「……正直、ちよつとだけ安心した。……愛夏ちゃん、ずつと気丈にしていたから。落ち着いてて、大人で、私なんかじゃぜんぜんかなわないうって、思ってたから」

いや、それは単に、私の反射神経が鈍いだけで。

45歳の感覚でいるから、若い頃みたいに驚いたり焦ったり、そういうのが表に出にくくなってるだけなんだ。

蘭さんは私の手からハサミを取り上げて、一度ぎゅつと抱きしめたあと、立ち上がっていた。

「あとは任せて。もうあと2本だけでも。一人でもできるよ」

「うん、おねがい。……ほんとにごめん」

運命を握らせちゃってごめん。

いちばん大変な究極の選択を任せちゃってごめん。

映画のラストシーン、赤い糸を切りたくなかったと言った、毛利蘭のセリフを覚えてる。

でも、本当にそれが正しい選択なのか、最後の最後で私には自信がなかったから。

本当に、それが正解なの？

私がいることで、物語が変わってないって、本当にそう言えるの？ 私はこの爆弾を作った森谷帝二に会っている。

その、ほんの小さなきっかけで、森谷帝二が爆弾の構造を変えなかったって、そう断言できるだけの自信があるの……？

あの日私が着ていた服、青いラインが入っていた。

直前まで蘭さんと話していた森谷帝二は、蘭さんが反応したコナン君の『その服、新一兄ちゃんからのプレゼントなんだよね』という言葉聞き取れた可能性がある。

そんな小さなことだって、森谷帝二の気を変えるきっかけになつたかもしれない。

そう思ったら、私はもう、これ以上立っていることさえできなくなっていたんだ。

「ごめんね新一、愛夏ちゃん、ちよつと精神の糸が切れちゃつたみたいで。……うん、ケガとかじゃないから。あとは私がやるから、指示を願う」

その数秒後。

ゴーンという、おそらく時計かなにかの音が、このロビーにも遠く聞こえてきていた。

5月4日（水）

……ああ、日付が変わつたのか。

それにしても、こんな夜中に時計が鳴るとか……近所迷惑はなはだしいなこのビル。

「新一、……ハッピーバースデー、新一。……だって、だって、もう言えないかもしれないから」

そのあと、工藤新一が何か言つたのだろう。

蘭さんは一瞬、穏やかなほほえみを浮かべて。

でも、その後に来た揺れと瓦礫が崩れる音に動きを止めたあと、蘭さんは電話に向かって新一の名前を呼び続けて。

たぶん今ので電話線が切れたか、工藤新一のケータイが壊れたか、

あるいはここと同じように電波が届かなくなったかしたんだろうけど。

何度か名前を呼んだあと、蘭さんは再び爆弾に向かう。

たぶん時間はあと1分くらいしか残ってない。

「愛夏ちゃん、切るね」

「うん」

私も立ち上がって、ふらつきながらもどうにか蘭さんの傍らに立つことができた。

残り秒数はあと25秒。

「愛夏ちゃん……」

「大丈夫、死ぬときは一緒だから。ここにいる誰も、蘭さんを恨んだりしないといけないよ」

「……うん、そうだね。死ぬときは一緒だもんね」

「うん、そう。だから、蘭さんが切りたいと思う方を切っていいよ」

たぶんそれが正解だから。

工藤新一が、江戸川コナンが、今まで私の存在に惑わされずに事件を解決できたように。

この世界に存在する彼女が決めるのが、一番正しいことなんだ。

残り2秒、彼女が青いコードを切った瞬間。

私たちの余命を表示していたデジタル時計が永久に止まった。

非常口側のドアの前に掘削機が到着してから、15分ほどの間。
私と蘭さんは、ドアから離れた場所で、少しだけ話をした。

「あの、新一からプレゼントされた服」

「プレゼントじゃないけどね」

「青いラインが入ってたじゃない？」

「私の言葉はスルーなんだ」

「今日、私が着てるのが赤で、だから青は勝手に愛夏ちゃんにしてたの」

「で、それを切ったと」

「だって、私と新一のラッキーカラーが赤だったから」

「私が好きな色は実は緑なんだけどね」

「え？ そうなの？」

「昔見てもらった占い師には、オーラの色は黄色だって言われたし」

「そんな占いあるんだ」

「知り合いに紫のイメージだって言われたこともある」

「どっちも違うかな」

「だから、母親が買う服は緑が多かったと思う」

「私はやっぱり赤い服かな」

「コード、私が切らなくてよかったね」

「愛夏ちゃんだったら、やっぱり赤を切ってた？」

「……たぶん切れなかった」

「切らなかつたら死んじやってたよ？」

「うん、それでも……どうかな。目をつぶって手探りで切ってたかな」

「愛夏ちゃんに任せなくてよかつたってことだけは判ったよ」

「なにしろ内気で小心者だから」

「よく頑張ったよね」

「お互いにね」

「新一、愛夏ちゃんと話したいって、言わなかったな」

「今まで話したことなんか数えるほどしかないし」

「でも、最後かもしれないなかったんだよ」

「あの時点では最後だと思っただけだった可能性もある」

「じゃあ、けつきよく新一の気持ちは判らないままか」

「もう蘭さんが好きってことでいいよ」

「愛夏ちゃん疲れてる？」

「明日早いから正直もう寝たいだけ」

「やっぱり私たちと一緒に時間に行かない？」

「2万円のためなら頑張る」

「園子だって事情を知ったら許してくれると思うけど」

「私、基本なまけ者だから、一度なまけたら終わる気がする」

「愛夏ちゃん、やっぱり真面目だね」

「……」

「あれ？ 寝ちゃった？」

「……………」

その後、起きた時にはすでに朝になっていて。

なぜか警察病院のベッドに逆戻りしてました。

ま、目覚めてすぐに退院できて、治療費もなぜか取られなかったの
で、よかったと言えばよかったのだろう。

FILE・11 推理クイーンは突然に 山荘包帯男殺人事件

5月4日（水）

この日の朝、私はものすごく忙しかった。

目が覚めたのは警察病院の病室で、4時40分のケータイアラームでは起きなかつただけ、5時にスヌーズ設定してるちよつと派手な音楽で目が覚めて。

慌てて現状確認、枕元にあったケータイだけを手にナースステーションへ行くと、すでに退院OKとの話だったので、そのまま病院を飛び出して電車に乗って米花駅へと降り立った。

そこから事件現場である米花シティビルへと走ると、さすがにビル周辺は立ち入り禁止状態になっていたから。

偶然通りかかった高木刑事にすがるように自転車置き場の自転車のことを話すと、危ないからとかなり渋られながらも、なんとか中に入れてもらえて無事自転車を取り戻すことができた。

「頼みますから、もうこれっきりにしてくださいよ。僕だってけつこうヒヤヒヤなんですから」

「はい、ほんとにありがとうございます」

「気をつけて帰ってくださいね」

たぶんまた機会があればあなたに頼むことになると思うけどね。

いやだと言いながら高木刑事が断れない性格なんだってことは、原作を通じてよく知ってたりしますから。

帰り着いた時には6時を過ぎてただけ、すぐにお風呂に火をつけて、準備が整う間にカ○リーメ○ト片手に一泊分の荷物を詰めて。

熱めのお湯につかって仕事モードに切り替えたあと、支度をして7

時ごろには何とか部屋を出ることができた。

さて、鈴木家の別荘へは乗り継ぎも含めて約2時間半。

うち30分ほどはあちらの最寄り駅からの徒歩移動の時間なので、電車が予定通りに到着してくれば、10時より15分くらい前に到着することになる。

つまり、社会人の感覚で言えばかなりのギリギリだ。

とにかく電車で寝過ごしたらアウトなので、到着3分前にケータイのアラーム設定をして、万が一居眠りしても目が覚めるように準備万端で列車に乗り込んだ。

移動中もずっと考えてた。

今回の犯人は別荘へ来る前から殺害計画を立てていて、おそらく凶器になる斧も犯人が自分で持ち込んだものだろう。

凶器以外にもトリックのためのおなかの詰め物やピアノ線、包帯男を演じるためのマントとか帽子も。

例えば彼が別荘に現れた時点で、私が何もかもぶちまけて説得を試みたところで、計画をやめさせるのは難しいと思う。

というのも、彼は本命の殺害前に、自分の本当の体形を見られたという理由で蘭さんを殺そうとするのだ。

殺害後ならまだ判るけれど、殺害前なら犯行をあきらめさえすれば、彼が体形を偽っていた理由にしたって単に「みんなを驚かそうと思つて」という理由で通じるのに。

犯人の説得は不可能、むしろ説得しようとした時点で、私が殺されて終わるだろう。

じゃあ、被害者の方を守る？

これも無理がある気がする。

例えば、呼び出しの手紙を受け取った被害者に、殺されるから応じるなど言ったところで、彼女はすでに盗作した脚本で脚本家デビューを果たしてしまっている。

盗作がバレて社会的に抹殺される恐怖を思えば、脅迫者に対してお

金で解決するなり、可能性がある方法を選ぼうとするのはむしろ当然のような気がするのだ。

ムリゲーじゃねえかよクソツタレ!!

いつそ名探偵にぜんぶぶちまけるか!?

そっちの方がよほど可能性があるよ。

彼は私なんかよりもずっと頭がいいんだから、殺害計画を未然に防ぐ方法も、私なんかよりずっとスマートに考えられるだろう。

—— 　　いつか、名探偵は私の秘密を暴くのだろうか？

私は別の世界からトリップしてきた45歳のおばさん。

さすがにそこまでは無理かもしれないけれど、例えば引きこもりの“高久喜愛夏”が夢の中で未来を体験してきたとか、そのあたりまではいけるかもしれない。

若返り自体は彼はすでに経験している。

だから、私が若返った、というところは、もしかしたら信じてもらえるかもしれない。

いずれバレる秘密なら、ぶちまけるのもありだと思う。

それで被害者が救えるのならできるだけ早い方がいいとも思う。でもなあ。

オカルトを信じる名探偵というのも、私は想像がつかないんだ。

けつきよくなんの解決策も見いだせないまま、無情にも電車は別荘最寄り駅（というほど近くもないが）へと到着して。

教えてもらった道順をたどって、私はつり橋を渡って、鈴木家の別荘へとたどり着いた。

そこで別荘管理の老夫婦に合流して掃除や力仕事をお手伝い。

犯人がアリバイ作りに利用していた屋根の修理について訊いてみ

ると、毎年修理と点検をしているので、傷んでいるということはないようだった。

(つまり屋根の修理が必要というのは犯人の出まかせだった訳だ。でも私が止めても彼は無理やり修理を始めるんだろうなきつと)

約2時間ほどで、老夫婦は準備を終えて帰っていった。

一人残された私は、本当なら老夫婦が用意してくれた食材で、昼ご飯を作って食べるところなのだけれど。

それまで無理やり起きて仕事していた反動で、どうにも眠気が抑えられなかったもので、ほかの人が来る午後4時ごろまで眠らせてもらうことにしたんだ。

……原作でコナン君と蘭さんが寝ていた、階段を上がって左側に3つ並んだ真ん中の部屋で。

(いやだって、急遽参加が決まった私の部屋が考慮されてなかったから、そこしかないって言われたんだもん。つまり恐ろしいことに毛利蘭や江戸川コナンと同室ってことですよ！)

目が覚めたのは、その二人が部屋に入ってきて、私を起こしてくれたからだった。

……しくつたなあ。

せめてあのラッキースケベ事件だけでも防げたら、蘭さんが狙われることもなかったのに。

今頃気づくとは、やっぱり私、昨日の事件でかなり疲れて思考力が低下してたらしい。

(元から抜けてるともいう)

ともあれ眠ったおかげで頭もだいぶすつきりしてくれたので、蘭さんと一緒に荷物を解きながら少しだけ話をした。

「愛夏ちゃんはもう一仕事したあとなんだよね。お疲れさま」

「蘭さんは大丈夫？」

「私はほら、健康なのが取り柄だから」

「私もそうだったんだけどな」

「そうだ、私聞いてなかったよ!? 昨日私と会う前に、愛夏ちゃんがコナン君と爆弾処理してたなんて!」

そういえばハンガーノックで入院したとしか言わなかったな。

蘭さんと会った時は痛みもぜんぜんなかったし、そもそもハンガーノックさえ起こしてなければ私が救急車で運ばれるなんてこともなかっただろうから、爆発に巻き込まれたことは入院の理由と思ってなかったんだ。

「目の前に大きな時限爆弾が鎮座してたあの時に、爆弾が爆発した話なんて、誰も聞きたくなかったでしょ」

「それはそうだけど。でも本当にケガはなかったの?」

「爆風で倒れた時の打ち身くらいかな。もうぜんぜん痛くもないし」

「そういえば、あれから新一から連絡あった?」

え? そんなものは……。

と、ケータイを開いて思わず青ざめる。

私が電車の乗り換えであたふたしてたくらいの時間に、工藤新一からの着信が……!

ぱたりとケータイを閉じて見なかったことにした。

「折り返しかけなくていいの?」

いやだって、今同じ部屋にいますから。

蘭さんの言葉にピクツと反応した江戸川コナン君が。

「まだ首洗ってないし」

それによく見たら、ここってケータイ圏外じゃん。
いまどきの日本で圏外の地域があるってだけで驚きだよ。

呆れた顔で微笑む蘭さんとコナン君と一緒に食堂まで行く。
園子さんとあいさつを交わして、姉の綾子さんを紹介してもらって、綾子さんのお茶の準備を手伝って。

高橋さんはすでに屋根の修理を始めていたようで、綾子さんが声をかけるとベランダを伝って階下に降りてきていた。

そのほかタバコを吸ってる太田さん（うらやましい）とカメラを回している角谷さん、できる女な感じの知佳子さんの総勢9人でテーブルを囲んで自己紹介をした。

同窓会組の5人は和やかに思ひ出話をしていたのだけれど。
綾子さんが敦子さんという人の話を出した途端、雰囲気が変わって。

高橋さんは屋根の修理の続きをしに出て行って、知佳子さんは散歩へ、角谷さんはそのあとを追って森へと行ってしまったみたいだった。

確かこのあと、蘭さんが太田さんに誘われて、森へ行くんだよね。
そしてそのうしろを園子さんとコナン君がこっそりついていって。
雨が強くなり始めた頃、雷の音に驚いた蘭さんがみんなと離れたところを見計らって、包帯男が蘭さんを襲うんだ。

でも私は綾子さんの手伝いで台所にこもらないといけないので、あえて関与することはしなかった。

「愛夏ちゃんもみんなと一緒に散歩してきていいのよ。ここは私だけで十分だから」

「いいえ、私は雇われてきてるので、できる限りお仕事させてください」

「んもう、どうして園子ったら、愛夏ちゃんを雇ったりしたのかしら。」

ふつうに招待すればよかったのに」

そりやお姉さま、園子さんには普通に招待したんじゃ私が来ないだろうってことが判ってたからですよ。

園子さんはできるだけ早く私を見極めたいと思ってますからね、今回のような泊りがけの旅行はチャンスだと思っただけでしょう。

「あら、降ってきたわね。高橋君大丈夫かしら。足を滑らせたりしないといいんだけど」

たぶん今頃は包帯男の扮装で森を歩き回ってるはずですよ。

なので心配には及びません。

まったく、いくら敦子さんのためだからといって、こんな優しい人を心配させるとか、あの人はいったい何やってるんでしょうね。

なんとなく不機嫌になってるのは、私がなにもできないことに苛立っているからなんだと思う。

それが誰のせいかといえば、間違いなくあの犯人のせいで。

いっそのこと雨のせいで屋根から落ちて足でもくじけばいいんじゃないかと思う。

「愛夏ちゃん、……もしかして、なにか怒ってる?」

「……すみません。ちよつと、自分のふがいなさに情けなくなってるというか」

「それ、もしかして園子のせい?」

「違います。園子さんも綾子さんも悪くなくて。……ただ、自分が力不足なだけで」

ああ、馬鹿なのは私だ。

関係ない綾子さんを心配させて。

「愛夏ちゃん、ちよつとここに座って」

綾子さんが指し示してきた高めの丸椅子に腰かけると、綾子さんはなぜか私の頭を抱き寄せてきたんだ。

「綾子さん……う？」

「ねえ、愛夏ちゃん。もしかして、なにか悩んでることがあるんじゃない？」

「……いえ、そんな」

「別に無理に話してくれなくてもいいのよ。でも、この人になら話しても大丈夫だって、そう思える人がいるだけでも違うと思うの。……園子から聞いたわ。愛夏ちゃん、ご両親もすでに亡くされて、独りで暮らしてる、って」

両親、なんて、なにも話さなかった。

父親の記憶はほとんどないも同然だし、母親とは最近は何の文句の応酬だけで。

でも ——

「……おんぶひも」

「え？」

「……子供の頃、押入れの上の段に座っていると、お母さんがおんぶひもをかけて、背中に背負ってくれた」

胸に抱きかかえられるなんて、今までほとんどされたことがなくて。

誰かのぬくもりがあるなんて久しぶりだったから、ふと思い出したのがそれだった。

知らず知らずのうちに涙がこみあげてきて……。

って、私いくつだよ！

お母さん思い出して泣くような年じゃないってぜったい!!

「いい思い出ね」

「……別に、たいした思い出じゃないし」

「愛夏ちゃん、ちゃんと泣いてないんじゃない？ よかったらここでしばらく泣いていって」

「……」

泣いては、いなかったな。

だってうちの母親、別に死んだとかじゃないし。

きつと私がいなくなった今でも私に文句しか言っていないと思うんだあの人。

憎まれっ子世にはばかるっていうけど、少なくともあの方は私には憎まれてたから、あの世界で長生きしたと思うし。

—— 憎んでいれば、憎んでいるうちは、生きててくれると思うし。

なかなか涙が止まらなくて、けっこうな時間、綾子さんの胸で泣いてたと思う。

そのうちに食堂の方が騒がしくなって。

顔を洗ってから綾子さんより遅れていくと、蘭さんが包帯男に襲われたという話で騒然としていた。

「ねえ、姉キはあの男見なかった？ この別荘の方に逃げていったと思うんだけど」

「さあ……夕食の仕度してたから。見た？ 高橋君」

「いや、屋根の修理でずっと上にいたけど、そんな人は来なかったと思うよ。でも……妙な感じの人ならこの別荘に着いたときにつり橋のそばで見かけたなあ。顔はよく見えなかったけど、黒っぽいマントにチューリップハットをかぶった不気味な人」

もしも今、この高橋さんのおなかを探ったら、黒いマントとチュールリップハットと包帯が出てくるのかな。

今ならまだ誰も傷ついていないから、たとえば彼が包帯男だとバレても悪質な冗談だったで済まされる。

それが誰にとつてもいちばんいい結末のような気がする。

……もしかしたら、私が彼に憎まれる可能性はあるけれど。

よし、決行しよう！

そう思つて高橋さんの背後に近づこうとした時、ふいにシャツの裾を引かれたんだ。

見れば私のシャツを握つてたのはコナン君で（まあ、そんなことするのは彼以外にはいない）、なぜか私をちよつと怒つたような真剣な目で見上げてたんだ。

「愛夏……姉ちゃん、なにかあつたの？ 目が真つ赤だよ？」

つて、おまえが止めるのかよ!?

さすが世界を動かす主人公、世界の修正力が彼を動かすのはたやすいのかもしれない。

ていうか、まさか自分が活躍したいがために犯罪を未然に防がせないんじゃないだろうな!?

「……そんなことより、今は不審者の方が重要だと思えます」

「愛夏姉ちゃんのことだつて重要だよ。ねえ、いったい何があつたの？ どうして泣いてたの？」

……完全にタイミングを外されたな。

綾子さんが警察に電話をしに行つて、そのあとをほかのみんなもついでいって。

ここに残つてるのは蘭さんと園子さんだけになつてる。

「コナン君、愛夏ちゃんをあんまり困らせないで」

「でも私も気になるわね。愛夏、あんた、姉キとなにかあった？」

「いえ、綾子さんは、私を慰めてくれただけで」

その時、玄関の方で高橋さんの叫ぶような声と玄関のドアを乱暴に開ける音が聞こえて。

「あとで聞くからね。私たちも行ってみましょう」

「うん」

廊下へ出ると、綾子さんからは電話が通じなくなっていることと、その後戻ってきた男性陣からつり橋が落とされていることを聞かされた。

さて、今回の私の仕事は、綾子さんの調理の手伝いがメインなのだけれど。

気が付けば台所には綾子さんと私のほか、蘭さん、園子さん、コナン君の総勢5人がいて。

手際のいい蘭さんに邪魔されて、私がする仕事がほとんどなくなっているような状況だったりします。

「で？ けっきょく何があったのよ、愛夏と姉キ」

「なにもないわよ。これはいわゆる乙女の秘密、ってヤツね」

綾子さんは園子さんの追及を軽く流してくれている。

私はただ、黙々と鍋の火加減を見てアク取りしているだけだ。

「愛夏姉ちゃん、ぼくにだけこっそり教えて。ねえ、いいでしょ？」

「コナン君、火の近くは危ないので、少し離れてもらえませんか？」

「ここまで調理が進んでやつともらえた仕事なのだ。」

失敗なんかしたら目も当てられない。
というかもうバイト代をもらえるレベルじゃなくなる。
今でさえかなり怪しいというのに。

しかし、綾子さんは長女気質というのか、世話好きであしらい上手な感じがまさしくお姉さま、なのだけれど。

同じ長女（しかも同じく妹と二人姉妹）の私は、どちらかといえば長女の悪い部分しかないのがまったたく違う。

私、甘え下手だし頑固だし、弱みを見せるとかほんとにできないタ
イプだからな。

そんな私を甘えさせちゃう包容力とか、なんかこの世界、尊敬でき
る人ばかりで構成されているような気がするよ。

「うん、お鍋もいい感じね。愛夏ちゃん、丁寧な仕事ありがとう」

「いいえ。たいしたお手伝いもできずにすみません」

「ううん、一人じゃどうしてもここまでできちんとできないから。愛夏
ちゃんがいてくれて本当に助かったわ」

「お役に立てたのならよかったです」

知佳子さんは食べないとのことなので、8人分の食器を用意して。

……もう、きつと殺されちゃってるんだろうな。

名探偵に邪魔されなければ救えたかもしれないとも思うけれど、犯
人の執念を思うと、違う形でまた殺人計画は練られたのかもしれない
し。

意図せず私を止める形になったコナン君の行動を免罪符に、私は彼
女を救えなかった罪の意識から必死に逃げようとしていた。

食事をテーブルに並べているとき、綾子さんの一言からコナン君が
質問して。

綾子さんの口から、敦子さんが2年前に自殺したことが語られた。

そのあと太田さんと角谷さんが相次いで現われて。

綾子さんが屋根にいる高橋さんに声をかけると、ベランダから外を見た高橋さんが、窓の外に誰かがいると言いつ出したんだ。

私はずっと高橋さんの行動を見ていたから、窓の外を知佳子さんが通り過ぎたところは見ていなかったのだけど。

いずれにしても、高橋さんが不審な行動をしたところまでは見ることはできなかった。

すぐに男性陣は窓を開けて不審者の行方を見定めようとしていたけれど、それに先立ってコナン君が非常用の懐中電灯を手に窓から飛び出していったんだ！

(ていうか、なぜ君は食堂で土足でいたんだ？ スリッパのサイズが合わないからなのか？)

さすがに彼を追うほかのみんなは玄関に回って靴を履き替えていたけれど、そのとき女性陣には戸締り確認が言い渡されたので、私は園子さんと組んで部屋の窓からベランダからすべての施錠を確認して回った。

戻ってきた男性陣からの報告は、原作通り、知佳子さんのバラバラになった遺体が森に散乱していたということだった。

外で遺体を見た男性陣はとても食事をする気になれないようで、再び全員で施錠確認したあとにそれぞれの部屋へと戻ってしまつて。

でも昼も食べていなかった私は夜まで抜く訳にはいかなないので、失礼して食堂で食べさせてもらうことにした。

片付けのために一緒に残っている綾子さんも、さすがに友人が殺されたとあつては食事どころではないのだろう。

食卓の隣に座ってはいても、食事に手を付けることはなく、憔悴した感じでぼんやりテーブルを眺めているだけだった。

「綾子さん、片付けなら私がやっておきますから。今日はもう休んだ

方が」

「……ええ、そうね」

声は耳に入っても脳まで達していない感じだ。

こういう時、私はうまく慰めるすべを持たない。

ふだんは普通の人間の振りをしているけれど、こんな風に人間の本質が問われるとすぐにボロが出てしまうのだ。

私はさつき綾子さんが私を泣かせてくれたように、彼女を泣かせてあげることすらできない。

急いで掻き込んだ私の食事が終わるころ、蘭さんと園子さん、コナン君が食堂へとやってきた。

「愛夏ちゃんと綾子さん、まだ残ってたんだ」

「うん、私は昼抜きだったから、食べないと持たないから。蘭さんたちは食事は？」

「私はちよつと。コナン君はいただいていく？」

「うん。じゃあスープだけ」

「私も遠慮しておくわ。愛夏、片付けは任せてもいい？」

「大丈夫」

「ありがと。それと姉キを見てくれてサンキュー。……姉キ、ここは任せて部屋で休もう」

「……ええ」

園子さんが綾子さんを連れて部屋へと戻ってしまったので、残ったのは蘭さんとコナン君だけになった。

「コナン君、スープを温めますよ」

「ううん。このままで平気だよ」

「そうですか。……朝までの間におながが空く人もいるかもしれない

から、ラップをかけて冷蔵庫に入れておけばいいかな」
「それでいいんじゃないかな。私も手伝うよ」

蘭さんが手伝ってくれたので、コナン君がスープを飲んでいる間に、私と蘭さんとで手分けして食器ごと台所の冷蔵庫に運ぶことができた。

最後に私とコナン君が使った食器を片付けて、あと雨に濡れてお風呂を使う人がいるかもしれないからそれも支度したあと、もう一度錠確認をして3人で部屋に戻った。

部屋にはベッドが2つしかなかったのだけれど、蘭さんは最初からコナン君と一緒に寝るつもりでいたらしく、窓際の私が昼間眠っていたベッドをあつさり譲ってくれた。

「なんかとんだことになっちゃったわね。こんなことさえなかったら、愛夏ちゃんと同じ部屋でお泊りなんてすごく楽しかったと思うのに」

「うん、そうだね」

私の方は、事件の緊張感がなかったら、江戸川コナンと同じ部屋だなんてとてもじゃないが耐えられなかったと思うけど。

今どうにか平常心を保っていられるのは、これから包帯男が蘭さんを襲ってくると思ってるからだ。

って、どっちも平常心には程遠いようなシチュエーションではあるよな。

(逆に両方あるから変にバランスが取れてるのかもしれない)

とりあえず、ぜったいに眠らないようにして、蘭さん抱えて逃げるくらいのことはできるように構えておこう。

「さて、鍵も確認したし、明日も早いからもう寝ようか」

「うん。おやすみなさい」

「おやすみなさい、愛夏ちゃん、コナン君」

「おやすみなさい」

そうして明かりを消してベッドに入ったあと。

蘭さんはすぐに眠ってしまったようだったがけれど、コナン君の寝息はまだ聞こえてこなくて。

……そういえば原作でも、蘭さんがコナン君のベッドに入ってきて、ドキドキして眠れなかったんだよね。

今のコナン君はおそらくそういう状態なんだろう。

「ねえ、愛夏姉ちゃん、起きてるの?」

しばらくしてから、小声でコナン君が話しかけてきました。

「……はい」

「眠れないの?」

「私がお昼寝しちゃったので。コナン君はもう寝た方がいいですよ」

「うん、でもぼくも眠れないから。少しだけ話してもいい?」

これはあれですか? また私を探ろうとしてるんですか?

……まあ、名探偵がいずれ私の正体を看破するかもしれないのは仕方がないことだし、自分が出した結論ならそれ以上疑うこともしないだろうから。

逆に正体を知ってもらった方が私は楽になれるかもしれないと最近思うようになった。

だから変にプレッシャーをかけてきたりしないのなら、私としては自分のことを話すことにそれほど抵抗はなくなっていたりするんだけど。

「はい」

「愛夏姉ちゃんは、あの包帯男って、なんだと思う?」

しかしコナン君の話は今回の事件のことで、私はちよつと拍子抜けしてしまった。

「なに、というの？」

「みんなが言ってるみたいに、たまたまこの山荘に現れた無差別殺人犯なのか、それともなにか計画的な犯行なのか」

「……コナン君は、無差別殺人が信じられないみたいですわね」

私が言うと、なぜかコナン君は、今まで手に入れた材料を一通り話してくれたんだ。

知佳子さんのスリッパが裏口にあつたことや、知佳子さんの遺体は靴をきちんと履いていたこと。

それと知佳子さんの部屋は荒らされてたりしなかったことから、彼女が自分で裏口から外へ出たのだろうということ。

「確かに、変ですね。そもそもなぜ知佳子さんがわざわざ靴のある玄関ではなくて、裏口に回つたのかというの。その知佳子さんの姿を、包帯男が食堂の玄関側の窓から見せたのか、ということも」

「うん、そうなんだ。でも例えば包帯男が知佳子さんの知り合いかなにかだとしたら、どうやって呼び出したのかもわからないし」

「知佳子さんの部屋はこの隣ですから、裏口側は見えないですし、窓越しに裏口に呼び出されたとは考えにくいですね」

私は原作の流れを思い出しながら、コナン君がまだ手に入れていない情報に触れないよう、必死で考えながら話していた。

確かチョーカーの話はこの部屋で蘭さんが襲われたあとだったし、知佳子さんが手紙を受け取っていた話もそのあとだ。

それ以外の材料をなんとか組み立てて話を合わせていく。

おかげでよけいな頭を使ってすっかり眠気の方はなくなってくれたし。

「……愛夏姉ちゃんは、言わないよね」

「ん？ なにをですか？」

「ぼくに、子供はよけいなことに首を突っ込むな、とか」

おうっ！ 油断してたら探りがきましたよ！

二段構えとか、名探偵もだんだん進化してきたなオイ！！

「子供がどう思うのか判りませんが、……人間って、年齢を重ねても、実はあまり進歩したりしないものなんですよ」

まあ、少なくとも私はそうだった。

年齢に応じて知識は確かに増えたけれど、本質的な部分では、自分
はなにも進歩してないと思う。

「コナン君はもともと、理論的な考え方が得意な人なんだと思います。
子供のうちはまだ常識が足りないので、ふつうならそれが表に現れる
ことはないんでしょうけど、君はふつうの小学一年生よりも常識的な
知識が多いみたいです。だったら私にかなう訳がないです。私は
君ほど頭がよくないというのは判り切ってますから」

「……愛夏姉ちゃんは、頭いいと思うけど」

「そんなことはないですよ」

「だって、今までぼくの追及から逃げてるじゃない。頭がよくなかつ
たらとつくにボロを出してるところだよ」

—— 空気が凍った。

コナン君の声は犯人を追い詰めるときそのもので、姿が見えないこ
ともあっても子供とは思えなかった。

というか、私はもともと彼を子供だなんて思っていないんだけど。

彼は確かに天才で、今まで様々な事件の謎を解いてきたけれど、でもたぶん私のことはどう捉えていいのか判らない部分の方が多いんだと思う。

証拠が集まるようなたぐいの話でもないから、だから彼は私に自白を促そうとしてるんだ。

……まだだ。

まだ自白はできない。

私の自白を信じるだけの証拠を、彼はまだ手にしていない。

でも、私が故意に漏らした証拠では、彼はぜったいに満足なんかしないだろうから。

今はこのまま少しずつ私がボロを出し続けるしかないんだ。

そのときだった。

「ねえ、愛夏姉——」

「シッ、黙って」

窓の外は今も強い雨が降っていて、明確な気配を感じることもなんかはできなかったけれど。

ずっと身構えていた私には、小さな物音と人の気配を感じることができて。

私のただならぬ声に、探偵の優秀な耳を持つコナン君も窓の気配に気づいたようだった。

お互いに横たわったまま、声だけを交わしていた私たちは、黙ってさえいれば犯人にはすでに寝入っているように見えただろう。

完全に部屋に侵入したとき、私は大きく息を吸って声を上げた。

「きゃあああああ——!!」

一瞬驚いて動きを止めた犯人のスキをついて蘭さんに駆け寄って抱き上げる。

そのままドアに駆け寄ろうとする私に犯人が斧を振り上げて――

「やめろー!」

コナン君が犯人のうしろから抱き着いて動きを止めようとする。

でも小さなコナン君の力ではどうても犯人の動きを止めることなどできない。

「誰かー!! たすけてー!! 包帯男に殺されるー!!」

ドアの近くまで行って蘭さんを背にかばいながら部屋の明かりをつけた。

犯人がひるんで顔を隠そうとしたのが判る。

「誰か来てー!! 高橋さんに殺されるー!!」

これは、一つの賭けだ。

あるタイミングで私はこの言葉を叫ぶつもりだった。

一つは、蘭さんが私よりも安全な場所にいること。

そしてもう一つは、コナン君が犯人の体形を確認したあとであること。

次の瞬間に私が殺される危険もあったけれど、周囲の部屋が騒がしくなったことで、犯人は失敗を悟ったのだろう。

すぐに窓の外に逃げ去っていったから、私は賭けに勝ったことを知った。

「あ、まてっ!」

コナン君は包帯男のあとを追おうとしたけれど、どうやら原作通り、足をくじいてしまったらしい。

直後に部屋に入ってきた園子さんに蘭さんを任せて、私はコナン君に近づいていった。

「動かない方がいいですよ」

「愛夏姉ちゃん、どうして高橋さんの名前を叫んだの？」

「あとで説明します。今シップを出しますから」

私が自分のかばんの中から用意していたシップを出している間に、ほかの部屋のみんなが集まってきた。

蘭さんも最後の方は起きていたようで、包帯男に襲われたことをみんなに説明してくれた。

「でも愛夏ちゃん、どうして高橋の名前を？」

「すみません。得体のしれない包帯男より、高橋さんの方が角谷さんたちが助けに来てくれる確率が高いと思ひまして。高橋さん、お名前を借りちゃってすみませんでした」

「……ひどいな。僕を犯人にするなんて」

「すみません。でも殺されかけたとっさのことなので、どうか許してください」

そう叫べばあなたがビビるかもしれないと思つたつてのもあるんだよ。

原作で無事だった蘭さんは大丈夫かもしれないけど、原作にいない私はいつ殺されても不思議じゃないんだ。

いろいろ考えて最善を尽くさないと、本当に怖いんだから。

……まあ、逆に正体を見られたと思ひ込んだ犯人に殺されるかもしれないとも思つたけどね。

(そのときはそのときで、せめて犯人解明の礎になれたつてことで諦

めるけど)

私はシツプは持ってきたけど包帯は持ってきてないので(だって手荷物に包帯とか、犯人と間違われそうだし)、別荘の救急箱から持ってきたものを蘭さんがコナン君に巻いてくれて。

このままバラバラに部屋にいるのは危ないからと、全員で食堂で朝を待つことになった。

その時、コナン君が綾子さんが持つ知佳子さんのチョコレートに気付いたのは原作通り。

そのあと食堂で犯人について話したり、コナン君が角谷さんのビデオを確認したり、綾子さんに知佳子さんの最後の行動について確認したりと、ほぼ原作通りに進んでいった。

あとは、蘭さんが他の人の部屋を開けた話をしていた直後、停電になった時。

包帯男の斧に襲われるのが蘭さんか、それとも私なのか。

私だったらたぶん撃退なんかできないだろうから、斧に襲われてジ・エンドとなるのだろうか……。

「て、停電よー！」

「今の雷でどこかの電線が切れたんだ」

「こ、怖いよー」

「わ、私……キツチンから口ウソク取ってくる！」

「おい、一人で大丈夫か？」

「私も行きます」

「ほくも」

私は声をかけずにこっそりと蘭さんたちについていった。

ときどき光る稲妻に照らされてるからかろうじて様子が判るけど、そうじゃなかったら真っ暗で手探りで進まなきゃならなかっただろう。

ようやく辿り着いた台所で、蘭さんたちがろうそくに火をつけた時。

窓のガラスが割れるような音が食堂の方から聞こえてきて。

そのあと、人が近づいてくるような音がしたから、私は道を開けてその気配が通り過ぎる瞬間、足をかけたんだ。

たぶんその人が転んだのだろう音と、重いものが床に落ちる音がして、気配に気づいた蘭さんがろうそくを近づけると、床に斧が突き刺さっているのが確認できたんだ。

「ちよつと、これ斧じゃない？」

「じゃあ、さつきここにいた人って」

その時、別荘の明かりがついた。

「あ、復旧した。……え？ 愛夏ちゃん来てたの？」

「うん、一応仕事で来てるし」

「なんだ声かけてよ。怖いじゃない」

「ごめんね」

だって、犯人に私がどこにいるのか知らせたくなかったんだもん。

私が見つからなければ蘭さんを狙うはずだから、囮にしてあわよくば現行犯で、なんてことも思ったんだけどね。

さすがに転ばせたくらいじゃ、明かりがつくまでその場にとどまってはくれませんでした。

でも私の攻撃力なんてそれこそ武器でもなければほんとにささやかなものだしな。

(だいたい素手で電柱にヒビを入れる女子高生と比較されたくないし)

園子さんの悲鳴に食堂へと駆け付けると、食堂のベランダの窓が割

られていて、包帯男がそこから侵入したように見えた。

……高橋さん、あの暗闇の中でベランダまで上がって窓を割ったあと、斧を持って蘭さんを襲って、再び食堂のみんなと合流したのか。息を乱してる様子もないし、ほかの人たちと会わなかった2年間であそこまで痩せたつてことは、かなり運動して頑張つてダイエットしたんだろうな。

その情熱をもっと違うところに向けることはできなかつたんだろうか。

私もベランダまで上がって、鍵とあと、手すりの傷も確認することができた。

このままだと雨が吹き込んでくるし、ガラスが散乱して危ないから、できれば掃除と修理をしたいところだ。

「私、掃除用具持ってきますね」

「愛夏姉ちゃん、危ないからあとでいいよ。明るくなってからやろう」

「そうだな。掃除中に襲われても困るしな」

「それよりスリッパに破片がついてると思うから、ここで落としてから降りよう」

コナン君に促されてスリッパの破片を落としたあと、私もテーブルの椅子に座った。

もう、事件を解決するピースはそろったはずだ。

あとはコナン君の麻酔銃で、推理クイーン園子の誕生を待つばかりで。

その時、なぜか急に眠気がさしてきて。

事件解決を待たずに、椅子に座ったまま私は眠ってしまったみたいだった。

—— ふつ、本当にそんな人が森の中にいると思ってるんですか？
誰かがしゃべっている。

—— 思い出してください、蘭さんと私が部屋の中で襲われたときのことを

かなり聞き覚えのある声だ。
ていうか、これ、たぶん、私の声だ。

—— じゃあなぜ、あの部屋には泥のあとがなかったんですか？
外は土砂降りですよ

でも、なんで私の声が聞こえるの？
私、今、しゃべってないよね？
私にしゃべらずに私の声が聞こえるとか……

—— 侵入口はおそらく、隣の無人になった知佳子さんの部屋でしょう。包帯男はそこからベランダを伝って窓を割って私たちの部屋に侵入した

もしかして、身体を乗っ取られてる、とか？
……まさか私、今まで「高久喜愛夏」の身体を乗っ取ってて、ついさっきまでは支配権を持つてたけど、それを取り返されたとか？
これもできるだけ考えないようにしていたことだ。

もしかしたら私の身体は本当は若返った私じゃなく「高久喜愛夏」自身の身体で、その中に「高久喜愛夏」は生きているかもしれないな

い、って。

今、私が自分の身体だと思っているのは、本当は「高久喜愛夏」の身体なんじゃないか、って。

——でも私が大声を出したから、慌てて部屋に戻って着替えて、皆さんに合流したんです

とにかく一度声を出してみなきゃ。

支配権が私にないならそれでもいいけど、でも確かめないといけな
いと思うから。

「……あ！」

よし、声、出せた。

とりあえず全面支配は受けてないみたいだから、たとえば「高久喜愛夏」がいたとしてもそれほど強い支配じゃないだろう。

「どうかした？」

「なんだよ、途中で黙ったりして。続きを話せよ」

……続き？

それって、今まで話していたことの……？

確か、さつきまで聞こえてたのは蘭さんを襲った犯人が部屋に侵入した経緯だったから、確か次は——

「それと包帯男は、窓の下にあった鍵の位置に、正確に穴をあけています。あそこに鍵があるのを知ってるのは、別荘内を詳しく知っている人だけです。つまり、知佳子さんを殺して蘭さんを襲った犯人は、この中にいるんです」

この時私はまだ夢うつつで、続きをと言われたからとりあえず記憶にあるマンガの内容を話していただけなんだけど。

続けているうちにふと、「なんで私、こんな話をしてるんだ？」ってなことに思い至って。

なんか記憶がごちゃごちゃやしていて、私に続きを促したのがいったい誰だったのか、ってことも判ってなくて。

でもそれが太田さんだっただけに気付いた瞬間、私は一気に目を覚ましたんだ。

「……え？」

「なんだよ、さっきからとつぜん声をあげたりして。なにかの病気か？」

いや、病気って、ただ眠ってただけなんですけど!?

……今、私、もしかして眠りの小五郎をやってた、とか？

って、なんでコナン君、素直に蘭さんか園子さんを探偵役にしなかったんだよ!

これじゃ私、もうほんとに探偵するしかないじゃないか!

「……私、どこまで話しました？」

「高橋が犯人で、死体を運んだ証拠があるってところだよ! いいかげんにしろ!」

「すみません。……皆さんが包帯男を追って出て行ったあと、綾子さんが玄関で知佳子さんのチョーカーを拾っています。ビデオを見れば判りますが、包帯男に抱えられた知佳子さんは、確かに首にチョーカーをつけていました。皆さんが出て行ったあとにそれが玄関に落ちていたということは、あの時知佳子さんを抱えて玄関を通った人がいるということですよ」

「だから、僕はあの時手ぶらだったって。それに死体って重いんだろ? そんなものを気づかれずに運べるはずが」

「死体なら。でも、首だけなら持ち運ぶことができるはずですよ。あの時知佳子さんの首から下はマントに隠れて見えませんでしたし、死体はバラバラだったんですから」

「ば、ばかばかしい！ 首だけだって同じことだ！ なんで僕が知佳子を殺さなきゃならないんだよ！ それに蘭さんや愛夏さんまで。それに—— 僕が人なんか殺せるはずがないだろう！」

……ああ、人を追い詰めるのって、なんでこんなに疲労感があるんだろう。

私は偽善者だから、できれば人を追い詰めたりなんかしたくないって思っちゃう人種なんだよ。

憎まれ役なんか引き受けたくないし、本当だったら後輩の指導みたいな仕事だつてしたくない。

こんなこと、日常的にやってる名探偵にはほんとに尊敬の一言しかないよ。

でも、やるしかないんだよね。

ここまで来て誰かにこの役を押し付けるなんて無理なんだから。

「ふ……どうして言わないんですか？ 包帯男と自分とでは、体形がぜんぜん違うだろう、って」

「そ、そうだよ高橋！ お前どうして」

「高橋さんは言わなかったんじゃない。私に聞き返されるのが怖くて、言えなかったんです。『あなた本当に太ってるんですか？』って」

そのあと——

私は高橋さんが知佳子さんの首をおなかに入れて運んだトリックを披露して。

蘭さんが誤って高橋さんの本当の体形を見てしまったことと、その口封じのために蘭さんを襲ったこと。

本命の知佳子さんを逃がさないよう、橋を落として電話線を切ったことなんかを説明して。

やがて動機の解明に至ったとき、高橋さんはようやく自分が知佳子さんを殺したと自白してくれた。

ナイフを取り出して自殺しようとした高橋さんを、私は止める気にはならなかった。

でもその時、私の声でコナン君が叫んだんだ。

「ぎげんじゃねーよてめえ！ 死にたきや勝手に死にやがれバーロー！！」

こ、これは、もしかして口パクすべきなのか!?

「確かにお前は敦子さんのために罪を犯したのかもしれないねえよ。だがなー、そのあと蘭を襲ったのは、正義のためでもなんでもねー。お前は怖かったんだ。犯罪者になってしまう自分が怖くて蘭を襲ったんだ！ 今のおまえは、正義の使者なんかじゃない!! ただの醜い、血に飢えた殺人者なんだよ!!」

なんとか原作を思い出しながら口を合わせて。

周りの人たちが私を見る、驚いたような視線の痛みには耐えながら、なんとか態度だけは堂々と装った。

でも、内心ではマジでガクブルなんですけど。

この展開、私にとってもかなりヤバいけど、名探偵にとっても相当ヤバい状況だろうから。

私は原作を、物語の先の展開を知っている。

名探偵は大人の頭脳を持っていて、人を眠らせてその人の声で事件を解決している。

お互いに、お互いだけが、この状況に気付いてしまった。

私は元から知ってたことだったけれど、でも私が知っているということ、名探偵は知ってしまった。

さて、私が途中から事件を解いたあの推理を、名探偵はどう受け取っただろう？

私に探偵の素質があるとか、変な誤解はしてないことを祈ろう。

そうじゃなかったら、今後私が事件に巻き込まれる確率が、また高くなりそうな予感がするから。

頼む、もうこれっきりで勘弁してください。

私、探偵をやるほどの強靱なメンタルなんて持ち合わせてないんです。

5月5日（木）

名探偵の麻酔針のおかげで眠気が収まらなかった私は、失礼して部屋で休ませてもらうことにした。

とりあえずもう包帯男の危険はないし、ほかの人は念のため夜明けまで高橋さんを見張るつもりのようなだから、逆恨みで私が殺されるようなこともないだろうし。

そう申し出ると、なんとコナン君までが部屋に戻って寝ると言い出したんだ。

（いや、小学生がここで部屋に戻るのものはものすごく普通なんだけど！
けど!!）

歩けない名探偵を私がおんぶして（眠気でフラフラしてるからけっこう怖かった）、階段を上がって部屋に戻ると、さっそくコナン君が訊いてきた。

「愛夏姉ちゃん、さっきの……」

「君が始めたんですよね、あの推理ショー」

「……！」

「途中で目が覚めちゃったので、仕方なく引き継いだんです。なのでもう二度とやりたくないと思いました」

先に結論を言っておく。

だって、今のこの状態だと、いつまで起きていられるか判らないし。

「……愛夏姉ちゃんは、ぼくがおかしいと思わないの？　ときどき大人みたいやしやべり方をするし、愛夏姉ちゃん以外にはわからなかった、犯人を指摘したり」

「なにか事情があるんだとは思ってますけど。……別に誰も迷惑してないですし、そういう小学一年生が世界に一人くらいはいてもいいんじゃないですか？」

「……その事情、聞きたいと思わない？」

「聞いたら否応なしに巻き込まれそうな気がするので、いいです。私はこの世界で平凡に生きていきたいので」

まあ、誰も迷惑してないかどうかは知らないけどね。

私はまだ、彼が工藤新一と同一人物だとか、黒づくめの男に薬を飲まされて縮んだとか、核心に触れる部分は知らないでいたいと思うんだ。

コナン君が思う、私のコナン君に対する認識は、天才的な推理力を持った小学生探偵、それでいい。

それ以上知らなければ、これから来る灰原哀なんかも必要以上に関わらなくて済むはずだから。

「……証拠が、見つからないんだ」

ぼそっと、名探偵が言う。

私が黙っていると、名探偵はさらに続けた。

「愛夏姉ちゃんの不自然な行動、つなげてみれば示してるものはない。状況証拠だけで決定的な証拠が見つからない。……言ってる意味、判るよね？」

いや、判るよ、判るけど……。

だから自白しろって言われても、君はまだたぶん半信半疑だ。

君が半信半疑でいる今はまだ、私は自白できない。

「証拠は、君自身が見つけるべきだと思いますよ」

「話してはくれないの？」

「話しても、君は信じないでしょ。君のやり方は、動かぬ証拠を突き付けて、言い逃れができないところまで追いつめることじゃないんですか？」

「……状況証拠はどんどん積みあがっていくのに」

少し苛立つように言ったコナン君の様子を見て、私はまた少しのボロを出したことを知った。

たぶん今までもこの調子でかなりのボロを出してるんだろうな自分。

いったい彼の中でどれだけの状況証拠が積みあがっていることやら。

さすがに限界だったのでベッドに入る。

名探偵もそれ以上は話しかけてこなかったから、私はそのままぐっすり寝入ってしまった。

目が覚めた時はすでに日も高くなっていて、別荘にはたくさん警官が出入りしているとところだった。

……こりや、バイト代は諦めた方がよさそうだな。

その場で事情聴取を受けて、帰っていいと言われたのはそろそろ日が落ちるかという頃だった。

それから徒歩で山を越えて、警察の車で駅まで送ってもらったあと、電車に乗る。

ボックス席に座ったのは、私と園子さん、向かいに蘭さんとコナン君で、同窓会組は別のボックスだ。

あちらは文字通りお通夜のようだったけれど、こっちの席は園子さんの明るさにはずいぶん助けられていた。

「それにしても、愛夏の推理と最後の一喝にはほんと、驚かされたわね」

「ほんと、まるで新一みたいだった」

「……思い出すと恥ずかしいんだけど」

「照れないの。でも愛夏にあんな特技があつたなんてね。私が特別に推理クイーンと呼んであげるわ」

いえ、その名前はいつか園子さんが探偵役をするときのために取っておいてください。

もう私があんなことをする機会はないですから。

……ないですよね……？

「あと、忘れないうちにこれ渡しとくわ。今回のバイト代」

「ありがとうございます」

「姉キが愛夏に感謝しててね、少しだけど上乘せしてくれたから。ほんとに少なくてあれだけど取っというて」

封筒の中身を見ると、万札が3枚と交通費相当の千円札が入っていた。

最初に決めたバイト代が2万で、でも本来の仕事ではあまり役に立ってなかったから、なんか申し訳ない気がする。

「なんか私、寝てばっかりで仕事の方はほとんどできなかつたのに。こんなにもらっちゃっていいの？」

「だって愛夏がいなかったら、朝までずっと包帯男の恐怖と戦うことになってたのよ。まあ、知佳子さんのことは残念だったけど、それだけでも十分愛夏がいた価値はあるわよ」

いやそれ、私がいなくても、コナン君がちやんと解決してくれてたから。

しかも推理クイーンの称号を園子さんから奪っちゃったら、私の存在って園子さんにとってはマイナスしかなかったことになるし。

「納得できないって顔ね。判ったわ。それを受け取る代わりに、私の言うこと一つだけ聞いてくれる？」

「無茶なことじゃなければ」

「大丈夫大丈夫。実は明日、蘭とカラオケに行くんだけどね、愛夏も一緒にどうかな？」

「それ、お願いでも何でもなしと思うんだけど」

「お願いだなんて言っていないわよ。それに無茶なことでもないでしょう？ 一度了承したんだから、いいから来なさい」

うん、園子さんにはかなわないな。

私も笑顔に戻って、園子さんの誘いを受けることにした。

……さて、次はカラオケボックス殺人事件ですか。

悲しい事件だったから、せめて被害者を助けて誤解を解きたいところではあるんだけど。

世界の修正力、どうにかして勝てる方法はないのかな。

FILE. 12 想い出補正は最強 〈カラオケボックス殺人事件〉

5月6日(金)

早朝、私はいつもの朝風呂といつもの朝食のあと、工藤新一から買い取った一張羅を前に悩んでいました。

今日は夕方の6時に待ち合わせて、園子さんたちとカラオケに行く予定なんだけど、今までのパターンだとおそらく今日はカラオケボックス殺人事件が起こるはずで。

相手は芸能人とはいえロックバンドで、けっこうラフな格好で来るはずだから、別にGパンでもOKだとは思っただけ。

……すでに2日着た一張羅、実はまだ洗濯を一度もしたことがないんだよね。

(2回目の時はスプレーしてごまかしてました。まあ、洗濯する時間もなかったんだけど)

今回も時間はないから、着るとなったら思いっきりスプレーしていいんじゃないんだけど、さすがに今回着たあとは諦めて洗濯するしかないんですよ。

おしやれ着の洗濯なんて、とうぜんやったことはなかったりする。私は通勤の車でいつもラジオを聞いてたから、聞きかじりでなんとなく洗濯の方法くらいは判るんだけど。

(確かたたんだ状態で押し洗いをして、脱水は1分以内、干すときも吊るさずにタオルの上で広げる、って感じだった気が……)

たぶん洗剤なんかも、いつもの粉のじゃなくて専用のを使わなきゃなんだろうな。

工藤新一、買い取るときだけじゃなく、買ったあとも思いっきり私

を悩ませてくれます。

ともあれ今悩んでいても仕方がないので、着る服はこれに決めてスプレーしまくったあと、何十年ぶりかでお米のご飯を炊くことにした。

というのも、今までいちおう仏壇には、毎日とは言わないけれどもご飯とお水を上げてたんだけど。

ご飯の方は、母が炊いたあと冷凍庫に小分けにしてあったのを電子レンジで解凍してたのが、とうとうなくなっちゃったんだ。

(うちの母も年だから、毎日ご飯を炊くなんてことはしてなかったんだよね。だから数日に一度炊飯器の限界まで炊いたのを小分けして冷凍庫に詰めまくってたんだ)

私も母に倣って、この方法で仏壇用のご飯を準備することにした。

お米はけっこう残ってたから、まずお米を計量カップで5カップ測って、炊飯器の内釜に入れて。

何度かといで水気を切ったあと、内釜のラインまで水を入れて、しばらくの間放置する。

待ち時間があるといつ煙草が吸いたくなるので、待つてる間近所をジョギングでもしようかと思つてふと気が付いたんだ。

いちおう体重計には毎朝お風呂上りに乗ってるんだけど、トリップ後の1か月で私、3キロくらい体重が減ってたんだってことに。

今45歳の私は27年前に高校を卒業して就職したんだけど。

部活をやめたのに加えて、ちょうどバブルの時代で飲み会や夕食付の会議や研修(そんなものがあったんだよ、あの頃は)が増えたこともあつて、けっこう体重が増えてくれたんだよね。

それからは断続的なダイエットの日々で、増えたり減ったりしながら最近では10キロ増ぐらいで安定してた訳で。

今でも毎朝体重計に乗るのが習慣になっていて、減るのが嬉しいからトリップしてからのこの1か月は放置してたんだけど、さすがにハ

ンガーノックまで起こしたとあつては食生活の見直しが必要だと思うようになったんだ。

トリップ前の私の食生活は、朝はカ○リメ○ト（400キロカロリー）で、昼は職場に配達されるヘルシー弁当（500キロカロリー）、夜は母の手料理だから判らないけどたぶん700から800キロカロリーくらいだったと思う。

（これでも頑張つて抑えてた方なんだよ。うちの母、私がダイエットしようが構わずご飯を盛ってくれちゃうから。しかも毎日少しずつ知らない間に増やしていくという方法で）

この頃でトータル1600から1700キロカロリーくらいだった訳だけど、トリップしてからは——阿笠さんと食べた頃は除いて——1食抜いたり朝晩カ○リメ○トの時もあつたから、前よりもむしろ減ってるくらいだったんだよね。

ただでさえ若返つて筋肉の量が増えるのに加えて、摂取カロリーが減ればどうぜん体重は減りますよ。

このままだと筋肉量も落ちて、以前の太りやすく痩せにくい体質に逆戻りは必至だという結論に至つた訳です。

放置してから30分ほどたったので、炊飯器に火をつけて。

私は以前職場で買わされた料理本（全12巻）を開いてみた。

………さすがはバブル時代に書かれた本だけあるな。

肝心の作り方よりも、テーブルをどう演出するかとか、贅沢方面に重点が置かれてるし。

今まで開いたことなかったけど、この本で料理を覚えられる人がいたら尊敬するわマジで。

（つか、これどう考えても上級者向けだよ。なんで料理しないのにこんな本買わされてるんだ20歳の自分）

まあ、過去の失敗は置いといて。

私は別に、料理ができない訳じゃないと思う。

ただ、致命的にめんどくさがりなので、料理する工程のめんどくさと食べた時の幸せ感と、比重がめんどくささにあるだけで。

昔、中学一年生の時、母が夜になっても帰ってこなかったことがあって。

(たぶん入院中の父のお見舞いで遅くなってたんだと思う)

おなかを空かせた当時小学3年生の妹と二人だけで、なんとか妹を食べさせなきゃという義務感から、冷蔵庫にあった食材でピーマンの肉詰めを作ったことがあるんだよね。

大人になってから、妹が調理師になったきっかけが、その時私が作ったピーマンの肉詰めだったと話してくれて。

(それがおいしかったからなのかまずかったからなのかは聞きそびれたんだけどね。きつとおいしかったんだろう)

まあ、その時の私は、無言で食べながら妹に「まずいって言うなよー」オーラを発信してたりしたんだが。

高校生の頃はなぜか2か月ばかり、自宅内で自分一人だけ自炊をしたことがあるので、カレーや野菜いため、焼き肉に唐揚げあたりが作れるのは確認済みだ。

(これは単にお小遣いを増やしたかったからだだったりする。母に一人分の食費を算出してもらって、そのお金をもらって自炊したあと、残った分を小遣いに上乘せするという子供のつたない知恵だった。ちなみに小遣いの使い道はマンガだ)

この時は弁当も作ってたから、部活と両立がきつくてけつきよくやめたんだけどね。

そうか、お弁当に卵焼きやおひたしを入れたりもしたから、そのあたりもやろうと思えばたぶん作れるじゃん。

……自炊、するか？

冷蔵庫に残ってた食材は腐る前に捨てたけど、調味料類はかなり

残ってるし、もちろん調理器具はあるからやろうと思えば始めるのは簡単だけど。

でも一人で自炊とか、ぜったい食材を無駄にしそうだな。

だからといってコンビニやレトルトじゃあエンゲル係数がものすごいことになりそうだし。

自炊から逃げたくて言い訳をつらつら考えてるうちに炊飯器が止まって蒸らしに入る。

そろそろラップと秤としゃもじを用意しておくか。

私のご飯、45歳の時は一食80グラムでよかったんだけど。

(だんだん茶わん1杯のコメの量が増えていくから、ある時母にグラムを量るように言い渡したんだよね。母は毎晩のように「こんなにちよつとじゃ足りないでしょ」と文句を言ってたけど) さて、16歳だと何グラムくらいになるんだろう？

だいたいさ、昔と今とでは、食材に含まれる糖分の割合が違うような気がするし。

(専門家じゃないからあくまで「気がする」だけだけど)

私の子供の頃はスイカに塩をかけて食べたけど、それはわずかな甘さを少しでも感じるためで、今のスイカは塩なんかかけなくたって十分甘かった。

果物だけじゃなくて、キャベツみたいな野菜とかもぜったい糖度が増してると思うんだよ。

だから、私が学生の頃と同じ調子で食べてたら、間違いなく太るような気がする。

いきなり食べる量を増やすのも怖いので、とりあえず今回は100グラムにして、10個ほどラップで包んだあと、仏壇用の40グラムを残りぜんぶで作っておいた。

作業が終わったのがちようどお昼頃。

せっかく炊き立てのご飯があるから、レトルトのカレーでもあった

めてカレーライスにしようか。

ご飯1つ分だけ冷凍庫へ入れずにレンジでカレーを温めたあと、お皿に盛って昼食にする。

……ご飯、ちよつと柔らかすぎたかな？

まあ、芯がないから良しとしよう。

夜はたぶんカラオケボックス殺人事件だから、お店で作ったサンドイッチやおにぎりなんかが出るだろう。

木村達也にはできれば死んでほしくないけど、事件が起こったあとはいくら大丈夫といってもテーブルの上のものを食べるのは怖いからね。

事件が起こる前にさっさとおなか一杯にしてしまうことにしよう。

そんなこんなで、レトルトカレーだけで昼食をとったあと、1枚だけ汚したお皿(昔パン屋の景品でもらった白いヤツ)とスプーン、しやもじや炊飯器なんかを洗っていたところ。

部屋の方でケータイの着信音がしたから、手を拭いて見に行ったらなんと液晶画面に工藤新一の名前が……！

もちろんソツコー身支度を整えて正座で出ましたよ！

(見えないだろうけど)

「はい」

『……工藤新一だけど。今、大丈夫か？』

「はい」

なんか、前2回に比べると工藤新一のテンションが低い。

これはもしや工藤新一、探偵モードだったりするんだろうか。

そうなるともたしても大量の状況証拠を提供することになりそう
だ。

とにかく、私が江戸川コナンと工藤新一が同一人物だと知ってい

る、ということだけはバレないようにしないとな。

『この間、悪かったな。けつきよく高い買い物させちまって』

探偵モードじゃなくて謝罪モードでした。

毛利探偵の時も思ったけど、名探偵が真剣に謝るのって、なんかすごく違和感があるな。

キャラクターとしての工藤新一はすごい自信家だったから、そのイメージが私の中に定着してるからなんだろうけれど。

もちろん現実に生きている工藤新一は間違うことだってあるし、人に謝ることだってあるんだろう。

「いえ、……別に怒ってませんので、気になさらないでください」

高い買い物だったけど、私も気に入ってるし、なんだかんだ役に立ってるからさ。

結果としてはそう悪くなかったと思ってるよ。

『そうか。ならいいんだけど。——で、こっからが本題なんだけど、なんでオメー、病院抜け出して米花シネマまで行ったりしたんだよ！ オレ前に言ったよな、自分を大事にしろって！』

うおおおお、なんだよ、いきなり叱られてるよ私！

これはあれか？ あの時コナン君に説教したから、その復讐ってヤツなのか!?

「すみませんでした」

『謝って話を終わらせようとすんじゃねえよ！ で？ 理由は？』

「あ、はい。……あの日、蘭さんが工藤さんと待ち合わせてるのを知ってたので。その……工藤さんに会いに行っただんです」

『……………?』

なんだか工藤新一が電話の向こうで黙ってしまいました。
しばらく声が聞こえなかったので、私が続きを話し出すのを待つて
るんだと思って、恐る恐る声を出す。

「……今まで、お仕事をいただきましたし、直接会ってお礼を言おうか
と……」

『……………』

「……別に、デートの邪魔をするつもりはなかったんですが……」
『……………』

「……今思えば、完全にお邪魔虫でした。すみません……」

『……そんなことねえよ。蘭とは別に、そういうんじゃねーし』

なんか、声が暗いな。

もしかして怒らせたんだろうか？

いや、今の私の話だけなら、怒らせる要素はないと思うんだが。

『とにかく周りを心配させんな。博士にもちやんと謝っておけよ』
「あ、はい。そうします」

そういえばあれからまだ阿笠さんに会ってないや。

電話が終わったらさっそく阿笠さんに会いに行こう。

『それと』

って、まだあるのかよ！

『……オメー、園子んちの別荘の事件、解いたんだってな』
「……………」

それについてはあまり追及していただきたくないんですけど。

『黙るなよ』

「あ、……はい」

『経緯はコナンのヤツに聞いた。……オメー、どの時点で気づいたんだ？ 高橋って奴が犯人だ、って』

さすがにこんな質問に対する回答なんて用意してなかったよ！

嘘をついたりするの、この世界に来てからけっこう得意というか、慣れてきてはいたけど。

探偵の耳を全開にして聞いている工藤新一をどこまで騙せるかなんてのはまったく自信ないし！

「……最初に違和感を持ったのは、高橋さんが屋根の修理をしていると聞いた時です。私、少し前に行って、別荘の掃除を手伝ったんですけど。雨が降りそうだったので、管理人の方に屋根のことを聞いたんです。そうしたら、屋根は毎年点検と、必要があれば修理をされていて、傷んでいるようなことはないとのことだったので」

『それ、まだ事件が起きる前だよな』

「はい。ですから、その時点では単なる違和感です。でも、いろいろ起こっていくうちに、犯人が高橋さんだと仮定したら、すぐくうまくつながつてしまったので。だから、夜中に襲われたときに、包帯男の前で高橋さんの名前を出してみました。もしかしたら反応するんじゃないかと思っただんです」

『それで？ 反応したのか？』

「よく、判りませんでした」

『……は？』

「私、工藤さんのように観察眼が優れてないので、正直判りませんでした。でもそのあと、コナン君がいろいろ聞き込みをしていたので、情報をつなげたら何となくつながっちゃったので」

声、震えてるんじゃないだろうか？

その場でいろいろ組み立てながら話すのとか、かなり苦手な方ではあるんだけど。

でも私も必死だからね。

江戸川コナンが知らない情報として屋根のことを話せば、今回私が事件を解いたのが単なる偶然だったと思ってもらえるんじゃないかと考えたんだ。

『直感型、とでもいうのか?』

「はい?」

『オメーみてえなタイプの探偵もいるんだ。最初から犯人を特定しておいて、反応を見ながら証拠を集める、みたいな』

「私、探偵じゃないんですけど」

『あそこまで推理できりゃあ立派な探偵だろ。……コナンのヤツに聞いたんだけどな、あいつの推理を引き継いだって』

「……工藤さんは、コナン君の才能のこと」

『……ああ、知ってる。毛利のおっちゃんの実績はぜんぶあいつのものだ』

「あの、あの時は、私は、仕方なくコナン君の推理を引き継いだだけで、……本来の私は、探偵なんて向いてなくて」

『ああ、そうだろうな。オメーは内気で人見知りだから、自分の推理を人に話すのなんか、今回のようなことでもなきや、とうていしねえだろうな』

「あ、はい」

『でもな、オメーがそうやって口をつぐんでることで、新しい犯罪が生まれることもあるんだよ』

工藤新一の口調と言葉にドキツとした。

そうか、工藤新一が怒ってるのは、私が犯人を判ってて、それなのに自分から推理ショーをしようとしなかったことなんだ。

工藤新一だって、犯人が罪を認めるまで、自分の推理が本当に正し

いのか、ぜったいの自信なんかない。

それでも推理ショーをするのは、これ以上犯罪に巻き込まれる人
できるだけ減らすためなんだ。

『オメー、森谷教授のことはいつから疑ってたんだ?』

「……」

『黙るな』

「は、はい。……違和感なら、ガーデンパーティーの時です」

『はあ!? ど、どういうことだよ! ちゃんと話せ!』

「……あの時、私たち以外にパーティーにいた人たち、全員なにかの実績がある人でした。……同伴者が、いませんでした」

『……それで?』

「テレビで、東都環状線が通ってる橋が、森谷教授のギャラリーにあつた写真と同じだったので。……黒川さんの家と同じく、壊したいのかな、って」

まあ、黒川邸放火のニュース自体は私は見てないんだが。

(今朝お風呂を溜めてる間に数日分の新聞を読み返してて初めて知りました)

ていうか私、なんだかどんどん白白させられてるんだけど……!

『その時点ではまだ森谷教授に恨みを持つ人間の犯行だとふつうは思うんだけどな。……で? 病院を抜け出した本当の理由は?』

……ああ、やっぱり嘘だつてバレてるし。

「……蘭さんを、助けに行きました」

『なるほど。それであんな無茶をしたつてことか。やつとつながったぜ。……それくらい理由がなきや、オメーが阿笠博士の電話を放置してまであんなことする訳ねえからな』

うん、まあ、そうだよね、普通に考えて。

私は阿笠さんにはお世話になってるし、そんな理由でもなかったら心配かけようだなんて思わないだろう。

『それで、籟本一郎はいつから疑ってたんだ？』

おい、この調子で私が巻き込まれた事件ぜんぶ尋問する気が工藤新一!?

「一郎様は疑ってません」

『そうなのか？』

「はい。トイレで刺された時が最初の違和感でした。だからなにも『あれはさすがに違和感がありすぎたからな。疑うのはふつうか』

と、まるで見てきたことのように言う。

……まあ、見てきたんだけど。

ここで、工藤新一は少し口調を変えて。

『……なあ』

「はい」

『これからも、コナンのヤツのこと、助けてやってくんねえかな』

え？ それはもしかして、私にこれからも眠りの小五郎をやってのことですか？

いやいや、それはさすがに無理です。

私には探偵に必要なぜったいの自信とか、目立ちたがり精神とか、そういうのが欠如してますし。

『黙るなよ。別に毎回推理しろとか言ってる訳じゃねーから。ただ、オメーが持つてる直感の違和感とか、そういうのをコナンのヤツに教えてやってくれ。それだけで、あいつはどうにでもするだろうから』

……いや、私が持つてるのは直感でもなんでもなくて、原作知識なんですけど。

あなたが言ってるのはつまり、私に犯人を名指ししろってのと同じことなんです。

「……私、正直、もう事件とかは……」

『ああ、そうだったな。……ワリイ、今は忘れてくれ』

「はい」

『その代わり、ときどきこうしてオレと話してくれねえか？ その

……事件のこととか、話せるヤツって、あんまいねーんだ』

「……」

『ここで黙るのかよ』

「……すみません」

いや別に、話をするのが嫌な訳じゃないよ。

むしろ声だけだから、昔あった「リ○ちゃん電話」みたいで、あんまり現実感がない分ちよくせつ会うより緊張感が少ないし。

ただ――

私は工藤新一を、現実の人間だと思いたくないんだと思う。

ずっとマンガの中の、アニメの中の、映画の中の人物だと思っ
たい。

私とは違う世界に住む人で、憧れの人で、ぜったいに手が届かない人、そう思っていたい。

彼を、私がいる場所まで連れてくる……引きずり下ろすようなことはしたくない。

―― 彼を現実の男だと、私にも手が届くんじやないかと、そう思ってしまうのが怖いんだ。

『まあいいや。勝手に電話すつから。着信拒否だけはできればしないでくれ。……傷つくから』

「……はい」

『じゃあな』

私の返事を待たずに、ケータイが沈黙して。

液晶表示を見たらなんと13分も工藤新一と話していた……らしい。

大きいため息をついたあと、改めて工藤新一との会話を思い出す。私がこれまでの事件に関して、ある程度の推理力を働かせていたことは、バレた。

じっさいは推理力なんかじゃなくて、私が原作を知ってるが故の不自然な行動だった訳だけど、それは私の直感力なんだと勝手に解釈してくれたらしい。

それならばもしもこの先に不自然な行動があったとして、彼はきつと私の直感なんだと思ってくれることだろう。

……まあ、悪くはない、かな。

問題があるとすれば、江戸川コナンや工藤新一がこれからも私に絡んでくる確率が、飛躍的に増大したってことだけで。

いやいやそれがいちばん問題だろ自分！

うっかり流されるんじゃねえよ！

コナンの世界で事件に関わるって、つまり死亡フラグまっしぐらってことなんだから!!

まあいいや、放置だ放置！

それより阿笠さんにちゃんと謝りに行こう。

昼ごはんの片づけを最後まで終わらせて、歯磨きをしたあと、私は

阿笠さんの家を訪ねた。

阿笠さんの家に行くと、そこには阿笠さんのほか、コナン君がいたり。

……そっか、コナン君が新一声で電話するのに一番都合がいいのつて、阿笠さんの家だもんね。

なぜそこに気付かなかったんだ自分。

「いらっしやい、愛夏君」

「こんにちわ、愛夏姉ちゃん」

「お二人とも、遅くなりましたが、先日の病院ではご心配をかけてすみませんでした」

ソファに座る前に頭を下げる。

阿笠さんに優しくお許しの言葉をいただいたあと、私はソファの空いてる場所に落ち着いた。

「愛夏君にとっては散々の連休だったようじゃのオ」

「はい。でも、悪いことばかりではなかったです。蘭さんの友人の鈴木園子さんや、お姉さんの綾子さんとも知り合えましたし」

「確か鈴木財閥のお嬢さんだったかの？」

「そうなんですか。どうりで動作やしやり方が洗練されていると思いました。一般庶民の私とはやっぱり一味違いますね」

コナン君、その微妙な表情はやめなさい。

園子さん、確かに性格はちよつとアレな感じだけど、よく見れば必死に庶民的な演技をしているのが判るじゃないですか。

……よく見ないと判らないけど。

「愛夏君に友人が増えるのはワシも大歓迎じゃ。仕事を探すのも大切かもしれないが、友人との時間も大切にしなさい」

「はい、ありがとうございます」

「大丈夫だよ博士。愛夏姉ちゃん、今日蘭姉ちゃんと園子姉ちゃんと一緒にカラオケに行くんだ。ぼくも一緒だよ」

「ほう、それは楽しみじゃな。わしもぜひ愛夏君の歌を聞いてみたいもんじゃ」

「うん、ぼくすごく楽しみにしてるの。愛夏姉ちゃん、ぼくと一緒に歌おうね」

「あ、はい、ぜひ」

ええつと、コナン君の歌って、確かものすごく斬新な音づかいで有名だったはずで。

(しかも何気に絶対音感の持ち主だとかいう設定があったりなかったり)

ていうか、私この一か月で気づいたんだけど、この世界に私が知ってる歌ってないような気がするんだ。

この間行つたテレビ局でも、歌つてた歌手もその歌もぜんぜん判らなかつたし。

たぶん、七つの子が作中に出てるから、有名どころの唱歌ならあると思うけどさ。

その中にカラオケで歌えるような曲が入ってることに期待しよう。

歌うことはね、嫌いじゃないんだ。

カラオケボックスなんてものが巷にでき始めたのが、確か私が高校生くらいの頃で。

その前は自宅でカラオケセット(高級品)か飲み屋で歌うのがほとんどだった時代。

学生はみんな、お気に入りのレコードかカセットテープをかけながら、流行の歌を歌手と一緒に歌っていた。

そんな時代を過ごしていたから、カラオケボックスってほんと、画期的だったんだ。

まだまだお小遣いで通えるような値段じゃないし、今みたいに曲数も多くないから、歌いたい歌がなくて泣くことも多かつただけけど。でも入ってる曲はみんなが知ってる流行歌だったから、判らない歌なんてものもあまりなくて、一体感みたいなのは昔の方がずっとあつたように思う。

年にほんの数回、特別な時に集まって歌うのが、すごく楽しい時代だつたんだ。

まあ、これも思い出補正つてヤツなんだと思うけどね。

今の若者は若者なりに、たくさんある曲を自由に選んで、友達が歌う知らない歌を楽しむなんてこともできたりするんだろう。

「愛夏姉ちゃんはどんな歌が好きなの？」

「私はあまり流行歌が判らないので、学校で習うような歌がいいです」「じゃあぼくが選んでもいい？」

「はい、お願いします」

「愛夏君も、すっかりコナン君に打ち解けたようじゃのオ。いいことじゃ、うんうん」

感慨深げな阿笠さんの言葉に、私はちよつとばかり照れてしまう。

まあ、私も最初の頃は、こんなに話せるようになるとは思わなかつたよ。

たぶん、コナン君が秘密の一部を打ち明けてくれたことで、お互いに変な緊張が減ったことがあるんだと思う。

名探偵も今日は以前の探るような視線を向けてくるようなことはなかつたし。

阿笠さんとコナン君と談笑して、時間を見計らって私は家へと戻ってきた。

待ち合わせまでの時間はまだあるけど、事件のことをぜんぜん考えてなかつたからね。

今回の事件、被害者はもちろん気の毒なんだけど、加害者も事件後に真実を知つてもものすごく後悔していた。

だから誰にとつても悲しい事件で、できれば未然に防いだあと、誤解も解いてしまいたいと思うんだ。

でも、どうしたら誤解は解けるんだろう。

あの、被害者が持ってた写真、裏側に書いてあった新曲を加害者に見せることができれば、誤解はたぶん解けると思うんだけど。

あの写真、確か被害者のロッカーから見つかるもので、事件現場にあったものじゃないんだよな。

だとしたら、事件前に被害者に歌を披露してもらうくらいしかないんだけど……。

新曲の話は確か本人からされたはずだから、その時に新曲が聴きたいとかねだつてみるか？

……この年になって、16歳の女の子っぽく男におねだりするとか……！

コナン君の苦悩と葛藤の日々が今本当に判つたような気がする。

考えているうちにそろそろ支度をする時間が近づいてきて。

気持ちを切り替えて、私は一度台所の湯沸かし器のお湯で髪の毛を落とすとした。

最初にあの服を着た時、髪は美容院でセットしてもらったストリートっぽいボブだった。

次の時はうしろで縛ってバレッタをつけた。

だから今回は、もともとの髪の癖を活かした感じにしようと思ったんだ。

私は濡らした髪の毛の水気を取って、少しだけドライヤーを当てたあと、髪全体にムースをなじませて毛先を握ってくるくる丸まるように固めてみた。

……うん、いいんじゃないか？

若返ってから癖が少なくなってたから、落ちかけのパーマみたいでアレだけど、それなりに雰囲気は出てる気がする。

前髪は内巻きにして、眉毛が出るくらい長さにしたら、いつものイメージとはだいぶ変わってくれたんじゃないかと思う。

かばんはいつもの大きいんだけど（たぶん家の中を探せば何か出てくるとは思うけど）、まあそこはぐい愛敬つてことで。

一張羅にサンダルで待ち合わせの毛利探偵事務所へ行くと、蘭さんが笑顔で迎えてくれた。

「わあ、愛夏ちゃん今日は髪下ろしてるんだ！パーマかけたの？」

「ううん、私もともとくせつ毛だから。ストレートの蘭さんがうらやましいよ」

「そうなの？ 私はこういうのが手軽にできるならくせつ毛もいいと思うけど」

「まあ、隣の芝生だね。蘭さんは今日もかわいい」

「ありがと。……コナン君、愛夏ちゃんこういうのも似合うよね」

「……うん。愛夏姉ちゃん、見るたんびにきれいになるね」

「……ありがとう」

なんか前回と似たような反応だ。

もしかしたら工藤家では、女性をほめるよう教育でもしてたりするんだろうか。

（まあ、あの工藤有希子さんならそれもありそうな気がする）

園子さんが来るのを待つて、毛利探偵はいなかったので事務所を留守番電話へと切り替えたあと、私たち4人は駅前のカラオケボックスへと向かった。

「いよいよ達也に会えるのね！ 私なに話そうかしら!？」

「楽しみよねー！　ねえ、もしかしたら一緒に歌ったりできるかな!?」
「だったらやっぱりヒット作の『血まみれの女神（ブラッディビース）』よね！　でも振り付けも間近で見たいし。ねえどうしよう蘭!?!」

前で盛り上がっている二人のうしろを、コナン君と並んでついでいく。

……やっぱり事件は起こしたくないよな。

でも、確かこの被害者、けつこう最初から機嫌が悪くて、周りに当たり散らしてるんだよね。

だからたとえ蘭さんたちが頼んでも、新曲歌ってくれるかどうか微妙なところかも。

「私はどちらかというと、新曲の方が聴きたいかな」

うしろから二人の会話に口をはさんでみた。

「え？　愛夏ちゃん、新曲って?」

「判らないけど、そろそろ用意されててもおかしくないかな、って」
「うん、どうなんだろう。でももしできてるなら聴きたいよね。ちよつと訊いてみる?」

「そうね。それで歌ってもらえたら、私たちがいちばん早く聞かせてもらったファンになるってことだもの！　いいわ、愛夏のそれ採用!」

とりあえず種だけは撒いておく。

これで新曲の話が出れば、二人は歌ってほしいとねだるはずだ。
かわいい女の子が二人でおねだりしたら、きっと彼も無下にはできないだろう。

受付で園子さんが名前を言うと、すでに話は通っていたようで。

案内された部屋に入るとレックスのメンバーはすでに来ていたようだった。

「あ、遅れてすみません！ 私、鈴木園子といます！ 今日はよろしくお願いします！」

「大丈夫よ、遅れてないから。私はマネージャーの寺原真理。ヴォーカルの木村達也は知ってるわよね。あとドラムが山田克己で、ギターの芝崎美江子よ。今日はよろしくね」

「はい！」

こちらでも自己紹介をして、空いている席に座らせてもらう。

私とコナン君は隣同士だ。

まずは飲み物を頼んで、メンバーたちはビールで乾杯。

もちろん未成年の私達はジュースだ。

「サイコーだったね今日のライブ!! 客のノリもよかったし!!」

「ああ、みんな達也のヴォーカルのおかげだよ!!」

「サイコーね —— ああっ！ 思い出した！ あの時の客だ、ミュージックタウンの時の!!」

そう言っつとつぜん木村達也が私を指さしたんだ！

「なんだよ達也とつぜん」

「あんどきも言っただろ!? ひな壇のいちばん上の客が、ノリはワライし拍手もおぎなり。な、ぜ、か、オレたちの時だけぼーっと見てたっつてー！」

「ああ、確かそんなこと言っつてたな……」

「え？ 愛夏ちゃんが？」

「そのお客だったつて言うんですか？」

「それ、人違いじゃ……」

あー、すみません蘭さん、たぶんそれ人違いじゃないです。
にしても木村達也、よくあんな暗いところで私の顔なんか覚えてた
な。

「覚えててくださったんですね。感激です」

「なにが感激だよ!! てめえ、オレのファンなんかじゃねえだろ!」

「ファンですよ。私、好きな人が前にいると固まる質なんです。困っ
た性格ですみません」

「……ぜってー違う」

それで興味を失ったようで、木村達也は元の席に戻っていった。

……あーびっくりした。

男の人に怒鳴られるとか、もともと超苦手だからな。

でも自動装着の45歳仮面が発動してくれたので、なんとか最小限
の騒ぎで収まってくれて助かったよ。

しかし、この分だと私のおねだりは聞いてもらえそうにないな。

(いや、もともとおねだりとか無理だけど)

蘭さんと園子さんの二人に期待しよう。

「愛夏姉ちゃん、ミュージックタウンって、歌番組だよな。観に行っ
たの?」

「あ、はい。ヨーさんが招待してくれたんです」

「そこで、このお兄さんが歌ってるところを観たの?」

「はい、そうです。でもまさか、ノリが悪い客だから覚えられてるとは
思いませんでしたけど」

コナン君と話していると、マネージャーさんに話しかけられた蘭さ
んと園子さんは、さっそく木村達也に質問していた。

私も聞こえたからそちらに注目する。

「あの、達也さん、次の新曲はもう決まってるんですか？」

「あ？ ああ、まあな」

「もし、よかつたらなんですけど、私たちにも聞かせてもらえませんか？」

「あー、それはちよつと無理かな。いろいろ版權とかあるみてえだし」
「そうですか。すつごく残念です！ でもCD出たらぜったい買いますから!!」

「ああ！ よろしくな！」

うーん、おねだり作戦失敗、か。

早くもピンチだ。

「愛夏姉ちゃん、ぼくたちも選ぼう？」

「あ、はい、そうですね」

コナン君が広げてくれた本を覗き込む。

そこはどうやら子供向けの歌が集まってるページのように……！

—— 見つけてしまったのだ!!

私の永遠の恋人、ド○えもんの歌を!!

「あ、あの、コナン君。すみませんけど、先に1曲入れてもいいですか？」

「うん、いいよ」

「ありがとうございます！」

すごい、映画の挿入歌まですべて網羅されてる!!

このラインナップならこの曲で決まりだな。

でもなんで私忘れてたんだろ。

このカラオケボックス殺人事件で、いやがらせに見せかけた発奮材料としてド○えもんの曲が流されたことは知ってたはずなのに。

その時、蘭さんたちが私の判らない曲でデュエットを始めて。

二人の歌声はなかなかのもので、さすがカラオケ慣れしてる世代と
いった感じだった。

その曲が終わったあと、すぐに流れ始めたのがドラ○もんのオープ
ニング曲。

私は思わずその場で立ち上がってしまった。

「あれ？ 次愛夏ちゃん？」

「ドラ○もん歌うの？ あんた」

「あ、えっと、私が入れたんじゃないんですけど、歌ってもいいですか
？ たぶん違う曲のつもりで間違えたんじゃないかと」

「いいんじゃない？ 誰も歌わないみたいだし」

たぶん私にタイミングを外されたんだろう、木村達也は何も言わな
かったから。

私は思いつきり、ドラえ○んのオープニングを歌い始めた。

私は昔からドラえ○んが好きだったんだけど、たぶん子供の頃より
も、大人になってからのの方がより好きだったと思う。

確か高校卒業してまだ間がない頃だったと思うんだけど、当時ちよ
うどレンタルビデオ店があちこちにでき始めてた頃で、職場の先輩に
お下がりでもらったビデオデッキでドラ○えもんの映画を観まくった
ことがあったんだよね。

その時、その頃だったからなんだと思う。

子供の頃には判らなかった、ドラ○えもんの物語の深さ、伏線の見事
さなんか感動して、毎年のように映画を観に行くようになったん
だ。

最後に観たのは去年の春で、その時はたまたま職場のなんとかフェ
アでサクラが必要になって。

午前中に母を連れてサクラをしたあと、午後から一緒に映画を観た

んだ。

でも、母は映画の間中、ほとんど眠っていて。

私は怒って、そのあとは帰りの車の中でも、ずっと言い合いばかりになっちやっただんだ。

映画を観たのはあれが最後で、けっきょく、あれが母と観た最後の映画になった。

……あれ？　なんか、声が詰まっとうまく歌えない。

涙が出て画面がよく見えない。

……なんで私、ドラ○もんを歌いながら泣いてるんだろう……？

「愛夏ちゃん！」

「愛夏姉ちゃん、どうしたの？」

私はマイクを置いて、木村達也のそばにあったりリモコンの演奏解除ボタンを押して、コナン君の隣のソファに戻った。

「愛夏姉ちゃん？」

「……すみません。ちよつと、思い出しちゃって」

カラオケが次の曲を流し始める。

って、これ、さつき私が入れた曲じゃん！

なんで私、よりによって武○鉄矢の少○期なんて入れたんだよ!!

こんな曲、よけいに涙を誘われるだけなんだけど!?

「う……っ！」

「愛夏姉ちゃん！」

「すみません。……母と観た最後の映画が、ドラ○もんで……」

「愛夏ちゃん……」

「お母さん、映画の間寝ちゃって。……私、素直じゃないから、ものす

ごく怒って……。お母さん、午前中に仕事で行ったフェアで、疲れたのに」

なんでこんなに感情が高ぶってるんだ？

……ああ、判った、生理が近いんだ。

それにしても若い頃の生理って、ここまで強力だったのかよ！

「お母さん、私に文句ばかり言って。でも、ずっと私のこと、心配してくれて」

「……愛夏ちゃん……」

「……なんでいないんだろう。……私、もつとずっとケンカしてたかった。これからもずっと、たくさんケンカしたかったよ……！」

BGMで少〇期が流れている間、私はずっと泣き続けていて。

蘭さんが他の人に「彼女、去年ご両親を相次いで亡くされて」なんて説明しているのを遠くに聞いていた。

ていうか、だれかこのBGMを止めてくれよ！

木村さん、目の前にリモコンあるんだから、この辛気臭い空気をなんとかしてほしいんですけど!!

ようやく少〇期の演奏が終わって。

静まり返った室内に、やがて軽快な音楽と鈴の音が流れ始めた。

ああ、これ、赤鼻のトナカイだ。

たぶん木村達也が入れたヤツだろう。

でも木村さんは、すぐにその曲の演奏を解除してしまった。

「ワライ、ちょっと、オレに先に歌わせてくれねえかな」

空気を変えたかったのだろう、真っ先に園子さんが明るい声で賛同する。

「はい、もちろんです！ ぜひ聴かせてください！」
「サンキュー。……伴奏ねえから、アカペラでワリイけど。とりあえず入ってる曲ぜんぶ消すな」

そうして木村さんは何曲かのイントロをすべて演奏解除していつて。

静かになったところで、マイクを持ってステージに立った。

「さつき、リクエストされたときは、歌わねえって言ったけど。……今じゃなきやいけねえ気がするから歌うな。—— 新曲『素顔の君に伝えたい』—— 聴いてくれ！」

始まったのは、しっとりとしたバラードで。

私にはごくふつうの愛の歌のように聞こえた。

でもたぶん、たった一人だけ、あの人には違うものが伝わったんじゃないかと思う。

歌詞の中に散らばる小さなエピソードは、過去の二人が積み重ねてきた想い出が、宝石のように輝いていたんじゃないかと思う。

歌い終えた木村さんの前には、いつしかマネージャーの寺原さんが立っていた。

目に涙をあふれさせながら。

「……達也……」

「……オレが素直じゃねえのは、知ってるだろ？」

「……」

「てめえには、オレが外見しか見ねえような男に見えたのかよ」

泣きながら寺原さんが首を振る。

そんな寺原さんを、木村さんが優しく抱き寄せた。

「待ってるのも、悪くはねえんだけどさ。考えてみたら、人間、明日なにかあるか判らねえもんな。……あのノリの悪い姉ちゃんに教えられたわ」

「……達也」

寺原さんは、木村さんの上着をぎゅつと握ったあと。
なにかを決心したように、顔を上げて言った。

「達也、臭い！」

「……はあ!？」

「これからトーク番組の収録だって言ったでしよう!? そんな臭い身体で行かせる訳にはいかないわ! 時間までにシャワー借りて浴びるわよ！」

「え? ちよつ、なんだよ急に! いまそういう雰囲気じゃ——」
「いいから来なさい！」

文句を言いながらマネージャーさんに引きずられていく木村さんを、私たちは茫然と見送っていた。

……あの、もしかして、フラグ、折れた……?」

「えーつと、つまり達也が好きなのは、あのマネージャーだった、つてこと?」

「そしてマネージャーさんも、達也さんのことが好きで」

「両想い、つてことは」

「私たちの達也があの人のもものになっちゃったつてことよ！」

蘭さんと園子さんが手を取り合って嘆いているのを尻目に。

静かに泣いている芝崎美江子さんを、山田克己さんが肩に手を置いて慰めていた。

……本当に、フラグは折れたんだ。

シャワーに行ったのはたぶん、木村さんの衣服に付いた青酸カリを落とすためだろうし。

心が通じ合った今、彼女が彼を殺そうとするようなことは二度とないだろう。

「愛夏姉ちゃん？」

「はい？」

「どうしたの？ なんだかすごくうれしそうだよ」

「うれしいですよ。だって、あの二人、心が通じ合ったんですから」

まあ、その陰で悲しい思いをした人がいなかった訳じゃないけど。それはもうどうしようもないめぐりあわせというか運命というやつだし。

諦めて新しい恋を見つけてくださいと言っただけありません。

「ねえ、せっかくだから歌おう」

「そうですね。コナン君、選んでくれました？」

「うん。ぼく入れるね」

……。
そうしてコナン君と初めてのデュエットとしゃれこんだんですが

コナン君の歌声は、思ってた以上に破壊的で壊滅的だったということは付け加えておきます。

被害者の命を救った、細くて困難な一本の道。

掴んだ今でも、私にはまだちゃんと判っていなかったけれど。

でも、この小さな一歩は、私にとってはけっして忘れられない、大きな一歩になった。

FILE・13 定期収入は恐ろしい 江戸川コナン誘拐事件

5月7日（土）

初めて被害者の命を救うことができた、カラオケボックスから一夜明けた朝。

私はいつものように朝食と朝風呂のあと、洗濯機を回しながら洗剤類が入ったバケツ（ブローダイヤと印刷されている。物持ちよすぎだろううちの母親！）の中身を確認してみた。

いやさ、もしかしたらおしやれ着用洗剤が入ってるかもしれないと思っただよね。

でも、襟汚れ用洗剤とか柔軟剤や漂白剤はあったけれど、残念ながら求めるものは入っていなかった。

という訳で、洗濯物を干したあと、スーパーが開くのを待つて私は買い物に出かけることにしたんだ。

エコバッグは母が使ってたのが3、4枚あったから、適当なのを1枚選んで財布を持って。

いざ、家を出たところで、向かいの奥さんとぼったり会ってしまったんだ。

……工藤有希子さん、帰ってたんですね。

ああ、もしかしたら今日と明日が江戸川コナン誘拐事件の日だったりするんでしょうか？

「あら、愛夏ちゃんお久しぶり」

「お久しぶりです」

さて、以前の私が彼女とどの程度の付き合いがあったのかは知らな

いけれど。

引きこもり少女だった「高久喜愛夏」がそんなにコアな付き合いをしていたとは思えないので、一度頭を下げたあと、普通に通り過ぎようとした、んだけど……。

……まあ、そう簡単に逃がしてくれるわけがないよな。

「この間はありがとう。家の掃除をしてくれたみたいで」

「いえ。こちらこそお仕事ありがとうございました」

「聞いたわ、愛夏ちゃん、学校を休学してアルバイトをしてるんですって?」

「はい。一年ほど引きこもっちゃったので、いまさら1年生というのも恥ずかしいので」

「じゃあ、今後もお願いできませんかしら? 我が家の管理。なんだかうちの新ちゃん、事件でしばらく家を空けてるみたいだから」

今日が江戸川コナン誘拐事件の日なのだとすると、彼女はおそらく現時点で、工藤新一を外国に連れていくつもりなんだろうな。

そうなればとうぜん工藤邸は空き家になる訳で。

まあ、いずれにしろ今後も空き家同然なのだから、この提案は理にかなっていると言えるだろう。

「ええ、まあ、たまに掃除に通うくらいなら」

「ありがたいわ。それじゃあ、週に1回、お掃除と空気の入替えをお願いすることで、月4万円はどう?」

え? お金払うつもりですか?

週に1回の掃除じゃたいしたことはできないし、時間とかも決めないじゃ、私がさぼってもぜんぜん判らないじゃないですか。

「あの、だったら、時給とかの方が」

「大丈夫よ。愛夏ちゃん真面目だから、ちゃんと4万円分の仕事はし

てくれるでしょう？ 私、こう見えて人を見る目はあるのよ」

「はあ……」

「決まりね。それじゃ、今月の分の4万円。あと合鍵も渡しておくから、よろしくね」

「え、ちよつと」

そう、私に財布の中から4万円と鍵を手渡して、有希子さんは隣の阿笠さんの家へと入ってしまった。

……どうするんだよコレ。

確かに私にとっては、毎月の定期収入があるのは嬉しいけどさ。

でも、こんなに簡単にお金と鍵を預けるとか、有希子さん、いつか悪い人に騙されたりしそうで怖いんですけど。

とりあえず一度家に戻って、お金を財布に、この物騒な合鍵をなくしそうにない茶筆筒の引き出しにしまっておく。

こりや、うちの戸締りも今までみたいに適当にはできないな。

(玄関の鍵は忘れないけど、ベランダとか窓とかは開けっ放しの時も多いし)

私はもう一度自宅の戸締りを確認して、改めて家を出て買い物に出かけた。

歩いて5分ほどにあるスーパーは初めて来るのだけれど、それほど広くはないので迷うようなこともなく。

最初に目当てのおしゃれ着用洗剤をかごに入れて、そのあと野菜コーナーから順番に売り場を回っていった。

とりあえずカレーの材料だけ……ジャガイモとか玉ねぎとかニンジンとか、ぜんぶ袋売りで一人分には多すぎるんだよな。

(まあ、使い切るまで作り続けてもいいんだけど)

とりあえず量が少なそうなのを一袋ずつ選んで、キャベツを一つと、あとひき肉としゃぶしゃぶ用の薄切り豚肉と、肝心のカレールーをかごに入れて会計を済ませた。

スーパーでは多少探索もしたけど、それでも1時間は経ってなかったはずなんだけど。

家の前まで帰ってきたら、阿笠さんとなぜか眼鏡をかけたおばさんが、ちようど家を出てくるところだったんだ。

……変わり身早すぎだろ！

阿笠さんは私に気付いて、笑顔で挨拶してくれた。

「やあ、愛夏君。買い物かね？」

「はい」

「紹介しよう。コナン君のお母さんと、江戸川文代さんじゃ。文代さん、彼女は向かいに住んでいる高久喜愛夏君で、コナン君の友人なんじゃよ」

「まあ、そうでしたの。いつもコナンがお世話になってます。わたくし、コナンの母で、江戸川文代と申しますの。お会いできてうれしいわ」

「……はい」

顔も、体形も、姿勢も、声やしやべり方も、ぜんぜん違う。

さすが元女優さんだと思わずにはいられない。

私はなんとなく呆然として満足に受け答えられなかったのだけど。

二人ともあまり気にならないようで、さらに話しかけてきたんだ。

「そうじゃ、愛夏君。時間があるなら、文代さんを毛利探偵事務所まで案内してもらえんか？」

「あ、ええ、かまいませんが」

「実は文代さんは、コナン君を引き取りに来たんじゃよ。愛夏君もしばらくコナン君とは会えなくなるじやろうから、一緒に行ってお別れをしておきなさい」

「はい、判りました。では、荷物を置いてきますね」

家に帰って、買ってきたものを冷蔵庫に詰めておく。

たぶん食材を長持ちさせる詰め方なんてものもあるんだろうけど、とりあえずは放り込むだけだ。

慌てて戻ると、前の道に一台の車が停まっっていて、運転席から文代さんが顔を出していた。

「お待ちせしました」

「いいえ。では、お願いしますわね」

「はい」

助手席に乗って、阿笠さんに一礼して走り始める。

案内とはいっても、彼女はすでに毛利探偵事務所の場所は知ってるはずだから、曲がり角で時折声をかけるくらいでいいだろう。

「さつき阿笠さんにお伺いしたんですけど、コナンは愛夏さんにはずいぶんなついてるようですね」

「あ、はい」

まあ、なついているというよりは、絡まれてると言った方が正解なんでしょう。

「どう？　うちのコナンちゃん、いい子に過ごしてたかしら？」

「はい、とつても聡い子で、公共の場で騒いだりするようなこともありませんし、とてもいい子にしてたと思います」

「そう。ならよかったわ。私たちもとつぜんの事故で、あの子のことは心配してましたのよ。よそ様にご迷惑をおかけしてるんじゃないかって」

「私は、そんなに関わることもありませんから」

ああ、なんかけつこうつらいな、この会話。

彼女は私に、江戸川コナンの母親という存在を印象付けたくてやっ
てるんだらうけど。

ぜんぶカラクリが判ってる私には単なる茶番にしか見えないんだ
これが。

小学一年生の江戸川コナンという少年のことを頭の中で捏造しな
がら話すこと5分、やっと毛利探偵事務所に到着してくれました。

文代さんを先導して階段を上がり、毛利探偵事務所のドアを指し示
す。

文代さんがノックをすると、出てきたのは蘭さんで。

私に一瞬視線を向けた蘭さんは、文代さんが名乗ると、うれしそう
な笑顔に変わっていったんだ。

「来た！ 来たわよコナン君!!」

「え?」

「ほらあそこに、あなたのお母さんが!」

「……………え?」

瞬間的に現実を受け止められなかったのだろう。

笑顔のまま固まるのは無理もない。

必死に抵抗するコナン君を、なんとか言いくるめて連れて帰ろうと
する文代さん。

援護射撃とばかり、私も笑顔でお別れを言った。

「コナン君、お母さんが迎えに来てくれて、よかったですね」

「愛夏姉ちゃん! この人ぼくのお母さんなんかじゃないよ!」

「お母さんですよ、間違いなく。…………しばらく会えなくなりますが、元
気で頑張ってくださいね」

「違うよ。…………愛夏姉ちゃん、信じてよ」

いやだって、お母さんだしねえ。

コナン君の訴えを笑顔で黙殺していると、やがて味方はいないと理解したのか、それともなにか決心したのか。

コナン君は文代さんの車に乗り込んで、私たちも走り去る二人を見送った。

そのまま私は毛利探偵と蘭さんに挨拶をして、帰ろうとしたところで、珍しく毛利探偵に声をかけられたんだ。

「おい、愛夏。オメーにちよつと聞きてえんだが」

「はい、なんででしょうか」

「オメー、パソコンは使えるか？」

「はい、多少は」

なにしろオタクの必須アイテムだし。

パソコン歴はかれこれ17年くらい？ キーボード歴ならワープロ時代も含めて30年近いですよ。

まあ、表計算ソフトでマクロを組めと言われたらちよつと困るかな、つて程度だけど。

「実はな、最近、この名探偵にぜひ仕事を依頼したいって声が増えてるんだが」

「お父さん、ずっと手書きの調査書を出してきたんだけど、実はあんまり字が上手じゃないのよ。だからパソコンを買おうって話が出てるんだけどね」

「蘭！ 余計なことは言うんじゃないよ！ —— つまりだ、オレはこの名探偵を頼りにして押し寄せる多くの依頼に対応しなきゃならないんだが、そうなるかどうかしても人手が足りなくてな。ついでに事務員を雇おうとも思うんだが、蘭がオメーがいいんじゃないかって」

「だって、どうせだったら知ってる人の方が心強いじゃない。その点、愛夏ちゃんだったら真面目だから信用できるし。最初はそんなに仕事もないだろうから、暇な時だけでも構わないし。ね、お父さん？」

「ああ。さしあたって明後日の午前中までに調査報告書を1通作りてえんだ。パソコンは今日中に用意する。オメー、明日1日で報告書作れねえか？」

報告書か。

私は元事務員だから、そういう仕事ならけっこう得意だ。

報告書って、毛利探偵が手書きで作ってるくらいだから、たぶんそんなに枚数もないよね。

だったらたぶん2、3時間もあれば作れるんじゃないかな。

「ちなみに、報告書って、何枚くらいあるんですか？ 手書きの状態で」

「1枚だが？」

「え？ そんなの、たぶん15分もかかりませんけど……」

蘭さんを見ると、そつと目をそらす。

……彼女、キーボードあんまり得意じゃないのか。

私の頃はなかったけど、最近は学校でもパソコンを教えるって聞いているけど。

「オ、オレはな、事件の報告は口頭でするんだ！ 依頼人と直接会ってだな ——」

「あ、はい。毛利探偵の推理ショーが真骨頂だというのはよく存じます。報告書はあくまで補助ということですよね」

「おう！ その通り！」

「判りました。では明日の午前中にでも伺います。9時ごろでいいですか？」

まあ、今回は仕事というより、友達にパソコンを教えに行く、って感じになるのかな？

そのくらいだったら事件に巻き込まれることもないだろうし（名探

偵は誘拐中だし)、たぶん大丈夫だろう。

徒歩で自宅へと戻ると、私はさっそくおしやれ着の洗濯を始めた。

まずは買ってきた洗剤の説明書きをじっくりと見る。

水2リットルに対してキャップ半分とのことなので、いつも飲んでるペットボトルで水を量って。

お風呂で使ってる洗面器に水を張って、まずは中のTシャツから。何度か押し洗いと濯ぎを繰り返したあと、ネットに入れて40秒ほど洗濯機で脱水、こちらは素材が割としっかりしていたので針金ハンガーで吊るして干した。

上のカーデイガンはけっこう伸びやすそうな素材なので、Tシャツと同じ手順で洗ったあと、新聞紙とバスタオルを敷いた上に広げて平干しだ。

最後のスカートは皺になりやすそうなので、脱水時間を若干短くして、手でたたいて広げたあと洗濯ばさみで吊るして干すことにした。

うん、これが今の私の精一杯だな。

もしもこれでヨレヨレになったとしても、これ以上のことはできなかったと諦めることにしよう。

(3回着たから1回1万6千円でレンタルしたってことで……とはとても思えないなあ畜生!!)

洗濯のあとは昼食の支度にとりかかった。

まずは買ってきたキャベツをはがしながら洗って、葉の部分は3センチ角くらいに、太くなつてるところは厚めにスライスして。

お湯を沸かしてまずは太いところを放り込んで、そのあとしゃぶしゃぶ肉を箸ではがしながら入れていく。

途中でキャベツの葉の部分を追加しながら肉をしゃぶしゃぶにしていって、パツクの半分くらいを入れたところで火を止める。

あとは残ったキャベツをお皿にあけて、ゴマダレをかければ完成だ。

昨日炊いたご飯を一つレンジで解凍してお茶碗に盛って。

肉とキャベツは程よく火が通ってるし、なんにも手を加えていないから予想通りのシンプルなお味。

うん、このくらいならさほどめんどくさくないし、その割に達成感もあるから、自炊も続けられそうだよね。

この次はもやしとピーマンあたりも追加して、ポン酢味を試してみてもいいかもしれない。

使ったお鍋とザルと包丁、お茶碗とお皿と箸を洗って。

午後1時、私は鍵とマスクとスカーフを手に、工藤邸のお掃除に向かった。

前回掃除してからすでに3週間くらい経ってるから、最初の掃除はできるだけ早い方がいいだろうと思ったんだ。

時給千円とするとだいたい40時間掃除しないといけない計算になるから、今日5時間やったとしてあと4、5回は通わないとならないんだよな。

まあ、ベストは1日8時間で月に5回ってところかな？

とりあえず今日のところはあまり時間もないし、窓全開で掃除機をかけたら終わりってことでいいだろう。

夕方6時までを目安に掃除機をかけて。

少し時間が余ったので、失礼して台所をのぞいてみると、こちらは工藤新一がちゃんと処理したのか冷蔵庫は空っぽで電源も切ってた。

(いや、もともとジュースとか以外入ってなかった可能性もあるな。彼が自炊してたとは思えないし)

水回りの拭き掃除をしたところで程よく時間切れ。

開けていた窓をぜんぶ閉めて、戸締りをしつこく確認したあと、自宅に戻って今度は夕食の支度にとりかかった。

ジャガイモと人参と玉ねぎは皮をむいて適当な大きさに切って。

うちで一番大きな鍋にひき肉を入れて軽く炒めたあと、水と野菜を入れてひたすら煮る。

野菜に箸を突き刺して、火が通つてることを確認したら、今度はカレールーを割り入れて。

こげないようにかき混ぜながら弱火で煮込んでいると、だんだんとろみが出てきていい感じになってきた。

これ、何日分くらいあるのかな？

あんまり残ると食中毒が怖いから、フリーザーバッグでも買ってきて冷凍しておいた方がいいかもしれない。

100グラムのご飯を解凍して、具だくさんのカレーをたっぷりかけていただく。

うん、さすが市販のルーをそのまま使っただけあって、普通の家庭の味に仕上がってるな。

ひき肉もいい感じに旨味が出ていておいしいし。

袋入りの野菜がまだ半分くらい残ってるから、この次はこれにコーンの缶詰でも入れたらさらにおいしくなりそうだ。

さて、今頃コナン君、廃屋で誘拐犯とともに緊張の一夜を過ごしていたりするのだろうか？

ま、とりあえず、元気で頑張ってくださいませ。

5月8日（日）

名探偵コナンの世界にトリップしてから今日でちょうど1か月。

相変わらず私は、毎日仕事探しの日々を送っております。

昨日の夜、寝る前にちよろつとだけ就職情報サイトをのぞいてみたところ。

高校生可能なアルバイトで、ピザ屋と寿司屋の配達の仕事を見つけてしまいました。

それまでぜんぜん考えたことがなかったんだけど、16歳って原付の免許が取れる年齢だったんだよね。

私に通ってた公立高校は、県の条例なんかで高校生のバイク免許取得が禁止になってたから、私が卒業前に最初に取得したのも普通自動車免許だったんだ。

原付免許持ってたらこのバイトできるじゃん！

という訳で、朝のお風呂を待っている間、私は原付免許についてネットで調べてみたんだ。

免許取得には特に教習所なんかに通う必要はなくて、試験場で筆記や実地の試験を受けるだけで簡単に取れるらしい。

最初に住民票と写真を用意して、試験場でお金を払ってまずは筆記試験。

これに合格すれば次は実地試験で、最後に講習を受けたあと即日免許が交付される。

料金はぜんぶ合わせても1万円もかからないくらいだから、これは早めにとっておいた方がいいかもしれない。

残念なことには今日は日曜日で、試験場は平日しか開いてないみたいだから。

私は明日以降、できるだけ早いうちに免許を取ることにして、お風呂のあと昨日の一晚寝かせたカレーと100グラムご飯、付け合わせにキャベツを一枚はがしてザク切りにしたもの（福神漬けの代わり）を添えて朝食にした。

大鍋の方はそのままだと場所を取るから、中身を深皿に入れ替えていくと、ちょうどお皿4つで大鍋が空になって。

そのまま粗熱を取ったあとラップをかけて、スカスカの冷蔵庫で保管することにしました。

朝と夜で食べたらあと4食で丸2日間、そのくらいだったらたぶん冷蔵庫で十分だよな。

(まだ時期的に傷みややすいというほどじゃないと思うんだ)

私はカレーは好きだし、毎食力〇リーメ〇トでも十分なくらい食に対してはこだわりがないから、こういう無茶も簡単にできちやったりするんです。

大鍋を洗ったあと、一息ついて。

昨日の一張羅を見てみると、かなり気を遣ったからかTシャツとカーデイガンの方はどうにか大丈夫そうだった。

スカートはやっぱり若干皺になってるけど……これはアイロンをかけるべきなのかな？

(裏地があるからけっこうめんどくさそうだ)

とりあえずもうちよつとだけ放置しておいて、気になるようだったらアイロンも使ってみることにしよう。

そんなこんなでいい時間になったので、私は家を出て、毛利探偵事務所へと向かうことにした。

と、家を出たところで今度は阿笠さんにバツタリ。

大きな荷物を抱えて車に運び入れているところでした。

「おお、愛夏君おはよう」

「おはようございます。ずいぶん大きなお荷物ですね」

「これはあれじゃ。今朝までかかってようやく完成した試作品での。これから依頼主に届けるところなんじゃよ」

「そうでしたか。お気をつけて行ってらしてください」

「愛夏君はお出かけかね？」

「はい、毛利探偵事務所まで。昨日ちよつとした仕事を受けまして」

「ほう、それはよかったの。頑張つてきなさい」

「はい。では」

段ボールからちらつとのぞいているのは衣服のようなものに包まれた機械っぽい何かだ。

これで大男に変装するのか？

なんか絵面だけだとほんと、いい大人が寄つてたかつて小学生をいじめてるみたいだよな。

（それにしても舞台装置や特殊メイク技術が豪勢すぎるけど）

とりあえず巻き込まれなかったことに感謝します。

毛利探偵事務所について、一歩中に入って、私は絶句してしまいました。

「……なんで、段ボールなんですか？」

「そりゃオメー、うちは誰もパソコンなんか判らねえからな」

「買ったお店でセットアップのサービスくらいあったと思うんですけど」

「金取るんだろ？ だったらオメーを待ってた方がいいじゃねえか」

「……」

……まあ、いいよ、やるよ。

このくらい、説明書を見れば誰でもできるように書いてあるんだから。

しかし、せめてパソコンラックの組み立てくらいやつといてくれないじゃないか。

これ、午前中に終わってくれるとはとても思えないなあ。

「ごめんね愛夏ちゃん」

「いいよ。新しいパソコンとか、それだけでワクワクするし」

「私はドキドキだよ。なんか変なことやったら壊れそうで」

「ふつうに扱うだけならそう簡単に壊れたりしないから大丈夫だよ」

まあ、あなたの場合、物理的に壊せそうな技術は持つてるけどね。とりあえずこれからはパソコンの近くでは暴れないように注意してください。

パソコンの設置場所を決めて、ラックを組み立てて。

その上に本体とキーボードとモニターと、あとプリンターを乗せていく。

説明書きを見ながらそれらをコードでつないでいって。

(まだインターネットにはつながないらしい)

電源を入れて初期設定を済ませるころにはすでにお昼近くになっていた。

「愛夏ちゃん、お昼、ポアロで取るけど何がいい？」

「あ……お任せで」

「じゃあサンドイッチにするね。お父さんもそれでいいよね」

「おお」

お昼、昨日のしゃぶしゃぶ肉がまだ残ってるんだけどな。

ま、いつか、あれは明日のお昼ご飯にしよう。

(やっぱり今のライフスタイルで3食自炊は危険だな。これからはちよつと考えるか)

お昼を食べながら休憩して。

バックアップを取ったりいろいろ設定を済ませたころにはすでに午後2時を過ぎていて。

やっと文書作成に取り掛かれる、と思ったところでコナン君と文代さんが毛利探偵事務所にやってきました。

「ええっ！　また息子さんを預かるんですかー!?!」

「ええ……。どうしてもこの子がここを離れたくないというもので……」

「しかしですなア、奥さん」

「これがこの子の養育費ですわ!」

「え?」

「御入り用の時はどうぞお好きナだけ」

ちよつとだけ気になったのでちらつと覗いてみると。

名義はなんと阿笠博士でした!

……江戸川コナン名義かと思つてちよつと期待したんだけどな。

(昨今、公的証明書がなければ通帳なんか作れないからね、まあ仕方がないか)

でもそれならどうやって江戸川コナンを外国に連れていくつもりだつたんだろう??

まあ、たぶん、優作氏も有希子さんも、コナン君に断られるのはほとんど確信してたんだろう。

そうじゃなかったらコナン君名義のパスポートくらい用意してただろうし、パスポートがあれば江戸川コナン名義の通帳も作れただろうから。

「愛夏さん」

「あ、はい」

「これからも、コナンのいい相談相手でいてくださいね」

「はい、私でよければ……」

「それと、——お仕事、あまり頑張りすぎなくていいからね」

……え??

文代さんの最後の言葉は、私の耳元で小さく言われたもので。そのあとウインクした文代さんは、私にはもう一人、別の人の面影を感じさせた。

……もしかして、昨日出会った二人の女性が同一人物であることに、私が気づいてるってバレてる……？

お、恐ろしすぎます工藤一家!!

頼みますからこのまま沈黙してとうぶん日本には帰ってこないでくださいお願いします！

にこやかな笑顔で帰っていく文代さんを見送って。

事務所に増えたパソコンを覗き込んでいたコナン君が、ぼそりと話しかけてきた。

「ねえ、愛夏姉ちゃん。もしかしてこれから愛夏姉ちゃんがこのパソコンでお仕事するの？」

「はい、どうやらそうなりそうです。まだ専門の事務の人を雇うほどではないみたいなので」

「ていうことは、ここにある会計ソフトとかも、愛夏姉ちゃんが使うの？」
「……」

……いや、まさか、そんなはずは……！

でも、誰もパソコンが使えないはずの事務所で、それなりに高額な会計ソフトを買ったってことは——。

「あ、そうだお父さん。愛夏ちゃんのバイト代も決めなきや」

「ああ、そうだな。会計事務なんかだと相場はどんなもんなんだ？」

「私も詳しくは判らないけど、たぶん時給千円から千五百円くらいかな。能力で優遇って感じみたい」

「だったら最初は千二百円にしておくか。—— 愛夏、オメー、それ

でいいか？」

いやいや会計事務って……！

このいかにも今までドンブリ勘定してましたな事務所で、会計事務を一手に引き受けることがどれだけの労力だと思ってるんだよ!!

「いえ、あの、私じゃさすがに会計とか……」

「なんだよ、オメー、パソコンできるって言ってたじゃねえか。報告書も会計も変わらねえだろ？ だからぜんぶオメーに任せることにしたんだよ」

「……あの、この事務所、一応税理士の人とかいるんですよ？」

「ああ。昨日うちが会計ソフト入れるって連絡したら泣いて喜んでたな。そのうちいろいろ説明に来るそうだから、そいつの対応も頼むぞ」

……無知って恐ろしい。

ていうか、つまりもう私が会計事務をやることは決定事項で、外堀も埋まってるってことじゃないですか!!

あああああ、判りましたやりますよ！

時給千二百円でたんまり稼いでやります!!

「……判りました。よろしくお願いします」

「ごつちこそよろしくな」

「うれしい！ 愛夏ちゃんがうちで働いてくれるなんて。ね、コナン君もそう思うよね？」

「うん！ ぼくも愛夏姉ちゃんが一緒にうれしいな！」

はいはい、私もうれしいですよ。

なんかこれから私の事件遭遇率が急上昇しそうで、涙が出るくらいうれしいです。

さて、そうと決まったら会計事務の勉強もしなきゃだな。
私が今までやってた会社の事務と、個人事業の事務とじゃ勝手が違
うだろうし。

まあ、多少は今までの45歳スキルが活かせそうで、それだけが救
いではあるけれど。

ところで肝心の毛利探定の調査報告書なんだけど。

さすが口頭での報告がメインと言い切るだけのことにはあって、調査
日時と調査場所、それと自分がそこで何をしたかということしか書い
ていなかった。

(調査の報告というより必要経費の報告書みたいなものだった。よく
今までこれで通ってたと思うよ)

そのまま清書してもほとんど意味はないので、毛利探定に私の目の
前で依頼人に対する報告を口頭でもらい、多少の脚色を交えて調
査書っぽくまとめておいた。

まあ、今の段階だとこれが精一杯かな。

でも毛利探定はけっこう感激してくれたみたいなので、まあ良しと
しよう。

「意外な才能だな。オメー、これからもオレの報告書、作ってくれねえ
か?」

「いいですけど……」

「けど、なんだ?」

「従業員を雇うのは私が初めてなら、雇い主としていろいろやらなけ
ればならない手続きがあると思うので、そのあたりはお願いします
ね」

「お、おう、任せろ」

……不安だ。

でもまあ、これでも立派な社会人なんだから、自分で調べて役所や

ハローワークへの手続きくらいならどうにかやってくれるだろう。

さて、この報告書の提出先が丸グループの会長さん宅で、内容が奥さんの浮気調査だってことは、明日起こるのは骨董品コレクター殺人事件で決まりってことで。

どうやら明日あたり生理も来そうだし、私は巻き込まれないように家でじっとしていることにします。

FILE・14 勉強は忘れた頃に く骨董品コレクター殺人事件く

5月9日(月)

昨日の夜はなんとなく予感がしたので、準備万端で眠りに入ったところ。

朝起きたら例のお客さんが寝ている間に来ていたみたいでした。

こうして朝を迎えてみると、前회가やっぱり異常だったということがよく判りましたよ。

まあ、パターンが違うというのもあるんだと思うけど。

(今回は量が多い方でした。痛みと量どっちも、というパターンもあるのだけれど、たいていはどちらか一方という方が多いです)

痛みに加えてだるさとかもあまりないので、普通にお風呂を沸かして入って、身体を温めたら痛みの方はほとんど感じなくなっていて。

これなら高校時代に薬を飲まずにいられたのも納得だ。

私が若い頃は、今ほど生理用品が発達してなかったから、量が多いときは2枚重ねたりとかけっこう大変だった記憶があるけれど。

最近は大サイズでほぼカバーできちゃったりするので、ほんと女性に優しい社会になってありがたいなと思う。

思ったほど体調が悪くなかったので、朝食でカレーライスを食べたあと、暇だし原付免許でも取りに行こうかと思ったのだけれど。

ふと思いついてネットの過去問サイトで原付の試験問題に取り組んだところ、見事に不合格を喰らってしまいました。

……やっぱり、免許取得の勉強をした時から計算すると約28年も経ってるからね、忘れててあたりまえだわ。

(日常的に運転はしてただけ、通勤で使う道は決まっているから、ふ

だん見ない標識の意味とかぜんぜん判らないし)

とりあえずぶつつけ本番で試験を受けて不合格を喰らわなくてよかったよ。

そんなこんなで過去問サイトをいくつか巡りながら勉強を進めていって。

お昼になったので、残ってたしゃぶしゃぶ肉とキャベツで昼食にしたあと、頭の休憩もかねて今月2回目の工藤邸に赴くことにしました。

以前なにかで聞いたことがあるんだけど、人が住んでいない空き家の傷みが早いのは、窓を閉め切って換気をしないのが主な原因らしい。

湿気がこもることと木でできた部分が腐ってしまうんだとか。

つまり、家を長持ちさせるためには、できるだけ換気をした方がいいということだ。

(このあたりも長く生きてるが故の無駄知識だったんだよね。まさか団地住まいの自分が空き家を抱えることになるとは思いませんでしたよ)

有希子さんは1週間に1回と言ってくれたけれど、暇があるなら頻繁に窓を開けるのが、家を湿気から守るいちばんの方法なんだと思う。

まあ、これから梅雨の季節も来るし、できないときも増えてくると思うんだけどね。

だとしたらなおさら、晴れた日にはできるだけ通って、換気と掃除をした方がいいだろう。

工藤邸に入って玄関の施錠をしたあと。

まずは順番に家の中を回りながら、すべての部屋の窓を開放していく。

ちよつと風があるからあまり大きく開けないようにしないと、あとで掃除が大変になりそうだ。

(湿気を追い出すために砂埃を呼び込んだんじゃ本末転倒だし)

換気の間は水回りの拭き掃除。

台所は一昨日やったので、今日はお風呂を約2時間かけてじっくりお掃除。

いやあ、だって、工藤家のお風呂つてめちやくちや広いんですよ。ヒノキでできた家庭風呂(ほぼ温泉旅館並み)に加えて、猫足のバスタブなんかもあって、そのミスマッチがご夫婦を象徴してる気がしてちよつと笑ってしまいました。

お風呂掃除のあとに1時間ほどお風呂場の湿気を追い出したりしたので、今回は3時間のお仕事でした。

嚴重に戸締りしたあと家に帰って、工藤邸お掃除日記的なものをパソコンに打ち込んでおく。

とりあえずテキストにベタ打ちしてるだけだけど、いいフリーソフトがあったら拾ってきて打ち込んだ方が楽しいかもしれないな。

ある程度たまってきた頃になにかあるか探してみることにしよう。

お掃除日記のあとは、夕食(カレーのストック3皿目)をはさんで、毛利探偵が導入した会計ソフトの説明書でお勉強。

まあ、そんなに複雑な会計処理をする訳じゃないので、依頼料なんかの収入と、あと必要経費の領収書の打ち込み方法だけ判れば大丈夫だろう。

細かいところはたぶん、担当の税理士さんが教えてくれるだろうし。

(しつつかし、会計ソフト導入で税理士さんが泣いて喜ぶって、今までいったいどんな処理をしてたんだ毛利探偵!?)

その毛利探偵事務所から、夕食後電話がかかってきました。

『おう、愛夏か?』

「はい、そうです」

『明日なんだが、オメー、午前中時間あるか?』

「はい、大丈夫です」

『実は明日、警察へ出かける用事が出来ちまってな。オメーに電話番号を頼みてえんだが』

あ、あれですね、骨董品コレクター殺人事件の調書を作るんですね判ります。

……まあ、今まで事務員がいなかったから、そういう時は電話番号なんかもいなかったんだらうけど。

せっかく私を雇うことにしたんだから、できれば活用したいよね。

「はい、判りました。何時ごろ出勤すればいいですか?」

『できるだけ早めに終わらせちまいてえからな。8時半に来てくれるか?』

「了解しました。ちょうど私も、会計ソフトを実際に使ってみたいと思っただところですので、勉強しながら電話番号することにします」

『そうか、じゃあ頼んだ。—— すまん、コナンのヤツが代わってくれっとうるせーんだ。少しだけ相手してやってくれ』

え? コナン君ですか!?

そういえば今までコナン君と電話で話したことはなかったですね。とりあえず今のところ、彼はケータイを持ってないってことになってるんだらう。

(工藤新一用のは持つてるだらうけど、さすがにそれで電話はできないし)

『もしもし、愛夏姉ちゃん?』

「はい、そうです」

『あのさ、明後日お祭りに行くの。愛夏姉ちゃんも一緒に行かない?』

あー、これ、もしかして天下一夜祭殺人事件ですか？

って、さっそく事件巻き込まれフラグが来たよ!!

明後日は確か水曜日のはずだけど……埼玉だから日帰りする予定なんだろうか?!

「お祭りですか。近くでやるんですか?」

『ううん、埼玉県の桶山つてところ。学校終わってから行って、お祭り見たあとに旅館に泊まるんだよ』

オイオイ……。

おめーらちゃんと学校行けよ!!

「さすがに旅館に泊まるようなお金は……」

『……そっか。せっかく愛夏姉ちゃんと一緒にお祭り見れると思ったのに』

「すみません」

『—— あ、愛夏ちゃん? 私だけど。お金のことなら心配しないで。お父さんが出してくれるから』

電話がコナン君から蘭さんに代わって、そう言ったあと、うしろで毛利探偵の怒鳴る声が聞こえます。

そのあと蘭さんと毛利探偵が電話そっちのけで争う声も。

調査の必要経費って……それ、世間では脱税と呼ばれてたりするんですか？

従業員の福利厚生費って……まあ、それならありなのかもしれないけど。

もしかしたらこちらに聞こえてないと思ってるのか、蘭さんの口から米花シティビルの話まで出てきて。

……あ、なんか判ったわ。

パソコンの件からこつち、毛利探偵が妙に私を信用してると思ったら、あの時蘭さんと一緒にいたことが響いてるのか。

(たぶん蘭さんが私のことをあることないこと吹き込んだんだろう。例えば爆風からかばってくれたとかなんとか)

それで話はずいぶん進んだのか、再び蘭さんの声が聞こえてきた。

『話の途中でごめんね、お父さん、愛夏ちゃんのためなら旅費くらい快く出してくれるって。だから遠慮しないで?』

ここまで話が進んでしまったら、もう私に断るなんてことができるはずもなく。

「……判りました。ご一緒させてもらいます」

ああ、次は射殺死体だよ。

この世界にいたら、あらゆる人の死に方を一通り見る羽目になりそうなのがする。

さて、明後日が天下一夜祭殺人事件なら、明日はたぶん消えた死体殺人事件が起きるはずで。

コナン君はそちらにかかりきりになるから、少なくとも私が巻き込まれることはないだろう。

……ま、明後日からの旅行が過酷なものになるのは間違いないから、なんの慰めにもならないけどね。

FILE・15 留守番は危険の香り 消えた死
体殺人事件

5月10日(火)

最後のカレーと、残り2つのうち1つの100グラムご飯で朝食にした朝。

時間がない中どうにか洗濯を終わらせて、8時半の10分前に毛利探偵事務所へと出勤しました。

「おはようございます」

「おお、おはよう。じゃああとは頼んだ」

オイ！ なにいきなり消えようとしてるんだ毛利探偵！

「待つてください。仕事の指示がなければ困ります」

「電話番号だよ電話番号。昨日言ったろ」

「はい、ですからその指示です。まずは電話がかかってきた場合、メモして折り返し電話でいいですか？」

「ああ、それでいい」

「次に来客の時ですが、帰りは何時ごろになりますか？ それによってお客様が待つか一度帰るか決めると思っていますので」

「あー、たぶん1時には帰れる。もしかしたら少し遅くなるかもしれない」

「判りました。それ以上遅くなるようでしたらご連絡ください。来客用のコーヒーなどはどこにありますか？」

「隣の部屋にある。てきとうに使って構わねえから」

「了解しました。あと、私がお昼はどうすればいいですか？ お昼休みも事務所にいた方がいいでしょうか？」

「ああ、そうだな。ポア口に出前を頼んでここで食ってくれ。会計は

ツケがきくからそれでもかまわねえ」

「ありがとうございます。では、気をつけて行ってらしてください」
「……ああ、行ってくる」

めんどくさそうな顔をしながらも、ちゃんと指示を出してくれたので、私は笑顔で毛利探偵を送り出した。

まあ、従業員を雇うのは初めてだって話だからな。

それまで家族だけでなあなあでやってきたんだから、慣れてないのも仕方がないんだろう。

さて、改めて事務所の中を見回してみる。

窓際に毛利探偵の事務机と、その上に電話とメモ帳。

中央部に応接用のソファとテーブルがあつて。

入口近くに食器棚とポット、急須なんかが置いてある。

私が使うパソコンは書類棚の近くだ。

たぶん掃除は毎日蘭さんがしてるんだろうけど、さすがに事務所を閉めたあとのようで、朝ではなさそうだから。

私は掃除用具入れのロッカーからぞうきんを取り出して、固く絞ったあと拭き掃除から始めた。

だいたいどんな職場でもそうだと思うんだけど、一人の人が掃除していると、どうしても偏りが出てくるんだよね。

(テーブルの上は毎日拭くけど、椅子の足はぜんぜん拭かないとか)

私はそんな、蘭さんがふだん手を付けないあたりを中心に、30分くらいかけてあちこち掃除をさせてもらったんだ。

雑巾の汚れに満足感を覚えつつ掃除を終えると、いよいよパソコンに向かって会計ソフトの勉強だ。

とはいっても、そんなに難しいものじゃないので、試しにいろいろ打ち込んでみて流れをつかむくらいだけ。

うん、ソフトの使い方自体は大丈夫そうだな。

あとは実際のデータを打ち込んでみて、印刷とか書類整理とかをしてみれば、どうにかなりそうな感じた。

やっぱり、いちばん手間がかかりそうなのが、調査報告書の作成か。でもこればかりはてきとうに練習で、って訳にいかないからな。このパソコンはコナン君が見る可能性もあるものだから、架空の報告書なんか作って保存して万が一コナン君に見られてもしたらまた私が疑われることにもなりかねないし。

早くも暇になってしまったので、私は自分のケータイを取り出して、ネットで仕事探しを始めた。

え？ もちろん仕事探しは継続しますよ？

だって、毛利探偵事務所の事務だけで、1か月の目標達成ができるとは思わないですから。

工藤邸の管理だっていつ打ち切られるか判らないし、たとえば継続できたとしても、残りの6万円を毛利探偵事務所で稼ぐには50時間ほど働く必要があるし。

今日も、例えば1時半まで働けばちょうど5時間だけど、この暇な事務所でそれを月に10日続けるといのはけっこうハードルが高いと思うんですよ。

ともあれ、肝心の電話番号の方は2件ほどかかってきたので、折り返しの連絡先を聞いてメモしておいた。

その後しばらくは何事もなく過ごしていたのだけれど。

昼近くになってかかってきた、3件目の電話が、けっこう問題だった。

「はい、毛利探偵事務所です」

『毛利はいるか』

「ただいま外出しております。折り返しお電話いたしますので、恐れ

入りますがお名前とご連絡先をお知らせいただけますか？」

『……いつ帰ってくる』

「午後には帰る予定です。少し遅くなるかもしれませんが」

『……麻生圭二だ。そう伝えれば判る』

「かしこまりました。麻生圭二様からお電話があったと、毛利に伝えておきます」

電話が切れたあと、ぶわっと冷や汗が出てきた。

麻生圭二、つて、ピアノソナタ『月光』殺人事件のキーワードだよ
!!

私はメモ帳に、『11:48 アソウケイジ様より電話』と書いて、少し落ち着くために、思わず毛利探偵の机の周りを探してしまった。(いや、さすがに思いとどまったけどね。せつかく1か月禁煙できたんだから、ここで吸うとこの先よけいにつらくなりそうだし)

とりあえずお昼の時間になったので、ポアロが混み出す前に電話をかけてサンドイッチとメロンソーダを注文しておいた。

(なんか、メロンソーダの上に乗ったチェリーが無性に食べたかったんだよ)

注文が届くまでと、届いたあとにかけて、私はピアノソナタ『月光』殺人事件について思い出していた。

このお話、確か満月の夜に事件が起きるはずで。

毛利探偵事務所には新聞が届いているので、今日の月齢を確認すると12・3。

ということは、13日の金曜日の夜が満月ということになる。

その前の天下一夜祭殺人事件が起きるのが、明日の11日だとして。

1泊して帰ってくるのが12日だから、日数的にも単行本掲載順的にもぴったり合う。

……回避、可能だといいなあ。
なんか電話を受けた時点で、回避の可能性がほぼ絶望的な気がして、それ以上は思考停止することにする。

毛利探偵が戻ってきたのは、予定よりも少し早く、1時ちよつと前だった。

「おかえりなさいませ」

「ああ、会計ソフトの勉強はできたのか？」

「はい。あとは税理士さんに細かいところを確認すれば何とかかなりそうです」

「そうか。……電話は3件か。旭さんは猫探しの件だな。……アソウケイジ？」

「はい、そう言えば判るとのことでした」

おもむろに、毛利探偵は机の引き出しから、マンガにあったあの脅迫文じみた手紙を取り出した。

……あんなところにあつたのか。

煙草を探してうっかり引き出し開けなくてよかった。

「そういうの、多いんですか？」

「ああ、最近ポチポチな。……いたずらだと思つて放つておいたんだが」

「そんな感じではなかったですね。午後には戻るとお伝えしましたので、またかかつてくるとは思います」

「……オメー、今週の金曜日の予定は？」

「予定はありませんが」

「なんとかならねえか？」

……こういう時、簡単に嘘をつける性格ならよかつたんだけど。

「……まあ、原付免許を取りに行くつもりだったので、ずらせないこともないです」

「じゃあ出勤だ。金曜日から土曜日にかけて、泊りがけになるかもしれねえから、そのつもりでな」

「いちおう理由をお伺いしても?」

「オメーはオレの調査報告書を作るのが仕事だろう? そのたびにいちいちオメーに調査内容を話すのが面倒なんだよ。だったら一緒に調査に行つちまつた方が早エだろうが」

ああ、先日の丸さんの浮気調査報告書が面倒だったのか。

こりや私、また自分で自分の首を絞めたな。

「判りました。ちなみに、明日の旅行は予定通りでいいんでしょうか?」

「ああ。蘭たちの学校が終わるころだから、3時半くらいに事務所に来てくれ」

「すみません、なんか、私の分まで旅行の費用を出していただいて」

「いいんだよ。子供はよけいな遠慮なんかすんじやねえ。黙って大人に養われてりやいいんだ」

確かに、毛利探偵が言うとおり、16歳は子供だよな。

でも私、実質あなたより年上なんですけどね。

(確か毛利探偵って38歳くらいの設定だった気がするし)

しょうがない、7歳年上の私が、可能な限りあなたを守ってあげますよ。

仕事は1時半までで終わり、5時間(昼休みを抜いた4時間で計算かな?)の労働となった。

工藤邸の掃除と同じく、こちらもテキストのベタ打ちで仕事をメモしておく。

いちおう給料日を聞いたら、20日締めOfMonth末払いにしてくれら
しいから、こんなのもつけておけば稼ぎの目安になるからね。

(ということは、今日が10日だから今月はあと10日しか仕事の
チャンスがない訳だ。やっぱりほかにも仕事を探さない?)

さて、金曜日からの出張はどういう扱いになるんだろうか？

とりあえず、今月は園子さんの3万円と工藤家の掃除4万円とで計
7万円稼いではいるから、出張の計算方法によつては目標10万はな
んとかかりそうなんだけどね。

まだ原付免許代を出そうとすると足りないから、来週早々に免許を
取りに行つて今月中にデリバリー系の職に就くのが最善だろう。

今朝でカレーのストックがなくなったので、今日の夕食のために再
び買い物に出た。

さすがに3日間朝晩とカレーを食べ続けたら飽きてきたから、今度
はフリーザーバッグを買つて冷凍することにする。

そのほか、カレーに入れるコーンの缶詰と、少し残ったキャベツを
野菜炒めにするのにもやしも買つて。

カレー用のひき肉を少し野菜炒めに回して、もやしとキャベツと玉
ねぎで炒めたあと、今日はそれと最後の100グラムご飯で夕食にし
た。

夕食のあとはストックのカレー作り。

うちのお鍋で約6食分ということが判つたので、今夜煮込んだあと
明日小分けにして冷凍すればいいかな？

そういえば100グラムご飯ももうないから、お米も炊いて冷凍し
ておかないと。

……うちの冷蔵庫、もともと家族二人しかいなかったからあんまり
大きくないんだけど、スペースは大丈夫だろうか……。

料理のレパートリーが限られてる私では、始めてみたはいいけどな

かなか自炊の壁が高くて。
早くも挫折しそうだったりします。

FILE・16 故郷は近く、でも遠く ㄱ天下一夜
祭殺人事件ㄱ

5月11日(水)

今日は午後から旅行の予定なので、朝風呂の前に炊飯器にといだお米を入れておいて、お風呂のあとに火をつけて。

炊き上がったご飯を小分けにして、今度はぜんぶ100グラムにしておきました。

出来上がった16個のご飯を冷凍庫に詰めていく。

それでスペースの半分は埋まらなかったなので、この分だと昨日作ったカレーを詰めてもなんとかなりそうではっとしたよ。

カレーの方もフリーザーバッグに詰めて冷凍庫で保管、半端に残ったご飯とカレーとカ〇リーメ〇トで朝食にして。

うん、お味もなかなかだし、これはこれで手軽な保存食ってことでバッチリだね。

あとは我が家の20年選手の冷蔵庫がとっぜん壊れたりしないことを祈るだけだ。

(買い替えの話が出てからすでに数年経ってるんだよね。こんなことになるならさっさと新しいのを買っておけばよかったよ)

冷蔵庫もこの20年で進化してるからね、うちのは冷凍庫が上にあるけど、最近では上下逆になってるタイプも多いし。

たぶん長い目で見たら電気代なんかも節約できたりするから、早めに買い替えた方がお得だったりするのかもしれない。

(ていうか、自炊するために冷蔵庫を買い替えるくらいなら、そもそも自炊をあきらめるのがものぐさ女子です)

そんなこんなでお昼までまた少し時間が余ったので、工藤邸の掃除

に向かうことにした。

先日からの水回りシリーズの続きで、3回目の今回はトイレ掃除。工藤邸のトイレは1階と2階の2箇所あるので、まずは屋敷の窓を全開にしたあと（これだけでも5分以上かかる）、2階のトイレから始めた。

職場のトイレなら個室5分もかけないのだけれど、少し丁寧に拭き掃除をして。

便座のカバーやタオルなんかはまた時間があるときにでも洗濯することに、約20分くらいかけて磨き上げていった。

それが2箇所で40分、雑巾を洗って窓を閉めればちょうど1時間でおしまいだ。

うん、このくらいの手間ならちよつとした空き時間にできるから、時間がないときにはこの手でいくことにしよう。

（でも今月分がまだ30時間以上残ってるから、いずれは時間をかけて庭の草取りなんかもしないとだけどね）

夕食は旅館の食事できつと豪華になるので、お昼はカ○リ○メ○トで済ませることにした。

食事中にも考えてたんだけど。

実は私の地元がもともと埼玉だったから、以前この天下一夜祭殺人事件についていろいろ検証したことがあるんだよね。

祭りの会場がどこだろうとか、毛利一家が泊まってる旅館がどこで、どういうルートで行ったのか、とか。

祭りの場所が特定できたら面白いだろうと思って始めたんだけど、その時はけつきよく結論が出なかったんだ。

まず、原作に名前が出ているのが、「桶山ホテル」と「桶山駅」だ。

桶山ホテルは犯人と被害者が宿泊していた場所で、周囲の様子が割と都会に描かれていることから、この2箇所は私が知る現実世界の「

桶川駅”及び駅近くにあるビジネス系のホテルじゃないかと推測できると。

桶川駅はJR高崎線にある駅で、上野までは40分前後くらいで行けるので、東京のベッドタウンとして埼玉ではそれなりに栄えてる方だと思っからさほどおかしくはないだろう。

一方、そこから車で40分くらいのところにあるお祭り会場。

文字が描ける程度の高さの山が3つ並んで見えるということは、秩父に近い方だと思っただけだ。

毛利探偵たちが泊まっっている旅館がその近くだとすると(マンガで旅館の浴衣らしいものを着ているのでたぶん徒歩でさほど遠くないだろう)、実は東京から直接秩父方面に行く路線が通ってるんだよね。

つまり、事件解決後に祭り会場近くの旅館に戻って泊まっただ毛利探偵たちが、わざわざ事件の翌朝に遠く離れた桶川駅で横溝刑事たちに見送りを受けるという事になり、マンガのラストシーンがかなり不自然な状況になるんだ。

まあ、遠回りするなりして桶川駅を通過って秩父方面に行くことも不可能じゃないけど、時間もお金もかかるしね。

そんな訳で、その時けつきよく私は、この謎の解明に至ることはなかつたんだ。

事件のことがまったく気にならない訳じゃないけど、私はむしろ今回そっちの方が気になっつたりする。

あの時、地元民の意地のようにいろいろ検証したことの答えが出るかもしれないのだから。

まあ、この世界の埼玉が、私が知る埼玉とまったく同じということはないから、解明してみれば「なーんだ」と思っただけの真実かもしれないけど。

食後は旅行かばんに荷物を詰めて。

(この旅行かばんも、確か勤続10年の記念品かなんかでもらったあとあまり使ってなかったんだけど、最近はなんだかんだ活躍してるよな)

パソコンで天下一春祭りのサイトを予習して時間をつぶしたあと、ちようどいい時間になったので毛利探偵事務所へと訪れた。

蘭さんは自宅の方で旅行の準備をしているということ、でもさほど待つこともなく荷物を持って階段を下りてきていた。

「お待たせ。じゃあ行きましようか」

なんか、蘭さんの荷物が一泊にしてはものすごく大きい気がするんだけど。

若い女の子って、あんなに荷物が大きくなるものなのか？

「蘭姉ちゃん、ずいぶん重そうな荷物だね」

コナン君も疑問に思ったのか、私の代わりに訊いてくれた。

「ほら、明日の学校の支度も入ってるから。教科書は学校に置いてきちゃったんだけど、制服がね」

「え？ 蘭姉ちゃん、明日学校行くの？」

「うん、行くわよ。だって近いから朝出れば十分間に合うから。その代わり、旅行の荷物はお願いな、お父さん」

「ああ。……ったく、仕方ねえなあ」

さすが化け物毛利蘭、旅行で一泊したその日に出席するのか。

……ていうか、先日思わず学校行けよとか思ってしまったてすみませんでした!!

東都環状線から埼玉方面の路線に乗り換えて。

風景はしだいに都心の雑踏から遠ざかって。

私を知る、地元埼玉の空気が漂ってくるような気がした。
景色そのものに見覚えはないんだけど、なんとなく、ああ地元なんだ、って思えるような雰囲気になってきたんだ。

—— たぶんここは、私を知ってる埼玉県じゃない。
だからきつと私を知る風景なんてものは存在してなくて……。

電車はトータルで1時間もかからずに桶山駅へと到着した。

「じゃあ、みんな、はぐれるんじゃないぞ」

「はい。コナン君、お父さんのあとについていくんだからね」

「うん、わかった」

「……」

そのまま毛利探偵は駅の改札を出てしまつて。

旅館のパンフレットを片手に駅前通りを歩き始めたから、私にはようやく目指す旅館が桶山駅近くにあることが理解できたんだ。

「あの、蘭さん」

「ん？」

「旅館、って、この近くのの？」

「うん、そう聞いたよ。桶山駅から歩いてすぐだつて」

「どうしてこんなところなの？」

「さあ、お父さんが決めたから、理由はよく判らないけど」

「なんかね、桶山にあるから、山の近くだろうって、おじさん言つてたけど」

……なるほど、つまり単なる勘違いだった訳だ。

それまでいろいろ検証していた分、私はなんだかぐったり疲れてしまった。

「す、少なくとも、山の近くじゃなさそうね」

「おじさん大丈夫かな？」

平日夕方の桶山駅は学生や買い物客で混み合っている。

そろそろサラリーマンも仕事を終えて雑踏に加わり始める頃だろう。

目当ての旅館は駅からかなり近かったらしく、その歴史あるたたずまいは都会的な周りの風景とぜんぜん溶け合っただけではなかった。

「おお、ここだな。—— すみませーん、予約した毛利ですが」

「はい、ようこそおいでくださいました。毛利様4名様ですね。さっそくお部屋へご案内いたします」

毛利探偵は気づいているのかいないのか。

美人のおかみさんに笑顔を向けられて上機嫌であとをついていく。私も、気づいていないならそれでいいかな、と思い始めていて。

もしもお祭りに間に合わなくて、犯人の笹井と出会わなければ、私が事件に巻き込まれることもなくなるってことに気付いたから。

おかみさんが案内してくれたのは洋室で、女性と男性と二部屋に分かれて泊まることになった。

「お夕食は6時ごろからになりますので、よろしければそれまでお風呂にでも行つてきてください」

旅館の建物からちよつと離れた場所にあるお風呂は、銭湯の小型版のような感じで、温泉などではなく本当にふつうのお風呂だった。

「なんだか、いろいろ予想外だったね」

「うん。でも、たまにはこういうのもいいかな。なんか、都会の真ん中にあるオアシスみたいで」

「ふつうに車の音とか聞こえるもんね。……お祭りって確か夜8時からだったけど、お父さん判ってるかな？」

「お祭り自体はもうやってると思うけどね。天の字が灯るのが8時で、20分ずつずれて下と一に火が付くから、9時までに行ければ一の端っこくらいは見えるかもね」

「愛夏ちゃん詳しいね。じゃあ、ここからだどのくらいで会場まで行けるかとか判る？」

「車だったら小一時間、電車だともっとかな。まあ、食事が終わってからも間に合うよ、たぶん」

「だったらいいんだけど」

いや、私はこのまま毛利探偵を夕食の時に酔いつぶして、車に乗れないようにしちやいたいくらいなんだけどね。

……まあ、それをやったら、事件を解決する人がいなくなつて、犯人が逮捕されずに終わることになるかもしれないからしないで。

広めのお風呂でくつろいで、備え付けの浴衣に着替えて食堂の前を通ると、すでにテーブルには同じく浴衣姿の毛利探偵とコナン君がついて私たちを待っていた。

「おう、早く座れ！ おかみさん、ビール！」

「ダメよお父さん！ これからお祭り行くんだから！」

「いいじゃねえかちよつとくらい」

「ダメ！ お祭りが終わるまで飲ませないからね！」

旅館の夕食はてんぷらとかお刺身とか、いわゆる旅館の伝統的な夕食で。

とくに変わった食材もなく、安心してゆつたりと食べることができた。

そんな食事が終わる頃、ようやく毛利探偵がおかみさんに声をかけたんだ。

「おかみさん、これから天下一春祭りへ行きたいんだが、ここからだとどう行けばいいんですかね？」

「え？ お客さんたち、天下一さんへ行く予定だったんですか？ そうと知ってれば夕食を早めにしたんですけど」

「……は？」

「そうですね、ここからだ、車を使って4、50分くらいでしょうか。今地図を印刷してきますから」

ここでようやく毛利探偵は自分の勘違いに気付いたらしい。

呆然としていたけれど、おかみさんが地図を持って戻ってきたあと、ようやく我に返ってまくし立てていた。

「あの！ この近くにレンタカーの店はありませんか!？」

「え、はい、旧道の向こう側のちよつと右へ行ったあたりに」

「お前たち！ すぐにレンタカー屋へ向かうぞ！」

「えー？ 私たち浴衣なだけど!？」

「そんなの車に乗っちゃまえば気にならねえよ！ それより早くしろ！

時間がねえんだよ！」

「わ、判ったから。……んもう、おとうさん、いつもこうなんだから」

私たちは部屋に戻ってひとまず私はいつものかばんを持ったあと、

毛利探偵のあとについてレンタカーのお店へと向かった。

……まあ、恥ずかしいのは今だけだし。

(たとえば周囲を仕事帰りのサラリーマンたちが闊歩していいようにとも)

毛利探偵が言うとおりに、車に乗ってしまったえば気にならないし、祭り会場はみんな似たような恰好だろうし、帰りは夜だから真っ暗だし。

でも、なるほどな、お祭りでみんなが浴衣姿でいたのには、こんな経緯があったんだ。

これでもいろいろ考えたんだよ。

お祭り会場から事件現場の桶山ホテルまでは警察の車に乗ったんだらうから、解決後は祭り会場近くの旅館に送ってもらったとして、そのあと再び桶山駅に戻ったのはどうしてなのか、とか。

もしかして推理ショーのあとに毛利探偵だけ桶山ホテルで寝ちやつたから、荷物を取りに（あと浴衣を返しに）蘭とコナンは片道40分を警察の車で往復したのかな、とか。

まさか、泊まった旅館が桶山駅近くで、なおかつ時間がなくて浴衣を着替えられなかったとは……！

やっぱり、マンガを読んでるだけじゃ判らないことは様々あるなあ。

借りた車にはナビがついていたので、私が目的地入力を引き受けて。

その流れで助手席に座ったので、コナン君の隣には座らずに済んだ。

「愛夏、オメー、カーナビまで判るのか？」

「このくらいならカンでいけますよ。毛利探偵も慣ればすぐ判るようになります」

まあ、私の車のカーナビとあんまり操作が変わらないから判るだけだけどね。

数年前に取り付けた当初は、車屋さんに教わらなければさっぱりだった45歳です。

「左上に出てるのが到着する時間か？」

「そうですね、あまりあてにはならないですよ。そんなことより前見て運転してください」

「お、おう」

「愛夏姉ちゃん、あてにならないって？」

「今はまだ帰宅ラッシュの時間帯ですからね、機械だからそういうの
があまり考慮されてないんです。あと、祭り会場付近はふだんよりも
混雑してる可能性もありますから」

「そうなんだ。愛夏姉ちゃん詳しいね」

「なにしろコナン君より3倍近く生きてますからね、いろいろあるん
です」

いや、彼はもう17歳になったはずだから、そろそろ3倍は盛りす
ぎかもしれないけどね。

ともあれ、こういう細かいところも彼にとっては状況証拠になつて
るんだろうな。

祭り会場は方角的には秩父方面で間違いなかったんだけど、出不精
で地理に疎い私にはそれが私の知る世界のどのあたりに該当するの
かは判らなかつた。

この祭りのために特設されたらしい、ただの広い空き地の駐車場に
指示に従って車を停めると、そろそろ文字の点火が始まるのだろう、
集まった人たちも何となく盛り上がっているようだった。

「けっこう人が多いな。おいコナン、はぐれるんじゃないぞ」

「うん、大丈夫だよ」

「チツ、めんどくせえ。……蘭、あれを買ってこい。迷子札代わりだ」
「うん、判った」

毛利探偵が指さしたのはいろいろな動物をかたどった風船の屋台
で、蘭さんは嫌がるコナン君を連れてお店まで行ってしまふ。

やがて戻ってきたときには、コナン君は浴衣の帯にウサギの風船を
くくりつけられていた。

「やだこれ、恥ずかしいよ」

「なんでよ、すごくかわいいのに」

「ねえ、愛夏姉ちゃん、これ取って？」

「いいと思いますよ。人ごみは子供には危ないですし、それがあれば目印になりますから」

風船がちょうど大人の目線あたりになるから、危険回避の意味はけっこう大きいと思うんだよね。

さすが子育てを経験してるだけのことはあるな毛利探偵。

おそらく蘭さんが子供の時にも、こんな風に彼女を守ってあげていたんだろう。

やがて8時の合図とともに、山の方が明るくなって。

数秒で山の中腹に炎でかたどられた天の文字が浮かび上がった。

「おおー！」

「きれい……」

うん、すごいな。

環境破壊とかいろいろ言いたいことはあるけど、確かにきれいだし、これはこれでありかもしれないと思う。

ケータイのカメラで一枚だけ山の写真を撮って。

短い文章を添えて、ユキさんとヨーさんにメール送信しておいた。

とりあえず被害者が死んだ時刻が過ぎた。

この犯罪自体は、防げる方法がまったく判らないから、考えることすらしなかつただけだ。

(ホテルの名前は判るけど、被害者は有名人だから、無関係の他人が部屋場所を教えてもらうなんて無理だろうし)

40分後、ちょうどの文字が灯った頃に、加害者は原作通り蘭さんに声をかけるのだろうか？

……この会場に数千人以上もいるだろう観光客の中から、わざわざ蘭さんを選ぶように。

お祭りでテンションが高い蘭さんを先導者に、手を引かれたコナン君と、私と毛利探偵がうしろをついて露店を回っていく。

夕食のあとだったから食べ物系は軽いものだけで、なつかしさについて綿あめとチョコバナナなんかを買ってしまった。

そういえばチョコバナナなんてものが流行り出したのもたぶん、私が高校生くらいの時だったかな？

それ以前だと串ものはあんず飴とかリンゴ飴とかフランクフルトとかで、飴系があまり得意じゃない私は綿あめと焼きトウモロコシばかり食べてたような気がする。

射的や金魚すくいなんかを流しているうちに、下の文字の点火があつて。

2枚目の写真を撮ってメール画面を見ると、ユキさんからの返信メールが届いていた。

……彼氏の写真？

毛利探偵の横顔を撮って一緒に送信しておいた。

「ん？ なんだ？」

「いえ、友達にちよつと」

「なんだ、撮る前に言え。かつこいい角度とかあるんだよ」

「失礼しました」

ユキさんからの返事は、不倫はよくないよー、で。

最後の1の写真は3人並んだところを撮って送ることにしよう。

下の文字が点いたあとは割とすぐに天の文字は消えてしまつて。

なるほど、文字の点火が20分おきなのは、できるだけ長い時間文字を灯しておくためと、あと文字が消えてる時間を作らないためなの

か。

いろいろ考えられてるなあ。

まあ、こういう祭りだったから、殺人のアリバイ作りに利用されちゃったりするんだけど。

「愛夏姉ちゃん!!」

「はい!」

「どうしておじさんなの!? ぼくでいいじゃない!!」

声に驚いて見るとうしろに怒った様子のコナン君がいて、手にはなぜか私のケータイが……!」

私、さつきちゃんとかぼんの内ポケットに入れたよね??

オイオイ探偵のモラルどこ行った!」

「……あの、ジョークですから」

「わかってるよ! でもちゃんと訂正しておいて」

「……判りました。写真撮りますからケータイ返してください」

「蘭姉ちゃん、ぼくと愛夏姉ちゃんのツーショット写真撮って?」

「うん、了解」

やり取りを見ていた蘭さんが苦笑いでケータイをコナン君から受け取る。

……ああもう、好きにしてください。

そのままだと同じフレームに収まらないので、コナン君の隣でしゃがんで笑顔を作って。

彼はそれがちよつと不満だったみたいだけれど、蘭さんがカメラを向けるとこちらも笑顔を作っていた。

蘭さんに返してもらったケータイでユキさんとヨーさんにメール送信。

タイトルは「間違えました」で、本文は「ラブラブです」だ。

いったいどこのバカップルだと言わずにはいられない。

「愛夏ちゃん、コナン君どうしたの?」

「友達に彼氏の写真と言われて、毛利探偵の写真を送ったら、それが気に入らなかつたみたいで」

「え? 愛夏ちゃんでもしかして年上趣味?」

「……そうなのかな。……うん、そうかも」

だって、見た目同年代の高校生とか、子供にしか見えないから。

(45歳ならそのくらいの子供がいて不思議じゃないし……というかむしろ普通だ)

20代の中頃にはもう、アイドルグループの男の子なんかカッコいいからかわいいに変わってた気がする。

「お、お父さんはダメだからね! ちゃんとお母さんという人がいるんだから!」

「うん、大丈夫、判ってるしあれはジョークだから」

「もう、愛夏ちゃん大人っぽいからすぐ心配。ぜったい年上受けするタイプだもん。いろいろ優秀だし」

「大丈夫だから。毛利探偵は美人好きで、それにちゃんとお母さんのこと愛してるはずだから」

なんで私が毛利探偵と不倫疑惑されなきゃならんのだ。

これからはたとえジョークでも毛利探偵をネタにするのはやめよう。

「あれ? 私、愛夏ちゃんにお母さんのこと話したっけ?」

「ううん、今聞いた。そういえば蘭さんのお母さんて何してる人なの?」

「弁護士だけど、今は別居してて。……でも、どうしてお父さんがお母さんを愛してるって?」

「あのさ、目の前の人自分が自分に興味があるかどうかくらい、見てれば判るよ？ それに毛利探偵が美人好きなのもあからさまだし。女の勘が、あれは本命がいるな、って。だったら相手は蘭さんのお母さんくらいでしょ」

「……愛夏ちゃん、ほんとに大人だよね」

いやまあ、ほんとに大人ですから。

ていうか、私ほんとに最近、嘘をつくスキルだけが磨かれていく気がするよな。

毛利探偵とコナン君は、話を聞いてたのかそうじゃなかったのか、こちらに背を向けて並んで立っただけ。

……まあ、聞こえてたんだろな。

どんな顔で聞いているのか興味はあったけど、ひとまずそつとしておいてあげよう。

「そろそろ一の字の点火が始まるかな。愛夏ちゃん、また写真撮るよね」

「うん。今度は3人並んだところを撮らせてほしい」

「ヨーコさんに送るの？」

「うん」

「え？ ヨーコちゃん!? 愛夏オメー、ヨーコちゃんのアドレス知ってるのか!?!」

「……教えませんよ」

「そこをなんとか……!」

「いい男は、努力する姿をさりげなく見せるものですよ。そういう姿に女はグツとくるんです」

「……」

心当たりがあるのか、毛利探偵は言葉を飲む。

そうこうしているうちに時間が来て、文字の両端から火がともつ

て、すぐに中央で一緒になって一の字が形作られた。

「あ、ついたついた！ 最後の「一」の文字が！」

「おーっ！」

蘭さんはその後コナン君に、いまさらながらこの天下一春祭りの趣旨を説明していて。

……今年の豊作を祈願、って、5月にやる祭りとしてはどうなんだろう？

(いや、意外に都会っ子の私には田植えのこととかよく判らないけど) 春祭り、という名前も5月にしてはちよつと遅すぎな気もするし。なんかこの世界、いろいろおかしなことになってる気がするのは私だけじゃないと思う。

そのとき ——

「ふー、間に合った……」

ずっと、来なければいいな、と思ってたあの人が。

うしろから聞こえた声に思わず振り返ると、息を切らせた色黒の男が、ちようど蘭さんたちのうしろあたりに立っていたんだ。

「すみません、1枚撮っていただけませんか？」

「あ、いいですよー！」

「じゃあ、あの「一」の字をバックに、このカメラで……」

蘭さんは男から使い捨てカメラを受け取って。

1枚撮ったあと、男が書いたという本を受け取って、いろいろ話をしていた。

……まあ、写真だけだと多少弱いから、蘭さんたちは万が一の時のための証言者、ということなんだろうけれど。

蘭さんって、ぱつと見ただけだと優しくて親しみやすい雰囲気があるから、こういう厄介なのに絡まれやすいんだろうな。

(その証拠に、ほぼ同時に振り向いた私は一切絡まれてないし)

「この辺もいいですね、もう2、3枚お願いできますか?」

「あ、じゃあ先に、私たちのも1枚撮ってもらえませんか?」

「ええ、もちろんです」

「愛夏ちゃん、せっかくだから撮ってもらおう? 一の文字をバックに、4人で」

それまで傍観者というか、通行人のような振りをしていたのにいきなり振られて驚く。

慌ててカメラを起動して笹井さんに手渡すと、ちよつと困ったような笑みを浮かべた。

「すみません、どれを押せばいいんでしょうか?」

「あ、このボタンです。画面を見ながらカメラを合わせて、ボタンを押したらあとは何も押さずに返してください」

「判りました。……どうもデジタル系は苦手です、すみません」「いえ」

まあ、最近はいち捨てカメラより、デジカメやケータイを使う人の方が多いからね。

使い捨てカメラを持ってきた理由としてその言い訳をあらかじめ用意していたんだろう。

(デジカメだと加工ができちゃったりするから、証拠として採用されるか微妙なところだし)

4人並んで、コナン君をフレームに入れるために蘭さんがうしろから抱き上げて。

戻ってきたケータイの写真のコナン君は、真っ赤になって口をつぐ

んでいた。

……うん、これは永久保存決定だな。

その後、笹井さんは数枚の写真撮影を蘭さんに要求して。

本をもらってしまったからか、蘭さんもとくに嫌がらずにその要求にこたえていた。

間に雑談をはさみながら、笹井さんも加わって5人で露天周りをまわっていたところ。

そろそろ一の字も消えそうだな、というあたりで、蘭さんがシャツターを押すと同時に笹井さんの背後に横溝刑事らしい男性が立っただ。

「え？」

「笹井宣一さんですな……？」 自分は埼玉県警の横溝と申します!!

今竹智さんの件でちよつと聞きたいことが……」

「は？」

「け、警察……？」

「ん？ はて？ あなた、どっかでお会いしたような……」

そう、口をはさんだ毛利探偵を横溝刑事はまじまじと見つめて。

「あのー……今竹になにかあったんですか？」

「殺されたんですよ!! あなたが彼と泊まっているホテルの部屋でね

!!」

「な!？」

そのあと

いちおう簡単にアリバイをということで、笹井さんは8時にはこの会場にいて、8時40分頃に私たちと会ったという話をして。

詳しい事情を聞きたいからと、なぜか私たちまでが桶山ホテルへ来るように言い使ってしまった。

いやまあ、判つてたことではあるけどさ。

私たち4人は毛利探偵のレンタカーで桶山ホテルまで行って、現場にいた若い刑事さんに頼んで、レンタカーはお店に返してもらうことができた。

（免許持ってたら私が返しに行ってもよかつたんだけどね。若返つたのがせめて18歳だったらなあ、免許証も残ってただろうから、そのままバックレられたのに……）

さて、桶山ホテルの部屋では、とうぜんのことながら射殺死体が横たわっていました。

……見なかつたけどね。

アリバイ証言のためだけにきた私なんかを確認する必要なんかないし。

まあ、毛利探偵とコナン君の二人は積極的に死体を調べに行っちゃいましたけど。

一通り調べ終わったのか、写真の現像が終わるまでの待ち時間に、コナン君が私のところへとやってきた。

「愛夏姉ちゃん、なにか判つた？」

「なにか、つて？」

「現場の変なところとか」

「ぜんぶ変ですよ。今竹さんが歯を磨いている最中に殺されたんだとして、銃声が聞こえたあとすぐに男が逃げたとすると、部屋を物色したのは今竹さんがまだ生きている時つてことです。いくら洗面所で歯を磨いてたと言つても、不審者に隣でござそざされたらいくらなんでも気が付きますよ。だったら犯人は、同じ部屋に泊まつたあの人しかいません」

そのくらいは、探偵じゃなくても、並みの想像力があれば気が付くことだからね。

むしろなんで犯人がそれに気づかなかったのかの方が不思議だわ。
(職業は想像力が必須な作家なんだし。……なるほど、だから売れないのか)

別に部屋なんか物色しないで、今竹さんの財布だけ頂戴して逃げればよかったのにさ。

(でもこれじゃ物取りに取られたのか本人がたまたま財布を落としたのか判らないか。別にそれでもいいような気がするけど)

じゃなかったら、最初から今竹さんを脅すなり騙すなりして縛ってから部屋を荒らして最後に殺すとか。

……あ、そうか、歯を磨いてたからそれができなかつたんだ！

口を粘着テープかなんかでふさがないと騒がれるから、けつきよく殺して逃げるしかなくなるもんね。

ほんと、この原作よくできてるわ。

「でも、証拠がないよ」

「そうですね。凶器や物証はたぶん、すでに川かなにかに捨てたあとでしょうし」

「そうだね。……ねえ、愛夏姉ちゃんは、あの写真の証拠って何だと思う?」

さて、どう答えるか。

ていうか、こういう聞き方をしてくるってことは、私がある程度未来予知に近いことをしてるって。

そっち方面に彼の思考が傾いてるからなんだろう。

「アリバイですよね。……彼が8時に祭り会場にいた証拠なら、ふつうに考えたら天の字じゃないですか?」

「天の字? でもそれだけじゃ8時から8時20分までの間に会場に

カメラがあつた証拠にしなければならないよ」

「ほかの人に頼んだりもできませんか。じゃあ、本人も映ってないと。蘭さんが撮った写真、すべて本人も入ってましたから、証拠にするならきつと同じようにしますね」

「でも、それだったら本当に、アリバイが成立しちゃうよ」

「等身大の立て看板でも置きましようか？　夜だから案外ごまかせるかもしれませんよ」

「ぼくだったら小さい写真を手前に置いて撮るかな。あんな人が多いところで、等身大の写真の写真を撮ってるなんて、すごく目立つもん」
「でも、いずれにしてもかなりの練習が必要です。指が入ったりフラッシュで変な光り方をしたり。事前に練習できる日なんて限られますから、やっぱり本人が入って直接写真を撮った方が現実的ですね」

「事前に練習……。事前に本番、か」

「本番、ですか？」

「あの使い捨てカメラには日付が入らないから、たとえば1年前の写真でもわからないよ」

「すごいですね、コナン君。もしもこれが1年以上前からの計画殺人なら、私でもそうすると思います」

「どうだろう、うまくごまかせるといいんだけど。」

「まあ、たとえばごまかせてなかったとしても、それはそれでいいんだけどね。」

「彼が私の秘密を自分の力で暴いてくれるなら、私はその方がいいんだから。」

「とりあえず私は、彼が起こしてきたアクションに対して、全力でごまかすだけだ。」

「やがて現像されてきた写真には、私とコナン君が想像したとおり、天の字と本人が写っていた。」

「ごりや、笹井さんが8時25分よりも前に祭り会場にいたのは間違いない。アリバイ成立ですな」

「いえ、毛利探偵。自分にはどうしてもこの男が犯人に思えてならないですよ。彼がやっていることは、まるでアリバイを作っているようじゃないですか」

うん、横溝刑事の感覚は正しい。

その調子で頑張っつてこれからも私のふるさと埼玉を守っつていっつてくっださい。

そのあと、コナン君が笹井さんに、自分の荷物を確認しなくていいのかと問いかけて。

どうやら横溝刑事がさらに笹井さんを疑うよう、仕向ける作戦に出たみたいだ。

ま、このあたりも原作通りなんだけどね。

そしてそのあと、出版社の編集者の人が来て、殺された今竹さんの原稿の代わりに笹井さんの原稿を受け取ったのも、原作と同じだった。

コナン君の意見で旗色が悪くなって帰ろうとする笹井さんを、なんとか引き留めようとする横溝刑事。

その時、毛利探偵がふつと椅子に倒れ込んで。

テーブルに肘をついた姿勢を取らせて写真を並べるコナン君を、私はそつと横目で見守っていた。

どうやら今回は毛利探偵がいるから、私に眠りの小五郎をさせる気はなかったらしい。

「預かりますよ」

「え？ ……うん、ありがとう」

コナン君の腰ひもに着いた風船を外して、ドアの取っ手あたりに縛

り付けておいた。

これで彼も落ち着いて推理に専念できるだろう。

「まったくだ……。君にはがっかりだよ、横溝刑事」

「も、毛利さん……」

「せっかくオレが、君に手柄を挙げさせるために黙っていたというのに……。犯人の仕組んだ、あんなアリバイトリックの写真が見抜けんとは……」

「そ、それじゃあ!!」

「ああ、小説家今竹智氏をこの部屋で銃殺したのは、君の隣にいる、笹井宣一だ!!」

そのあと、自分が無実であると言い募る笹井さんの熱弁を、すべて毛利探偵は理論でねじ伏せていった。

写真の件についても、1年以上前に撮られたものである可能性を示唆したあと、原作とは違って風船に邪魔されはしなかったけど、原作通り横溝刑事に任せた。

きつとコナン君も、横溝刑事のことはある程度信用できたんだろうな。

写真を見比べて、手首の日焼け跡に気付いた横溝刑事が問い詰める
と、やっと笹井さんは自分の犯行を自供した。

「—— ねえ、お父さん、起きてよー!」

「諦めて置いていく?」

「こんな殺人現場に置いていたら、警察の人に迷惑よ。……でもどうしよう」

「じゃあ、ちよつと男の人に手伝ってもらって、下まで運ぼうか。あとはタクシーに乗せて旅館まで行ければ何とかかなると思うよ」

「そうね。じゃあちよつと頼んでみようか」

そうして蘭さんが、現場にいた刑事さんに声をかけると、タクシーを呼ぶまでもなく県警の車で送ってもらえることになって。

ありがたいことに旅館でも部屋まで運んでもらえたから、私の中では埼玉県警の評価はうなぎのぼりだったりする。

「お父さん、推理のあと眠っちゃうあの癖、なんとかならないのかな？」

「そうなんだ。私は初めて見たけど」

「最近けっこう多いのよ。たぶん、ふだん使わない頭を使って糸が切れちゃうんだと思うけど」

「まあ、推理するのとかつて、かなり精神力を使うからね。私もやってみるまで判らなかつたけど」

「そういうえば愛夏ちゃんも推理クイーンだったもんね」

「それやめて。もう二度とやるつもりないから」

「なんでよ、まるで新一みたいにかつこよかつたのに」

部屋の中で眠る準備をしながら、蘭さんと話していた。

蘭さんの中では、推理する人Ⅱ工藤新一という図式がすでに出来上がってるんだろうな。

「じゃあ、私、明日早いから、悪いけどもう寝るね」

「うん。私はまだ早すぎるから、ちよつとだけ散歩してくるから」

「じゃあ、おやすみ」

「おやすみ」

部屋に鍵をかけて、旅館の建物からお風呂がある庭に出る。

そこで少しだけ埼玉の空気を堪能していると、ふいにケータイが振動して、工藤新一からの着信があったんだ。

……もしかして、コナン君の部屋の窓から、私がかここにいるのが見えたのかもしれない。

「はい」

『オレ、工藤だけど』

「はい、高久喜です」

『今電話平気か？』

「少しなら大丈夫です」

『あの、さ。オメー、また事件に巻き込まれたって聞いて』

……コナン君、君だつてさつき部屋に戻ったばかりでしょう？

部屋に戻つてすぐに工藤新一に電話で事件の報告をしたとでもいうつもりなのか？

ケータイ持っていないコナン君が、こんなに早く工藤新一に連絡できたりしたら、勘のいい人ならおかしいって感じると思うよ。

「……今回は、ぐ遺体も見ませんでしたし、特には」

『そうか。まあ、無事だったならなによりだけど。それに、今回はコナンの相談にも乗ってくれたつて。その、ありがとうございます』

「いいえ、たいした力にはなれなかつたと思います」

『それでもねえよ。オメーの助言が的確だつたつて、コナンも喜んでたから』

「それならよかつたです」

まあね、原作という正解を知つてるから、ある程度的確にならざるを得ないのは仕方ないつていうか。

あんまりそらしちやつてコナン君の推理を正解から引き離すのも問題つていうか。

『それと、オメー、毛利探偵事務所働き始めたんだつて？』

「はい。まだ臨時のバイトですが」

『すげえ優秀だつて聞いたけど』

「たまたま毛利探偵や蘭さんの不得意分野が得意だつただけで、……」

私がとくべつ優秀な訳では……」

『あの、さ、もしオレが……』

そのあと、続きを言わないまま、少しの沈黙があつて。

やがて続きを待つていた私の耳に、少し調子が変わった工藤新一の
声飛び込んできた。

『あー、まあその話はいいや！ とにかく仕事がんばれよ！』

「あ、はい。工藤さんも頑張ってください」

『おう！ じゃあな！』

……。

……相変わらず唐突に切れるなあ。

ていうか、けっきょく何が言いたかつたんだろう？

相手の態度を見れば、自分に興味があるかくらいはすぐに判る。

電話だと判りにくいけど、でもまったくの無関心じゃないことは確かだ。

そのくらい、女として45年も生きてれば判っちゃうんだよ。

ああ、着信拒否したくなってきた。

(前回、傷つくからやるなど釘を刺されてしまったので、ギリギリまではやらないけど)

ものぐさ女子の本能が叫ぶんだよ、面倒ごとは回避しろ、と。

ケータイの時刻を確認すればそろそろ真夜中に近い。

蘭さんはもう寝ついただろうから、私ももう寝よう。

なんか今日も1日疲れたわ。

5月12日（木）

朝、いつものアラームで目を覚ますと、隣の蘭さんもゆっくりと目を開けたところだった。

「愛夏ちゃん、今何時……？」

「5時だよ。ごめん起こしちゃって」

「……うん、もう起きなきゃ。私、みんなより少し早い電車が出るから。愛夏ちゃんはゆっくりしていつてね」

「うん」

ていうか、毛利探偵とコナン君とじゃ、帰りの電車の中とかなにを話しているのか判らないよ。

できれば私も蘭さんと一緒に帰りたいたいところだったりする。

蘭さんと一緒に着替えて（彼女は学校の制服だ）食堂へ行くと、すでに朝食の用意はできていて。

どうやら蘭さんは自分の朝食を早くしてくれるよう、事前に旅館に話していたようだった。

ということはどうぜん、私の朝食はない訳で。

仕方ない、私は毛利探偵たちと一緒に帰ることにしよう。

「少しお待ちいただければすぐに用意いたしますので」

「ありがとうございます。……蘭さんは先に食べていいよ」

「じゃあ、お先にいただきますね。……うん、やっぱり旅館の朝食っておいしい」

それはたぶん、自分で作ってないからだよ。

蘭さんの料理を食べたことがある訳じゃないけど、私自身も自分が作ったご飯って、やっぱりなんか味気ないから。

（まあ、もともと料理が下手だとも言う）

さほど待つこともなく私の朝食も並んだんだけど、その頃には蘭さんはあらかた食事を終えていた。

「食べ終わったらすぐに出ちやう感じ?」

「うん、できればお父さんたちにも挨拶していききたいけど、まだ寝てそうだから」

「ラッシュの時間に重なるから気をつけてね」

「ありがとう。愛夏ちゃんたちも気をつけて帰ってね」
「うん」

さて、毛利探偵は何時ごろ帰る予定なのかな。

あんまり遅いと明日の出張の準備ができないから、たぶん午前中のうちには出ることになるだろうけど。

食堂で蘭さんを見送って。

私も食事を終えて部屋に戻ったけれど、隣の毛利探偵たちはまだ起きていないみたいだった。

まあ、まだ朝の6時半だから無理もないよな。

しばらくの間、私はケータイを見ながら時間つぶしをしてたんだけど。

ふと、埼玉とはまたしばらくお別れなんだな、なんてことを考え始めちゃって。

近いんだからいつでも来れるし、定職に就いてる訳じゃないから時間もそれなりにあるんだし、今回みたいにあまに泊まりに来ることだってできるんだけど。

出不精の私がきつかけもなく1時間電車で揺られるなんて、この先何年後になるか判ったものじゃないんだ。

私はケータイで地図が見られるサイトを検索して、埼玉県の、自分

が以前住んでたあたりを調べてみた。

場所自体は桶川駅から数駅東京方面に戻ったところで電車を降りて、徒歩だと1時間余り、車で15分余りくらいだ。

つまり、ここ桶山駅が元の世界の桶川駅に対応しているなら、今回はチャンスだったりするんだ。

でも、近隣の地図を表示してみても道の形からかなり違っていて、ケータイの小さな画面では元の自分の家がどのあたりなのか、特定することはできなかった。

行ってみようか。

さすがにレンタカーを借りるのは無理だけど、駅前にレンタサイクルのお店があるかもしれないし、なんならタクシーを使ってもいいし。

そう思っただいたいの見当をつけた駅名でレンタサイクルを検索したら、こちらはなかったので諦めることにして。

でも、バス路線でたとえば見覚えある地名とかも出てくるかもしれないから、一度調べてみるのも悪くないよ。

そうこうしているうちに朝の7時を過ぎたから、私は隣の部屋へ行ってみることにした。

コナン君はすでに起きて支度を始めていて、でも毛利探偵はまだ眠ってる。

……コナン君、あの麻酔針、ちよつと強力すぎやしませんか？

まあ、一瞬で眠らせなければ意味がないのは判るけど、そのあとなかなか目覚めないのはちよつと問題だと思っただけだ。

「おじさん、起きて！ 愛夏姉ちゃんが来たよ！」

「毛利探偵、そろそろ起きませんか？ 朝ご飯の準備ができてますから」

「どうする？ 愛夏姉ちゃん」

「できればさっさと起きてほしいですね。ちよつと相談したいことも

あるので。——毛利探偵！殺人事件です!!」

そう、耳元で怒鳴るように言うと、毛利探偵はピクツと反応して。次の瞬間にがばつと身を起こして、きよろきよろとあたりを見回した。

「なんだ!? 事件か!?!」

「はい、朝食の用意ができてるみたいです。私はすでにいただきましたので、お二人も早めに食べてきてください」

「……は?」

「おじさん、旅館に迷惑だから、早く朝ごはんにしよう? ……あと、おじさん、パンツ見えそう」

ああ、寝てる間に浴衣がはだけて確かに見えそうになってますね。視界に入っただけでもぜんぜん意識にのぼってこなかったのは、やっぱり45歳ゆえということ。

「じゃあ、私は部屋にいますので、支度ができたら呼んでください」

「あ、ああ。……蘭はどうした?」

「とつくに出かけましたよ。荷物はまとめてありますので、あとで持って帰ってあげてください」

「……判った。……悪かったな」

「いいえ」

なにを謝られたのか判らないまま、あいまいに返事をして部屋をあとにする。

部屋に戻って何気にテレビをつけると——さすがに有料じゃなかった。残念——昨日の事件がニュースになっていた。

そういえば横溝刑事たちは毛利探偵を見送りに来るのかな、などと考えていると、隣の部屋からケータイの着信音が聞こえてきて。

テレビの音量を抑えると、漏れ聞こえてくる毛利探偵の声に横溝刑事の名前が混じっていたことから、相手が警察関係者だと判る。

「どうやら本当にあのシーンも再現されるみたいですよ。」

けつきよく駅で待ち合わせのような形になってしまったので、そのあと毛利探偵は急いで支度をして、どうにか朝の9時ごろには旅館を出ることができた。

駅ではいかつい刑事たち数人が改札前で待っていて。

その中でもひとときわいかつい横溝刑事に案内されて、毛利探偵は無事帰りの電車に乗ることができました。

「いやー、犯人の笹井を無事逮捕できたのも、あなたのおかげですよ毛利探偵!!」

「は、はあ……。犯人？ 笹井？ 事件？」

もちろんマンガでの蘭さんのセリフはスルーです。

「犯人が笹井だけに……。『ささいな事件』なんちつてー！ ワツハツハツハツ!!」

「は、ははっ」

「はははは……」

電車の発車メロディが刑事たちのうつろな笑い声をかき消して。

上機嫌な毛利探偵を乗せたまま、列車は静かに発進していきました。

まあ、私は一緒に乗って、向かいの席に座ってる訳なんですけど。

「毛利探偵、実はちょっとお願いがありました」

「おう、どうした？」

「実は私、埼玉に親戚がいるんですけど。ここから近いので、帰りに寄っていきたいと思うんです。なので次の駅で別行動させてもらえ

「ませんか？」

「ああ、そりゃ構わねえが」

「ありがとうございます。もちろん明日の出張に影響は出ないようになります。という訳で、明日は何時ごろに出勤すればいいでしょうか？」

「ああ、まだ決めてねえんだ。決まったら電話する。多少朝早くても大丈夫か？」

「はい、問題ありません。ちゃんと今日中に帰りますので、夜にでもお電話いただければありがたいです」

「そうか。気をつけてな」

「はい、お二人もお気をつけてお帰りください。このたびはほんと、旅行に誘っていただいてありがとうございます」

「まあ、最後は事件になっちまったがな」

「それでも楽しかったですから」

そんな会話を交わしたあと、ちょうど次の駅に着いたので、私は荷物を持って電車を降りて。

私は一度改札付近まで戻って、路線図を確認してから再びホームへと降り立った。

そのまま次の電車が来るのを待つつもりだったんだけど……。

「愛夏姉ちゃん」

うしろから声をかけられて、振り向いたらそこに、リュックを背負ったコナン君がいました。

ソッコー毛利探偵のケータイに電話を掛けたのは言うまでもありません。

私はコナン君を次の電車に乗せて、どこかの駅で待ち合わせた毛利探偵に引き渡したかったのだけど。

毛利探偵が乗った電車は途中から快速に変わるもので、すでに乗換

駅は出発してしまつたあととのことで、けつきよく東都環状線の乗換駅まで降りられないんだよね。

つまり、コナン君をこの駅まで迎えに来てもらうとしたら往復で1時間以上も待たなければならぬということ。

(もちろん私が連れていってもここに戻ってくるのに同じだけかかることになる。だったらそのまま諦めて帰るよ)

さすがに事件と旅行で疲れているアラフォーの毛利探偵にそこまでの無理は言えず、けつきよく私がコナン君を毛利探偵事務所まで連れて帰ることになりました。

ていうか、コナン君、ほんととは一人で帰れるんだけどね。

(中学生なら微妙だけど高校生なら余裕だと思う。ちなみに出不精の私は中学2年生まで電車で一人で乗れなかったり)

「まあ、ついてきてしまつたものはしょうがありません。諦めて一緒に帰りましょう」

「え? どうして? 親戚のおうちはいかないの?」

「実は場所がいまいんです。だからちよつと迷うつもりでいたので、さすがにコナン君を付き合わせる訳にはいかないですよ」

「そんなの平気だよ! ぼく元気だもん。ちよつとくらいなら歩けるよー!」

「以前歩いた時には、徒歩1時間15分かかりました。道を知っていてそれだけかかる距離ですよ。迷いながらだつたらどのくらいになると思いますか?」

「……わかんない」

「はい、私にも判りません。なので今日のところは帰ります。今度また、機会があつたら来ることにします」

ホームのベンチでそんな話をしたあと、お互いに黙つたままやつてきた電車に乗り込んで。

列車のドアの近くに立って、流れていく風景をじっと見つめていた。

見覚えはぜんぜんないのに、でも懐かしい風景。

たぶんちよつとした思い込みはあるんだと思うけど。

でもここは、この世界での私のふるさとなのは間違いなくて。

目当ての駅に到着した時、私は思わず駅のホームを見回してしまっ
た。

もしかしたら、ほんの少しでも、どこかに面影があるんじゃないか
と思つて。

知らない発車ベルを遠くに聞きながらドアが閉まるのを待つ。

そのときだった。

いきなり腕を引かれて、たたらを踏んだ私は、思わず電車から降り
てしまったんだ！

「え？」

目の前で電車のドアが閉まつて。

慌てて周りを見回すと、私の腕を掴んでいたのはコナン君だった。

……よかった、少なくともはぐれなくて。

「愛夏姉ちゃん、やっぱり行こう！」

「え？」

「行きたいんでしょう？ ぼくがいなかったら行くつもりだったんで
しょう？ だったら行こうよ！ ぼく、ちゃんについていくから！」

「……」

「ほら、行くよ！」

コナン君に腕を引かれて歩き始める。

……もしかして、というかやつぱり、コナン君を心配させちゃったんだろうな。

私あの時、いったいどんな表情で風景を見つめていたんだろう。

カードを持ってない私は自動改札に切符を通して改札を出て。

うしろからコナン君がついてくるのを確認しながら、目指す方へと歩いていった。

……なんとなく、面影はあると思うんだよね。

たぶんここが、私が知る駅に対応するこの世界の駅なのは間違いないと思う。

(じっさい何年も来てなかったのも、現実問題このくらい変わってても不思議はないんだけど)

駅の2階から高架を渡って、ひとまずいくつかあるバス停の路線をすべて確認した。

私が住んでいたのは団地で、5階建ての棟が一所にいくつも建っていたから、その名前が付いたバス停は必ずあると思ったんだ。

でも、見た限りではぜんぜん載っていなくて。

もう一度高架に戻って、今度はタクシー乗り場へ行くことにした。

「場所、わかったの?」

「判りませんでした。なので、今度はタクシーで見覚えある場所を探してみることになります」

「……ぼくがいるからだよね。ごめんなさい」

「違いますよ。歩いて探すつもりは最初からありませんでしたから」

さすがにね、たとえ見つかったとしても、往復2時間以上歩く気はなかったですよ。

すでに目の前に停まっていたタクシーに乗り込んで、私はまず元の世界の場所を告げた。

「○○団地までお願いします」

「……すみません。それは何市にあるんですか？」

「市内だつて聞いたんですけど、ありませんか？　○○団地」

「ないですね。××団地なら駅の逆方向にあります」

「じゃあ、たぶん聞き間違えたんだと思います。すみませんが、ちよつと私の言うとおりに走ってみてもらえますか？　一度来たことがあるのでたぶん覚えてると思うんです」

「はあ、それはかまいませんが」

「よろしくお願いします。じゃあ、まずは国道へ出て――」

タクシーにはナビがついていたので、私は表示される地図を頼りに、道を指示していった。

国道から信号を数えて、左折。

そのあとの道は少し下り坂になってるはずなんだけど、この世界ではそんなことはなくて。

道が予想外に左へ大きくカーブしたので、適当なところで右折してもらつて。

そのまましばらく行くと高架が見えてくるはずなんだけど、それもなかったから、またおおよその距離を進んだところで左折してもらつた。

本当だつたら見えてくるはずの団地群。

でもそんなものはぜんぜん見えてこなくて。

行き過ぎたのか、それとも早く曲がりすぎたのかと思つて、何度か頼んで迷走してもらつただけ。

けつきよく私は私が以前住んでいた場所を特定することはできなかつたんだ。

違うんだね、やっぱり。

ここは、私が住んでいた世界なんかじゃない。

私が知ってる風景なんて、ここにはぜんぜんない。

—— 私は、この世界に独りだ。

「どうします？　この先は隣の市になりますけど」

「……すみません、戻ってください」

「判りました。どこまで戻りますか？」

「最初の駅まで戻ってください。ちゃんとタクシー代はお支払いしますから」

「……了解しました」

ふっと力を抜いて背もたれに身体を預けると。

隣でコナン君が、心配そうな表情で私を見ていた。

私はちよつとだけ笑みを浮かべて。

「すみません、やっぱり判らなかつたです。せつかくコナン君がついてきてくれたのに」

コナン君はすぐには返事をしてくれなくて。

じつと私を見つめていたから、私は思わず目をそらしてしまった。

……ダメだ、あの目は。

あんな目を向けちゃダメだ。

その目は、私は、見なかつたことにするから。

「親戚の家なんかじゃ、ないよね」

やがてコナン君の声が聞こえてきたから、私はほんの少しだけ安心した。

「親戚の家ですよ。……母の、家で、……以前、私が住んでいた家でもあります」

こういう状況で、嘘は簡単に見破られそうだから。

私はできるだけ嘘にならないように、でも適度に誤解できる余地を残しながら、そう返事をした。

「それ、愛夏姉ちゃんが4歳の時まで住んでた家？」

「え？」

「あ……」

私が驚いたのももちろんだけど、コナン君も、自分が失言したことに気付いたようで。

私が驚いたのは、私が今のあの団地に引っ越してきたのが41年前、4歳の時だったからだ。

そして今6歳（7歳かな？）のコナン君は、今16歳の私が4歳の時のことなど知っているはずがないから、失言したことに気付いたんだろうけれど。

どうやらこの世界の「私」も、4歳の時にあの家に引っ越してきたのは同じだったらしい。

「誰かに聞きました？ 私が4歳の時に引っ越してきた、って」

「……うん、阿笠博士と、新一兄ちゃんに」

「お二人とも、そんな昔のことをよく覚えてましたね」

「ちゃんと覚えてたよ。……でも、愛夏姉ちゃんは4歳の時の家なんて、覚えてる訳ないよ。辿り着けなくてあたりまえだよ」

「……そうですね。あたりまえですね」

なんか、都合よく誤解してくれたみたいだから。

私はもう、それで通すことにしてしまった。

駅でタクシー代の4千円を払って、少し休むために、コナン君は私を駅近くの喫茶店に引っ張っていった。

……元の世界でも確か、ここに喫茶店があったんだよね。

もつとも店の名前も内装もぜんぜん違ってたと思うけど。

階段を上がって二階、喫茶店の狭いテーブル席に落ち着くと、コナン君は勝手にコーヒーを二人分注文してしまった。

店の中は程よく空いていて、声が聞こえるほど近くには誰も座っていない。

コナン君は、注文したコーヒーが来るのを待ってから、ようやく話し始めた。

「ねえ、昨日のツーショット写真、見せてくれる？　ぼくまだ見てなかったでしょ？」

ちよつと予想外で驚いたんだけど、私は素直にケータイを取り出して、画像を呼び出したあと、ケータイをコナン君の方へと向けた。

「ちよつと借りるね」

ケータイを取り上げて、コナン君は素早い動作でボタンを押している。

……さすが、生まれた時からケータイが身近にある世代だ。

ボタン操作に危なげがない。

ていうか……。

「なにをしてるんですか？」

「新一兄ちゃんのアドレスに送ったんだよ。ぼく、新一兄ちゃんメールアドレス知ってるんだ」

な、なにを勝手に送ってるんですか!?

そりゃ、あなたが工藤新一のアドレスを知ってるのはあたりまえと
いうか当然というか、よく判ってますけど。

でも、私のケータイから送ったってことは、つまり工藤新一に私の

メールアドレスがバレた、ってことじゃないですか!!

私これから、工藤新一の電話攻撃だけじゃなくて、メール攻撃まで受けることになるんですか!?

「……コナン君、少なくともそういうことは、相手に断つてからやるべきだと思いますよ」

「なにかまずかった?」

「判らない振りでごまかさないでください。私、工藤さんに自分のアドレスを教えていいなんて、一言も言ってませんから」

「つまり、ダメだった、ってこと? 愛夏姉ちゃん、新一兄ちゃんのと嫌いな?」

「嫌いではないですけど。……苦手ではありませんから。私は、同世代の男の人とか、あまり親しく付き合いたくないんです」
「……」

なんか、これを機にコナン君に、愚痴をぜんぶぶちまけちゃいそうな誘惑にもかられたんだけど。

頭の中でいろいろシミュレーションしてたらなんだかコナン君がかわいそうになってきて。

こんな、たかが中卒フリーター女のために彼を悩ませてしまうのも悪い気がして、けっきょくそこまではしないで済んだ。

代わりにちよつとだけ釘をさしておくことにする。

「以前、なんですけど。……私、友達からのメールで、パニック障害のような症状を起こしたことがあるんです」

これは45歳の私が30代の頃に実際に経験したことだったりするんだけど。

コナン君には、私が中学の頃か、もしくは引きこもり中に体験したことのように聞こえただろう。

「目の前が真っ暗になって、心臓がドキドキして、頭の中に騒音がガンガン響いてくるんです。私、そのあとしばらく、メールを開けなくなっちゃいました。だから今でも、メールはちよつと怖いんです」

「……今でも?」

「はい、まだちよつと怖いですね。読むのもですし、人に送るのも怖いんです。もしも自分のメールを読んだ人が、かつての私のような思いをしたら、と思うと、なかなか気軽に送れないです」

「……」

「なので、工藤さんにも伝えてもらえませんか? 私がメール恐怖症だって」

「……新一兄ちゃんは、そんな変なメールは送らないと思うよ?」

「そうですね。でも、メールってほんとに怖いんですよ。送った本人が意図した内容とはぜんぜん違うものを、受け取った側は感じることもあるんです。それだったら、まだ声という情報がある分、電話の方がマシです。本当だったら、表情が判る分、ちよくせつ会うのがいちばんなんですけど、なかなかそういう訳にもいかないでしょうから」

「……新一兄ちゃん、忙しいから」

「はい、なので、私にメールを送ったとしても、返事は期待しないで欲しいんです。受け取るよりも送る方が数倍怖いので」

「じゃあ、新一兄ちゃんから送るのはいいの?」

「いいですよ。基本的に返事はありませんから、ほんとに送るだけになりますけど、それでいいなら」

「うん、わかった。新一兄ちゃんにはそう伝えておくね」

「はい、よろしくお願いします」

ま、そうは言うものの、私のメール恐怖症自体は、もうほとんど治ってたりするんだけどね。

(さすがに10年くらい経ってるからね、そういつまでも引きずってはいられませんよ)

ただ、私は長く生きてる分、普通の16歳よりもトラウマが多くて、若者特有の傍若無人に付き合うのはかなりきつかったりして。

コナン君の好きなサッカーで例えるなら、大人ルールで戦ってる選手の中に、平気でボールに手で触れたりボールを持つたり投げたり持ったまま走ったりする選手が混じってるようなものだったりするんです。

まあ、それが工藤新一の魅力の一つなんだとは思うけどね。

おばさんにはちよつと眩しすぎるといふのか、鋭すぎるといふのか、うっかりしていると刺し殺されそうな恐怖を感じるようなものだったりするんだ。

「あの、さ」

「はい」

「愛夏姉ちゃん、昨日蘭姉ちゃんとしやべってた時、言ってたよね。目の前の人が自分に興味があるかどうかくらい見れば判る、って」

……やつぱり聞いてたのか。

しかし、コナン君がこう言ってきたということは、次にくる言葉はきつと——

「じゃあ、ぼくの気持ち、わかってるんだよね？　ぼくが愛夏姉ちゃんのこと、どんな風に思ってるのか」

そう、言葉を切ると。

もう私が答えるまでは何も言わないぞとばかり、コナン君はじつと私を見つめて動きを止めた。

まあ、さつきタクシーの中で見せた「あの目」よりはマシだけど。

ちよつとあれはほとんど二度と見たくないと思うようなたぐいのものだったから、あれをしないでくれただけでもずいぶん気が楽ではある。

「……判ってる、つもりではありませんけど。……私はその気持ちに、応

えることはできないです」

「どうして？ ぼくが子供だから？ ……違うよね。きつと、ぼくが子供とか大人とか関係なく、愛夏姉ちゃんはそうなんだよね」

「はい、私はたぶん、人を心から信じることができない人なんだと思います」

それが判るのに30年くらいかかったんだけどね。

判らないまま私に付き合わされた彼氏の方々には、今となってはほんとに申し訳なかつたと思う。

なんか、以前に読んだ夢小説かなにかだと思うんだけど。

「愛することは許すこと、愛されることは信じること」って言葉があつた。

私は、人を許すことはできるけれど、人を信じることができない。だからたぶん、私は人に愛されること、その愛情を信じることができないんだろうな、なんてことを漠然と思ったんだ。

たとえ私に愛情を向けてくれる人がいたとしても、私はその愛情を信じられない。

そして、自分の愛情を信じてくれない人に、変わらぬ愛情を注ぎ続けることなど、普通の人にはできない。

私とまともな人間関係を結ぼうとしても、ただ疲れてしまうだけなんですよ、江戸川コナン君。

私は君に、そんな思いをさせたいなんて、微塵も思っていないんです。

「愛夏姉ちゃん、ぼくは、愛夏姉ちゃんに信じてもらいたいよ。……ぼくのこと、信じてくれない？」

まあ、私がほんとに16歳だったら、まだ可能性はあったかもしれないけど。

45年も人を信じずにここまで来ちゃったんだから、いまさら変わるのほちよつと無理だろうな、と思う訳です。

「……君には、この先、もつとたくさんのお会いがあつて、その中にはきつと、君を心から信じてくれる、素敵なお女の子なんかも——」
「そういう話じゃなくて！　ぼくはただ、今、愛夏姉ちゃんと一緒にいたくて……」

「やっぱり大人の逃げ口上は通じないか。」

ほんと、思春期の少年ほど厄介なものはないと思うよ。

「……なにかが、愛夏姉ちゃんのことを苦しめてるんだ。その何かは何なのか、ぼくは知りたい。ねえ、ぼくを信じて打ち明けてよ。話して欲しいんだ、ぜんぶ」

……あれ？

なんか話がかみ合つてなくないか……？

「……ぼくを、信じてよ」

とりあえず修正だ修正。

「無理ですよ」

「どうして？」

「話して、信じてもらえるような話じゃないんです。君自身が、その答えに辿りついてくれないと」

「たとえばどんな話でも愛夏姉ちゃんの話なら信じる。……そう、言つてもっ。」

「……じゃあ、一つだけ、ヒントを出しましょうか。……コナン君は、私は何歳くらいに見えますか？」

コナン君は、一瞬、訳が判らないというような表情を見せて。そのあと、いぶかしみつつも、私の問いに答えてくれた。

「16歳、じゃないの？ ……見た感じはもうちよつと上に見えるかもしれないけど。……そういう話じゃない？」

「私には、コナン君は……そうですね、思春期真っ只中の、17歳くらいに見えます」

「……!!」

「コナン君から見ても、私は何歳くらいに見えますか？」

平然と彼を17歳だなんて言っちゃったけど。

……内心はガクブルですよ。

もしも彼がルール無視で問い詰めてきたら、あるいは拉致監禁でもしてこようなものなら、博士のメカに対抗するだけの手段なんか私にはないんだから。

「君の中でその答えが出たら、その時は話します。ぜんぶ話すかどうかは答え次第ですね。……それでいいですか？ コナン君」

コナン君は茫然として、でも頭の中ではいろいろなことが計算されてるんだろうけれど、表面的にはただ茫然としているようにしか見えなかった。

まあ、今までの経緯というか、多少の付き合いがあるから、一足飛びに私を黒の組織の一員だとか疑うことはないと思うけど。

……ないよね？

とりあえず、今帰ればギリギリお昼までには帰りつけるので。

私は喫茶店の会計をして、まだ黙ったままのコナン君に声をかけ

て、お店をあとにした。

駅で次に到着した電車に乗り込んで、来た時とは違って途中2回ほど乗り換えて、米花駅に到着したのがお昼頃。

そのまま毛利探偵事務所に向かおうとした私に、コナン君が声をかけてきたんだ。

「愛夏姉ちゃん、お昼食べて帰ろう？ ぼくもうおなかすいちゃった」

これは、まだ私に何か話したいということなのかな？

だったらまあ、応じない訳にはいかないだろう。

「じゃあ、毛利探偵に連絡しますね」

私が毛利探偵に電話して、今米花駅にいることと、お昼を済ませてから帰ることを伝えたあと、コナン君の案内で米花駅周辺の洋食のお店に入るようになった。

コナン君がハンバーグ定食、私がお子様ランチを注文して。

(いや、お子様ランチって、子供がいてなおかつその子が頼まないときしか食べられないからけっこうレアなんだよ)

運ばれてきたプレートの、チャーハンに刺さった旗とかゼリーに描かれた動物とかにニツコリしていると、コナン君があきれたように話しかけてきた。

「今の愛夏姉ちゃん、小学生にしか見えない」

「じゃあ小学生かもしれないですね。でも、お子様ランチってけっこうお得なんですよ。あまりカロリーが高くなって、いろんな味が楽しめる、お値段もそこそこで。まあ、ふだんは食べられないので、コナン君には感謝してます」

「……そんなことで感謝されてもあんまりうれしくないよ」

それはたいへん失礼いたしました。

コナン君も、ある程度開き直っちゃえば、それなりに小学生を楽しめると思うんだけどね。

「愛夏姉ちゃんはドラ○もんも好きだよね」

「はい、理想の男性ですね」

「……そういう“好き”なの？」

「あんなに頼りがいがあつて、いつも一生懸命で、心優しくて、なにがあつてもぜつたいにの○太君を見捨てないんですよ？ あんな人が彼氏だったら最高だと思っんです」

「……」

「まあ、共感してくれる人は今までいませんでしたけどね」

「……愛夏姉ちゃん、変わってる」

「よく言われます」

最近我真面目と言われることの方が多かつたけどね。

つていうか、45歳くらいになると、周りも遠慮してその手の意見は言ってくれなくなつてたんだけど。

（上司に対して「変わってますね」と言える若手社員はなかなかいないと思う）

「ハンバーグ少し食べる？」

見れば私の方はもう少しで食べ終わるところで、コナン君はまだ半分以上残つていた。

「もういいんですか？」

「あと少しは食べるけど、もともと大人一人前は無理だから。愛夏姉ちゃんはそれじゃ少ないでしょ？」

「そうですね、じゃあ少しだけいただきますでしょうか」

そうして、江戸川コナンと食事のシェアという、トリップ直後なら
気絶してたかもしれないシチュエーションを体験してしまったり。

思えばほんと、私コナン君に慣れたよなあ。

まだ手をつないだりとかの物理的接触は無理そうだけど。

(あ、でも爆弾の時に全身で抱きしめちゃったな。まああれは、そうい
うのじゃなかったし)

「ねえ、新一兄ちゃんとかは？」

「何がですか？」

「彼氏にするの」

「——ッ！」

よかった、あらかた飲み込んだあとで！

「どう思う？」

「……ムリです」

「なにが無理なの？ 新一兄ちゃん、別に悪い人じゃないと思うよ？」

「頭も運動神経もいいし」

自分のことなのによく言うなオイ。

さすが自信家工藤新一！

「あの、蘭さんにも以前訊かれたんですけど。……コナン君は、蘭さん
の気持ちは、ご存知ですよね？」

「……うん、知ってる」

「私は、工藤さんには蘭さんしかいないと思ってるので」

「でもそれ、愛夏姉ちゃんの気持ちじゃないよね？」

「私の気持ちですよ。私は厄介ごとには関わりたくないんです。それ
に、他人のものにも興味はないです」

「……まだ、他人のものじゃないよ」

「それでもです。私は蘭さんと争うようなことはしたくありません

し、そんなに工藤さんに関心ありません。何度か電話で話したことがあるだけで、どういう人かもよく知りませんし」

なんか遠回しになっちゃってるのは、訊いてきてるのがコナン君で、なおかつ工藤新一本人だからだ。

目の前に本人がいて、自分をどう思うのか訊かれたのだったら、私もズバリと言えたのだと思う。

でも本人に告白された訳じゃないのに振る訳にもいかないし。

あとから思えば、私はこの時にちゃんと、工藤新一を振るべきだったんだと思う。

それができなかったのは、やっぱり私の中に、彼に嫌われたくないという気持ちがあったからなのだろう。

「ねえ、愛夏姉ちゃんはさ、将来のこととかどう考えてるの？」

コナン君が話題を変えたので、私は幾分ほっとしながら答えた。

「今とはとにかく仕事を探して、いい就職先を見つけたらそのまま就職します」

「見つからなかったら？」

「そうですね、来年あたりから、大学受験の準備を始めて、進学します。それで卒業後にどこかの企業に就職しようと思います」

「高卒認定試験を受けるの？」

「はい、それで18歳になった年に大学を受験してみても、まあ、落ちた時にはまた考えますけど」

「じゃあ、その時は新一兄ちゃんの事務所に就職したらいいよ。その頃にはいくらなんでも新一兄ちゃん、戻ってきてると思うし」

思いがけないことを言われて、私は思考が停止してしまった。

というのも、彼らが高校を卒業して、就職や進学をする姿なんか、私

は想像もしたことがなかったからだ。

「……愛夏姉ちゃんは、新一兄ちゃんと仕事をするのは嫌？」

つて、思考停止してる場合じゃない。

ちゃんと答えないと。

「……ええ、まあ……その時に、工藤さんにその気があったら、ぜひお願いしたいですけど」

「じゃあ決まりだね」

「それはコナン君が決めることじゃないでしょう」

「……うん、そうだね。新一兄ちゃんが決めることだもんね」

—— 将来のこと、江戸川コナンが工藤新一に戻る日は必ず来るって、私は信じてるけど。

でもそれがいつになるのかは、私には判らない。

私が読んでた夢小説の設定では、この世界は1年がループしてるって考え方が主流だった気がするけど。

来年の春、蘭さんたちはちゃんと高校3年生になってるんだろうか……？

コナン君との食事を終えて、私は彼を毛利探偵事務所へと送っていった。

すると、毛利探偵は事務所を開けていて、暇そうに新聞を読んでいたところだった。

「ただいま帰りました。ご迷惑をおかけしました」

「いや、こっちのセリフだ。うちの坊主が迷惑かけて悪かったな」

「いいえ、私の方こそ、あちこち連れまわして遅くなっちゃいましたから」

「どうせコナンのヤツがうろうろちよろちよろしてたんだろ。……ま

「あいい、明日なんだが、朝5時半頃に事務所へ来てくれるか？」

「はい。予定は一泊でいいんですよね？」

「ああ。それと、あいつらもつれていくからな、そのつもりでいてくれ」

「判りました。では明日朝5時半に伺います」

「ああ、頼むな」

まあ、原作でも毛利蘭と江戸川コナンは一緒だったからね。

明日が平日の金曜日だつてことには目をつぶっておきますよ。

帰ってから、私はまた急いで洗濯をして。

洗濯機が回っている間に部屋の中を搜索して、なんとか手帳らしきものを探し出した。

明日からの私の役割は、毛利探偵の調査を記録して、調査報告書を作るからだからね。

……まあ、原作通りに進んじやったら、報告書を提出する先の人物はいなくなっちゃうんだけど。

とにかく、この2日間はあまりに濃すぎて45歳にはかなりきつかったから。

ストックのカレーで夕食を食べたあと、私はそのまま万年床で眠りについた。

FILE・17 現世のことは現世で くピアノソ
ナタ『月光』殺人事件く

5月13日（金）

昨日は夕食のあと、なにもせずそのままぱたりと眠ってしまった。
て。

目が覚めたのは、いつもの目覚ましが鳴るよりも前、夜中の3時半
過ぎぐらいでした。

時刻を確認して、一瞬そのまま寝そうになっちゃったんだけど。

旅行の支度がぜんぜんできてないことに気付いたから、慌てて起き
出してお風呂に火をつけたあと、昨日空にした旅行かばんに再び衣類
やら何やらを詰め込んでいった。

私、本来だったらこんな毎日予定があるような、活動的な生活し
てなかったんだけどな。

（ほんと私、仕事がなければ立派な引きこもりだったし）

土日は一歩も家から出ないでいられた45歳の頃が懐かしいです。

毛利探偵は一泊の予定だと言ってたけれど、原作では確か二泊して
たはずなので、2日分の下着を詰め込んで。

身支度したあと日焼け止めとヘアムースもかばんに放り込んで、い
つものカレーで朝食にして。

5時半の待ち合わせまでには何とか間に合ったので、道々あくびを
しながら毛利探偵事務所まで行ってみると。

……こちらで戦場でした。

「愛夏ちゃんおはよう！ お父さん、すぐ降りてくるから！」

「あ、はい。今日はよろしく」

「うん、こちらこそ！ あ、コナン君、歯ブラシちゃんと持った!？」

「蘭姉ちゃん、旅館に泊まるんだから、歯ブラシはいらないと思うよ」

蘭さん、程よくパニックってるなあ。

ていうか、原作では彼らが旅館に泊まってる描写ってほとんどなかったんだけど、もしかしてお風呂とか着替えとかぜんぜんしないまま3日間過ごしちゃったりしたんだらうか？

5時半過ぎにはどうにか事務所を出ることができたから、そこから電車を乗り継いで、港まで行つて。

伊豆諸島を回る高速船に乗って中継地の島まで行つたあと、その島で早めの昼食をとつてから、今度は小型の船に乗って月影島へと向かつた。

「—— ったくよー、なんでこの名探偵毛利小五郎が、わざわざあんな島に出向かなきゃいけないーんだ？ 一週間前に届いた、こんな手紙のせいだよー……。それに、一昨日かかつてきた、男からの電話。」

—— ったく、身勝手な依頼人だぜ」

「でもいいじゃない。おかげで伊豆沖の島でのんびりできるんだから！ ねー、コナン君？」

「うん！」

「フン……。あれがのんびりできる島に見えるかよ……。？」

見れば遠くかすんで小さな島影が見える。

……いや、遠くはないな、島が小さいからあまり近づいてるように見えないだけで。

あんなところにも人が住んでるっていうんだから……。人間てほんと、すごいと思う。

船から降りたあと、月影島の案内パンフレット —— 船を乗り換えた島に置いてあつた —— を見ながらまずは旅館へと行く。

そこで旅の荷物を置いたあと、まずは麻生圭二さんを探さないと

いうことで、村役場へ。

窓口の職員が住民台帳を探している間、私は手元の手帳にそれまでの記録をつけていた。

島に到着したのが2時過ぎで、旅館経由でここに来たから、そろそろ時刻は午後3時半になるところだ。

「愛夏姉ちゃん、それ、お仕事？」

「はい。毛利探偵の調査報告書を作るための資料にするんです。必要経費なんかも計算しないといけませんしね」

「……大変なんだね」

「大変ですけど、それが仕事ですからね。どうかコナン君は気にせず、のんびりしててください」

まあ、のんびりできるのは今だけだけどね。

こうしている間も、名探偵は名探偵で、届いた手紙についていろいろ考えを巡らせたりしているんだろう。

窓口でしばらく待たされて、やがて得られた返事は「そんな人はこの島にいない」で。

でもそのあと、年かきの職員が教えてくれたところによると、麻生圭二さんはすでに亡くなっているということだった。

満月の夜に自宅で家族を惨殺し、自ら家に火を放ったとか。

まあこれ、けつきよくは麻生さんを殺した犯人たちがでっち上げた噂で、麻生さん自身も彼らに殺されたことがのちに判ったりするんだけど。

「うーむ、死者からの手紙か。タチの悪いいたずらだぜ」

もしかしたら島にきたのが毛利探偵だけだったら、そのまま船でとんぼ帰りしてた可能性もあったよな。

コナン君が引き留めてけつきよく村長さんに事情を聞くことに

なっただけだ。

あんがいここで帰ってた方が、犯人も犯行を順延するなりしてたかもしれない。

(そして今度は別の探偵に依頼して……って、それじゃお金がいくらあっても足りないか)

村長がいるという公民館を求めてさまよっていると、住宅街の真ん中にある診療所から、患者を見送りにその人が出てきたんだ。

白衣を着て、ハイネックのセーターにスカートをはいた、犯人が。

「あの一、すみません、公民館ってどこですか？」

蘭さんの声に振り返ったその顔を見ても、本当に女性にしか見えな

い。
身長は私よりも低くて、肩幅は……もしかしたら私より若干広いかもだけど、でも十分女性で通用する範囲だ。

喉仏はハイネックで見えないし、足もうらやましいくらいにきれいだし。

声も女性にしては低い気がするけど、でも男の人の声というにはちよつと無理がある感じだった。

たぶん、3日前に事務所の留守番をした時に聞いた電話の声と同じはずなただけだ。

むしろあの時の方が作ってたのかもしれないな。

この人が低くぼそぼそ話すところを想像してみたけれど、電話の時の声と一致させることはできなかった。

浅井成実と名乗った(見た目)女医さんは、選挙カーが通ったのをきっかけに、近く村長選があることを教えてくれた。

2年前に亡くなった前村長の三回忌法要が、これから公民館で行われるという情報も教えてくれた。

確か成実先生は前村長の検死をしていたはずだから、2年前にはすでにドクターだったということ。

医大で医師免許が取れるのが最短で24歳だったはずだから、その直後に赴任してきたとすると現在は若くて26歳、実際はもうちよつとってそうな気がする。

(現実的なことを言えば医大卒業後すぐに検死とか若干ムリがあるけど、原作ではそんな感じだった)

ということは、家族が亡くなった12年前には最低でも14歳にはなっていたことで……。

当時東京の病院に入院していたはずの14歳の(もしくはそれ以上の)少年が、浅井家の養子になって病気を克服して必死で勉強して医大に入って、ここまで来るにはとてつもない苦労があったんじゃないかと思う。

……なんでみんな、そこまで努力してなお、復讐なんかに手を染めようと思うんだろう？

成実先生だって、医者を目指したのはきつと、自分の命を救ってくれたお医者さんに感謝してのことだろうと思うのに。

(少なくとも島の診療所では対処できないほどの病気だったんだから、ある程度命の危険なんかもあったんだろう)

命の大切さを一番知ってるはずの、そして家族が殺された悲しみを一番知ってるはずの成実先生が、これから3人もの人たちを次々殺していく殺人鬼になる。

止められるなら止めたいけれど、果たして被害者の命を救う道は残されているんだろうか？

公民館に近づくと、建物の前には村民が集まって、なぜか村長に対してシユプレヒコールをしていて。

まだ村長が代わって2年しか経たないというのにずいぶんと評判を落としているらしい。

公民館の中に入って、ちようど部屋から出てきた村長の秘書らしき人に取次ぎを頼んだのだけれど。

なにをしているのか、しばらくの間そこで待たされることになった。

「—— ったく、いつまでこんなところで待たせる気だ？」

まあ、村長さんが東京の探偵という肩書にビビってるとは、さすがの毛利探偵も思うまい。

その時、コナン君が廊下の突き当りのドアを開けると、そこはグラインドピアノが一台あるだけの広い部屋だった。

「ピアノ……」

「でけー部屋だなあ……ん？ ほー、公民館の裏はすぐ海か……」

「でもこのピアノきつたないわねー！ 少しは掃除すればいいのに……」

「ダメですそのピアノに触っちゃ!!」

うしろからの声に驚いて見ると、さっきの秘書の人が立っ

て、このピアノが麻生圭二が死んだその日に演奏会で弾いていたもので、その後村長が死んだ日にも同じ『月光』を弾いていたことから、呪われたピアノだと呼ばれているのだとかなんだとか。

……まあ、この秘書の人（平田さん）が、ピアノの隠し扉を利用して麻薬取引をしてたりするから、人を遠ざけるために流した噂だったりするんだが。

今、この時点で隠し扉の中には、彼が隠した麻薬が入ってたりするんだらうか？

「とにかくあなた達は法事が終わるまで玄関で待っていてください！」

平田さんにピアノの部屋を追い出され、廊下で成実先生と村長候補の清水さんとすれ違ったあと、私たちはけつきよく玄関の外で法事が終わるのを待つことになった。

「ったくよー、いくら法事の前だからって、少しの時間くらい取れるだろうによー」

「なにか後ろ暗いことがあるのかもかもしれませんね。有名な毛利名探偵の名前に恐れをなしてるんでしよう」

「チツ、これも有名税ってヤツか。……まあ、仕方ねえな、大人しく待つか」

毛利探偵が煙草を取り出して、玄関先で吸い始めて。

一瞬目を奪われちゃったんだけど、あえて見ないようにしながら私は切り出した。

「少し、建物の周りをまわってきます。声が届く範囲にいますから、なにかあったら声をかけてください」

「ああ、判った」

「愛夏姉ちゃん、ぼくも行くー！」

コナン君がうしろから追いかけてきたので、私は時計回りで、建物の周りを歩き始めた。

第一の殺人が起こるのが、この法事が行われている約1時間くらいの間だ。

ピアノの部屋の裏口のドアから海に連れ出された被害者が、海の水で溺死させられる。

被害者は村長候補の川島さんだ。

だから、もしかしたら私がピアノの部屋のドアを見張っていれば、殺人を未然に防ぐことは可能かもしれない。

というか、実際そのくらいしか思いつかなかったんだ。

公民館は追い出されちゃったから、中に入ることはできないし、たとえ入れたとしても私がそんな行動をとるのは不自然極まりない。

それだったらまだ、海の方で見張ってた方が確率が高いと思っただ。

「愛夏姉ちゃん、もしかして、煙草嫌い？」

追いかけてきたコナン君に訊かれてちよつとだけ答えに迷う。

……まさか、好きすぎて見ると吸いたくなるから、とは言えないし。

嫌いつてことにしておいた方が無難だろう。

「うちの父も、けつきよく煙草に殺されたようなものです。1日3箱吸ってるヘビースモーカーだったので」

まあ、この世界の“私”の父親のことは知らないけどね。

でもたぶん、遺影も享年も一緒だったし、死因とかも私の父と変わらないだろう。

法事が行われている部屋の方を回って、玄関の真裏まで来る。

ピアノの部屋はさつきまでとは違って、カーテンがきっちり引かれて、中が見えなくなっていた。

海側まで回り込んでいちおう裏口のドアも引いてみる。

こちらにも鍵がかかっている、ここから中に入ることはできそうになかった。

「愛夏姉ちゃん、なにしてるの？」

「いいえ、別に何もしてませんよ。ただ、ここから人が出てきたら、法事の様子が訊けるかもしれないと思っただけです」

「……もう日が暮れるね」

「そうですね。さすがにおなかが空いてきました。早く用事を済ませて旅館に帰りたいです」

話しながらも、もしかしたらピアノの部屋の様子が判るかもしれないと思つて、耳を澄ませてたんだけど。

お坊さんのお経の声と、なによりあの木魚の音が強烈で、小さな気配くらいでは感じられなくなっている。

建物の反対側でこれだけ聞こえるんだから、法事の席で聞いてたら、心臓に直撃するようなめっちゃ鋭い音なんだろうな。

(なにもあんなに力いっぱい叩かなくてもと思うんだけど……私が知ってるお坊さんで、なぜかみんなものすごく力を込めて木魚を叩くんだよね。心臓が弱い人なら命に係わるよ)

しばらくの間、私とコナン君は、海に沈む夕日の残照を眺めていた。やがてポツリとコナン君が話しかけてくる。

「ねえ、愛夏姉ちゃん。……愛夏姉ちゃんは、あの手紙の文章、どう思った？」

手紙の文章って、あれだよな。

“次の満月の夜、月影島で再び、影が消え始める。調査されたし”
ってヤツ。

これだけでは殺人予告とは思えないけど。

「なにかが始まる、って言ってるように感じますね。再び、ということ
は、以前にあったのと同じことが起こる、ということでしょうか」

「以前にあったことって、麻生圭二さんが亡くなったことと、前の村長
さんが亡くなったこと？」

「差出人の麻生圭二さんを調べていて、その二つが出てきたってことは、
少なくとも関係がありそうですね」

「……ピアノの呪い」

コナン君は少しの間考え込んでいたけれど。
やがてなにかに気付いたのか、ふと顔を上げて真剣な目で私を見つめて言った。

「愛夏姉ちゃんはここにいて！」

そう言い捨てたあと、玄関の方へと走っていく。

そのあと玄関で毛利探偵と言いつ争うような声が聞こえてきて。

どうやら公民館に入ろうとするコナン君と、それを阻止しようとする毛利探偵との間で攻防が始まったらしい。

私は言われた通りにその場を動かさず、じつとピアノの部屋の気配をなんとか読み取ろうとしていた。

でも、けつきよくそのドアからは誰も出てこなかったのに。

ピアノで演奏された『月光』の曲が、部屋の中から聞こえてきたんだ！

——まさか、殺人が行われた……？

私の中の気配を感じ取れなかったのは仕方がなかったとしても。

(あの木魚っ……！)

犯人は被害者を溺死じゃなく、別の方法で殺したってことになるのか……？

お坊さんの声がやんで、公民館の中が騒然としてきて、誰かの悲鳴や怒鳴り声も聞こえてくるようになって。

私はコナン君が言った通りその場を動かさずにはいたんだけど、やがてコナン君自身が窓のカーテンを開けて、私と目を合わせてきたから。

私はそれを動いてもいいという意味としてとらえて、再び玄関から回ってピアノの部屋へと向かった。

川島さんの遺体は、原作同様ピアノにもたれかかるようにそこにあって。

その身体に濡れたような様子はなく、部屋にも引きずったような跡はまったくなかった。

「——死亡推定時刻は、30分から1時間ほど前。首にうっ血したような跡が認められますが、直接の死因は……おそらく急性の薬物中毒ではないかと」

「薬物中毒、ですか？」

「はい。解剖して詳しく調べなければはっきり判りませんが」

成実先生が検死をした結果が聞こえてくる。

……薬物中毒。

たぶん私が外にいるのを、カーテンの隙間からでも確認したんだろう。

成実先生は殺害方法を、とっさに溺死から薬物中毒に変更したんだ。

使った薬物は十中八九、ピアノの中に隠されていた麻薬で。

どういふ方法で摂取させたのかは判らないけど、たぶん今彼女を調べても、注射器などは持っていないだろう。

—— 殺害阻止は、できなかった。

あれだけで阻止できる確率はそう高くないとは思ってたけど。

(どちらかといえば成実先生が私を見て殺害を思いとどまってくれるのを期待していた)

でも私、ピアノの中に麻薬が入っていたことも知ってたはずなのに。

……私がやることはいつも中途半端だ。

とりあえず無心で毛利探偵の捜査を手帳にメモしていく。
今の私にできるのはそれだけだったから。

「この部屋のドアには鍵がかかっている、外には法事が始まってから
ついさつきまでずつと愛夏が立っていた。玄関のドアにはオレたち
がいた訳だから、犯人はこの部屋から出たあと、法事の席に戻った確
率が高いな」

「ちよ、ちよつと待ってよ。じゃー犯人はまだこの中に、いるかもしれ
ないって事!?!」

「ああ、あの騒ぎに乗じて外へ逃げ出していなければね」

そのあとはほぼ原作通りで、トイレに立った被害者を最後に見たの
は現村長の黒岩さん。

そのすぐあとに成実先生もトイレに立って、その時は怪しい人は見
なかったと証言した。

被害者に恨みを持つ者(というか、被害者が死んで得をする人物)と
して挙げたのは、現在村長選を戦っている黒岩さんと清水さん。

そしてコナン君は、被害者を殺したのは男の人だろうと推測した。

「だってほら、殺された川島さんって、かなり大柄な人だよ。あんな人
を短時間で首を絞めて、外にいたぼくたちに気付かれないように音を
立てずにあんな格好をさせるなんて、ふつうの女の人にはできないと
思うけど」

確かに、床に人が倒れるような音がしたら、あの木魚の音があつて
もさすがに気づいていたような気がする。

ということは、成実先生は川島さんが声を上げる暇もないほどに瞬
時に首を絞めて気絶させて、倒れ掛かる巨体を支えてピアノの椅子に
座らせ、薬物を摂取させたということだ。

まあ、お医者様だから、人の頸動脈をどう締めれば気絶するかとか
は知り尽くしてるのかもしれないけど。

ほとんど神業というか、一步間違えていたら失敗しかねないほど綱渡りだったというしかない。

ピアノのふたの間には、原作通りに楽譜が挟まっていた。おびえたように西本さんが走り去っていったのも、原作の通りだった。

そこで、それまで姿が見えなかった蘭さんが、駐在のおまわりさんを連れて戻ってきたんだ。

おまわりさんがやってきたことで一区切りついたので、今日のところは私たちも解散することになった。

帰り道は、途中まで一緒だった成実先生と別れて。

旅館に帰る道すがら、コナン君が毛利探偵に、調査依頼の手紙が殺人予告だったという話をした。

そこで毛利探偵は、これまで起こった事件がすべてピアノのそばだったことから、ピアノを見張ると言い出して。

原作通り、公民館へと引き返してしまっただ。

「ぼくたちも行くようよ、公民館に」

「コナン君、私は旅館に戻って休もうと思います」

「愛夏姉ちゃん？」

「ピアノを見張るといっても、24時間起きてる訳にはいかないでしょう？ 今晚は私が休んで、明日の朝に交代要員として公民館に向かいます。もちろんなにかあつたらすぐに電話してくれば駆けつけますから」

「……うん、そうだね。おねがい」

「はい、了解しました」

蘭さんはコナン君と一緒に戻っていったので、私は宿に行つて、島の海産物をたっぷり使った夕食を堪能したあと、温泉でゆつたりまったりして布団で眠りについた。

いやだって、付き合ってられませんよ。

どうせ今夜は窓の外の人影を見るだけだろうし、明日は目暮警部たちが到着するから、むしろそっちの方が重要だし。

今日はゆつくり休んで、明日の朝コナン君たちと交代したあと、手帳の情報をまとめながら警察の到着を待つことにしよう。

5月14日（土）

いつものアラームで目を覚まして。

いつもの朝風呂は温泉という、いつもとは違ったぜいたくをしたあと、少し時間を早くしてもらった朝食をいただいで。

身支度後に旅館を出たのは朝の7時くらいだった。

島の朝の風景を見ながら公民館へと向かうと、原作通りコナン君と蘭さんと成実先生は起きていて、毛利探偵と駐在さんはぐっすりと寝入っていた。

「おはようございます」

「おはよう愛夏ちゃん」

「愛夏姉ちゃんおはよう」

「おはようございます」

皆さん眠そうな顔ですね。

とくに犯人さん、意味なく一晩中起きてなきやいけないのはけっこうつらかったんじゃないでしょうか？

「昨日はなにか変わったことはありませんでしたか？」

私が訊くと、3人はわかるがわる、夜に見た人影のことを話してくれて。

私はそれを手帳にメモしたあと、3人に宿へ帰るようにと促した。

「成実先生も独り暮らしなら、これから家で食事の支度をするのは大変でしょう？ 毛利探偵は起きそうにありませんから、旅館の朝食をいただいちやっても大丈夫だと思うんです」

「成実先生、ぜひそうしてください。昨日の差し入れのお礼です。父も許してくれると思いますから」

「そうね、じゃあいただきちやおうかしら」

「なんなら温泉もいただいきたらいかがですか？」

私が付け加えた言葉には、それはさすがに旅館に迷惑だから、と断っていたけれど。

……まあ、この流れで温泉へ行ったら、どうしたって女湯に3人で行くことになるだろうからね。

ちよつと意地悪だったかもしれない。

（でもこういう時の相手の些細な反応を、名探偵なら推理の材料にできるかもしれないからね。殺人犯にはちよつとだけ意地悪しちゃいました）

3人を見送って、私はピアノの部屋で昨日からの情報を手帳に整理している。

なぜかコナン君だけが一人ピアノの部屋に戻ってきて。

「愛夏姉ちゃん、もしかして、成実先生ってなにか違和感があった？」

コナン君が不自然に思ったのは成実先生じゃなく私の方でした！

思いつきり想定外だよ!!

こんな場合の言い訳なんかぜんぜん考えてないし!!

「……自分でも、なにが違うのか、よく判らないんです」

「わからないの？」

「……強いて言うなら、私に対しての反応、みたいなものでしょうか。」

……私、背が高いせいで、私より背が低い男の人に、ときどきああいう感じの態度を取られることがあるんです。……横目で見上げて、ちよつと迷惑そうな表情をされるような。……女の人は、あまりそういう反応はないので、ちよつとだけ……気のせいかもしれませんけど」

私は成実先生が男の人だと最初から知ってるから、あまり気にしないでいたんだけど。

思い返してみれば、確かに女性にはあまりないそういう反応があったような気がするんだ。

……まあ、本当にわずかで、気のせいだといってしまえばそう思えるような小さなものだったんだけど。

「もしかしたら、背が高い女性に、あんまりいい想い出がないだけかもしれないませんね」

「……そう」

実はこの反応、いちばん顕著なのが、目の前のコナン君なんだけだね。

確かに、せつかく追い越したと思った私が再び見上げるようになったのだから、迷惑に思っただけだろ。

ほんとに私、言い訳を考えるスキルだけはどんどん上達してるよなあ。

あまり私と長話をしていると、蘭さんが戻ってくる可能性もあったから。

コナン君はそれだけ話してすぐに旅館へと帰っていった。

私は3人がたたんで置いていった毛布を椅子にして、同じ部屋に横たわると遺体のことはできるだけ頭の中から追い出しながら、それま

での情報を整理して手帳の別のページに書き写していく。

それだけでもけっこうな時間を喰ってしまつて、変な姿勢で書いてたからちよつと疲れたりもしただけだ。

でも、45歳の時みたいにな、身体が固まって数秒ほど動けない、なんてことはないんだよね。

(以前は運動不足だったせいもあつて、ちよつと椅子に座つてただけでも立ち上がるのに苦労したもんだ)

あの頃はほんと、自宅にいただけでエコノミークラス症候群になりそうなくらい、ほんとに動かない生活だったんだ。

今でもその頃の感覚が残つてるから、動き出す前に痛みを警戒して反応が鈍くなつてたりするんだけどね。

はたから見たらさぞかし、私は年寄り臭い女子高生に見えることだろう。

目暮警部たちが公民館に到着したのは、午前中も10時を少し過ぎたからのことだった。

おそらく昨日私たちが乗った高速船ではなく、飛行機で中継の島まで来たあと、すぐに乗り換えて最速で駆けつけてくれたんだろう。

「おはようございます、目暮警部」

「おはよう。愛夏さん、あなたも一緒だったんですか」

「はい。毛利探偵に、調査の記録をつけるように言われまして。私、今は臨時で毛利探偵事務所の事務員をしているんです」

「そうでしたか。……で、肝心の毛利君は寝ていて、あなたが寝ずの番ということですか?」

「いいえ、私は夜は旅館で寝させてもらいました。蘭さんとコナン君と、あと浅井さんというお医者様が起きていてくれたんです。今は交代で、蘭さんたちは旅館に戻ってますけど」

「なるほど。で、事件の概要は愛夏さんに聞いていいのかね?」

「はい。詳しくはこちらにまとめてあります」

私が目暮警部に手帳を渡すと、目暮警部は一通り見て、隣の高木刑事に手渡しして書き写すように指示を出した。

私も改めて自分の口から概要を説明するとともに、コナン君から引き継いだ楽譜を手渡す。

話が終わったあと、目暮警部は事情聴取の手配や人員の配置なんかを始めて。

後続の警官たちが11時過ぎに到着したから、そこでやつと毛利探偵を起こしたんだ。

毛利探偵に軽く苦言を呈したあと、目暮警部は事情聴取の手伝いを申し渡して。

私は毛利探偵の記録係だから、一緒に行って事情聴取に立ち会うことになった。

法事の記帳をしていたのが38名、すでに最初の何人かが村役場に呼ばれていたから、用事があつて急いでいるという人を優先的に部屋に呼んで事情を聞いていく。

名前や故人との関係、法事で座っていた場所やその時の行動なんかを確認するだけでもかなりの手間だ。

まあ、たいいていの人は割と協力的だったので、さほど時間もかからずに最初の取り調べを終えることはできたのだけど。

(それでも1人5分として全員終わるのに5時間以上はかかるからね、警部たちだつて休憩なしつて訳にもいかないし)

私も途中で何度か休憩させてもらつて、午後5時になってから旅館の蘭さんに連絡を入れると、いちおう睡眠はちゃんとれたようどコナン君と成実先生と一緒に村役場まで来てくれた。

「成実先生、眠そうですね」

「はい、ちよつと急患が入つちやいまして。あんまり眠れてないんですよ」

「それは大変でしたね」

「ええ、でも旅館の朝食をいただいたので、少しは寝る時間が取れました。ありがとうございます」

今日は土曜日で、ふだんの成実先生は東京の実家へ帰っているはずだから、診療所は休みのはずでこの急患というのもけっこう怪しくはあるんだけどね。

今の段階でツツコミを入れても、患者の個人情報が、と言われて突っぱねられるだけだろうから、私は何も言わずにスルーしておくことにする。

原作ではこのあと、成実先生が顔を洗うと言って席を立てて。

事情聴取を終えて帰ったと思われる村長が、役場の放送室で殺されるといふ第二の事件が起こる。

遺体発見がほしい6時半頃なのだけれど……検死をした成実先生は数分前に殺されたと言言するのだけど、実際の死亡時刻はその30分くらい前になるはずなんだよね。

ということは、この時成実先生が顔を洗いに行った時が、実際に人が行われた時ということになる。

「あ、お父さん」

そのとき、取り調べに使っている部屋から、毛利探偵が出てきていた。

おそらくさつきから黙り込んだままの西本さんの取り調べが進んでいないから、毛利探偵も一息入れにきたのだろう。

「どう？ 犯人判った？」

「バカ言うな、なにしろ参考人は、法事にきた村民38人……。名前と住所を確認するだけでも一苦労だ……」

「あの一、私はいつ取り調べを……」

「ああ、成実先生は一番最後にしてもらいました。お疲れみたいですから……」

「じゃー、その前に洗面所で顔洗ってきます」

私は成実先生が廊下を曲がって見えなくなるまでを見送って、毛利探偵たちに告げた。

「私も、お手洗いに」

「ああ。オメーも疲れただろ。今のうちに少し休んでおけ」

「はい、ありがとうございます」

私も成実先生と同じ廊下の角を曲がったあと、トイレへは行かず、放送室がある2階への階段を上がっていった。

なにか、明確な作戦があった訳じゃないんだけど。

でも、もしも私の姿がちらりとでも見えたら、成実先生が村長の殺害を思い留まってくれるんじゃないかって。

たぶん成実先生は、本当は心の優しい人だから、ほかの殺人鬼とは違うんじゃないかって。

第一の事件でも失敗していたはずなのに、私はまだ甘い考えを捨てきれなかったんだと思う。

階段を上がり切った直後くらいだった。

私は首筋に痛みを感じたあと、急速に意識が遠のいていったんだ。誰かに首を絞められたのだと感ずる暇もなく意識が落ちていく

—— 倒れ掛かる私を受け止めたのは、しっかりとした男の人の腕だった。

「—— ちゃん！ 愛夏ちゃん！」

誰かに名前を呼ばれて、身体をゆすられて。
訳も判らないまま急速に目を覚ました。

「……あ……」

「愛夏ちゃん！ 目が覚めたのね!? よかった……!」

「……蘭、さん……?」

視界に入った蘭さんの名前を呼んだあと。

まだぼんやりしたままの頭を巡らせて、視界に入ったのは赤い色と動かない何か。

……黒岩村長の遺体だった。

「……私……」

「愛夏さん、覚えていることを話してもらえますか？」

「目暮警部……」

すぐに私が意識を取り戻したことに気付いたのだろう。

次に声をかけてきたのは目暮警部で。

それでようやく、私はこの第二の事件に巻き込まれてしまったのだと理解した。

……やっちゃったよ。

もうぜつたい、こういうことはごめんだと思ってたのに。

おそらく私、容疑者の一人になつてはるはずだ。

まさか別の場所で倒れてた私を殺人現場まで連れてきて揺り起さずなんてことはないはずだから、私は村長が発見された時にはここで倒れていたはずだから。

「……私も、容疑者ですか？」

「いや、愛夏さんは後ろ手にハンカチで縛られていた。あれは自分で縛れる位置じゃないことは確認してある」

「そうですか」

「それで？ いったい何があったんですか？」

幾分ほっとした私はあつたことをすべて正直に話すことにした。

「トイレを探して、2階に上がったところで、首筋に急に痛みを感じたあと、意識がなくなつたみたいなんです。……首を絞められたのかもしれません」

「……失礼」

目暮警部は、私の一つ縛りの髪をよけて、首筋をまじまじと見つめる。

「最初の事件の被害者と同じだな。頸動脈に絞められたような跡がある。おそらく愛夏さんを襲ったのも、黒岩村長を殺害したのも、川島さんを殺害した事件の犯人と同一犯だろう」

「それじゃあ……」

「ああ、容疑者は数人に絞られた。愛夏さんが席を外してから今までの1時間、この建物にいた人物のうちの誰かが、二人の人間を殺した犯人だ」

殺人現場から解放された私は、一応念のため、検死を終えた成実先生に診察してもらった。

「見たところ異常はないみたいね。念のため脳の検査は受けた方がいいけど、でも今までと変わったことがないなら心配はいらないと思う」

「ありがとうございます」

「でも、どうして2階に？ 1階にもトイレはあったのに」

「先に成実先生が行かれたのは知ってましたから。顔を洗ってる時に乱入するのは悪いかな、って」

「私のせいだったか。……ごめんね、こんなことになっちゃって」
「いえ」

その謝罪の言葉が私の首を絞めたことに対するものだとしたら、ひとまず受け入れるよ。

……たぶんあの時、私に罪を着せることもできたはずなのに。

私の手首を縛ってくれたのは、あなたの優しさなんだと思うから。

まあ、だからといって、二人もの人間を殺したことが許せる訳じゃないけど。

別にさ、私がいなくていいところでならいくらでも、誰を殺そうが誰に殺されようが気にしないけどさ。

頼むから私を巻き込むのだけはやめてほしいんだよ切実に!!

診察が終わったと見たのか、私のかばんを持った蘭さんが話しかけてきた。

「愛夏ちゃん、大丈夫？」

「あ、うん、とりあえず大丈夫」

「これ、かばん、預かってたから」

「ありがとう」

「いちおう中は確認しておいて欲しいって、目暮警部が。あと、手首を縛ってたハンカチは証拠品で押収するって。たぶん愛夏ちゃんのだよね？」

「そうかな？ あんまり自分のハンカチの柄とか覚えてないから判らないけど、たぶん」

「なんで？ ふつう覚えてるでしよう？」

「かばんの中に入れっぱなしになってたヤツだと思う。別にふだん使わないから1枚くらい構わないよ」

蘭さんがあきれたように苦笑しながら息をつく。

まあ、私、女子力底辺だからね。

いちおうかばんにハンカチの2、3枚は入れてあるんだけど、出かけることが少ないから使わないまま洗わずに放り込んであるだけなんだよ。

（下手したらシールとかもついたままだったりするかも）

なんで既婚男性の上司とかって、お礼とかお土産とかでハンカチばかり買ってくるんだろう??

そのまま2階のトイレに行つて。

私は一応、かばんの中身を確認してみた。

財布とか通帳とか、物取りが狙いそうなものはそのまま。

犯人が狙いそうな手帳なんかも、ページが抜けてたりするようなことはなかった。

まあ、手帳にはほんとに日付や時間なんかのタイムテーブルと、使ったお金の記録と、事情聴取の記録くらいしかないからね。

たとえ犯人が読んでいたとしても、私が誰を犯人と想定しているか、なんてことは判らなかつただろう。

ハンカチは3枚のうちの1枚がなくなっている。

確か白地に赤い色の花が描いてあったのだと思うから、それを私の手首を縛るのに使ったってことなんだろう。

（あとの2枚のうち1枚は似たような柄で少し青い色の花が入ってるので、もう1枚は茶色のハンカチタオルだ。これはどちらも残っていた）

よけいなもの（脅迫状とか？）が入っているようなこともなかった

から、ハンカチを取り出した以外は犯人は私の荷物に手を付けることはしなかったのだろう。

用を足して廊下へ出ると、トイレの前でコナン君が待っていた。

「愛夏姉ちゃん、大丈夫!？」

「あ、はい、心配いりません。ちょっと貧血になっただけなので、後遺症なんかもたぶんないと思います」

「それもだけど、……死体とか」

「そうですね。もしかしたらあとで怖くなっちゃうかもしれませんが、今のところは大丈夫です」

答えたのに、コナン君はまだ心配そうな顔をしている。

私、もしかしたらけっこうショックを受けたような顔をしているのかもしれない。

「……ねえ、どうしてあの時、2階へ行こうと思ったの？」

「先に成実先生が顔を洗いに行ったのを知ってたので、その最中に乱入するのは失礼だと思ったからです」

「じゃあ、成実先生がトイレにいたかどうかは見えてないんだよね？」

「見てないですよ。私も取調室ですっと座ったままだったので、少し運動したいというのもありましたから、階段を見つけてすぐにそちらへ向かいましたから」

「誰に襲われたのかは判らなかった？」

「階段を上がり切ったところで、うしろからだだったと思うので、人影は見えてません。でも、……男の人だったとは思いますが」

「どうして?」

「倒れる瞬間、抱き留められたんですけど、男の人のしつかりした腕だったと思うんです。……確かにそうかと言われると自信はありませんが」

コナン君は顎に手を当てて少し考えていて。
やがて顔を上げた時、手にした手帳に書いてあった楽譜を私に見せてくれた。

「これは？」

「遺体のそばの床に描かれてたんだ。愛夏姉ちゃんはなんだかわかる？」

「さあ。演奏するとしたらちよつと面倒そうな曲ですけど」

なにしろピアノを習ってたのって30年くらい前だからな。

まあ、コナン君はそういうことが聞きたいんじゃないんだろうけど。

「そういえば、ピアノの部屋に残されてた楽譜の4段目に似てますね。なにか関係があるんでしようか」

「暗号だったんだ。ピアノの方は『わかってるな、次はお前の番だ』で、放送室のは『業火の怨念、ここに晴らせり』だったよ」

「……誰に宛てたんでしようか」

「あの時間、放送室に呼び出されてたのが、西本さんだったんだ。たぶん殺された村長もだと思う。だからこれはその二人に宛てたんじゃないかな」

相変わらず、コナン君は私に対する調査も継続している、らしい。
(私に暗号のことを隠しておいて、どんな言葉が出るか確認したかったのか?)

事件の調査と私の調査と、コナン君も大変だなオイ。

「じゃあ、次に狙われるのは、西本さんということですか？」

「月光には第三楽章があるんだ。今まで流れたのは第一楽章と第二楽章だから、もう一つ事件が起こる可能性はあると思うよ」

それから私とコナン君は現場へと戻って。

ちようど来ていた駐在さんが、麻生圭二の残された楽譜の話をしていたから。

コナン君は駐在さんと一緒に、公民館の鍵を取りに駐在所へと行ってしまった。

残された毛利探偵と目暮警部は、容疑者の取り調べを一通り済ませたあと、さすがに夜も遅くなってきたので今日の捜査は終了するとうことで。

蘭さんはコナン君を探しに行ってしまったので、私も犯罪阻止のために一緒に行こうとしたのだけれど。

「オメーはダメだ。オレが残業代を払わなきゃならねえだろうが」

たぶん私が襲われた直後だから、心配してくれたんだろうな。

(素直じゃないのは探偵の特徴なのか?)

私は毛利探偵と一緒に旅館に戻るようになった。

「愛夏、オメーは犯人は見てないのか?」

「はい、なにしろうしろからだだったので。抱き留められた時の腕は、男の人だったような気がしますけど」

「新しい手掛かりはなしか」

「はい、すみません」

「別にオメーが謝ることじゃねえよ。……調査だけの予定が、思いがけずオメーまで危険な目に合わせちゃった。悪かったな」

「いいえ、そんなことは」

まあ、半分くらいは自業自得だし。

「たぶん、私が犯人につながる手がかりを見るなりしてたとすれば、村長さんと一緒に殺されてた気がするのです。毛利探偵には悪いんです

が、なにも見なくてよかったですよ」
「……そうだな。オメーが無事でよかったよ」

言葉では殺されたかともか言いながらも、つい「成実先生はそこま
でしないんじゃないか」と思ってる自分がいるんだよね。

いったい私、どこまで成実先生に甘いんだろう？

（もしかして女装男子が好物だからとか、そういうオタクのサガが関
係あるのか??）

旅館で毛利探偵と一緒に夕食を食べて。

終わる頃にはすでに西本さんが殺されてるだろう時間は過ぎてい
たから、お風呂には入らずに部屋で荷物と手帳の整理をしていた。

すると、さほど進まないうちに毛利探偵が部屋に駆け込んできたん
だ。

「愛夏！　また事件が起きた！　公民館へ急ぐぞ!!」

「はい!!」

どうやら新たな事件が起これば残業代も私の体調も関係ないらし
いです。

（だったらさつき犯罪阻止に動かしてもらいたかったよ!）

私はすぐにかばんを持って、毛利探偵のあとについて走っていつ
た。

公民館の前で目暮警部たちと鉢合わせて。

一緒に公民館の倉庫へと行くと、西本さんの自殺死体（に見せかけ
た絞殺死体）がぶら下がっていたから。

私は思わず目をそむけてしまった。

コナン君が暗号の解読方法を警官の一人にレクチャーして。

一通り見るべきものは見たのか、再び私のところへやってきた。

「愛夏姉ちゃん」

「はい」

「大丈夫？」

……確かに、死体3連チャンはかなりきつかったですよ。
でも、さすがに荒療治的に慣れてきた感じはある。

「今は大丈夫です。心配してくれてありがとうございます」

「愛夏姉ちゃんは、西本さんが自殺だとは思ってないよね？」

「……さあ、私には」

「愛夏姉ちゃんは、ずっと一人の人を疑ってる」

「……」

「でもどうして“あの人”なの？ 愛夏姉ちゃんはいったい何を知ってるの？」

さて、どう答えるべきか。

いつもこの人は答えにくい質問ばかりを持つてくる。

「ええっと、昔の人間は、男が洞窟の外に出て狩りを、女は洞窟の中で子育てをしていたといわれています」

コナン君は少しだけ首をかしげる仕草をしたけれど、口に出しては何も言わなかった。

「そのため、現代の男性は道を覚えるのが得意で、女性は小さな変化に気づきやすいといわれます。もちろんそれに当てはまらない人もたくさん存在するとは思いますが。……例えば子供の顔色とか、近所の人とのコミュニケーションとか、女性は周囲のごく小さな変化に敏感なんです。それがいわゆる“女の勘”の正体なんだという人もいます」

「それが、愛夏姉ちゃんの直感の正体？」

「さあ。ただ、女性にはたぶん、男性が気づかないことに気付く能力が、生まれつき備わってるんだと思います。それは本当に、ただの勘としか言いようがないもので、なかなか説明はできないんですけど。……たぶん、女性は、男性が見ている世界とは、少し違う世界を見ていると思いますよ」

ま、昔の聞きかじりの知識だから、ほんとかどうかは知らないけど。だいたい人間の本能なんて現代ではほとんど退化しちゃってて、そういう本能に近い能力がどれだけ残ってるかも怪しいしね。

（食欲の秋とかはしっかり残ってるけど……。この食料が豊富な現代日本人にそんな本能いらないから!!）

とりあえず、これで何とかごまかされてくれないものだろうか？

私にごまかされた訳じゃないのだろうけれど、忙しいコナン君はその後捜査に口をはさみ始めて。

自殺で終わらせようとした目暮警部に、あからさまな自殺じゃない証拠を突き付けて、容疑者たちの事情聴取のやり直しをさせることに成功していた。

どうやら令子さん（村長の娘）の婚約者である村沢さんが殴られた事件も同時に起こっていたようで、意識不明のまま成実先生に手当てを受けていたのも原作の通りだ。

現場に一区切りつけて、あとは鑑識の人たちに任せたと、目暮警部と私たちは再び村役場に移動した。

休日の村役場は、今はほぼ臨時の捜査本部のようになっていて。

運び込まれてくる証拠品や証拠の写真を見て、コナン君がなにかに気付いたのか。

捜査員の一人に指摘していると、毛利探偵に邪魔だと現場を追い出されてしまっていた。

その後煙草を買いに行くと言って外に出た平田さん（村長秘書）を、

コナン君が追いかけていくのが視界の隅に見えた。
(そろそろ11時近いからね、今買わないと明日の5時まで買えなくなると思えば必死だろう……喫煙者としては)

このあと道でコナン君が駐在さんを呼び止めて、麻生圭二が残した楽譜の暗号を読んだらすべての謎が解けて、放送室から毛利探偵の声で推理ショーを始めるはずだ。

この事件、私にできることはもう、成実先生の自殺を止めるくらいしかない。

今回は現場にコナン君がいないから、私くらいしか止められる人はいないんだ。

でも相手はいくら体格が私より劣つてるとはいえ男の人で、力で抑えつけることが可能かどうかは判らない。

役場の入口から駆け込んできたコナン君を、毛利探偵が追いかけていく。

私は深呼吸しながら、できるだけ成実先生より入口に近い位置に立って、身構える。

大丈夫、ほんの少しだけ引き留められれば、周りは屈強な警官ばかりだ。

すぐに私に代わって犯人を取り押さえってくれるだろう。

『判りましたよ警部殿!! この島で起きた事件のほとんどがね——』

名探偵の推理ショーが、始まった。

スピーカーから聞こえる毛利探偵の声は、まずは前座とばかり、先ほど村沢さんが殴られた事件の犯人が平田さんだと推理して。

平田さんが公民館のピアノの隠し扉を利用して、川島さんと共謀し

て麻薬取引をしていたのだと言った。

「ということは、麻薬取引で川島氏ともめ、それでお前は川島氏を……」

「な!？」

『しかし平田さんは三つの殺人とは無関係です!!』
「「え?。」」

『彼が犯人なら、わざわざピアノの部屋で犯行は行いませんよ。あの部屋が殺人現場になれば、あとで調べられてピアノの隠し扉が見つかってしまいかもしれませんからね』

殴られた沢村さんも犯人ではないとして、その理由についての不自然な点を挙げていた。

『では犯人は誰なのか。今までわかっている犯人像は、三件ともかなりの力技で、おそらく犯人は男性。そして、アリバイのない人物』

毛利探偵の声は、第二の事件で流れたカセットテープの前半5分30秒に空白があったことから、発見される直前に殺されたと思われるでいたこと。

しかしコナン君が血で描かれた楽譜に倒れ込んだ時には、その血は乾ききっていて消えたりはしなかったこと。

つまり死亡推定時刻が間違っていて、そんなことができるのは、検死をした成実先生以外にはないことが語られたんだ。

成実先生は驚いたような仕草を見せながらも、毛利探偵の声に反論はせず、じつと耳を傾けているみたいだった。

うしろにいる私にはその表情をうかがうことはできない。

ただ、今は、成実先生が動き出した時、瞬時に反応できるよう、身構えるだけだ。

毛利探偵の声はさらに12年前の事件へと飛んで行って。

麻生圭二が実は自殺ではなく殺されたこと、そして彼には娘のほか
に息子もいたことが語られた。

その名前がセイジだと明かされたその時。

成実先生は、ふっと息をついて、身体の緊張を解いたように見えた。

—— ああ、この時だったのか。

成実先生が現世に別れを告げたのは。

動き出そうとした成実先生を、私はうしろから抱き着いて倒そうと
した。

でもそれはかなわず、私を振りほどこうとする成実先生になんとか
くらいついて叫ぶ。

「誰か！ 犯人確保!!」

周りにいた警部や警官たちが一斉に私たちに注目する。

その間もずっと振りほどこうとする成実先生に引きずられて、私は
手を放しそうになってしまったけれど。

「取り押さえろ！ 犯人を逃がすな!!」

続けて叫んだ目暮警部の声に反応して、何人かの警官が私たちの周
りを固めて、成実先生を取り押さえてくれたんだ。

「やめろ！ 放せ!!」

もう、女性を取り繕うのはやめたのだろう。

警官たちは成実先生の身体を床に押し倒して、必死でくっついてい
た私も一緒に倒されてしまっていた。

仰向けに倒れた成実先生の顔は、今は私のすぐそばにある。

「なんなんだよおまえは！　ずっとオレの邪魔ばかりしやがって！！
最初からオレに目をつけてやがっただろ！！」

「邪魔するに決まってるじゃないですか！　人が目の前で死んで嬉しい人なんかいませんよ！」

「あんな奴ら、殺されて当然じゃねえかよ！　あいつらはオレの家族を殺しておきながら、12年ものうのうと生きてやがったんだぞ！！」
「それで殺したらあんたも同じだろうが！　今度は令子さんにでも復讐させる気かてめえ！」

成実先生と私との言い争いを、なぜかだれも止めようとしなかったから。

私たちは床に倒れたままの格好で、互いを見ながら怒鳴りあっていた。

「だったらせめて死なせろよ！！　なんで邪魔すんだよ！！」

「現世のことは現世で決着付けろ！　刑務所の臭い飯を食ってたっぷり反省してから死刑になれ！　それがけじめってもんだだろうが！！」

「知るかそんなの！　こんな犯罪を犯したんだ！　その程度で罪を償ったことになんか、なる訳ねえだろうが！！」

「だからってその罪をあの世にまで持ち込むのかよ！　あっちには私の両親だっているんだからね。殺人犯なんかに行ってもらって、うちの両親に迷惑かけてほしくなんかないよ」

階下の騒ぎはおそらく放送室にも届いていたのだろう。

毛利探偵の声もいつの間にか止んでいたから、成実先生が暴れるのをやめると、辺りはしんと静まり返っていた。

「あんだね、うちの両親がいる世界に、3人も殺人犯を送り込んでくれたんだからね。これ以上のことはさせないよ。せめてあんたくらい

は、罪を償ってからあつちに行つてよ」

「……なんだよそれ。訳わかんねえよ」

「だから、現世のことは現世で終わらせなさい。あなた、まだ30年も生きてないんだよ？　どんな形でも、生きていればいろいろ判ることもあるから」

成実先生が暴れるのをやめたから、私も解放されて、周りの警官たちに助け起こされて。

成実先生には手錠をかけられて、そのまま連行されていくようだった。

私は周囲の人たちに遠巻きにされてただけだ。

ふと、放送室から降りてきたらしいコナン君が、私の目の前に立っただ。

「愛夏姉ちゃん、……ありがとう」

「いいえ。お役に立てたようでよかったです」

「ぼく、そこまで気が回らなくて」

「コナン君はいろいろ抱え込みすぎなんですよ。言ってくればフォローくらいしますから」

目的語がない会話は、周囲にはまったく意味不明だったのだろうけれど。

私の口調が元に戻って安心したのか、蘭さんも笑顔で話しかけてきた。

「愛夏ちゃん、なんかすごかったね、今の」

ほかに言いようがなかったんだろうな。

犯人との怒鳴りあいなんて、どうコメントしていいか判らないようなものだろうから。

「愛夏さん、我々警察からも改めてお礼を言わせてください。犯人逮捕にご協力くださり、ありがとうございます。」

「いえ……たいしたことは」

「おそらく麻生成実は自殺するつもりだったのでしよう。今、公民館に油が撒かれていると連絡がありました。彼は公民館に火をつけるつもりだったのだと思います。それが阻止できたのは、愛夏さんのおかげです」

「はあ……」

いやさ、そもそも公民館に油をまかれるとか、警察の不手際としか言いようがないんだけど。

せめて事件現場なんだから、夜間に見張りの警官ぐらい置いておこうよ。

(そうしておけば原作でもあんなにあっさり犯人に自殺されなかったんだしさ)

5月15日(日)

「……起きないわね」

「諦める?」

「そうでしょうか。なんだか疲れちゃったし」

推理後に眠ってしまう悪癖持ちの毛利探偵は、今回も放送室の椅子で眠り込んでいて。

実はこの島、人口約300人くらいで、この2日間で見かけた車はなんとあの選挙カー1台、とうぜんタクシーなんかあるはずもない。

警察の人たちもみんな飛行機や船で機材を担いでやってきてるから、毛利探偵を旅館まで運ぶ手段が、人が担ぐ以外にないんだよね。という訳で、蘭さんもあっさりとあきらめたところだったりする。

旅館に戻ると、こちらも島の宿屋に分散した警察官たちの待機所になっっているようだ。

夕食はもうなかったのだけれど、警官用の夜食のおにぎりが山になっっていたので、蘭さんとコナン君は必要分だけ失敬していた。

ま、朝まで食べられないことを思えば、ここで食べておきたいところではあるからね。

と、数時間前に夕食をしつかりと堪能させていただいた私は、まるで他人事のように思うのであった。

眠る前に、捜査日記というか、私の勤務日記を手帳に付けておく。

今朝は朝7時から蘭さんたちと交代で見張りについて、事情聴取の手伝いをして、途中1時間ほど気絶したりもしたけれどけつきよく夜の8時まで勤務。

その後9時くらいにまた呼び出されて、日付が変わる頃までいろいろやってたから、トータルで14時間くらい働いた計算になるかな。

それに鈴木家の3万と工藤家の4万と自転車便の1万を足したら……前回の電話番号とかも入れて今月の目標達成しちゃったよ。

(ま、計算方法が判らないから、実際のところはどうなるか判らないけど)

翌朝はふつうにケータイのアラームで目が覚めて。

朝風呂に入ったあと、朝食の時はみんな眠そうな顔をしていた。

とりあえず毛利探偵も今日未明に目が覚めたようで、独り寂しく旅館に戻って寝なおしたらしい。

(風邪をひかなくてなによりだよ)

目暮警部たちはまだ島に残っているいろいろやることがあるようだけれど、私たちは今日はもう船に乗って帰宅するだけだ。

とはいえ、東京に戻る船が午後になるので、午前中はこの島で過ごすしかないのだけれど。

それまで働き詰めだった私は、久しぶりに何もしない時間というのを旅館の部屋で過ごししていた。

「愛夏ちゃん、暇だし散歩にでも行かない？」

「日曜日は寝て曜日ー」

「なによそれー」

蘭さんが軽く笑い声をあげる。

最近の若い子にはこんなオヤジギャグでも新鮮に感じるのか。

「蘭さんは行つてきなよ。私はこの貴重な時間を寝ることに費やすから」

「んもう、こんな島に来る機会なんて、そうそうないんだよ？ もったいないじゃない」

「私、観光とかほんと、興味ないからさ」

「しょうがないなあ。じゃあ、一人で行ってくるから」

「うん、気をつけてね」

まあ、名探偵コナンの世界にいたら、これから先も山ほどいろんな場所に行く機会はあると思うけどね。

……もれなく事件がついてくるという超豪華特典付きで。

そのまま5月の潮風に吹かれながら部屋でうとうとしていると。

ふすまをノックする音が聞こえて、その数秒後にそつとふすまが開いて、コナン君が顔を見せたんだ。

……蘭さん、コナン君を連れていってくれなかったんですね。

二人つきりでデートできるチャンスだったというのに、名探偵も気が利かないなあ。

「愛夏姉ちゃん、寝てるの？」

「はい、寝ています」

「起きてるじゃない」

「寝てますよ。見て判ると思いますけど」

今の私の姿は、枕に頭を置いて、畳の上でほとんど大の字になってるような状態だ。

こんなにゆったりと身体を伸ばすのも、狭い部屋で縮こまって寝てる私にしてみれば、ずいぶん久しぶりのような気がする。

「愛夏姉ちゃん、おじさんみたい」

「じゃあおじさんかもしれないですね。久しぶりなんですよ、こうして暇な時間を過ごすの」

思えば目が覚めてから眠るまで、ずっと仕事のことばかり考えてたからな。

仕事がないときは次の仕事のことを考えて、気が焦って。

本当の意味での日曜日を過ごすのって、この世界に来てから初めてだったんだ。

窓を通り過ぎていく風が心地よくて。

なんとなく夢心地で、そばにコナン君がいるのに、変な緊張もしてなくて。

少しの間、うとうとしてたかもしれない。

ふつと意識が戻って、目を開けて見ると、隣でコナン君も寝転がって眠っていた。

……この2日間、名探偵も働き詰めで、疲れたよね。

いつものふてぶてしさの消えた幼い寝顔を見て、ちよつとだけ笑みを浮かべる。

寝顔は天使だけど……起きてる時の名探偵は、ほんと、油断がならない小悪魔だからな。

そろそろ君との攻防に疲れ切りそうな45歳がいるよ。

とまあ、そんなこんなでこのまままったりと船の時間まで過ごす予定でいたのだけれど。

目暮警部の使いだという警官に呼び出されて、話の途中から目が覚めていたコナン君と村役場まで出向いていくと、麻生成実が私と話をしたいと言ってるらしくて。

私はコナン君と一緒に彼と会うことにしたんだ。

(まあ、ほんとはそのまま帰りたかったんだけど)

警察が取調室として使っている一室で、私はコナン君と一緒に麻生成実と対峙した。

「なあ、あんた、愛夏さんだっけ」

「はい」

「もしかしてあんた、オレが男だって、最初から気づいてた？」

「最初からではないですけど。……でも、同じ違和感を持ってたのは、たぶん私だけじゃないと思いますよ」

「ん？ それ、どういうことだ？」

「たぶん、村の人の人中にも、気づいてる人はいたと思います。もしかしたら、麻生圭二さんの息子さんだって、判ってた人も」

「……まさか、そんなはずは……」

「最近、性的マイノリティーとか、だいぶ市民権を得てきてますし。気づいていても言わないというのも、一種の優しさだと思いますから」

麻生成実は私の言葉に絶句している。

ほら、あのまま死んでたら、こういう村人のさりげない優しさだって、判らないままだったってことなんだよ？

「話したいことって、それだけですか？」

「いや……。あの時オレ、あんたにずいぶんひどいことしたから。これを逃したら、謝ることもできそうにないし」

「私よりも、ほかに謝らなければならぬ人はたくさんいると思いませんけど」

「でもさ、最後にはあんたがオレを止めた訳だし。それに、ずっとオレのこと、止めようとしてくれた。……ごめん。そして、ありがとう」

「少しは生きる気になったってことでしょうか？」

「まあね、とりあえず、罪を償うよ。……このままじゃ、死んだ家族にどう報告していいか判らなくなっちゃったし」

「復讐が終わった、以外の報告をしたくなった、ということでもいいんでしょうか」

「ああ。……もう、父さんが言うような、まっとうな生き方はできないけど。でも、これから先の人生で、少しはなにか掴んでから死にたいと思うようになった。……あんたが言ったようにさ」

人が生きるということに、もともと意味なんてものはたぶんないんだと思う。

この人がこれから生きていくことにもたぶん意味なんてないし、たとえあの時死んでたとしても、なにも変わらなかったのかもしれない。

でも ——

「少なくとも、一つはすでに掴んだんじゃないですか？ 昨日死んでたらなかったはずの、今日という日を生き始めたことで」

「……そうだな。そうかもしれない」

「そのうち、毛利探偵から、事件についての報告書が届きますから。よかったですお棺の中に入れてもらってください」

「……」

穏やかな笑顔をひきつった笑顔に変えたまま、それ以上麻生成実は話を続けようとしなかったから。

私とコナン君はそれをしおに取調室から失礼することにした。

「愛夏姉ちゃんて、けっこう残酷だよね」

「そうですか？ 普通だと思いますけど」

「もしかしてけっこう怒ってる？」

「怒ってますよ。私の寝て曜日を邪魔してくれましたし」

「……そっちなんだ」

「ほかに何かあるんですか？」

「……ううん、いい。……なんでもない」

コナン君はそれきり黙ってしまったから、私もそれ以上は何も言わなかった。

現世のことは現世で決着をつける、か。

私もこの新しい人生でなにかに決着をつけなくちゃいけないんだろうけれど。

でもこの世界、1年がとてつもなく長そうではあるよなあ。

FILE. 18 福利厚生はいつも強制 くプロ
サッカー選手脅迫事件く

5月16日(月)

さて、月影島から戻ってきた翌日の朝。

今日も朝のアラームで目を覚ましたあと、お風呂にお湯を溜めながら、まずはお洗濯から始めた。

なにしろ出張で出た洗濯物が丸3日分もたまりまくってるからね。(以前下着だけでも買い足しておいてよかったよ。じゃなかったら足りなくなるところだったわ)

お風呂を出て作り置きのカレーで朝食にしたあと、全自動から出てきた下着をひたすら干しまくる羽目になった。

そんなこんなで身支度をして家を出たのが朝の10時、私は毛利探偵事務所へと出勤した。

「おはようございます」

「おう、早いな」

「朝は割と強い方なので。さっそくパソコン使いますね」

「ああ、よろしくな」

それからはひたすら月影島の事件のおさらいだ。

昨日の帰りの船の中であらかたまとめはあるので、報告書つぽくレイアウトしながら打ち込んでいく。

毛利探偵は相変わらず暇そうだなあ。

これでちゃんと蘭さんを育ててこれてるってことは、まあそれなりに大きな仕事は今までも来てはいたんだろう。

ていうか、もしかしたら案外、親の遺産とかで食うには困ってない

んだったりして。

そのあたり、原作にはぜんぜん出てこなかったから、ちよつとばかり興味をそそられる部分だったりする。

できれば蘭さんが帰ってくるまでには終わらせたかったから、急ピッチで進めてたんだけど。

さすがに丸々2日分ともなるとそう簡単には終わらなくて。

昼食をはさんだ午後3時過ぎにやっとどうにか作り上げることができたんだ。

「ふう……」

「終わったのか？」

「はい。あとはもう一度日を置いてチェックをすれば完成です」

「ご苦労だったな。次はいつ来る予定だ？」

「そうですね、毛利探偵の都合がいい日ですけど」

「……ああ、そういや、蘭がオメーに話したいことがあるとか言ってたぞ。じきに帰ってくるから、それまで待ってたらどうだ？」

……いや私、なんでこんなに急ピッチでやってたかって、ひとえに蘭さんに会いたくなかったからなんですけど。

だってさ、順調にいけば今日って、プロサッカー選手脅迫事件が起きる日なんだよ！

さつき毛利探偵が聞いてたラジオでもちらつと、東京スピリッツとビッグ大阪の試合がどうか言ってたし。

あの赤城量子って子が訪ねてくるよりも前に帰らなきゃ、ぜつたい蘭さんに現場まで連れていかれるに決まってるじゃん！

「いえ、ほんとに、今日のところは帰らせてください。ちよつといろいろやりたいこともあるので」

「仕方ねーな。じゃあ、オレの方から話しておくか。オメー、明日はなにか用事があるのか？」

明日、つて……。

原作の掲載順で言ったら、プロサッカー選手脅迫事件のあとには確か、闇の男爵殺人事件のはずだ。

……。

……ホテルで串刺しになるヤツだよ!!

「あ、あの、先日のお原付免許が……」

「そんな急いで取るほどのもんじゃねえだろ。タダでホテルに泊まれるってんだ。オメーの分もあるから一緒に来い」

「……なぜ私の分が……?」

「大人3人と子供1人で予約してあるんだとよ。部屋も2部屋あるらしいから、オメーがちょうどいいだろ。従業員の福利厚生だ! オレは最高にいい雇い主だな、ワツハツハ……!!」

いやいや、毛利探偵が最高にいい雇い主かどうかは置いて。

明日が火曜日で明後日が水曜日だってこともひとまず置いて。

確かこの話、阿笠博士が友人の博士とそのお孫さんと3人で行く予定だったところに、急に都合が悪くなったから毛利一家が譲ってもらったツアーだったはず。

それがなんで、私の分の人数が増えてたりするんだ……?

つまりこれ、もう私が行くのはぼ決定ってことじゃないですか!

世界の修正力が働いた結果としか思えないよ!

「あの、奥様とかは……」

「無理だとよ」

あ、一応訊きはしたんだ。

「園子さんなんかはいかがですか?」

「それも蘭が訊いたらしいが、用事があるって断られたらしい。ま、あいつも忙しいからな」

鈴木財閥のお嬢様だからね、いろいろあるんだろう。

ていうか、ここで押し問答してたら、蘭さんが帰ってきちやうかもしれないし。

もうあきらめて受けた方がいいような気がする。

「判りました。ご一緒させていただきます。何時に来ればいいですか？」

「朝飯食ってからだから、8時でいいんじゃないか？」

「はい、判りました。よろしくお願いします」

「おお」

そのあと。

出来上がった文書は用心のため、本体と、私が自宅から持ってきた外付けハードディスクと、サービス品らしいUSBメモリーの三箇所
に保存して。

(いやだって、パソコン初心者が触る可能性があるパソコンなんて、なにがあるか判らないし)

一部だけ印刷したのは毛利探偵にチェックをお願いして。

どうにか蘭さんが帰宅する前に毛利探偵事務所をあとにすることができました。

……串刺し事件が待ち構えてると思えば、あんまりうれしくはないけどね。

さて、時刻は午後3時を過ぎたところで、まだじゆうぶん時間はあったから。

帰宅してから少しだけ休憩したあと、また工藤邸のお掃除へ向かいました。

今回は、以前から気になっていて、でも時間がなくてできなかった窓ふきだ。

工藤邸の窓はほとんどが観音開きで外側へ開くタイプなので、まずは恒例の全部屋全開にしたあと、1階の窓から順番に片側ずつ、表と裏を水拭きと乾拭きできれいにしていた。

バケツの水を何度か変えて、1階を終えたところでタイムアップ、3時間のお仕事だ。

この次は2階の窓から始めることにしよう。

そんなこんなで、無事にお勤めを終えたあと。

テレビでサッカー中継を見ながらストックのカレーで夕食にして。

東京スピリッツの勝利でサッカー中継が終わってしばらくした頃、蘭さんから電話がかかってきたんだ。

「あ、愛夏ちゃん？　ねえ聞いてよ！　今日たいへんだったんだから！」

そんな感じじゃやべり出した彼女は、けつきよく30分くらいかけて、工藤新一の彼女が現われた事件のいきさつを語り続けて。

最後に工藤新一が中途半端に姿を現わしたせいでよけいに疑惑が深まったらしく、今度会ったらとちめるんだと息巻いていて大変だった。

対する私はまあ、半分以上聞き流してはいたんだが。

（真相はマンガで知ってるし、よけいなことを言っただけな疑惑を持たれても困るし）

これ、原作では3日くらいかけて赤城量子に説得させてたけど、明日から泊りがけで伊豆のホテルだし、誤解が解けるまで原作よりも時間がかかるんじゃないだろうか？

「だから愛夏ちゃん、そういう訳だから。ねえ、聞いてる？」

「あ、うん。聞いてたけど何が？」

「んもう、ちゃんと聞いててよ。明日は伊豆のホテルに泊まるから、水着持ってきてね、って話」

「……水着……」

……あつたつけ？

確か、20代の頃に近所のスイミングスクールに通うつもりで買って、けつきよくほとんど行かなかったから真新しい状態のがあつた気がするけど。

でも20年も前の水着とか……！

「たぶん家の中をひっくり返せば出てくると思うけど、今から探すのは無理——」

「えー!? じゃあ愛夏ちゃん泳げないじゃない!! 私、ビキニでよかつたら貸そうか?」

「いや、サイズが……」

「ひもで縛るタイプだから大丈夫よ。判った、じゃあそれも持っていくから」

ていうかその前にビキニとか着たことないんですけど!?

スタイルがいい人ならカッコいいとは思うけど、私の体形でビキニとか、どこの勘違いおばさんだつて話なんですけど!!

これはもう自分の水着を探すしかないよ。

蘭さんと電話を切ったあと、家の中のありそうなところを探しまくって、なんとか見つけましたよ20年前の水着を!

とりあえず虫食いも色あせもなかったから、一度試着して確認してみよ。

上に羽織るパーカーも探し出して、海にいる間はこれは脱がないぞと決意しつつ、ぐったりしながら明日の支度を終えた。

毛利探偵事務所の事務員、今からでも辞めちゃダメだろうか……？

眠る前にふとケータイを見たら、工藤新一からのメールが届いていました。

内容は、タイトルが「ありがとな」で、本文が「犯人の自殺を止めてくれて」で。

これが来たのは実は今日の昼間だったのだけれど（音が鳴らない設定にしてあるので届いたのに気づきませんでした）、その前にももう一通、挨拶っぽいのが4日前の日付で届いていて。

気が向いたら返事をくれとか、けっこう遠慮がちな文面で、ちよつと笑っちゃいました。

いや、笑っちゃいかな、きっとあちらは真剣なのだろうし。

今更ながらアドレス教えたのは失敗だったかもしれないと思う。

まあ、ほんとに耐えられなくなったらアドレスを変更しよう。

せめてそのくらいのは自由は許されてもいいと思う。

これ以上メールの頻度が上がらないよう祈りながら、私はケータイをぱたりと閉じた。

【April fool】最終回【特別企画】

もう、何もかもが嫌で。

夢も希望も、将来の展望も、なにも見えなくて。

生きていても仕方がないから、私は死のうと思った。

死のうと思って、実行して、これならたぶん死ねたんじゃないかな、
と思っただけけど。

「……………は……………」

「あー、えーと、君らが言うところの、死ぬ前の世界、みたいなの？ 生
と死の狭間というか、お花畑とか、三途の川とか、そんな感じ？」

目の前にいたのは、特に目立った特徴のない、平均的な顔をした、一
人のお兄さんだった。

周囲もとくに変わったところのない、学校の教室くらいの広さの部
屋。

窓もあるけどガラスの向こうがどうなっているのかはなぜか見え
ない。

部屋の中央に今は一つのテーブルと二つの椅子があつて、お兄さん
は私をその一つに座らせたあと、向かいの席に座った。

「じゃあ、私、死ねたんだけだ」

「まあね。正確に言えば、このままだと確実に死にそうだったから、そ
の直前で時間を止めた、つてのが正解だけだ」

え？ 時間を止めた？

ということは、私はまだ本当には死んでないってこと？

「うん、死んではないよ。でも時間が進めば間違いなく死ぬからね、死
んでると変わらないよ。言ってみれば再生中のビデオテープを一

時停止したようなものだから。今、ぼくがまた再生ボタンを押せば、君の人生は終わるってこと。理解できそう？」

………いろいろ、説明が足りないような気がするんだけど。

でも私は混乱はしてなくて、それどころかふだんよりもずっと頭がすっきりしていて。

判ったのが、彼がたぶん神様のような存在で、私の常識の範囲にいる人間じゃないんだってこと。

彼にとっては私の人生はビデオテープのようなもので、彼は私の人生を、まるで娯楽映画を観るように見ていたってことなんだ。

その、ビデオテープって表現も、なんだかすごくレトロな感じがするんだけど。

「あれ？ ビデオテープって、君の時代のものだったよね？」

「……今はDVDとかBDに取って代わられていますけど」

「そりゃ失礼。ぼくから見ると、どれも同じ時代のものと思えないからさ。まあ、あまり細かいことは気にしないで」

「……はあ」

どうやら彼とは時間のスケールもそうとう違いそうだ。

たぶん彼にとっては、20年や30年程度の差は誤差にくらいしか思えないだろう。

とりあえず、彼は私の人生を見ていて、私が死にそうになったから、その直前で時間を止めたのだということが判った。

だから私は今、私の人生の時間の外にいて、身体はまだかろうじて生きているけれど死ぬ直前で魂だけここに引っ張られてきたような状態なんだろう。

「まあ、おおよそ理解できたようだから、続きを話すでしょうか。その

前に気になることがあれば質問にも答えるよ」

「あ、えーと、あなたは誰ですか？ 神様？」

「うん、まあそんな感じ。例えばさ、君が生物学者だったとして——」

いきなりたとい話を始めそうだったので、私は頭を切り替える。

ふだんよりもずっと頭の回転が良くなっているようで、私は難なく彼の話に乗ることができた。

「——サケが遡上してくる様子を見て、『あれ、このサケはどこから来たのかな？』なんて疑問を持ったとする」

「あ、はい」

以前テレビで見た、産卵のために産まれた川に戻ってくるサケの大群を想像する。

「で、まあ、のぼってきちやったサケについてはその時点で調べることができないけど、これから産まれるサケの稚魚に印をつけたら、放流されたあとにどこをどう通ったか判るから、すでに遡上済みのサケについてもある程度予想ができるよね」

「はい」

「で、一匹だけに印をつけるよりも、似たような条件のたくさんの稚魚に一度に印をつければ、精度や確度も上がってより正確なデータが取れる。ここまでは大丈夫？」

うん、言ってることは判る。

サケの稚魚なんて大量にいて、ほとんどが途中でほかの魚のえさになつたりして、無事に帰ってくるのはたぶん数パーセントもないだろう。

だからある程度の数が必要不可欠で、むしろ多ければ多いほど、より詳細なデータを取ることができるはずだ。

「だけど、その話が私に関係あるってことは……」

「ぼくの仕事はそんな感じだね。印をつけた個体の観察をしてるんだ。で、いま、その個体の一人が死にそうになってたから注目してるところ。まあ、別にただ『死んだ』って結果だけでも十分なんだけどさ。せっかくだら16年も観察してたから、ちよつともつたいなく感じてさ」

「……どうやら私は、彼にとってはサケの稚魚と同程度の価値の存在らしい。」

「……説教するために呼んだんですか？ 命をムダにするな、とか」「べつに？ 説教なんてしないよ。それが君の人生の選択で、結果死という結論を選んだんだから。君の選んだ末の結果はぼくの研究の資料としては申し分ない。それはぜんぜんかまわないんだけど、ただ、ちよつともつたいないと思っただ。——君の身体が」

「私の、身体ですか？」
「うん。だって優良な子孫が生まれそうな気がしない？ 健康で、視力はいいし体力はあるしアレルギーもない。体長も女性の中では平均よりかなり大きい方だし。まあ、なぜかほかの個体も子孫を残そうとしないんだけどね。ぼくは君たちの遺伝子ってけっこう優秀だと思っただけだな」

いや、そういう見方をするなら確かに優秀かもしれないけど。

この人は、今は人間らしい見た目をしてるけど、たぶん人間の美的感覚なんかは持ってないんだろうな。

私だってサケの稚魚の美醜なんか判らないし。

ほかの個体、というのはおそらく私と同様に彼が観察してる個体のことなのだろう。

もちろんぜんいんが私と同じ16歳という訳じゃなくて、その中には結婚してもおかしくない程度の年齢の人もいるってことで。

それらの個体が私と同じ遺伝子を持つてるなら、結婚しようとする理由は判る気がする。

「あの、私、ブスだし。身長が高すぎるのは人間の女性にとってはモテない要素の方が多いし、スタイルだってそんなに良くないし。頭とかも人並みかそれ以下で。私は人づきあいが嫌で、逃げてたからぜんぜん性格もよくないし。誰かと結婚してうまくいくとかありえないです。だからごめんなさい」

私はふだん、こんなになちゃんと話せるような性格じゃない。

内気で人見知りで、言葉を飲み込んで相手には嫌な思いをさせたと思っただけで落ち込むような性格だ。

でも、彼に対しては違っていて、思っていることをちゃんと話せていることに自分自身で驚いていた。

もしかしたらなにかそういう精神的な制限みたいなものがかけられてるのかもしれない。

「うん、別に謝る必要はないよ。それはそういう結果だったただだから、ぼくはさほど気にしてないし。ただね、まあ、ほかの個体もいるからいいっていえばいいんだけど、やっぱり大事に使えば100年以上も持つ身体をたった16年で破棄するんじゃないかってさ。せつかくだから、ちよつと実験させてもらおうと思うんだ」

実験……？

それって、私は死ねないってこと……？

それどころか、私の身体になにか痛いこととか、ひどいこととか、そういうことがあったり……？

「ああ、別に君に何かしようとか、そういうんじゃない……ある意味君に何

かするのは間違いじゃないのか。でも、君が痛い思いをしたり、つらい思いをしたり、そういうことをさせるつもりはないから」

私の顔色を読んでるのか、それとも心を読んでるのか。

私を観察してるとも言ってたから、たぶん心を読むような技術も彼にはあるのだろう。

「技術的な話は置いとくとして。……君のあの身体に、別の記憶を入れてもいいかな？」

「……」

「ああ、言葉が足りないね。つまり、君は今、魂だけがここにどまつてるような状態だ。君をここに置いたまま、君の身体に別人の魂を入れるようなものだと思ってくればいい。具体的には、ぼくが観察する個体で、45年生きてる個体がいるんだ。その記憶を君の身体にコピーしたいと思ってる」

なんだか意味が判らずにいると、ふいにテーブルの横にテレビのようなものが現われた。

その画面に、今彼が言った内容が凶解されているらしい。

「ぼくが管理してる個体で、遺伝的には君と同一なんだけど、彼女は45年ほど生きてる。この個体の記憶をコピーして、君の脳に転写する。コピー元はそのままそれまでの生活を続けていくけど、コピーされた方はいきなり身体が若返ったような感じになるのかな？　ただ、さっきのたとえ話で言えば、彼女は君とは別の川に放流した稚魚だから、周囲の環境なんかもまるで違うものになってるけどね」

……まあ、私は死んだのだから、いまさら身体をどう使おうと、それはかまわないけど。

魂だけ抜かれた状態の私自身はいつたいどうなるんだろう？

ちゃんと死ぬるなら、あとはどうだろうと勝手にすればいい。

それなのに私にこうして話しているってことは、つまり死んだはずの私にも影響があるってことで。

「うん、残念ながら、その処置をすれば君をすんなり死なせることもできない。身体が生きてるからね。身体と魂と、どちらか片方だけを死なせることはできないんだ。つながってるから」

「じゃあ、私はどうなるんですか？ 魂の私は？」

「君の身体の様子はそのテレビに映るようにしておくから、ここでそのビデオを見てるのがいいんじゃないかな。見たくなければ早送りするなり、停止するなりすればいいし。コピーした彼女の人生が終わるまでここにいってもらうことになるから、おおざっぱに計算して40年か50年か。コピー元が死ねばコピーの彼女の魂も死ぬから、たぶん長くてもそのくらいで済むと思うよ」

いやそのくらいって……。

16歳の私にとつては、50年なんて想像を絶する時間だ。そんな長い時間をここで過ごすのはさすがに嫌だと思った。

「大丈夫だよ。実際にはそんなに長くないから。ビデオには早送りって機能がついてるし。DVDにもついてるだろ？」

ああ、そういうことか。

ここは時間を停止させることもできる世界だから、逆に加速させることもできるのか。

「体感時間にすれば、たぶん1年もないんじゃないかな。もつとも、じっくり見た方が面白いと思うけど。ともあれ、君に選択肢はないからね。嫌かもしれないけど、最低1年くらいはここにいってもらうからね」

そのあと、部屋の使い方を軽く説明して、彼は部屋を出て行った。

もつとも、この部屋にはドアのようなものはなかったから、いきなり存在を消した、というのが正しいかもしれない。

もちろん私が部屋を出ることはできないようだった。

それから私は、部屋に設置されたテレビで、元の自分の身体が私以外の人に支配される様子を黙って見ているしかなかった。

早朝、とつぜん私の部屋で目を覚ました彼女は、ものすごく混乱しているようで。

彼女の心の声もモノローグのように聞こえてきたから、しばらくは早送りせずにその様子を見続けていった。

最初、まったく知らない人のように思っていた彼女は、だんだん私自身と似たような性格をしていることが判ってきて。

混乱して絶望する彼女を気の毒に思ったせい、それとも最初に他人のように見えたせい、知る程に私は同族嫌悪よりも親近感の方を強く感じるようになっていた。

外へ出て、阿笠博士に挨拶する彼女。

仕事場で笑顔で人と接する彼女。

人におびえながらも、ふつうの人を演技する彼女。

……私を知って、同情し、嫌悪し、でも過去の自分に対するいとしさのようなものをにじませた彼女。

私は、とても狭い世界に生きていたのだろうと思った。

友達がいなければ人間じゃないような気がしていた。

考えるのが遅くて、焦れば焦るほどテンパって言葉が出なくて、誤解されて怒らせても誤解を解くこともできなくて。

私なんかいない方が世の中うまくいくんだらうって思ってた。

私がない方がみんな幸せになるなら、いなくなつてやろうって

思った。

私が死んだら周りの人は後悔して同情してくれるかもしれない、って。

だったら死んでやろうって、そう思った。

自分の生き死にですら誰かのせいにして、身近な誰かを悪者にしようとした。

私は、私が死んだあとの世界を、本当の意味で見た訳ではないけれど。

でもきつと、私が死んだからといって、ほとんどの人は私のことなんか気にも留めていないだろう。

私が死んだからって、私に対して後悔したり同情したりする人なんかいない。

逆に私が生きていようが、多少誤解されて怒らせようが、それを気にするような人もいないんだ。

私がない方が、世の中がうまくいく？

ううん、たとえ私一人が生きていたところで、世の中がうまくいかなくなることなんてないよ。

私がない方がみんな幸せになれる？

まさか、私一人が誰かを不幸にするとか、そんな多大な影響力は私にはないでしょ。

いろんな意味で、私は周りの人たちにとって、どうでもいい存在だったんだ。

私は周りに対する当てつけのような気持ちで死のうと思ったけど、ほんとはそんなの、自分で自分を過大評価してただけだったんだ。

それを、彼女は私に教えてくれた。

彼女はこの世界で生きていた。

私は生きていなかったのに、ちがう世界から来た彼女は、私よりもずっとちゃんとこの世界で生きていた。

「や、楽しんでる?」

「……」

気が付けば、私はもう何年も、このビデオを見続けていたのだろう。この部屋の中では時間の経過は判らないけれど、ほとんど早送りもなかったから、ビデオの中で経過した時間の分は見続けていたことになる。

疲れたりとか、おなかが空いたりとか、集中力が切れたりというよ
うなことがなかったから、私はそれに気づかなかったけれど。

「自分の人生を外側から見ると、あまりできない経験だからね。どんな気分なのか、ぼくにも想像できないけど」

「……なんか、いろいろ、ダメな自分が判りました」

「そういうもの? それはそれでけっこうきつそうだけど」

「ええと、この人、45歳ってことは私より29歳も年上なんですよね? そのくらい離れたらもう他人と変わらないし、でもこの人の根っここのところが自分と似てるのはすごくよく判つて。……今更なんですけど、正解の一つを見せてもらえて、自分も生きられそうな気がしたっていうか」

人生に攻略本はないけれど、彼女は私の人生の攻略法を一つ、実演して見せてくれていた。

もちろん私は同じようにはできないから、同じ結果にはならないだろうと思うけど。

でも、もしもまた生きることができのなら、そのためのヒントはたくさんもらえたような気がするのだ。

私はもう死んでいる人間だ。

だから人生に先なんかないし、いまさら生きたいと思っても彼も彼女も困ってしまうだろう。

「あの身体に君の魂を入れるのは無理だよ。もうあれは彼女の人生だからさ。それにぼくも彼女の観察は最後までやり遂げたいし」

「ですよ。判ります」

「君の現状は何も変わってない。つらいと思つたこと、今はこの部屋にいるからあまり感じないだろうけど、君が死にたいと思つた環境は何一つ変化してないんだ。だから君が戻つたところで、けつきよくは同じ結果になるかもしれない」

「そうですね。でもその現状に対する認識が変わつたというか。同じ状況でも同じ結果にはならない気がします」

まあ、それが判つたところで、すでに何もできない訳だけれど。

それでもこの人 —— 人とすら言えるか判らないけど —— にはなんとなく、今の私の気持ちを知ってもらいたいと思つたんだ。

「あのさ、ビデオテープって、巻き戻しって機能があるのは知ってる？」

とつぜん話がかわって、でも私はなんとか思考を切り替えて、その話についていく。

まあ、早送り機能があるのだから、とうぜん巻き戻しの機能もあるのだろう。

時間戻せる、ということ、もしかして……

「でもって、その巻き戻した時点から、重ね撮りっていうのもできるんだよね。ぼくはデータのコピーばかりしてるから、今回も君の身体と世界を丸ごとコピーしてそこに彼女の記憶を移植したんだけど。この微妙な巻き戻して重ね撮りっていう機能を知ったとき、ぼくはすごく感動したんだ。こういう概念で大事だよ」

……えーと、つまり、彼女の記憶が入ってるのは私の身体のコピーで、私の身体オリジナルは残ってる、ってこと……?」

「君の世界と身体オリジナルは、時間を止めた状態で残ってるよ。じゃないと君はすぐに死んでなくなっちゃうし、かといって君を身体に残したままだと彼女の記憶がおかしくなっちゃうし。まあ、こういう試みが初めてだから、いろいろ不具合も出てはいるんだけどね。具体的には、あのコピーの世界の時間が圧縮されちゃったりとか」

「……」

「たぶん君のオリジナルの世界が動き出せば、そのあたりも解消されるだろうから、できればさっさと動かしたいんだ。でも同じ結果が待ってるなら、けっきょくコピーした方の君の身体も無事じゃないだろうからさ。……どうかな? もう一度、生きることとはできそう?」

私は、もう一度生きることができる。

つらかったあの時の気持ちは覚えてるし、もう一度同じことになったら生きていける自信はあまりないけれど。

でも、私は一つ、見本を見せてもらえた。

ほんとだったらありえない、自分の人生の攻略法を、私は彼女に見せてもらえたんだ。

「簡単じゃないんだろうな、とは思います。自信も、あんまりないです。でも、……もう一人の私は、ちゃんとできたんですね。だったら、私も、できないはずはないです」

彼女だって、友達はいなかった。

元の世界で付き合った男性ともうまくいかなかった。

彼女が私と違ってたのは、ほんのちよつとだけ、自分に見切りをつ

けるのが遅かったってだけ。

だったら、私も彼女と同じくらいは自分でものに期待してもいいかもしれない。

45年間生きてきた彼女が言うように、生きていれば判ることもあるのかもしれない。

「君の人生はあれで終わったんだし、これからの人生はおまけみたいなものだから。それと彼女の方もただのコピーだからあまり気にしないで。彼女は君が死んでもそれで終わりだけど、オリジナルの彼女が死んでもそれ以上生きられない不安定な存在だからさ。まあ、ぼくとしてはできるだけ長持ちしてほしいけどね」

これは言葉では気にしないでと言いながら、心に留めておいてほしいといってるんだろう。

もう一度私が自殺したら、私の身体からコピーされた身体を持つ彼女も死ぬことになる。

それまで生きてきたのとはまったくちがう世界で必死で生きようとしている彼女も道連れになるぞ、と。

「じゃ、君が自殺を実行する前日まで巻き戻すから。コピーの世界ではいろいろ不具合が出てたけど、ぼくも二度目だしこっちは大丈夫だと思う。こっちが安定すればコピーの方も安定してくれるだろうし。ぼくはまたしばらく二つの世界を観察してるから」

そう、彼は言葉を残して。

私はそのまま意識を落とした。

朝、目を覚ますと5時半くらいで。

私は彼女と同じように、お風呂に火をつけて、朝食の準備をする。食材はほぼないからまずはお米をとぐところからだ。

しばらく置いてから火をつけて、朝風呂に入る。

伸びっぱなしの髪を整えてうしろで一つ縛り。

中学の頃は二つに縛ってたけど、一つの方が少し大人っぽく見え
た。

外に出かけられそうな服を探し出して身に着けた頃にはずいぶん
日が高くなっていた。

もしかしたらあの神様は、自殺した私に再び生きる希望を取り戻さ
せようと、コピーの世界を作り上げたのかもしれない。

それは私のためとかじゃなくて、単なる実験の一環で、私が立ち直
ろうがそうでなかろうが結果はどっちでもよかったんだろう。

でも、それで救われたような気がする私にとって、彼はやっぱり神
様だったんだ。

……彼にとつては私はたくさんいるサケの稚魚の一匹にしか過ぎ
ないんだろうけど。

彼女がしていたように、背筋を伸ばして深呼吸。

今までは誰かにとがめられそうで平日の日中は外に出られなかつ
た。

でも、彼女が教えてくれたんだ。

私のことなんて、見てる人も気にしてる人もほとんどいないん
だ、つて。

足を一步踏み出して、階段を下りていくと、目の前の住宅から一人
の男性が出てきて。

私はまたちよつとひるみそうになってしまったけれど、なんとか笑
顔を作るようにして、声を張って言った。

これが私の人生の本当の始まりだ。

「おはようございます、阿笠博士」

了